

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第214集

衣原古墳群
衣原遺跡
衣原古窯群

第二東名 No. 82~83 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市-1

(第1分冊)

2 0 1 0

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第214集

衣原古墳群
衣原遺跡
衣原古窯群

第二東名 No. 82~83 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市-1

(第1分冊)

2010

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所



1号窟全景（北東から）

巻頭図版 2

衣原 1号窯



1. 燃焼部付近（東から）



2. 排煙調整溝（北東から）



3. 排煙口（北から）



4. 遺物出土状況



1. 床面断ち割り状況（東から）



2. 床面断ち割り状況（東から）

巻頭図版 4

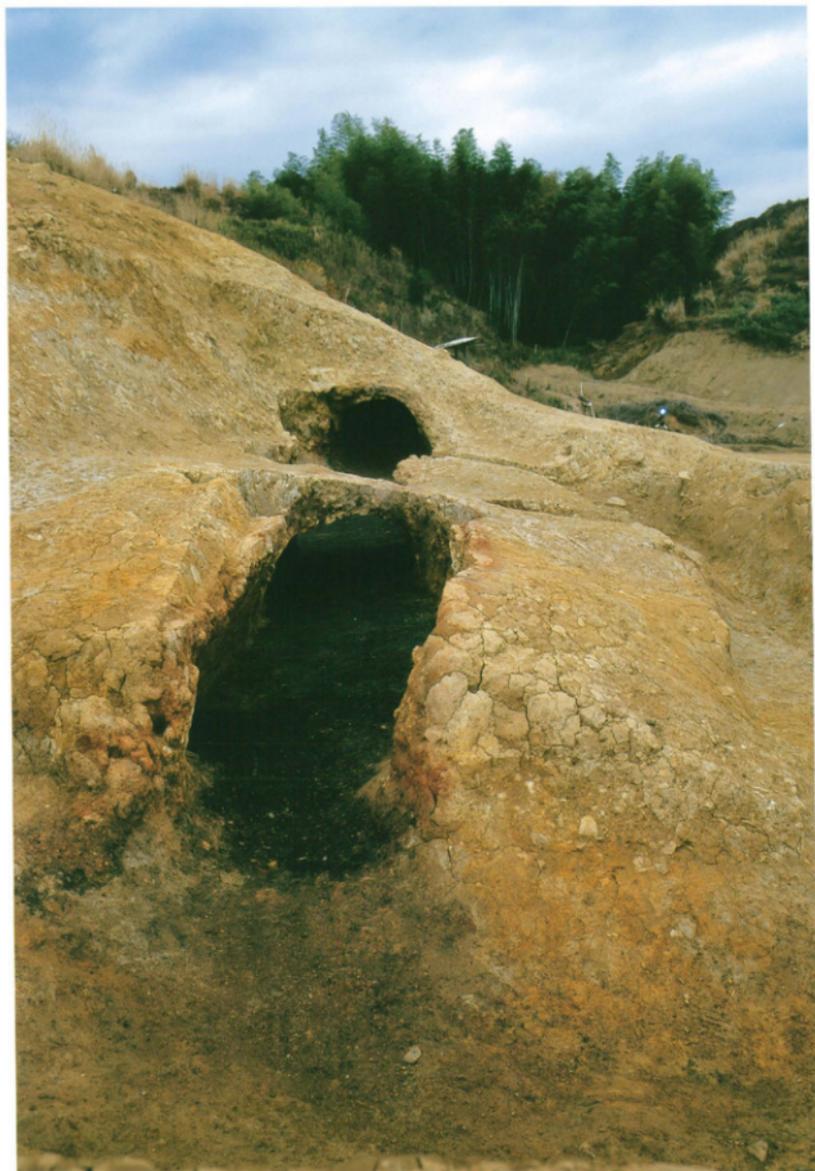
衣原11号墳



1. 11号墳全景（西から）



2. 奥壁付近遺物出土状況（西から）



2号窟全景（南西から）

巻頭図版 6

衣原 2 号窯



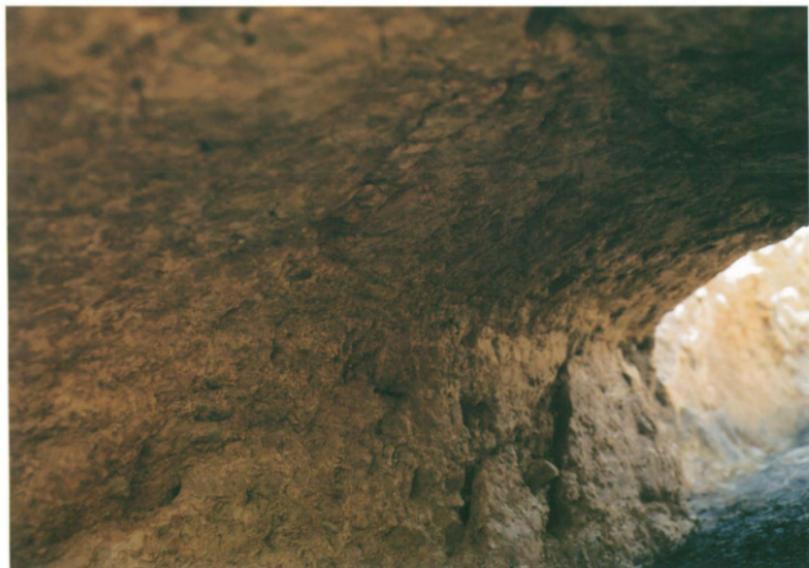
1. 2号窯全景（南東から）



2. 2号窯全景（北東から）



1. 2号窯排煙口（北から）



2. 天井部残存状況（北西から）

巻頭図版 8

衣原 2 号窯



1. 第1横口 (西から)



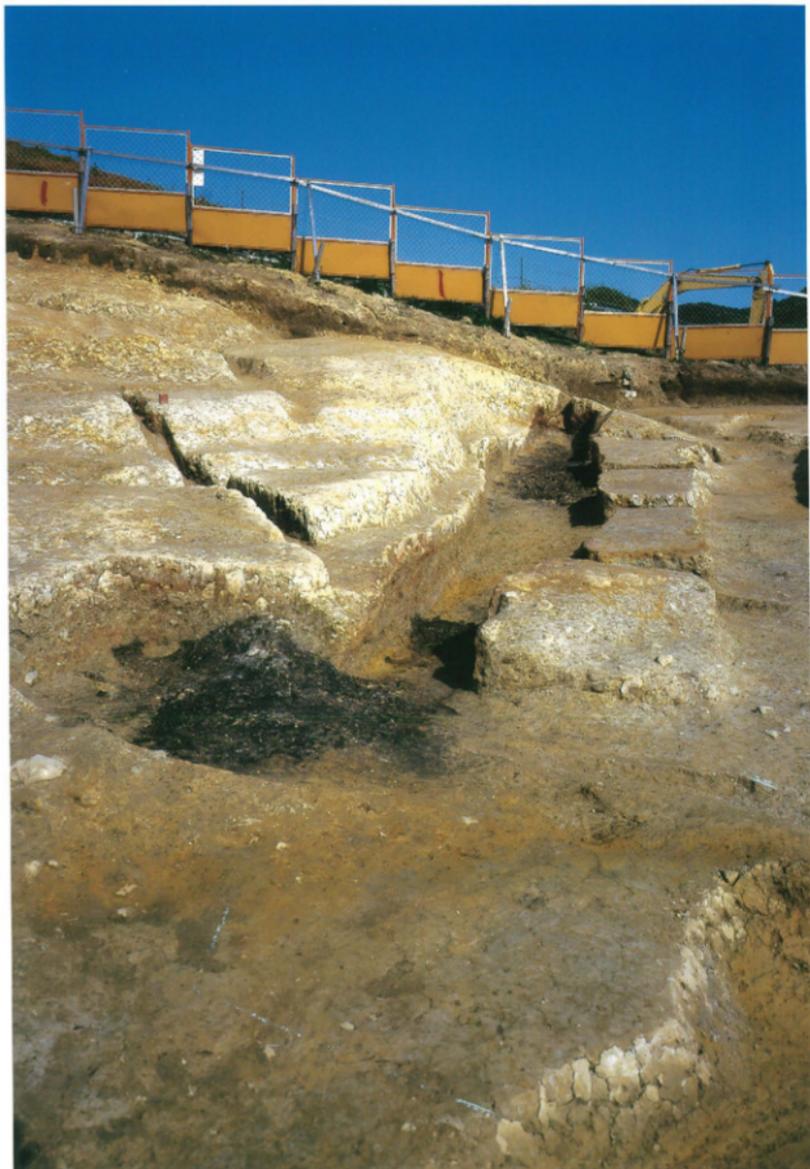
2. 第1横口 (東から)



3. 第2横口 (東から)



4. 第3横口 (東から)



3号窯全景（西から）

巻頭図版10

衣原3号窟



1. 3号窟全景 (南から)



2. 前庭部 (西から)



1. 床面風化材出土状況(北から)



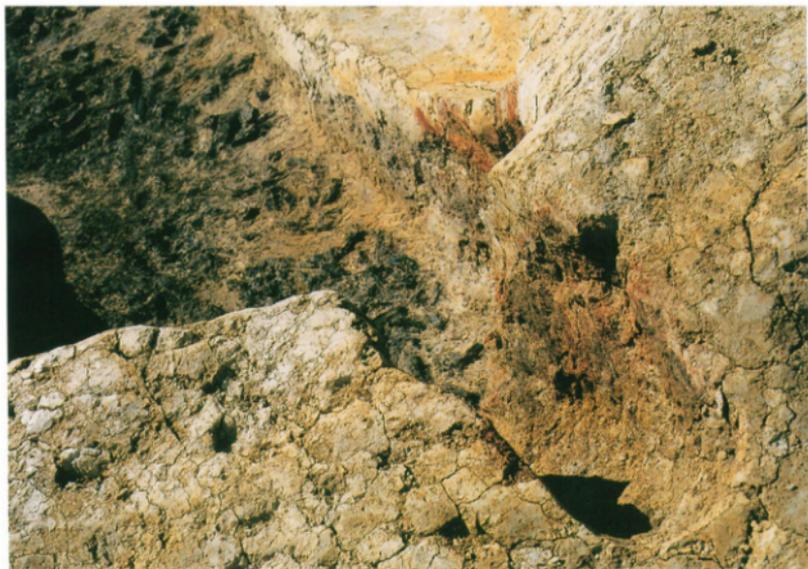
2. 床面風化材出土状況(北から)

卷頭図版12

衣原3号窯



1. 壁面 (北東から)



2. 排煙口 (南東から)



11号墳出土遺物



1号窯出土遺物



1. 5区出土土器



2. 5区出土礫石群



序

静岡県内で第二東名高速道路の建設工事が始まってから17年を経過しています。その間、平成8年度から県内では工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査が先行して行われてきました。

藤枝市中ノ合地内は第二東名高速道路の本線とパーキングエリア部分にあたり、市指定史跡の衣原古墳群の一部を含んでいたことから、平成12年度より試掘・確認調査が行われてきました。その結果、12,760㎡という広大な面積の発掘調査をすることになったのです。本調査は平成14年度から始まり、丘陵上には衣原古墳群の一つである衣原11号墳を始め、須恵器の焼成窯や横口式炭窯、弥生時代や古墳時代後期、奈良・平安時代～近現代にいたるまでの集落の痕跡など、多くの遺構・遺物が発見されました。

これまでの志太平野北東部は大きな開発が少なく、埋蔵文化財の詳細については、まだ解明されていない地域でありました。今回の埋蔵文化財調査は、周辺の遺跡調査も含めて、志太地区の歴史に大きな一石を投じる貴重な発見を提示してきました。

なかでも注目すべきことは、県内初の横口式炭窯2基の発見です。また古墳時代後期の須恵器窯である衣原古窯群が発見されたことも特筆に値することです。同じく第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査で見つかった藤枝市（旧岡部町）の入野高岸古窯の発見とともに、古墳時代の志太地域で須恵器生産が盛んに行われていたことを立証したのです。

これらの遺跡資料が、この地域の歴史解明の一躍を担うことと、大いに活用されることを願うものであります。

現地調査、および本書の作成にあたっては、中日本高速道路株式会社東京支社、ならびに静岡県教育委員会、藤枝市教育委員会をはじめとする関係機関各位の御理解と御協力に厚くお礼を申し上げます。また、調査を通じて有益な御指導、御助言を多方面から賜りました。さらに調査時の不便を理解し、時に励ましをいただいた葉梨地区の方々や、長い期間にわたり作業にあたられた現地作業員、膨大な資料を根気よくまとめた整理作業員の方々に、この場をお借りして深く感謝する次第であります。

平成22年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 天野 忍

例 言

- 1 本書は、藤枝市域（以下、藤枝地区）における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の総論と、静岡県藤枝市下之郷字衣原に所在する衣原古墳群、衣原遺跡、衣原古高群の発掘調査報告書である。なお、本報告書は「第1分冊」と「第2分冊」によって構成されており、本書は「第1分冊」である。
- 2 第二東名建設事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査においては、それぞれ地点名が付されている。本書は、No82・83地点に関わるものである。なお、衣原遺跡はNo82地点、衣原古墳群、衣原遺跡、衣原古高群はNo83地点に相当する。
- 3 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（市町）単位で実施している。本書は藤枝市に関わる第二東名埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 4 調査は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、日本道路公団静岡建設事務局の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 5 確認調査・本調査の期間ならびに調査面積、基礎整理作業の期間は第1章第3節の表3・4、および第4節の表5に記したとおりである。
- 6 調査体制は第1章第1節-2の表1に藤枝地区の調査体制として記したとおりである。
- 7 執筆は平野吾郎、及川司、菊池吉修、中川律子、勝又直人が行った。分担は下記のとおりである。
及川 司：第1章第1節-1-(1)
菊池吉修：第1章第1節-1-(2)～第5節、第2章、第3章第1・2節
中川律子：第3章第3節
平野吾郎：第3章第3節出土土器
勝又直人：第3章第3節-4-註4
- 8 須臾器の蛍光X線分析は、大阪大谷大学 二辻利一氏に依頼して行った。衣原1・2・3号窯の考古地磁気測定は、大阪大谷大学 広岡公夫氏に依頼した。分析結果は「第2分冊」第4章第4節に掲載している。
- 9 調査・資料整理で実施した委託事項および委託先は下記のとおりである。
地形測量、基準点測量、空中写真測量等業務…株式会社フジヤマ
掘削業務…関丸紅、安全管理業務…榎杉本組、働アーク東海
土器胎土分析…バリノ・サーヴェイ株式会社、自然科学分析…古環境研究所
- 10 現地の写真撮影は各調査担当者が実施した。航空写真の撮影は株式会社フジヤマに委託した。出土品の写真撮影は当研究所本部にて当研究所整理技術員が実施した。
- 11 木製品の保存処理は当研究所保存処理室長西尾太加二、金属製品の保存処理は大森信宏が実施した。
- 12 各調査の概要は、当研究所やほかの刊行になる出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。
- 13 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所がたった。
- 14 発掘調査の資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。
- 15 発掘調査および整理作業では以下の方々へ御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
浅野 毅 瀧美賢吾 安間拓巳 伊藤寿夫
伊藤通玄 岩木智絵 岩原 剛 植松章八
太田好治 岡村 涉 河瀬正利 後藤健一
篠ヶ谷路人 篠原和夫 柴田 稔 菅原雄一
鈴木一有 鈴木敏剛 滝沢 誠 鶴岡正昭
戸塚和美 中嶋郁夫 長谷川 睦 藤沢良祐
堀大真美子 向坂鋼二 望月智司 八木路行
渡井英善 (五十音順、敬称略)



藤枝市の位置

凡例

本書の掲載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 座標は、平面直角座標Ⅱ系を用いた国土地院系（改正前）を使用している。
- 2 方位は、平面直角座標Ⅱによる方位（座標北）を基準として表示している。
- 3 本文中の遺構に関する表記は下記のとおりである。
 竪穴住居跡：SB 竪柱建物跡：SH 溝状遺構：SD 土坑：SF 井戸：SE 柱穴：SP 不明遺構：SX
- 4 出土遺物は、本調査Ⅰ～Ⅴ期ごとに通し番号を付けて取り上げ、土器 P、石器 S、木製品 W、金属製品 M の略号を付した。
- 5 掲載した遺物の番号は、種類・出土遺構・挿図の別にかかわらず遺跡ごとの通し番号を付している。
- 6 遺物の縮尺は原則として、土器は 1/3、石器は 1/2（旧石器～縄文は 4/5）、土製品・木製品は 1/2 または 1/4、金属製品は 1/2（銭貨は 1/1）として、各図にスケールを付してある。
- 7 挿図の縮尺は各図に示すとおりである。
- 8 石器の石材分析は静岡大学名誉教授 伊藤通玄氏に依頼した。石材名は本文中または観察表に記した。
- 9 土層・土器の色調は、新版『標準土色帖』1998 農林水産技術会議事務局監修を使用した。
- 10 藤枝市と周辺の遺跡分布図は、国土地理院発行 1:50,000 地形図「家山・静岡・掛川・住吉」を加筆・修正した。

〈遺構〉		〈遺物〉	
	焼土	木製品	 漆
	炭化物	石器	 研磨痕・擦痕
	貼床		 自然面
			 欠損面（尖頭器・石核調整剥片）
		須臾器（4章）	 回転ヘラケズリ範囲

目次

巻頭カラー図版

序

例言

凡例

第1章 総論	1	第3章 衣原遺跡	73
第1節 調査に至る経緯		第1節 位置と環境	
1. 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取扱いの経緯	3	1. 地理的環境	75
2. 調査の体制	5	2. 歴史的環境	76
第2節 藤枝市の位置と環境		第2節 調査の方法と経過	
1. 地理的環境	6	1. 調査の方法	78
2. 歴史的環境	8	2. 調査の経過	79
第3節 確認調査		第3節 調査の成果	
1. 確認調査の対象地点	11	1. 概要	80
2. 確認調査の方法	12	2. 1～3区	83
3. 各地点の概要	14	3. 4区	86
第4節 本調査		4. 5区	87
1. 経過と方法	25	5. 6区	116
2. 概要	26	6. 7区	142
第5節 資料整理	28	7. 8区	161
		8. 9区	181
		9. 10区	191
第2章 衣原古墳群	29		
第1節 位置と環境		抄録	
1. 地理的環境	31	(第2分冊)	
2. 歴史的環境と調査歴	32	第4章 衣原古窯群	
第2節 調査の方法と経過		第5章 総括	
1. 調査の方法	34	付編 入野東古墳・入野高岸古窯	
2. 現地調査の経過	35	出土遺物について	
第3節 調査の成果		写真図版	
1. 概要	36		
2. 衣原11号墳の調査	37		
第4節 まとめ	62		

挿図目次

図1 藤枝市の地形図	6	図38 11号墳出土土器 4	59
図2 藤枝市と周辺の地質図	7	図39 11号墳出土土器 5	60
図3 藤枝市と周辺の遺跡分布図	8	図40 11号墳出土土器 6	61
図4 第二集名の路線と対象範囲	11	図41 両袖式石室をもつ古墳 1	62
図5 確認調査対象範囲 1 (No.79～80地点)...	17	図42 両袖式石室をもつ古墳 2	63
図6 確認調査対象範囲 2 (No.81地点).....	17	図43 両袖式石室分布図	63
図7 確認調査対象範囲 3 (No.82・83地点)...	20	図44 11号墳遺物出土区割り図	64
図8 確認調査対象範囲 4 (No.84・85地点)...	22	図45 衣原遺跡の位置	75
図9 確認調査対象範囲 5 (No.86地点).....	23	図46 衣原遺跡と周辺の 弥生～中世遺跡分布図	76
図10 確認調査対象範囲 6 (No.87地点).....	24	図47 1～10区グリッド配座図	80
図11 木調査対象範囲と11号墳の位置	31	図48 1～3区遺構全体図・出土遺物	81
図12 衣原古墳群と周辺の 古墳時代遺跡分布図	32	図49 2区遺構全体図・土層断面図	82
図13 衣原古墳群の位置	33	図50 2区竈穴住居状遺構 SF29・31	83
図14 11号墳と周辺の地形	36	図51 2区溝状遺構・土坑・埴土	84
図15 11号墳石室展開図	38	図52 1～3区確認調査他出土遺物	85
図16 11号墳縮影	39	図53 4区近世土坑	86
図17 11号墳遺物出土状況	39	図54 5区グリッド配座図	87
図18 11号墳 A-1 群(上)遺物出土状況	40	図55 5区遺構全体図・出土遺物	88
図19 11号墳 A-1 群(下)遺物出土状況	41	図56 5区集石範囲と土層断面	89
図20 11号墳 A-2 群遺物出土状況	41	図57 5区火葬遺構群全体図	90
図21 11号墳 B・C 群遺物出土状況	42	図58 5区火葬遺構 SF1～5・7～10、SF14・15	91
図22 11号墳出土馬具 1	43	図59 5区火葬遺構 SF6・ SF6 出土礫石径 1	93
図23 11号墳出土馬具 2	44	図60 5区火葬遺構 SF6 出土礫石径 2	95
図24 11号墳出土大刀 1	45	図61 5区火葬遺構 SF6 出土礫石径 3	96
図25 11号墳出土象嵌鈿	46	図62 5区火葬遺構 SF6 出土礫石径 4	97
図26 11号墳出土大刀 2	47	図63 5区火葬遺構 SF6 出土礫石径 5	98
図27 11号墳出土鉄釵 1	48	図64 5区火葬遺構群出土遺物	99
図28 11号墳出土鉄釵 2	49	図65 5区火葬遺構 SF1-4・SF1 出土遺物	100
図29 11号墳出土鉄釵 3	50	図66 5区火葬遺構 SF3～9 他出土遺物	101
図30 11号墳出土鉄釵 4	50	図67 5区溝状遺構	102
図31 11号墳出土鉄釵 5	51	図68 5区包含層出土遺物 1	105
図32 11号墳出土両面金具・刀子・釘	52	図69 5区包含層出土遺物 2	106
図33 11号墳出土装身具 1	53	図70 5区包含層出土遺物 3	107
図34 11号墳出土装身具 2	54		
図35 11号墳出土土器 1	55		
図36 11号墳出土土器 2	57		
図37 11号墳出土土器 3	58		

図71	5区包含層出土遺物 4	108	図106	7区竪穴住居状遺構 SB01~03 出土遺物	147
図72	5区包含層出土遺物 5	109	図107	7区孤立柱建物跡 SH04・05	148
図73	5区包含層出土遺物 6	110	図108	7区孤立柱建物跡 SH106	149
図74	5区包含層出土遺物 7	111	図109	7区孤立柱建物跡 SH07	150
図75	5区包含層出土遺物 8	112	図110	7区孤立柱建物跡 SH08・09	151
図76	5区包含層出土燧石群 1	113	図111	7区孤立柱建物跡 SH10~12	152
図77	5区包含層出土燧石群 2	114	図112	7区孤立柱建物跡 SH13~15	153
図78	6区グリッド配置図	116	図113	7区掘立柱建物跡 SH16・柱穴列・楕穴	155
図79	6区遺構全体図	117	図114	7区焼土および焼壁土坑	156
図80	6区土層断面図	118	図115	7区土坑状遺構 SP582	157
図81	6区低地部土層断面図	119	図116	7区溝状遺構 SD107・108・114・128・129	157
図82	6区竪穴住居状遺構 SB01・02	120	図117	7区出土遺物 1	158
図83	6区竪穴遺構(757・1758)	121	図118	7区出土遺物 2	159
図84	6区孤立柱建物跡 SH103・04	122	図119	7区出土遺物 3	160
図85	6区掘立柱建物跡 SH05・06	123	図120	8区グリッド配置図	161
図86	6区掘立柱建物跡 SH07・08	124	図121	8区遺構全体図	162
図87	6区掘立柱建物跡 SH109・10	125	図122	8区土層断面図	163
図88	6区掘立柱建物跡 SH11~13	126	図123	8区掘立柱建物跡 SH01~04	164
図89	6区井戸状遺構図・出土遺物	127	図124	8区掘立柱建物跡 SH05~07	165
図90	6区土坑状遺構図・出土遺物	128	図125	8区竪穴住居状遺構 SB08・10	167
図91	6区不明遺構 SX1446・ SP1503 遺構図・SP1503 出土遺物	130	図126	8区竪穴住居状遺構 SB09	168
図92	6区不明遺構 SX1446 出土遺物	131	図127	8区竪穴住居状遺構 SB09 出土遺物	169
図93	6区溝状遺構 SD1428	133	図128	8区竪穴住居状遺構 SB11~13	170
図94	6区溝状遺構	134	図129	8区竪穴住居状遺構 SB10~13 他出土遺物	171
図95	6区溝状遺構・土坑出土遺物	135	図130	8区溝状遺構・土坑他	172
図96	6区1373(焼土)出土遺物	136	図131	8区溝状遺構 ST03	173
図97	6区包含層他出土遺物 1	137	図132	8区掘立柱遺構	175
図98	6区包含層他出土遺物 2	139	図133	8区包含層他出土遺物 1	176
図99	6区遺構・包含層他 出土遺物 1	140	図134	8区包含層他出土遺物 2	177
図100	6区遺構・包含層他 出土遺物 2	141	図135	8区包含層他出土遺物 3	178
図101	7区グリッド配置図・基本土層	142	図136	8区包含層他出土遺物 4	179
図102	7区遺構全体図	143	図137	8区包含層他出土遺物 5	180
図103	7区竪穴住居状遺構 SB01	144	図138	9区グリッド配置図	181
図104	7区竪穴住居状遺構 SB02・03 床面検出状況	145	図139	9区遺構全体図	182
図105	7区竪穴住居状遺構 SB02・03 完掘状況	146	図140	9区掘立柱建物跡 SH01~03	183
			図141	9区掘立柱建物跡 SH04	184

図142	9区孤立柱礎物跡 SH05	185
図143	9区孤立柱礎物跡 SH06・07	186
図144	9区孤立柱礎物跡 SH08・09	187
図145	9区土坑	188
図146	9区井戸 SE650	189
図147	9区遺構・包含層 出土土器・金属製品1	190
図148	9区遺構・包含層 出土金属製品2	190
図149	10区グリッド配層図	191
図150	10区第1面遺構全体図	192

図151	10区第2面遺構全体図	193
図152	10区土層断面図	194
図153	10区竪穴住居状遺構 SB01~07	195
図154	10区竪穴住居状遺構出土遺物	196
図155	10区孤立柱礎物跡 SH08・09	197
図156	10区柱穴列・土坑	198
図157	10区溝状遺構・小穴	199
図158	10区溝状遺構 SD02・出土遺物	200
図159	10区遺構・包含層他出土遺物	201
図160	6・8・10区出土尖頭器・ 石核製削片	202

挿表目次

表1	藤枝地区の調査体制	5
表2	周辺の遺跡地名表	9
表3	確認調査期間と面積	12
表4	各地点の調査年次	13
表5	小調査実施期間と面積	25
表6	周辺の古墳時代遺跡地名表	33
表7	11号墳調査工程表	35
表8	埋藏時期	65
表9	11号墳出土大刀観察表	68
表10	11号墳出土河頭金具観察表	68
表11	11号墳出土鉄鍔観察表	68
表12	11号墳出土勾玉観察表	69
表13	11号墳出土碧玉観察表	69
表14	11号墳出土小玉・土玉観察表	69
表15	11号墳出土土器観察表	70
表16	周辺の赤生~中世遺跡地名表	77
表17	衣原遺跡調査工程表	78
表18	各区の調査期間と面積	81
表19	瓦磨寺開運年表	115
表20	1~3区出土土器観察表	203
表21	1~3区出土鉄貨観察表	203
表22	1~3区出土土器観察表	203
表23	5区出土織石経観察表	204
表24	織石経一覽	208
表25	5区出土土器観察表	211
表26	5区出土埋管観察表	215

表27	5区出土釘観察表	216
表28	5区出土金属製品観察表	217
表29	5区出土鉄貨観察表	217
表30	5区出土土器観察表	217
表31	6区出土土器観察表	218
表32	6区出土鉄貨観察表	223
表33	6区出土釘観察表	223
表34	6区出土土器観察表	223
表35	7区出土土器観察表	224
表36	7区出土土器観察表	225
表37	7区出土土製品観察表	225
表38	8区出土土器観察表	226
表39	8区出土鉄貨観察表	233
表40	8区出土土器観察表	233
表41	8区出土土製品観察表	234
表42	9区出土土器観察表	234
表43	9区出土埋管観察表	234
表44	9区出土鉄貨観察表	234
表45	9区出土釘観察表	234
表46	10区出土土器観察表	234
表47	10区出土土製品観察表	238
表48	10区出土土器観察表	238
表49	10区出土土器観察表	238
表50	6区鉄滓計測表	238
表51	衣原遺跡出土鉄貨一覽	239

挿写真目次

写真1	No.79地点	確認調査作業状況	13	写真9	No.81地点	作業状況	27
写真2	No.80地点	確認調査作業状況	13	写真10	No.81地点	作業状況	27
写真3	No.82地点	確認調査作業状況	19	写真11	整理作業状況1		28
写真4	No.83地点	確認調査 重機掘削状況	19	写真12	整理作業状況2		28
写真5	No.84地点	確認調査作業状況	21	写真13	本調査作業状況1		34
写真6	No.85地点	調査前状況	21	写真14	本調査作業状況2		34
写真7	No.80地点	作業状況	27	写真15	本調査作業状況3		34
写真8	No.84地点	作業状況	27	写真16	本調査作業状況4		34

図版目次

巻頭図版1	衣原1号窯 1号窯全景	巻頭図版9	衣原3号窯 3号窯全景
巻頭図版2	衣原1号窯 1. 燃焼部付近 2. 排煙調整溝 3. 排煙口 4. 遺物出土状況	巻頭図版10	衣原3号窯 1. 3号窯全景 2. 前庭部
巻頭図版3	衣原1号窯 1. 床面断ち割り状況 2. 床面断ち割り状況	巻頭図版11	衣原3号窯 1. 床面炭化材出土状況 2. 床面炭化材出土状況
巻頭図版4	衣原11号墳 1. 11号墳全景 2. 異密付近遺物出土状況	巻頭図版12	衣原3号窯 1. 壁面 2. 排煙口
巻頭図版5	衣原2号窯 2号窯全景	巻頭図版13	衣原11号墳 11号墳出土遺物
巻頭図版6	衣原2号窯 1. 2号窯全景 2. 2号窯全景	巻頭図版14	衣原1号窯 1号窯出土遺物
巻頭図版7	衣原2号窯 1. 2号窯排煙口 2. 大井部残存状況	巻頭図版15	衣原遺跡 1. 5区出土土器 2. 5区出土礫石組
巻頭図版8	衣原2号窯 1. 第1横口 2. 第1横口 3. 第2横口 4. 第3横口	巻頭図版16	衣原遺跡 5区出土鉄貨

第1章 総論

第1節 調査に至る経緯

1. 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取扱いの経緯

(1) 全体の経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年1月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜市から東海市に至る延長約270kmの第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては東西に貫く形となり、その延長は約170kmである。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成3年9月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と併行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成4年2月17日付けで文化庁へ通知を行うとともに、平成4年5月11日付けで、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査の手続きの依頼を行った。また、平成4年8月27日付けで日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて県教育委員会は、平成4年9月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成5年3月18日付けで、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あてに回答がなされている。この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積が1,453,513㎡となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成5年11月19日付けで日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県七木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。

さらに平成6年度には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しが行われた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象総面積は1,286,759㎡となっている。

平成7年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始につい

てもかなり見通しがでてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成6年2月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第1回の協議が平成7年12月13日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成8年7月1日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組されている。

平成8年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成8年9月24日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについての確認書を締結、さらに調査実施機関である(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成8年9月25日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成8年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真の№94地点、浜北市大平の№136地点、同市四大地の№137地点の確認調査が実施されている。その後、平成9年度からは発掘調査も本格化し、県内各地の確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公団に対し、平成9年1月31日付けで建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成9年12月25日付けで施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により平成6年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリスタアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年9月2日付けで日本道路公団静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成10年9月25日付けで再踏査の依頼をするともに、10月2日には踏査の実施に関する打ち合わせ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付けで県教育長から日本道路公団静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,734㎡であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年3月5日付けで協定変更を行っている。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線およびサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場について(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工専用道路および取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査の事業量の増大に(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市・浜北市・富士宮市・裾野市・富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

(2) 藤枝地区の経緯

上記のような経緯のなか、藤枝市域では№79～87地点の合計9箇所が調査対象の地点となった。この9地点については、調査が可能となった地点から順に、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所が発掘調査を実施した。調査は平成9年度から確認調査を開始し、遺構の広がりか認められた地点については、本調査を実施することとなった。本調査を実施したのは、№79～84地点、№87地点であり、調査期間は、平成10～18年度である。基礎整理作業は現地調査と併行して実施し、資料整理と報告書作成作業は平成17年度から開始した。

2. 調査の体制

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所では、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査にあたって、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の管轄に合わせて、工区を設定し調査にあたることとした。本書で扱う藤枝地区は静岡工区に含まれる。藤枝地区の各地点の調査では、藤枝市に設置した藤枝地区事務所を拠点として、各現地調査を実施している。

No.79～87地点が藤枝地区に所在し、これら9地点の確認調査を平成9年度と平成12～15年度に実施した。その結果、No.80～84地点と87地点は、遺構の広がりが見えなくなったため、本調査を実施することとなった。本調査は平成9～10、12～18年度に行っている。

一連の調査に関する資料整理作業は、平成16年度から着手した。これは、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、現地調査を優先するという方針であったためである。ただし、基礎的な整理作業(各種台帳類作成、写真・図面整理、出土遺物の洗浄・注記)については、藤枝地区事務所にて、現地調査と併行して実施した。

なお、上述した確認調査・本調査、資料整理に関わる調査体制は表1のとおりであり、各地点の調査年次・調査面積は表3・4に示したとおりである。

表1 藤枝地区の調査体制

		9年度	10年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
統括部	所長	齊藤 忠	高橋 忠	高橋 忠	高橋 忠	齊藤 忠	齊藤 忠	高橋 忠	高橋 忠	高橋 忠	高橋 忠	高橋 忠	天野 忠
	副 所 長	池谷和二	山下 至	山下 至	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫
	常務理事	三村貞典	伊藤友雄	伊藤友雄	池田徳平	池田徳平	池田徳平	池田徳平	池田徳平	池田徳平	池田徳平	池田徳平	池田徳平
	事務次長												
	総務課長	野間野天治	杉本敏雄	杉本敏雄	本形昭一	本形昭一	本形昭一	本形昭一	本形昭一	本形昭一	本形昭一	本形昭一	本形昭一
	総務課副長	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸
	経理課長	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸	植藤隆幸
	経理課副長	杉田 智	杉田 智	杉田 智	杉田 智	杉田 智	杉田 智	杉田 智	杉田 智	杉田 智	杉田 智	杉田 智	杉田 智
	調査課長	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英
	調査課副長	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英
	主任調査員	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英
	調査員	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英
	調査員	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英	石川 英
	調査研究部	主任調査研究員	足立順司	新野昭夫	飯田徳夫	鈴木貴幸				長谷川 謙			
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之
調査研究員		塚本貴幸	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	大橋 豊	三井文洋	藤山智之	三井文洋	藤山智之	藤山智之	藤山智之	藤山智之

第2節 藤枝市の位置と環境

1. 地理的環境

藤枝市は東経138°15'、北緯34°52'付近に位置し、総面積は141.98km²である。市域は、南北に約22.2km、東西に10.8kmと縦に細長く、北は静岡市と川根町、東は岡部町、南は焼津市と大井川町、西は島田市に接する（2008年3月現在）。

市域の中央部には瀬戸川が流れる。瀬戸川は、朝比奈川と合流して流量を増した葉梨川と合流し、駿河湾に注いでいる。瀬戸川は市の最北部および最西部の山地から発した流れを合わせて南流しており、平野部に出るとその流れを東へと変えている。朝比奈川、葉梨川の両河川も山間地域では南へと流れを取っているが、平野部で流れを東へ変えている点で共通している。この3つの河川と大井川が形成した沖積地である志太平野に、藤枝市は市街地の大部分を置く。



図1 藤枝市の地形図

志太平野は北部に連なる赤石山系から派生した山地に三方を囲まれ、東は駿河湾に臨んでいる。これらの山地は、南の平野に向かって少しずつ標高を下げながら平野へと至る。図1に示したように、市内最高峰は、市域北西部に位置する高根山（871m）で、その南に位置する高尾山（675m）、さらにその南西に位置する菩提山（677m）など600～800m級の山々が連なる。これらの山塊が織りなす稜線は、島田市との自然境界となっている。山塊は、南下するに従い高度を次第に下げ、市域中央部の城山（380m）、鳥帽子形山（392m）、京塚山（245m）等の200～300m程度の標高をもつ山々を頂点としたのち、平野部に至る。この赤石山系の末端に当たる丘陵の裾部は開析作用により、多くの深い谷とやせ尾根が鳥趾状に入り組んでおり、北から南に向かって変化に富んだ地形を呈している。

藤枝市内の地層は、図2に示したように、北から三倉層群、瀬戸川層群、大井川層群および平野部の沖積層の4つに大別される。北の方が、より古い時期に形成された地層であ

る。市内最北部の檜峠から舟ヶ久保にかけて分布する三倉層群は、中生代の白亜紀から新生代古第三紀頃、海底に堆積した砂や泥が形成した地層が、その後の地核変動で褶曲や断層を生じながら今日の山地となったもので、砂岩と頁岩・礫岩の互層である。南縁部は特に伊久美層群とも呼ばれる。

この南側の瀬戸川上中流域から葉梨地区にかけての標高300～500mの山地は瀬戸川層群と呼ばれ、新生代古第三紀に形成された海成の地層で、三倉層群と同様に砂岩と頁岩の互層が主となっている。三倉層群との相違点として、一部に玄武岩質の火成岩脈が見られる（静岡県 1974）。瀬戸川層群と三倉層群が接するところは褶曲帯の境界の断層になっており笹山構造線と呼ばれている。

さらに南の標高10～200mの丘陵地にかけては大井川層群が分布している。これも同様に海成の地層で新生代第三紀に形成された地層といわれるが、古第三紀に属するという説もある（藤枝市教育委員会 2005）。大井川層群と瀬戸川層群との境界も断層で、十枚山構造線と呼ばれる。これより南側の平野部は大井川によって形成された扇状地であり、先述の志太平野に該当し、厚い砂礫層が堆積している。

また、大井川や瀬戸川の沖積作用による堆積が進む以前の志太平野は、海岸線が現在よりも内陸部に位置し、複雑に入り組んだ河口部をもっていたと考えられる。そのため、河口付近には中州状に取り残された川中島が数多く形成されていたと考えられる。それは藤枝市内に現在も残る、青島、前島、高洲、平島などという地名にも表わされている。また、五十海や潮、潮前、水上、水守、藪田などといった微高地の間に形成された湿地帯をその起源としている地名も複数見られる。

このように、大井川下流域は、現在とは異なり決して良い居住環境をもっていたとはいえない。そのため、縄文時代から弥生時代にかけては、水の害を受けることの少ない丘陵の末端部や裾部、後背沼地上的の微高地に集落域が形成されたといえる。この地域の遺跡分布の背景には、地質的な要因がある。

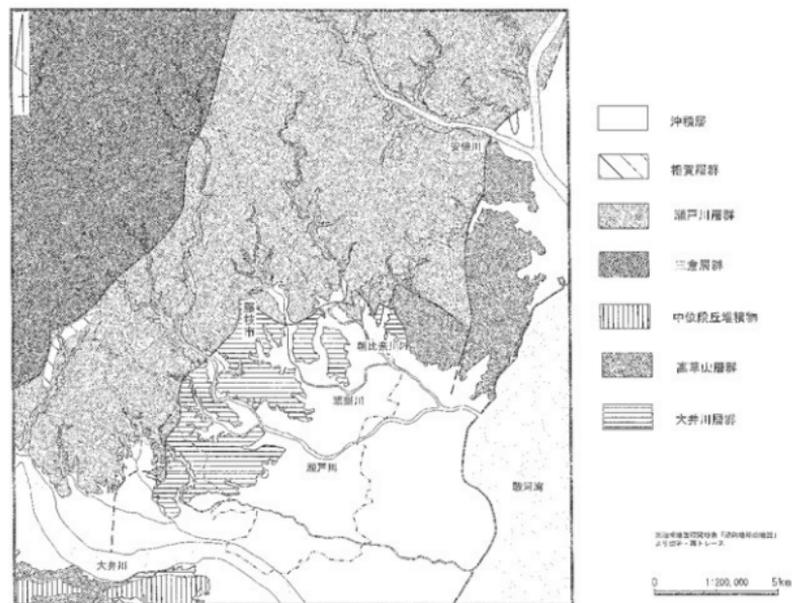


図2 藤枝市と周辺の地質図

2. 歴史的環境

旧石器・縄文時代 藤枝市および志太平野における旧石器時代の遺跡は少なく、天ヶ谷遺跡(59)があげられる程度である。この遺跡からは、旧石器時代後期に位置付けられる尖頭器や細石刃、ナイフ型石器などが出土している。

縄文時代草創期～前葉も資料は少ないが、中期以降は遺跡数が増える。中期の遺跡としては、大量の土器や石斧、石錘、石鏃などが出土した天ヶ谷遺跡や、土器、打製石斧、石鏃などが出土した南新屋遺跡(50)があげられる。南新屋遺跡を始め、縄文時代の遺跡は瀬戸川流域で確認されているものが多い。図示した範囲外ではあるが、瀬戸川流域で最も上流に位置する舟ヶ久保遺跡では黒曜石製の石鏃などが出土している。中流域には、河川沿いの丘陵上に寺畑遺跡(63)、瀬戸川と滝沢川が合流する丘陵上に中山遺跡(64)が存在する。両者とも石斧や土器などの遺物が出土している。また、100点以上の石鏃、打製石斧や磨製石剣、縄文土器など多くの遺物が出土し、拠点的な集落であった可能性がある萩の平遺跡(65)も瀬戸川中流域に位置する。萩ヶ谷遺跡(54)は市内で初めて縄文時代の住居が検出された遺跡であり、土器や石器、剥片の出土が見られる。これらの遺跡は、段丘上や丘陵上に位置しており、当時の生活空間の中心が平野北端部の丘陵地であったことがうかがえる。

弥生時代 藤枝市周辺において、弥生時代前期の遺物は萩ヶ谷遺跡で出土しているが、遺構は発見され

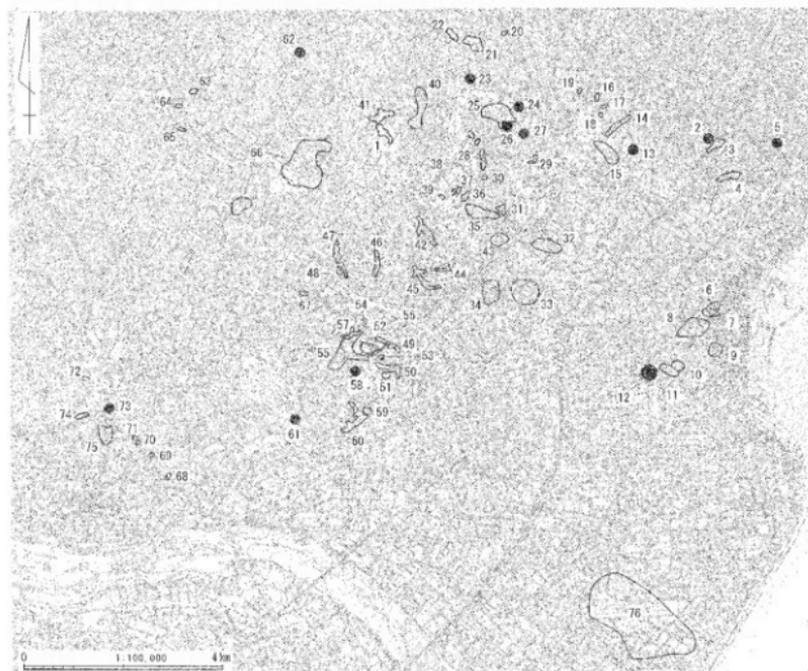


図3 藤枝市と周辺の遺跡分布図

ていない。集落遺跡が確認されるのは、弥生時代中期以降である。河川下流域では、丘陵上やその辺縁部において、遺跡数が飛躍的に増加し、大河川の氾濫原であることから進出が遅れていた後背湿地や沖積微高地にも集落域は拡大する。上蔵田川の丁遺跡(38)や清水遺跡(15)、郡遺跡(34)はその好例である。また、上蔵田モミダ遺跡(39)は葉梨川の沖積域に広がる弥生時代後期中頃の遺跡で、出土土器は志太平野の土器編年やこの地域の特性をとらえる上で重要な資料となっている。

縄文時代晩期以降から、居住域は山を下り、低地へと進出する動きは小規模ながらも継続的に見られていたが、弥生時代後期に再び丘陵上に集落を営む傾向が顕著になってきている。白砂ヶ谷遺跡(47)では丘陵上に多数の竪穴住居群や方形周溝墓が検出されている。荘館山遺跡(48)や東浦遺跡(36)、稲ヶ谷遺跡(57)なども丘陵上に営まれた集落遺跡である。丘陵上における集落の展開の背景には、低地部の集落の増加やそれに伴う人口増により低地部への進出が困難になったこと、鉄器の普及により耕地の拡大が丘陵部においてもより容易になったことに起因していると考えられる(藤枝市 1980)。

古墳時代 古墳時代に入ると、志太地域においては多くの古墳が築造され、遺跡数は飛躍的に増加する。その多くは、後期の古墳であるが、前期や中期の古墳も存在する。

前期の古墳は、時ヶ谷五兔免古墳群(42)や秋合古墳群(56)中に散見できる程度で、総じて数は少ない。しかし、前期後半以降になると、若王子古墳群(45)や東浦古墳群(36)に代表される、いわゆる初期群集墳の形成が始まる。近年では、仮宿堤ノ坪古墳(26)のように朝比奈川流域でも、類型が確認されている。大型の古墳が見られない一方で、初期群集墳が点在することは志太地域の地域的な特色ともいえる。

なお、志太地域では前期・中期の前方後円墳は未発見である。前方後円墳が築かれるのは、後期になってからである。円筒埴輪や形象埴輪をもち、6世紀初頭に位置付けられる高田観音前2号墳(23)は、朝比奈川流域の首長墓として位置付けられる前方後円墳である。6世紀中葉における瀬戸川流域の首長墓として位置付けられるのは、荘館山1・2号墳(48)である。2基とも、駿河では希少な横穴式石室を埋葬施設にもつ前方後円墳であることが注目できる。

6世紀後半以降は平野に面したほとんどの丘陵斜面に群集墳が造られるようになる。これらは、比較的規模の小さな古墳が密集して群在する特徴があることが指摘されている(増井 1978)。100基以上の

表2 周辺の遺跡地名表

№	遺跡名	時代	類別	№	遺跡名	時代	類別	№	遺跡名	時代	類別
1	衣麻遺跡	弥生～古墳	竪穴・土	27	笠原西蔵田古墳群	古墳	古墳	93	石川遺跡	縄文、古代、近世	竪穴・土
2	下蔵田古墳群	古墳	古墳	28	中蔵田遺跡	弥生、古墳	竪穴・土	94	新井遺跡	縄文、弥生、古代	竪穴・土
3	岩原穴古墳群	古墳	古墳	29	沢原遺跡	古墳	古墳	95	瀬戸川久保遺跡	古墳、古代	火葬場、土器
4	黒川古墳群	古墳	古墳	30	三ヶ谷遺跡	古墳	古墳	96	秋合古墳群	古墳	古墳
5	花岡遺跡	中世、近世	雑居	31	安物ヶ谷古墳群	古墳	古墳	97	稲ヶ谷遺跡	縄文、弥生、古代	竪穴・土
6	浅土遺跡	古墳	古墳	32	水守遺跡	古墳	古墳	98	時ヶ谷古墳	古代	古墳
7	稲倉遺跡	土壇～中世	古墳	33	田中城	中世、近世	築城	99	天ヶ谷遺跡	古墳、古代	古墳
8	宗之森遺跡	古墳～中世	古墳	34	結城遺跡	弥生～中世	古墳	100	瀬戸川古墳群	古墳	古墳
9	赤坂遺跡	古墳	古墳	35	下蔵田遺跡	弥生	古墳	101	岩山山遺跡	弥生、古墳、中世	築城
10	小瀬川西浦遺跡	弥生、古墳	竪穴・古・土	36	東浦古墳群、東浦遺跡	古墳	古墳	102	花田城	古墳	築城
11	築城田遺跡	弥生～中世	土・水・土	37	内山遺跡	弥生、古代、中世、近世	古墳	103	寺田遺跡	縄文	古墳
12	小川遺跡	古墳～近世	墓・埴	38	上蔵田川の丁遺跡	弥生	築城	104	中山遺跡	縄文	築城
13	稲倉遺跡	古墳	雑居	39	上蔵田モミダ遺跡	弥生、古墳、古代	築城	105	成の平遺跡	縄文、弥生	新石器
14	向原古墳群	古墳	古墳	40	中ノ倉遺跡	古墳、中世	古墳	106	駒形古墳群	古代(奈良・平安)	古墳
15	浅土遺跡	弥生、古墳	築城	41	志太山(中ノ倉)古墳群	古墳	古墳	107	谷原組・西蔵田古墳群	古墳	古墳
16	衣麻遺跡	弥生	築城	42	時ヶ谷五兔免古墳群	古墳	古墳	108	石川寺古墳群	古墳	古墳
17	沢ノ谷遺跡	弥生	築城	43	赤川西遺跡	古代	築城	109	鎌倉寺古墳群	古墳	古墳
18	宗之森遺跡	古墳	築城	44	約能高古墳群	古墳	古墳	110	二家古墳群	古墳	古墳
19	上蔵田遺跡	弥生	築城	45	若王子古墳群	古墳	古墳	111	駒形古墳群	古墳	古墳
20	村山遺跡	弥生	築城	46	時ヶ谷古墳群	古墳	古墳	112	茶倉内遺跡	弥生、古墳	築城
21	人形宮古墳群	古墳	古墳	47	白砂ヶ谷古墳群・白砂ヶ谷遺跡	古墳	古墳	113	野田遺跡	中世	築城
22	人形宮古墳群	古墳	古墳	48	荘館山遺跡・荘館山山遺跡	古墳	古墳	114	志ヶ谷遺跡	縄文、弥生、古代	築城
23	高田観音前2号墳	古墳	古墳	49	秋合遺跡	古代	築城	115	瀬戸川古墳群	古墳	古墳
24	仮宿堤	中世	築城	50	南新南遺跡・南新南古墳群	縄文、弥生	築城	116	沼守遺跡	縄文、中世	築城
25	朝比山遺跡	中世	築城	51	鳩山山遺跡	弥生	築城	117	沼守遺跡	縄文、中世	築城
26	仮宿堤ノ坪古墳	古墳	古墳	52	時ヶ谷・舟渡遺跡	古代	築城	118	沼守遺跡	縄文、中世	築城

古墳が群在していたといわれる瀬戸古墳群(60)は、その代表例である。南新屋古墳群(50)のように、7世紀後半以降に新たに形成される古墳群もあるが、8世紀初頭には、古墳の築造は終焉を迎える。

古墳時代の集落遺跡としては、上敷田モミダ遺跡や下敷田遺跡(35)、宮塚遺跡(29)、中敷田遺跡(28)、中ノ合遺跡(40)があげられる。これらは、前期～中期に位置付けられ、丘陵縁部の微高地や後背湿地、沖積微高地上に所在する。大井川町の藤守遺跡(76)は後期の集落遺跡である。藤枝市内における古墳時代後期の集落として、注目できるのは寺家前遺跡(本章第3節3-(3))である。この遺跡は、第二東名高速道路の建設に伴う調査で実態が解明され、掘立建物跡や堅穴住居跡が発見された。**奈良・平安時代** この時代の遺跡で注目できるのは、官衙関連遺跡の存在である。律令期の駿河国には、3つの郡が存在する。このうちの志太郡と益津郡に比定される範囲の一部が、現在の藤枝市域と重複する。獅子ヶ谷遺跡(52)は志太郡衙跡、郡遺跡は益津郡の郡衙跡とそれぞれ考えられている。両遺跡とも丘陵を背後に背負い、前方に自然堤防を臨む場所に立地しており、多数の木簡や墨書土器などの遺物が出土し、周囲には関連性をもつと考えられる遺跡の展開が確認されている。

獅子ヶ谷遺跡から、瀬戸川沿いに4km置った丘陵部には、奈良時代から平安時代にかけて、100基程の窯が操業された助宗古窯群(66)がある。また、獅子ヶ谷遺跡南方の山廻遺跡(58)からは、鉄滓やフイゴ羽片が出土し、郡衙周辺に設置された官官工房としての機能が想定されている。これらの遺跡は、奈良時代を中心とした火葬窯が発見された内瀬戸火葬窯群(55)などととも、獅子ヶ谷遺跡と関連が考えられている。一方、郡遺跡の周辺にも、水守遺跡(32)や水守西遺跡(43)のように、益津郡衙とのつながりが考えられる遺跡が見つまっている。

なお、「和名類聚抄」に見られる志太郡と益津郡の地名は、いずれも丘陵周辺、あるいは海岸部の微高地上に比定されている。その背景には、律令期以前の志太平野が河川の氾濫原や湿地が大部分を占めていたことが考えられている(藤枝市教育委員会1981)。現在見られる景観とは大きく異なる。古墳時代以前の集落も、ほとんどが丘陵部や丘陵縁部の微高地、河川沿いの自然堤防や後背湿地で確認されているが、これも同様の地理的環境に起因すると考えられる。ただし、何度も繰り返された河川の氾濫の結果、砂礫層が厚く堆積したため、遺跡が地中深くに埋没している可能性もあるだろう。現在の景観が形成されるのは、中世以降連続と続けられる開発の結果といえる。

中世以降 平安時代末以降、武家勢力が伸長するなか、当地では藤原氏の流れを汲む岡部氏や朝比奈氏が台頭する。駿河国は、南北朝時代に今川氏が所領を与えられて以降は今川氏の勢力下に置かれ、岡部氏と朝比奈氏は今川家に仕えている。今川氏は駿府を本拠地としたが、駿府進出以前は直轄領である葉梨庄を拠点とした時期があり、花倉城(62)を築城したのも今川氏とされている(静岡県教育委員会1981)。湖山北麓の朝日山城(25)は岡部氏の山城ともいわれており、その北東の仮宿館(24)は岡部氏館跡という伝承も残る。義元の死を契機に今川氏の勢力が衰えると、駿河は武田氏、北条氏、徳川氏の侵攻を受ける。志太地域は、武田氏、次いで徳川氏の領有を経て、徳川家康の治めるところとなる。家康の関東移封後は、中村一氏麾下の横田村詮が田中城(33)に置かれ、関ヶ原の戦いを迎える。

江戸時代の志太地域は、田中藩、掛川藩、横須賀藩によって統括された。田中藩は江戸時代の前半には城主が短期間で交代する時期が続いたが、享保年間の本多氏入封以後は明治元年まで世襲されることとなった。田中城は麻薩備県により廃城となる1871年までに12氏、21代が城主となるが、入城、転封に合わせた加封や、幕府の褒贈への就任から「出世城」とも呼ばれた。

また、東海道の整備に伴い、藤枝は宿場町となり活況を呈した。藤枝宿は、「藤枝」という名の町があったのではなく、街道筋に連なる村々がその親村に属しながら、その一部を宿駅として割くという、ほかの宿場町と異なる特徴をもつ。また、小規模ながらも瀬戸川の川越が行われたことや、駿河では幕府領ではない宿駅は藤枝宿と沼津宿のみであることも特徴である(藤枝市教育委員会1971)。

第3節 確認調査

1. 確認調査の対象地点

(1) 位置と現況

第二東名の路線は、藤枝市の中央部を北東から南西へ向けて横切る。藤枝市域での路線は、約6.4kmであり、3箇所の特設トンネルのほか、パーキングエリアも建設が予定されている。

藤枝市は概ね市域の南東半が平野、北西半が丘陵となっている。第二東名は平野部と丘陵部の境となる付近に建設が行われることとなった。藤枝市では、北から朝比奈川、葉梨川、瀬戸川が流れ、それぞれ流域に沖積平野を形成している。また、朝比奈川と葉梨川、葉梨川と瀬戸川の間には、北西の山塊に連なる丘陵が入り込んでいる。第二東名の路線は、これらの丘陵と河川を横断し、北は岡部町、南は島田市へとつながっている。なお、両市境は丘陵となっている。第二東名の路線とその周辺では、丘陵部分が茶畑等の畑地あるいは山林であり、平野部分は宅地や水田等として利用されている。丘陵部、平野部ともに大規模な土地の改変はほとんど受けておらず、本来の地形が概ね残されている。

(2) 対象地点の選定

第二東名の路線範囲において、静岡県教育委員会および藤枝市教育委員会が確認調査を必要とする対象地点とその範囲を選定している。藤枝地区では、No.79地点～No.87地点の9箇所が対象地点となった。

9箇所の対象地点のうち、No.80地点は中ノ合遺跡、No.82地点は衣原古墳群、No.86地点は助宗古窯群として、それぞれ周知されている埋蔵文化財包蔵地と路線の計画範囲が重複するため、調査の必要性が生じた地点である。また、その他の地点は周知の遺跡を含まないが、地形や近辺の遺跡分布との関係から、遺跡の存在を含めて確認調査を行う必要があるとされた場所である。

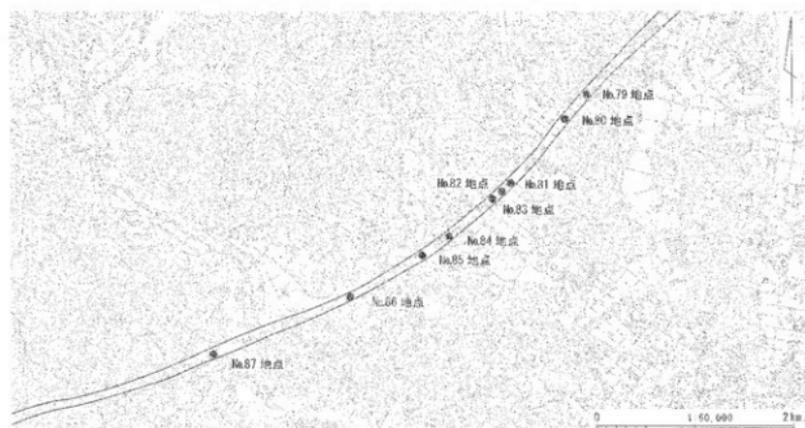


図4 第二東名の路線と対象範囲

2. 確認調査の方法

(1) 調査の方法

確認調査は、藤枝市に設けた藤枝地区事務所を拠点に地点ごとに調査を実施した。現地調査においては、掘削作業に先立ち、必要に応じて現地に駐車場と作業員棟等を設置した。また、これと併行して対象地点の位置と範囲を確認し、調査区の設定を行った。なお、掘削作業の効率化を図るため、調査区設定後、樹木や茶樹等の伐採を行った箇所もある。

調査はトレンチ掘削にて実施することを基本としたが、地形や環境等によってはテストピット掘削にて実施した箇所もある。掘削作業は、表土や攪乱土は重機を使用し、包含層掘削と遺構検出は人力で実施した。ただし、重機の進入が困難、あるいは作業に危険が伴う際は表土除去も人力で実施した。なお、遺構や遺物を確認した場合や、遺跡の把握が難しい場合、トレンチやテストピットを拡張した。

遺構または遺物を発見した際には、位置と層位等に留意した上で、その状況を書録に残した。なお、出土遺物については、記録に取った上で取り上げ作業を実施することを基本とした。ただし、遺構内である程度まとまって出土した遺物に関しては、本調査を実施することを前提とし、出土状況の記録を残すに留め、取り上げ作業は行わなかった。

遺構・遺物に関わる記録類の作成にあたっては、図面と写真を用いた。記録図は、測量用基準杭を調査地点ごとに設定した上で、トータルステーションを使用して作図した。縮率は全体図が1/100、その他は1/20を基本としたが、必要に応じ、その他の縮率も使用した。なお、測量用基準杭は、三角点や第二京名の工事関係用基準杭を基に国土座標にあわせて設定したものと、株式会社フジヤマに委託し設定した基準点を基に国土座標あるいは任意に設定したものがあつた。記録写真撮影には35mm判カラーネガフィルムを用い、必要に応じてモノクロフィルムの35mm判や8×7判を使用した。

以上の方法で、確認調査は地点ごとに遺構・遺物の有無とその広がりを把握したが、安全面を考慮して調査終了後、トレンチやテストピットを埋め戻し、整地作業を行った箇所もある。この作業には重機を使用した。重機の進入が困難、あるいは作業に危険が伴う場合は人力で行っている。

表3 確認調査期間と面積

地点名		対象面積 (資料調査面積)	面積合計 (築構割合計)
No.79地点	その1	2,037㎡ (230㎡)	4,317㎡ (342㎡)
	その2	2,280㎡ (112㎡)	
No.80地点	その1	3,371㎡ (337㎡)	21,770㎡ (1,564.6㎡)
	その2	1,270㎡ (585㎡)	
	その3	6,461㎡ (232.6㎡)	
	その4	10,668㎡ (410㎡)	
No.81地点	その1	37,616㎡ (1,006㎡)	73,366㎡ (2,671㎡)
	その2	35,750㎡ (1,865㎡)	
No.82地点	その1	19,231㎡ (1,024㎡)	38,627㎡ (2,477.5㎡)
	その2	5,100㎡ (690㎡)	
	その3	14,296㎡ (763.5㎡)	
No.83地点	その1	3,970㎡ (370㎡)	34,640㎡ (1,907㎡)
	その2	7,600㎡ (657㎡)	
	その3	18,070㎡ (880㎡)	
No.84地点		10,320㎡ (790㎡)	10,320㎡ (790㎡)
No.85地点		1,147㎡ (35㎡)	1,147㎡ (35㎡)
No.86地点		8,505㎡ (457㎡)	8,505㎡ (457㎡)
No.87地点		17,353㎡ (615㎡)	17,353㎡ (615㎡)
総計			210,046㎡ (10,888.1㎡)

(2) 調査の経過

各地点の確認調査は、調査実施条件が整った地点について、道路公団から調査要請のあった順に着手した。そのため、調査の順序は地点順ではない。また、同一地点内でも、調査実施条件の整備の関係から、部分的に数度に分けて確認調査を実施した場合もあった。その場合は「No.79地点その1」等として調査を実施した。

藤枝地区の確認調査は平成9年から開始し、平成15年まで実施した。各地点の調査期間は表4に示したとおりである。各地点の詳細な調査経過については、地点ごとに次項以下に記した。

表4 各地点の調査年次

地点名	種別	平成9年度	平成10年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
No.79	確認調査									
	本調査									
No.80	確認調査									
	本調査									
No.81	確認調査									
	本調査									
No.82	確認調査									
	本調査									
No.83	確認調査									
	本調査									
No.84	確認調査									
	本調査									
No.85	確認調査									
	本調査									
No.86	確認調査									
	本調査									
No.87	確認調査									
	本調査									
基盤整備										



写真1 No.79地点 確認調査作業状況



写真2 No.80地点 確認調査作業状況

3. 各地点の概要

(1) Na79地点

位置・立地と状況

Na79地点は、藤枝市高田・中ノ合に所在する。藤枝市高田と中ノ合ともに、藤枝市域では北西部に位置する地区であり、高田地区は朝比奈川右岸、中ノ合地区は葉梨川兩岸に所在する。朝比奈川と葉梨川は合流し、さらにその下流で西から流れてきた瀬戸川とも合流し、駿河湾に注いでいる。これらの河川と大井川が形成した平野が志太平野である。志太平野は北方と西方は山塊、南方は大井川、東方は駿河湾となっている。このうち、北西部の山塊からはいくつかの支脈が派生しており、朝比奈川と葉梨川の間に南北に連なる丘陵もその一支脈である。この丘陵の尾根上に所在するのが、Na79地点である。丘陵の稜線上には狭隘ながらも平坦面が確認できる部分がある。確認調査対象地点となったのは平坦部とその周辺で、標高は約75～110mである。丘陵部は山林あるいは茶畑となっており、調査対象範囲についても調査開始前は山林となっていた。調査対象範囲とその付近は、近代以降に大幅な地形の改変を受けた様子は見られない。なお、Na79地点の約1.2km北東にはNa78地点、南西約0.2kmにはNa80地点、南西約0.5kmには中ノ合遺跡が所在し、JR 焼津駅からは北西に約7kmの距離である。

調査方法と確認状況

Na79地点の確認調査は平成12年度と平成13年度に実施した。このうち、平成12年10月4日～12月6日に実施した調査が「確認調査その1」、平成14年2月12日～2月28日に実施した調査が「確認調査その2」である。調査対象面積の合計は4,317㎡、実掘削表面積の合計は342㎡である。調査対象範囲のうち、北西部の斜面地と中央部の平坦部を対象として実施したのが「確認調査その1」であり、調査対象面積2037㎡、実掘削表面積239㎡である。残る調査区の南部の2,280㎡を対象として実施した調査が「確認調査その2」であり、実掘削表面積112㎡である。

調査はトレンチを地形に則して設定し、人力により掘削を行った。遺物が集中した範囲については、トレンチの拡張も行った。トレンチの設定状況や完掘状況、土層断面、遺物出土状況等の記録については、実測図を取るとともに写真撮影を行った。

掘削作業はすべて人力で行った。基本的な層序としては、黄褐色シルト層が地山であり、この上は赤褐色シルト層、褐色シルト層、表土ならびに耕作土の順であった。ただし、丘陵部であるため、これとは様相が異なる部分も見られた。なお、「確認調査その1」では、褐色シルト層から山茶碗や灰釉陶器、赤褐色シルト層からは縄文土器や石器が出土した。遺構については、何も検出できなかった。

結果

調査開始前、「確認調査その1」の範囲は中世の山城、「確認調査その2」の範囲は集落跡あるいは古墳群の可能性がそれぞれ考えられていた。これらに関わる遺構や遺物を発見することはできなかったが、その一方で、予期しなかった時期の遺物が「確認調査その1」において多数出土した。それは、調査区中央部の平坦部から集中して出土した縄文土器や石器である。当該期の遺構については検出されなかったが、遺物が集中して出土した範囲を中心とした500㎡を対象に「中ノ合イセ山遺跡」として、平成14年度に本調査を実施することとなった。なお、このほかに、「確認調査その1」では山茶碗や灰釉陶器が出土し、「確認調査その2」では表土からではあるが、石器等が出土している。

(2) Na80地点

位置・立地と状況

Na80地点は、藤枝市中ノ合に所在し、前頁に記したNa79地点からは南西に約0.2kmの距離である。立地状況に関しては、概ねNa79地点と同様であるが、調査対象範囲の標高は25～60m前後であり、Na79地点よりも低い。Na79地点の斜面下方から山裾にかけてがNa80地点といえる。調査開始前は山林あるいは畑地となっていた。JR 藤枝駅からは、北に約6.5kmの距離である。

さて、葉梨川流域にはいくつかの遺跡があるが、中ノ合遺跡はその一つである。中ノ合遺跡は、葉梨川左岸の沖積平野と丘陵が接する部分に所在する遺跡で、古墳時代や中世の集落遺跡として知られている。中ノ合遺跡として熟知されている遺跡範囲と第二東名高速道路の計画範囲は一部重複していた。また、路線計画範囲における丘陵部分は、周囲の遺跡の状況から古墳が存在する可能性も考えられたため、中ノ合遺跡とその周辺をNa80地点として調査を実施することとなった。

調査方法と確認状況

Na80地点の確認調査は平成12～14年度に実施した。調査対象面積は21,770㎡、実掘削面積の合計は1,564.6㎡である。確認調査は4回に分けて行っており、「確認調査その1」は平成12年12月19日～13年3月27日、「確認調査その2」は平成13年9月3日～9月25日、「確認調査その3」は平成13年12月18日～14年2月8日、「確認調査その4」は平成14年10月21日～11月21日にそれぞれ実施している。調査対象面積は、その1から順に、3,371㎡、1,270㎡、6,461㎡、10,668㎡であり、実掘削面積は、それぞれ337㎡、585㎡、232.6㎡、410㎡である。

確認調査はトレンチあるいはテストピットを掘削することによって実施した。確認トレンチとテストピットは地形に明して設定し、掘削は重機と人力にて実施した。表土および攪乱土層については、進入路と作業の安全が確保できる場合は重機を使用した。斜面地等は人力で掘削を行った。包含層掘削や遺構・遺物検出作業については、すべて人力で実施した。遺構・遺物が確認されたトレンチについては、適宜、拡張を行った。記録図の作成には、測量基準点を基にトータルステーションを用いた。実測図の縮尺は1/20、1/40、1/50を基本とした。記録写真の撮影には35mm判カラーリバーサルフィルムを使用した。なお、調査期間中は、現地に詰め所と駐車場を設置した。

「確認調査その1」の調査範囲は、対象地の北側部分である。調査では、古墳～奈良時代・中世～近世の遺物が出土したが、遺跡が広がる様子は見られなかった。「確認調査その2」の調査範囲は、調査区の北西の一部と、調査区中央の丘陵裾部である。このうち、中央の丘陵裾部において、中世の遺構・遺物の広がりを確認した。「確認調査その3」は調査区の東側部分の尾根部とその周辺が対象範囲である。埴土中から須恵器が出土したが、遺跡の広がりはなかった。「確認調査その4」は調査区の西平部である。調査では古墳時代の小穴を検出し、古墳時代前期の土器が出土した。丘陵頂部では、古墳の石室の一部を検出した。

結果

「確認調査その2」において、遺跡の広がりが明らかとなった260㎡については、「Na80地点本調査I期」として、平成14年3月～5月に本調査を実施するはこびとなった。「確認調査その4」において、遺構の広がりが明らかとなった2,690㎡については、平成15年2月12日～12月26日に本調査を実施した。

一連の本調査の結果、古墳時代前期の集落跡をはじめ、古墳時代後期の古墳群と集落跡などの存在を明らかにすることができた。

(3) №81地点

位置・立地と状況

№81地点は、藤枝市中ノ合642-1他に所在する。中ノ合は藤枝市北西部の葉梨川沿いの地区で、地区の中でも西春りの葉梨川右岸に№81地点は位置する。調査対象範囲となった箇所は、市域北部の山塊と平野が接する場所で、北と西、南の三方を丘陵に囲まれ、東には沖積平野が広がっている。

藤枝市では、沖積平野を見下ろす丘陵には多くの古墳が存在するが、№81地点周辺の丘陵にも寺家山古墳群や衣原古墳群などの古墳群が展開する。№81地点は、これらの古墳の分布に加え、周囲の遺跡の分布状況から弥生～古墳時代の集落跡が広がる可能性が考えられ、さらに「矢部屋敷」という小字名も見られることや、「葉梨館」推定地に近いことなどから、中世の屋敷地の可能性も考えられたため、確認調査を実施することが決定した地点である。

調査方法と確認状況

確認調査は平成12年度と平成15年度に実施した。調査対象面積の合計は、73,366㎡である。このうち、平成12年6月12日～9月29日に37,616㎡を対象とした調査が「確認調査その1」、平成15年9月29日～16年3月25日に35,750㎡を対象とした調査が「確認調査その2」である。調査対象範囲のうち、概ね南半分が「確認調査その1」、北半分が「確認調査その2」における調査実施範囲である。実掘削表面積はそれぞれ1,006㎡、1,665㎡であり、合計実掘削表面積は2,671㎡である。

調査対象となった範囲は、大きく平地部と丘陵斜面部に分けることができる。平地部では、地形と方位を基に20～30mの間隔で4m四方のテストピットを設定し、丘陵斜面部では地形に則して幅1mのトレンチを設定し、これらを掘削することで遺構・遺物の有無とその広がりを確認した。掘削は表土と攪乱土については重機を用い、その他は人力で実施した。「確認調査その1」・「確認調査その2」の両者において、遺構・遺物の存在が明らかとなった範囲があり、遺構・遺物を確認したトレンチやテストピットの中には掘削を行ったものもある。その結果、弥生時代後期・古墳時代後期・中世初頭の集落跡と水田跡が広がることが判明した。ただし、層位については地形の変化に富むため一律ではない。概ね丘陵部では、表土や耕作土の厚さが0.5m前後あり、地表から0.5～1.0m程度掘削すると地山となっていた。平地部では、中世遺構検出面が地表下約1.0～2.0m、その0.3～1.0m下が古墳時代の遺構面、さらにその0.1～1.0m下が弥生遺構検出面であった。

遺構の検出状況ならびに遺物の出土状況については、基準点を基にトータルステーションを用いて実測を行った。その際、縮尺は1/20、1/100を基本とした。また、トレンチ、テストピット完掘の状況、遺構検出状況、遺物出土状況、作業状況については、35mm判カラーネガフィルムを用いて記録撮影を行った。なお、調査終了後は重機を用いて埋め戻しなどの排土処理を実施した。

結果

調査対象地点の南半部を対象とした「確認調査その1」では、中世の整地層を確認でき、水田跡等の遺構の広がりも明らかとなった。また、弥生時代後期と古墳時代後期の水田が広がることも判明した。

調査対象地の北半部を対象とした「確認調査その2」は、地形によりさらに丘陵部と平地部に分けられ、平地部において遺構・遺物の広がりを確認することができた。存在と広がりが明らかとなったのは、弥生時代後期・古墳時代後期、中世初頭の集落跡と水田跡である。なお、周囲の遺跡の状況から古墳や窯跡の存在が期待された丘陵部においては、これらの遺構・遺物を発見することはできなかった。

遺物に関しては「確認調査その1」と「確認調査その2」の両者において、弥生土器や須恵器、灰釉陶器、山茶碗、近世陶磁器等に加え、弥生時代や古墳時代の木製品等も出土した。

以上の成果から、№81地点に関しては、遺跡の広がりが明らかとなった範囲に関して本調査を実施す

ることとなった。このうち「確認調査その1」で本調査が必要となった範囲は、平成12年11月14日から平成14年3月29日まで「No.81地点本調査Ⅰ期」として18,580㎡を対象に本調査を実施した。「確認調査その2」の結果、本調査の必要性が生じた箇所については、平成15年9月26日から平成19年3月30日まで「No.81地点本調査Ⅱ期・Ⅲ期」として19,050㎡を対象として本調査を実施した。本調査対象面積の合計は37,630㎡である。なお、No.81地点は、今回の第二東名建設事業に伴う確認調査の結果、新たに発見された遺跡であり、遺跡の広がりが見えなくなった範囲については「寺家前遺跡」として遺跡登録された。

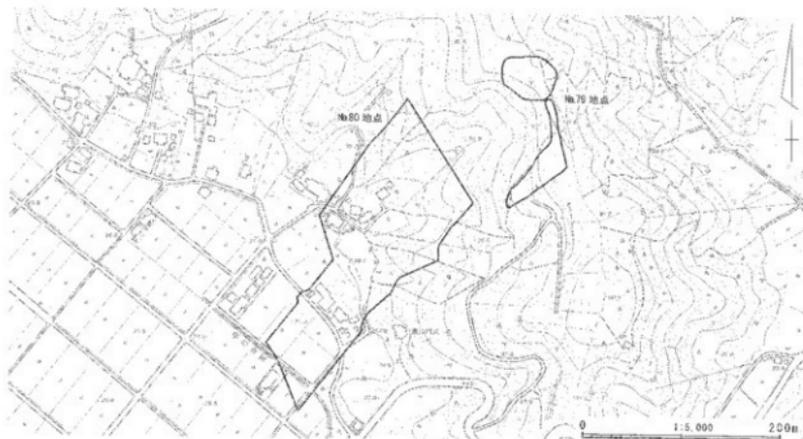


図5 確認調査対象範囲1 (No.79～80地点)



図6 確認調査対象範囲2 (No.81地点)

(4) No.82地点

位置・立地と状況

No.82地点は、藤枝市下之郷646に所在する。藤枝市下之郷は市域北東部を流れる箕梨川沿いに広がる地区で、No.82地点は下之郷北西部の丘陵上に位置する。標高は20～50m、JR 藤枝駅からは北北西に約5.5kmの距離である。藤枝市域では、沖積平野を見下ろす丘陵部に多くの古墳群が展開し、箕梨川流域にもいくつかの古墳群が存在する。衣原古墳群はその代表的なものの一つである。計画された第二東名の路線は衣原古墳群として周知されている遺跡の範囲を横切るため、両者が重複する範囲に関しては、No.82地点として確認調査を実施することとなった。また、周囲の状況から遺跡が広がる可能性がある範囲についても、併せて確認調査を実施することとなった。なお、調査開始以前、対象範囲は茶畑あるいは山林となっていた。大規模な土地の改変を受けた状況は見られないが、調査対象範囲内には古墳の主体部を構成していた可能性が考えられる石材が路頭している箇所もあり、畑地の開墾や耕作に伴う掘削が遺構に影響を与えている可能性は考えられた。

調査方法と確認状況

確認調査は平成12～14年度に3回に分けて実施した。19,231㎡を対象として平成12年12月19日～13年3月27日に実施した調査が「確認調査その1」、5,100㎡を対象として平成13年8月1日～11月30日に行った調査が「確認調査その2」、14,296㎡を対象として平成14年6月1日～10月31日に実施した調査が「確認調査その3」である。調査対象表面積は合計38,627㎡である。実掘削表面積の合計は2,477.5㎡で、内訳は「確認調査その1」から順に1,024㎡、690㎡、763.5㎡である。なお、調査対象範囲が広いため、調査にあたっては地形を基に調査区内を便宜的に5つに区分した。調査区北部がA区、中央部東側斜面がB区、中央部の丘陵頂部がC区、調査区南斜面がD区、調査区南端の丘陵裾がE区である。

調査は地形に則して設定したトレンチを掘削することにより実施した。掘削は主に人力で行ったが、表土の除去に重機を使用した範囲もある。また、掘削に先立ち茶樹の伐採を実施した箇所もある。表土ならびに耕作土を除去すると、地山となっていた。遺物はB区、C区、E区において出土したが、いずれも表土や耕作土からの出土である。出土した遺物は、縄文土器と須恵器、陶磁器類である。縄文土器は、D区から出土したが、細片である上に風化の著しいものであった。須恵器は古墳時代後期の所産で、B区とC区で出土した。陶磁器類は中世～近世のもので、B・C・D・E区から出土している。

遺構としては、古墳として断定できるものを確認することはできなかった。ただし、E区の南東部と東部では古墳の埋葬施設に関わる可能性がある石材を検出し、南西部では周溝の可能性が考えられるくぼみを検出することができた。なお、実測図作成にあたっては、測量用基準杭を設置し、これを基にトータルステーションを用い、1/20、1/100を基本として図化を行った。調査状況ならびに、記録写真の撮影には、35mm判カラーネガフィルムを用いた。調査期間中は現地には詰め所を設置した。調査終了後は、人力にて埋め戻し作業を実施した。

結果

3回に分けて実施した調査のいずれにおいても、遺物の存在は確認できた。着手前は、古墳群が大規模に展開する可能性も想定されたが、古墳が現存する可能性がある箇所は「確認調査その1」において1箇所が確認されたのみである。古墳が遺存する可能性をもつ範囲については本調査を実施することとなり、平成14年度に500㎡を対象として本調査を実施した。

(5) No.83地点

位置・立地と状況

No.83地点は、藤枝市下之郷628他に所在する。この地点は、前項に記したNo.82地点の南西に隣接し、No.82地点から続く丘陵の裾部と丘陵に接する平地部を調査範囲とする。調査区内は地形により、低地部と丘陵部に大別でき、低地部の標高は20m前後、丘陵部の標高は約25～45mである。なお、調査対象範囲となった丘陵は、東を流れる葉梨川とその支流で西を流れる半谷川に挟まれている。No.83地点として調査を行ったのは、この丘陵の先端部と、半谷川が形成した沖積平野の一部である。

No.83地点もNo.82地点と同様に、衣原古墳群として周知されている遺跡の範囲と一部重複する。周知の遺跡範囲外にも、古墳やその他の遺跡が存在する可能性がある部分は広がっており、当該箇所にもあわせて確認調査を実施することとなった。なお、調査開始前、この地点は茶畑と宅地になっており、JR藤枝駅からは北北西に5.4kmの距離である。

調査方法と確認状況

確認調査は平成13～14年度に3回に分けて実施した。平成14年2月6日～3月20日に8,970㎡を対象として実施した調査が「確認調査その1」、平成14年4月8日～6月15日に7,600㎡を対象として実施した調査が「確認調査その2」、平成14年9月1日～10月31日に18,070㎡を対象として実施した調査が「確認調査その3」であり、確認調査対象総面積は34,640㎡である。実掘削面積は、それぞれ370㎡、657㎡、880㎡であり、合計1,907㎡である。

調査範囲は、調査年次と地形に則して7つの調査区に区分した。確認調査は地形に則したトレンチとテストピットを掘削することにより実施した。表土は重機により除去することを基本としたが、重機の進入が困難な箇所については人力により掘削を行った。表土除去後は人力で掘削を行った。なお、トレンチは幅1m、テストピットは5m四方を基本としたが、必要に応じて拡張を行った。

3件のいずれの調査においても遺物は出土し、遺構の広がりや明確となった範囲もある。遺構や遺物の検出・出土状況を含め、確認調査の状況とその成果は、写真と実測により記録を残した。主な出土遺物は土器であり、古墳時代～古代の須恵器の出土量が最も多かった。遺構は、古墳や窯跡、堅穴住居跡、柱穴等の存在を確認できた。

実測図作成にあたっては、測量基準点を設置した上でトータルステーションを用いて図化し、実測図の縮率は1/100、1/20を基本とした。写真撮影には35mm判カラーネガフィルムを使用した。なお、調査期間中は現地に詰め所を設置した。調査終了後は、必要に応じて埋め戻し作業を実施した。



写真3 No.82地点 確認調査作業状況



写真4 No.83地点 確認調査 重機掘削状況

結果

確認調査の結果、丘陵部において遺構・遺物の広がりが見られた範囲が存在する。「確認調査その1」では、古代～近世の遺物が出土し、古墳と火葬遺構の存在が判明した。「確認調査その2」では、古墳時代後期の高跡の存在を確認し、「確認調査その3」においては弥生時代～近世の土器等が出土し、弥生時代と古墳時代後期～古代・中世の集落跡の広がりが見られた。

遺構・遺物の広がりが見られた範囲については、平成14～16年度に本調査を実施した。「確認調査その1」の結果を受け、平成14年7月1日～15年1月23日に1,600㎡を対象として行った調査が「本調査Ⅰ期」である。「確認調査その2」で発見した窯跡は、平成14年10月23日～8月23日に1,560㎡を対象として「本調査Ⅱ期」として調査を実施した。平成14年11月1日～3月20日に3,000㎡を対象とした「本調査Ⅲ期」、平成15年4月1日～16年1月15日に3,600㎡を対象とした「本調査Ⅳ期」はいずれも「確認調査その3」の成果に基づくものである。平成16年4月1日～12月17日に2,500㎡を対象とした「本調査Ⅴ期」は、「確認調査その2」と「確認調査その3」の成果に基づくものである。本調査対象面積の合計は12,260㎡である。

なお、「本調査Ⅰ期」で調査した古墳が「衣原11号墳」、「本調査Ⅱ期」と「本調査Ⅴ期」で調査した窯跡群が「衣原古窯群」、「本調査Ⅰ期」の火葬遺構と「本調査Ⅲ～Ⅴ期」の集落跡が「衣原遺跡」である。

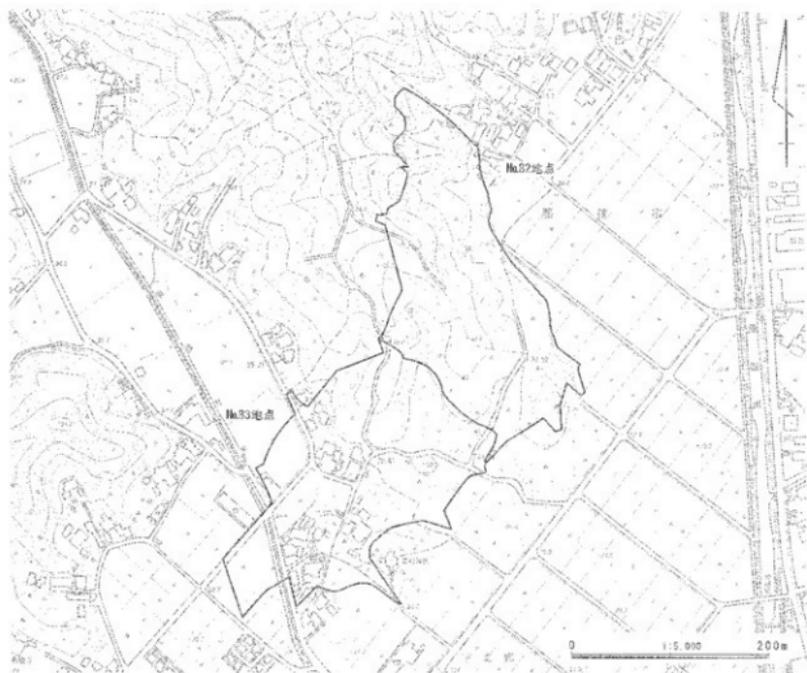


図7 確認調査対象範囲3 (No.82・83地点)

(6) No.84地点

位置・立地と状況

No.84地点は、藤枝市花倉77-2に所在する。花倉は藤枝市の北東部、葉梨川の支流である花倉川が形成した沖積平野とその周辺の丘陵に囲まれた地区である。調査対象範囲となったのは、花倉川左岸に所在する丘陵頂部から斜面にかけてである。この丘陵は、藤枝市北方の山塊から連なり、調査対象範囲の標高は約40～70mである。眼下には花倉・下之郷の集落が広がり、南東に目を転じると、駿河湾や伊豆半島を眺望できる。JR 藤枝駅から北に約5.4km、No.83地点からは北西に約0.4kmの距離である。調査開始前、この地は茶畑となっていたが、大幅な地形の改変を受けた様子は見られず、本来の地形を残しているようであった。

「花倉」の地名は今川家の家督争いである「花蔵の乱（天文5年：1536年）」により知られているが、No.84地点の所在する丘陵周辺には「葉梨館」の推定地がある。No.84地点はこれらと関わる遺構あるいは、周囲の遺跡状況から古墳が存在する可能性が考えられたため、確認調査を実施する運びとなった。

調査方法と確認状況

確認調査は平成14年度から平成15年度にかけて実施した。調査期間は平成15年1月4日～5月1日であり、調査対象面積は10,320㎡、実掘削表面積は790㎡である。

調査はトレンチを掘削することで行った。表土除去は重機で、包含層掘削や遺構検出は人力で行うことを基本としたが、古墳が存在する可能性のある箇所は、表土除去も人力で実施した。トレンチは地形に則して設定し、遺跡の広がりを見るため、一部は拡張を行った。調査終了後は、人力と重機で埋戻しを行った。記録図の作成には、測量基準点を基にトータルステーションを用いた。実測図の縮尺は1/20を基本とし、記録写真の撮影には35mm判カラーネガフィルムを使用した。なお、調査実施中は現地に詰め所を設置した。

丘陵部であるため、層位は調査区内でも場所により相違が見られる。表土の直下はにぶい黄褐色土層であり、その下が黒褐色土層である。この黒褐色土からは灰釉陶器等が出土しており、中世前後の堆積層ととらえられる。その下部は、暗褐色粘土層あるいは黒褐色粘土層であり、縄文土器が出土している。なお、場所によっては、縄文土器包含層の直上に遺物を含まない暗褐色土層が存在した。

結果

調査区中央部の丘陵頂部付近において古墳の存在が確認でき、土師器等が出土した。このほか、調査区北部等で灰釉陶器と縄文土器が出土した。

遺構・遺物が広がることが明らかとなった範囲は、平成15年6月11日～16年1月16日に「花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳」として本調査を実施することとなった。本調査対象面積は4,840㎡である。



写真5 No.84地点 確認調査作業状況



写真6 No.85地点 調査前状況

(7) No.85地点

位置・立地と状況

No.85地点は藤枝市花倉字岩下に所在し、JR 藤枝駅の北北西約5.1kmの距離である。花倉地区は北と西、南の三方を山に囲まれ、中央部に花倉川が流れている。No.85地点は、その南側の丘陵先端部の斜面に所在し、標高は40m前後である。前頁のNo.84地点は、花倉川を挟んで北東約0.3kmに位置する。

前述のとおり、「花倉」は「花蔵の乱」の舞台となった地であり、No.85地点の北西約2.6kmに花倉城が所在する。No.85地点はこれらと関連する中世城館が存在する可能性が考えられたため、確認調査を実施することとなった。調査開始前、この地は雑木林や竹林となっていた。

調査方法と確認状況

確認調査は平成14年3月4日～3月31日に実施した。調査対象面積は1,147㎡、実掘削表面積は35㎡である。

確認調査は、地形に則して設定したトレンチを人力で掘削することで行った。20cm前後の表土を除去すると暗黄褐色土層となっていたが、この土層からは何も出土せず、遺構を検出することもできなかった。この下層は地山であったが、地山上面においても遺構を検出することはできなかった。一部、地山と暗黄褐色土層の間に堆積層が見られる部分もあったが、これらの層位でも遺構や遺物を検出することはできなかった。

調査は写真と図面により記録を残した。実測図の作成にあたっては、測量用基準杭を基にトータルステーションを用いて測量し、1/20、1/100を基本として図化を行った。写真撮影には、35mm判カラーネガフィルムを使用した。

結果

確認調査の結果から、この地には遺跡の広がりはないことが明らかとなり、本調査の必要はないという判断に至った。

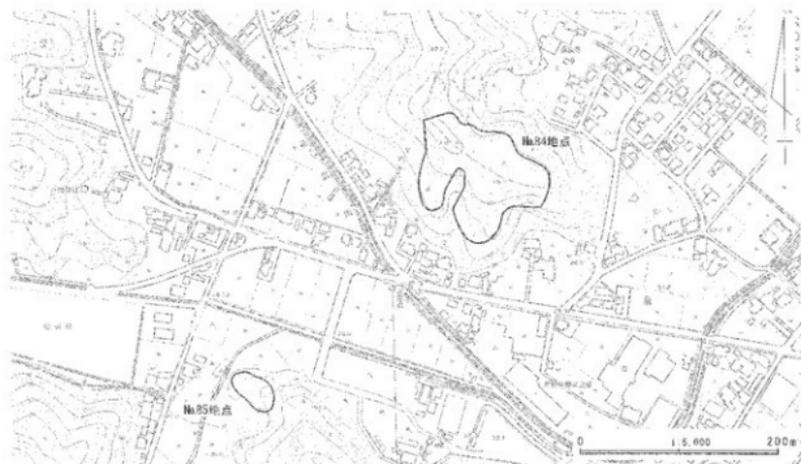


図8 確認調査対象範囲4 (No.84・85地点)

(8) No.86地点

位置・立地と状況

No.86地点は藤枝市助宗字清水地下水先に所在する。藤枝市助宗は市の中央部を流れる瀬戸川左岸に位置し、南部を瀬戸川の支流である鹿鳴渡川が流れる。No.86地点は鹿鳴渡川左岸の丘陵南側緩斜面の一角に所在し、標高は約70m～110m、JR 藤枝駅からは北西約5.2kmの距離である。

調査対象範囲は助宗古窯群として周知されている遺跡の範囲内にある。助宗古窯群は奈良時代～平安時代の窯跡であるが、窯跡の分布状況と地形から5つの小群に分けられている。No.86地点は清水下C群の範囲に含まれており、第59・60号窯跡が存在する可能性が考えられたため、確認調査を実施することとなった。調査開始前、調査対象範囲ならびにその周辺は、茶畑となっていた。

調査方法と確認状況

確認調査は平成9年10月1日～10年2月18日に実施した。ただし、確認調査中に遺跡の広がりが見明らかとなり、直ちに本調査へ移行した。上記の調査期間は本調査期間を含む。実質的な確認調査の期間は10月1日～12月18日で、確認調査対象面積は8,505㎡である。実掘削表面積は807㎡であるが、うち350㎡は本調査に移行した面積であり、確認調査としての実掘削表面積は457㎡である。

調査はトレンチ掘削により実施した。確認トレンチは地形に則して設定し、掘削は表土および攪乱土は重機で、その他は人力で行った。調査区西部のトレンチでは、須恵器等の遺物とピット等の遺構を確認することができ、遺跡の広がりが見明らかとなった。出土した遺物は、いずれも律令期のものである。この範囲は、第51～54号窯跡のほぼ前面にあたり、ほかにも窯跡に関連する遺構が存在することも考えられたため、本調査を実施することになった。その他のトレンチでは、遺構・遺物ともに発見には至らず、調査終了後、重機で埋め戻しを行った。なお、確認調査期間、現地には詰め所を設置し調査にあたった。調査記録の作成においては、測量はトータルステーションを用い、1/20、1/100を基本として図化を行った。写真撮影には、35mm判カラーネガフィルムを使用した。

結果

先述したとおり、遺跡の広がりが見確認できた350㎡については、引き続き本調査を実施した。



図9 確認調査対象範囲5 (No.86地点)

(9) No.87地点

位置・立地と状況

No.87地点は藤枝市寺島字大谷に所在する。藤枝市寺島は市域中央部を流れる瀬戸川の右岸に位置し、JR 藤枝駅からは北西に約5 kmの距離である。その南西部の丘陵緩斜面にNo.87地点はあり、調査範囲の標高は約70～100 mである。調査開始前は茶畑となっていたが、大規模な土地の改変は受けておらず、地形は原状をほぼ保っている様子であった。

No.87地点は周知の遺跡範囲ではないが、周囲の遺跡の状況から、平坦面には縄文時代～古墳時代の集落跡、丘陵頂部には古墳が存在する可能性が考えられたため、確認調査を実施することとなった。

調査方法と確認状況

確認調査は平成9年11月1日～12月24日に実施した。調査対象面積は17,358 m²、実掘削表面積は615 m²である。確認調査は地形に則してトレンチを設定し、人力による掘削で調査を実施した。

トレンチ掘削の結果、調査区東寄りの丘陵頂部で古墳1基とそれに伴う遺物が出土し、調査区北寄りの緩斜面では縄文時代～古墳時代の遺物と遺構の存在が明らかとなった。時期を確定できないものの、遺構は調査区の西寄りでも検出できた。層位は、表土と耕作土の直下にはぶい褐色土層となっており、その下層は褐色土層、黄褐色土層の順である。このうち、褐色土層からは、縄文時代～古墳時代の遺物が出土し、黄褐色土層上面が遺構検出面である。なお、丘陵部であるため、層位は場所によって異なっており、表土や耕作土の直下が基盤層である範囲も見られた。

記録図の作成は、トータルステーションを使用し、縮尺は1/20、1/100を基本とした。写真撮影は、35mm判カラーネガフィルムを使用した。なお、調査期間中は、現地に詰め所を設置し調査にあたった。

結果

確認調査の結果、縄文時代と古墳時代前期の集落跡、古墳時代中期の古墳が存在することが判明した。遺跡の広がりが見え明らかとなった4,698 m²については、平成9年度と平成10年度に本調査を実施することとなった。なお、丘陵頂部で検出した古墳は「寺島大谷古墳（1号墳）」として、その他は「寺島大谷遺跡」として本調査を実施した。

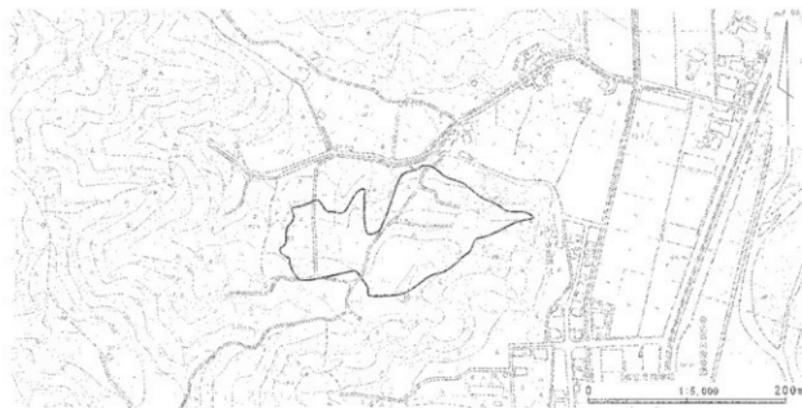


図10 確認調査対象範囲6 (No.87地点)

第4節 本調査

1. 経過と方法

藤枝地区において、本調査を実施したのは、No.79地点（中ノ合イセ山遺跡）、No.80地点（中ノ合遺跡・中ノ合イセ山古墳群）、No.81地点（寺家前遺跡）、No.82・No.83地点（衣原遺跡・衣原古窯群・衣原古墳群）、No.84地点（花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳）、No.86地点（助宗古窯群）、No.87地点（寺島大谷遺跡・寺島大谷古墳（1号墳））、以上の8地点、12遺跡である。

本調査は平成9年～18年度に実施した。本調査を実施した対象地点とその範囲は、前節に記した確認調査の結果に基づき、静岡県教育委員会から示されたものである。上記の遺跡のうち、最も早くに着手したのは、助宗古窯群（No.86地点）と寺島大谷遺跡・寺島大谷古墳（1号墳）（No.87地点）であり、平成9年度に本調査に取りかかった。助宗古窯群は平成9年度中に調査を終え、寺島大谷遺跡・寺島大谷古墳（1号墳）は平成10年度に現地調査を終えた。

平成12年度には、寺家前遺跡（No.81地点）、平成13年度に中ノ合イセ山遺跡他（No.79・80地点）、平成14年度には衣原遺跡他、平成15年度には花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳の調査に着手した。中ノ合イセ山遺跡と花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳の調査は平成15年度に終了し、衣原遺跡他の調査は翌平成16年度に終了した。寺家前遺跡の調査は平成18年度に終了した。なお、藤枝地区における本調査面積の総計は、63,728㎡である。各地点・各遺跡の調査面積と調査年次は表5のとおりである。

本調査と併行して、基礎的な整理作業を藤枝地区事務所あるいは各地点の現地事務所にて実施している。第二東名建設事業に関わる発掘調査は現地調査を優先させるという方針に基づき、本格的な資料整理作業は、上記の遺跡の調査に一区切りが付いた平成17年度から着手した。

本調査の方法としては、表土の除去には重機を用い、遺構検出・遺構掘削は人力で実施した。測量基準点については、旧測地系を基に検出遺構に合わせて設置した。遺構実測・遺物取り上げにあたっては、トータルステーションを用いた。図化にあたって、縮率は1/20と1/100を基本としたが、必要に応じてその他の縮率も用いている。写真撮影は、35mm判カラーネガ・カラーリバーサルフィルム、5×7判カラーリバーサル・モノクロフィルムを用いることを基本とした。なお、詳細な調査の方法と経過は各調査で異なるため、各遺跡の報告の中で述べることにする。

表5 本調査実施期間と面積

遺跡名	地点	年度												面積	
		9	10	11	12	13	14	15	16	17	18				
中ノ合イセ山遺跡他	No.79														500㎡
	No.80														2,950㎡
寺家前遺跡	No.81														37,630㎡
衣原遺跡	No.82														500㎡
衣原古窯群	No.83														12,260㎡
衣原古墳群															
花倉大柳遺跡	No.84														4,840㎡
花倉大柳古墳															
助宗古窯群	No.86														350㎡
寺島大谷遺跡	No.87														4,698㎡
寺島大谷古墳(1号墳)															

2. 概要

藤枝地区では、12遺跡の調査を実施し、縄文時代から近世に至るまでの遺構・遺物を検出している。以下、時代別に概要を記す。

縄文時代

縄文時代に関して調査を行ったのは、中ノ台イセ山遺跡（No.79地点）、花倉大柳遺跡（No.84地点）、寺島大谷遺跡（No.87地点）である。いずれも中期の遺跡といえる。ただし、中ノ台イセ山遺跡では、縄文土器や石器等の遺物の出土に密まり、遺構は検出できなかった。遺物は周囲からの流れ込みによるものと考えられる。土器はいずれも細片である上に表面の風化と摩耗が著しく、型式の判別は困難であるが、中期の所産と考えられる。石器は、石匙や磨石等がそれぞれ数点ずつ出土している。

花倉大柳遺跡と寺島大谷遺跡ではそれぞれ、竪穴住居跡1軒と柱穴等の調査を実施している。遺物は、土器に加え石鎌や石斧等の石器が出土している。花倉大柳遺跡から出土した土器は北屋敷式や北裏C式等であり、寺島大谷遺跡から出土した土器は勝坂式であるため、花倉大柳遺跡は中期前葉～中葉、寺島大谷遺跡も中期に位置付けられる。

弥生時代

弥生時代の遺構・遺物の調査を行ったのは、寺家前遺跡（No.81地点）、衣原遺跡（No.82・83地点）、花倉大柳遺跡（No.84地点）、寺島大谷遺跡（No.87地点）である。調査の中心となったのは、後期の集落跡であるが、寺家前遺跡では水田跡の調査もしており、衣原遺跡では中期～後期、寺島大谷遺跡では後期～古墳時代初頭の所産と考えられる遺物や遺構も確認している。

最も多くの遺構・遺物が確認できたのは、寺家前遺跡である。寺家前遺跡では、30軒を超える竪穴住居跡と掘立柱建物跡を検出し、水田の存在も明らかとなった。遺物は土器や木器のほか、銅剣や銅環等の金属器等も出土している。出土遺物は、いずれも弥生時代後期に位置付けられるものである。弥生土器は、まとまった資料が得られており、この地域における土器様式をとらえる上で貴重な資料である。

衣原遺跡と花倉大柳遺跡では後期に位置付けられる竪穴住居跡等を調査している。先述のとおり、衣原遺跡では中期～後期の土器が出土し、遺構にも後期に位置付けられるものが存在する可能性が考えられる。

寺島大谷遺跡の調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落跡を調査している。遺構としては、竪穴住居跡12軒のほか土坑等を検出しており、竪穴住居跡のうちの一軒は焼失住居であった。

古墳時代

中ノ台遺跡と中ノ台イセ山古墳群（No.80地点）、寺家前遺跡（No.81地点）、衣原遺跡他（No.82・83地点）、花倉大柳古墳（No.84地点）、寺島大谷古墳（1号墳）（No.87地点）で古墳時代の遺構・遺物を調査した。このうち、中ノ台遺跡では前期の集落と後期の古墳2基、寺島大谷古墳（1号墳）では中期の古墳を調査している。寺家前遺跡と衣原古墳群、花倉大柳古墳はいずれも後期の遺跡であるが、それぞれ注目すべき成果をあげている。

寺家前遺跡では後期の集落跡と水田跡を調査している。志太地域では古墳時代後期の集落跡は、存在自体がほとんど知られておらず、当地の歴史解明には貴重な資料となる遺跡である。また、集落跡の中心部において、一辺が約10mの規模で、四面に庇をもつと目される掘立柱建物跡を検出している。

寺家前遺跡の南西に隣接する衣原遺跡他では、同じく古墳時代後期の須恵器窯、横穴式石室墳の調査を実施した。衣原古窯群は志太地域における、現状では最古の須恵器窯である。衣原古墳群では6世紀後半に位置付けられる横穴式石室墳を1基調査した。石室内からは馬具や銀象嵌をもつ鐙等が出土している。寺家前遺跡と衣原古窯群、衣原古墳群とは隣接する遺跡である上に、ほぼ同時期に位置付けられ

るため、3者の関連性も十分に考えられる。

花倉大柳古墳は古墳時代後期前半に位置付けられる円墳である。後期前半に位置付けられる古墳は、葉梨川中流域としては初の調査事例である。

古代

衣原古窯群 (No.83地点) では、当地初例となる横口式炭窯 2 基を検出した。助宗古窯群 (No.86地点) は、奈良時代～平安時代の須恵器窯群である。No.86地点は窯体の調査には至らなかったものの、灰原を調査し、坏類を中心とした遺物が出土している。瓦塔や獣足硯等も破片ではあるが出土している。助宗古窯で生産されたと考えられる須恵器は、寺家前遺跡 (No.81地点)、衣原遺跡他 (No.82・83地点) でも出土している。両遺跡とも当該期と確定し得る遺構は数少ないが、柱穴等の中にはこの時期の所産の可能性をもつものはある。衣原遺跡他からは、このほかに緑軸陶器の碗、円面硯がそれぞれ破片ではあるが出土している点が注目できる。

中世

平安時代末～鎌倉時代初頭と考えられる集落跡と水田跡を寺家前遺跡 (No.81地点)、集落跡を衣原遺跡 (No.82・83) 地点で調査している。

寺家前遺跡では、掘立柱建物跡や溝状遺構、井戸等を検出した。掘立柱建物跡は近世以降の柱穴との判別が困難であるため、総数を確定することはできないが、少なくとも十数棟は存在したことは確かである。遺物は山茶碗が主体であるが、山茶碗の中には底面に墨書が確認できるものも一定量見られる。このほか、青磁や白磁といった貿易陶磁器、漆碗等も出土しており、集落域と水田域とを区画する溝状遺構からは藁草履も出土している。なお、寺家前遺跡では、中世後半や近世の陶磁器も出土している。

衣原遺跡でも、掘立柱建物跡等を検出している。遺物は山茶碗が主体であるが、貿易陶磁器等も出土している。衣原遺跡は近世の遺構・遺物に関しても調査を行っている。遺構としては、火葬墓を検出しており、ここからは銭貨やかわけ等が出土している。また、江戸時代に位置付けられる一字一石経や陶磁器類も多く出土している。搦鉢は、志戸呂産の割合が高いが、瀬戸・美濃産のものも見られる。



写真7 No.80地点 作業状況



写真8 No.84地点 作業状況



写真9 No.81地点 作業状況



写真10 No.81地点 作業状況

第5節 資料整理

資料整理と報告書作成は、現地調査の実施と同様に地区単位で、順次実施することとなった。ただし、第二東名に関わる埋蔵文化財調査は、現地調査を優先するという方針であり、藤枝地区においても現地調査を優先した。基礎的な整理作業の一部は現地調査と併行しながら実施し、藤枝地区の本格的な資料整理・報告書作成は、現地調査に区切りがついた平成17年度から開始した。

資料整理の方法と経過については、ここで概略のみ記すこととし、詳細は各遺跡の報告に記した。基礎的な作業は、現地、あるいは藤枝地区事務所にて実施した。整理作業と報告書作成は、平成17年度から藤枝地区事務所にて行った。出土遺物に関しては、洗浄・注記を行った後、仕分けと分類作業を経た上で接合作業と復元作業を行った。その中から抽出した遺物を実測した。この実測図を元に版組を行い、トレースを実施した。遺構についても、版組を行ってトレース作業を実施した。また、遺構図・写真等の台帳作成も併せて実施した。報告書の執筆と編集作業は上記の諸作業と併行して実施している。なお、報告書掲載遺物については写真撮影を実施した。写真撮影は4×5判カラーリバーサル・モノクロフィルム、6×7判カラーリバーサル・モノクロフィルムを用いて、当研究所写真室にて実施した。

なお、各現地調査の結果に基づいた周知の埋蔵文化財包蔵地の追加登録や登録内容の変更が、静岡県教育委員会および藤枝市教育委員会によって行われている。本書では、変更された遺跡名・遺跡範囲・古墳番号に基づいて報告している。現地調査終了時から周知内容の変更が行われるまでに、多少の時間が経過した。そのため、周知内容の変更以前において調査成果の一部を公表したのものについては、当然、変更前の内容に基づいている。これまでに公表している内容と本書に記した内容に相違がある場合、本書で報告する衣原遺跡群に関しては、本書をもって訂正することにする。本章の第3節・第4節にその成果の一部を記した中ノ合イセ山遺跡他（No.79・80地点）、寺家前遺跡（No.81地点）、花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳（No.84地点）、助宗古窯群（No.86地点）、寺島大谷遺跡・寺島大谷古墳（1号墳）（No.87地点）に関しては、現時点での見解であり、今後、刊行予定の各遺跡の報告書において訂正する。

参考文献

- 土 隆一編 1974 『静岡県の地質』 静岡県
藤枝市史編さん委員会 2007 『藤枝市史 資料編1 考古』 藤枝市
増井義己 1978 「志太平野の群集墳」『静岡県考古学研究会 静岡県考古学会
藤枝市教育委員会 1981 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』
静岡県教育委員会 1981 『静岡県文化財調査報告書第23集 静岡県の中世城加跡』 静岡県
藤枝市教育委員会 1971 『藤枝市史』上巻 藤枝市



写真11 整理作業状況 1

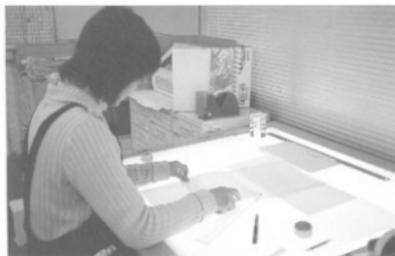


写真12 整理作業状況 2

第2章 衣原古墳群

第二東名No.83地点

第1節 位置と環境

1. 地理的環境

衣原古墳群は藤枝市の北西部に所在し、JR 藤枝駅からは北北西に5.5kmの距離である。この付近は市域北部に広がる丘陵と、市域南部に広がる平野が接する場所である。古墳群は丘陵の頂部から裾部にかけての稜線状と南側斜面を中心に展開する。古墳群の眼下には、藤枝市北部を流れる葉梨川とその支流である半谷川が形成した沖積平野が広がっている。この沖積平野は、最大で東西1.5km、南北2.0kmの幅をもち、平野の東寄りを流れる葉梨川の下流方向である南東部で志太平野と続いている。ただし、平野の東側、北側、西側、南西側は標高約60～350mの山塊に囲まれ、志太平野と接する部分の幅も400m程度であり、あたかも盆地状の地形となっている。衣原遺跡の所在する丘陵からはこの盆地状の平野を一望することができる。

衣原古墳群は標高20～70mの丘陵稜線上と南側斜面に展開する。この丘陵はさらに北側へと続いており、標高80～90m付近には冢家山古墳群が展開している。ともに古墳時代後期の古墳群である。現在、丘陵の裾部付近は一部宅地として利用されており、緩斜面には茶畑が広がっている。急峻な斜面地は一部植林がなされているほかは自然林が残されている。本書で報告する衣原11号墳は、衣原古墳群の中では最も南側に位置し、標高も最も低い。

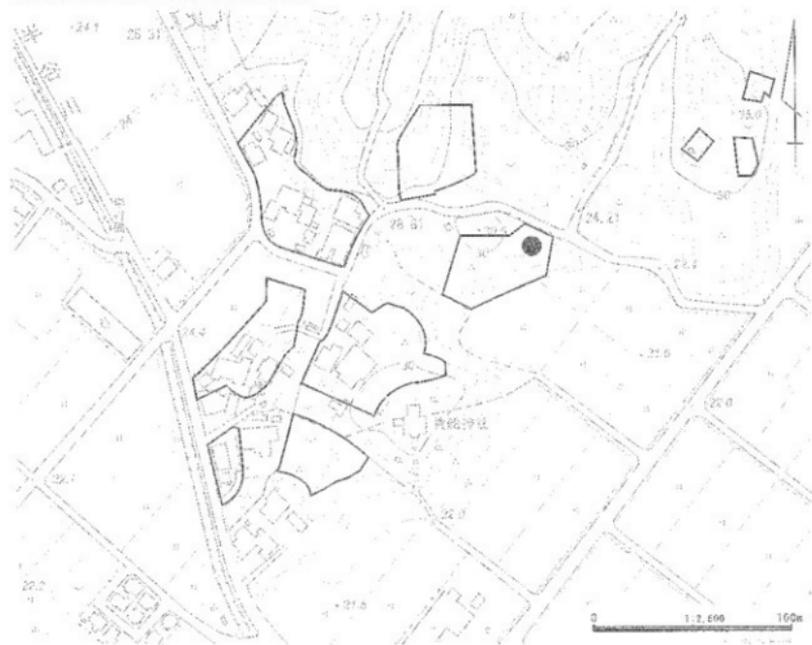


図11 本調査対象範囲と11号墳の位置

2. 歴史的環境と調査歴

(1) 歴史的環境

藤枝市北部を中心とした志太地域の歴史的環境は第1章第2節に記したとおりである。ここでは、衣原古墳群が所在する葉梨川流域の古墳時代について概観する。なお、葉梨川流域は、志太地域における古墳時代の遺跡のあり方とはほぼ同様の傾向を示す一方で、特徴的な点ももつ。

まず、古墳については葉梨川流域では、古墳時代を通じて前方後円墳は確認されておらず、首長墓を見いだすことができないことが特徴の一つといえる。また、前期末～中期にいわゆる初期群集墳が存在することも特徴の一つである《東浦古墳群(42)、五鬼免古墳群(54)、女池ヶ谷古墳群(34)》。古墳築造が盛期を迎えるのは、後期に入ってからであり、本章で報告する衣原古墳群(1)もその一つである。

集落遺跡には大きな特徴は見られないが、中期～後期の集落がほとんど知られていない志太地域において、後期の集落が存在することが注目できる《寺家前遺跡(63)》。また、前期の集落も存在する《中ノ合遺跡(46)》。

最大の特徴は、志太地域では唯一古墳と集落、生産遺跡がまぎらって存在することである。寺家前遺跡と、本書で報告する衣原古墳群、衣原古窯群はいずれも6世紀後半から7世紀前半の所産であり、これらの遺跡は直径700m程の範囲内にある。時期的にも地理的にも有機的な関連性がうかがえる。

(2) 衣原古墳群の調査歴

衣原古墳群は一部が藤枝市の指定遺跡となっている。発掘調査は行われていないが、存在自体は古くから知られており、昭和40年代には須恵器等が表面採集されている(藤枝市 2007)。これらの須恵器は

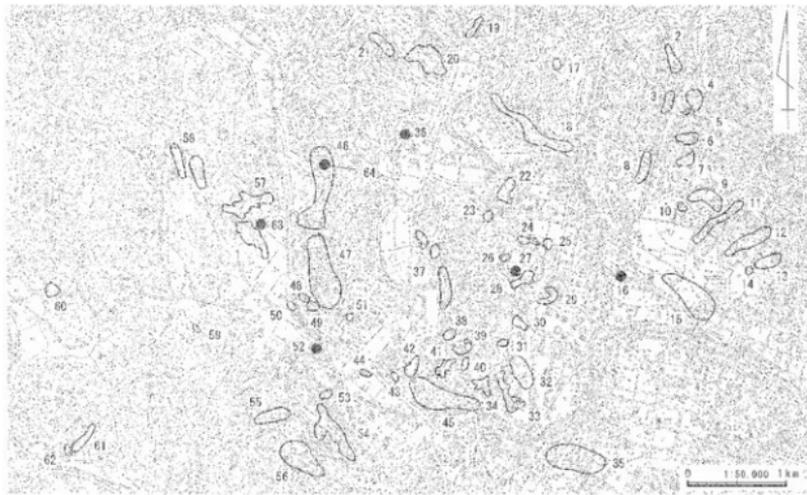


図12 衣原古墳群と周辺の古墳時代遺跡分布図

6世紀後半～7世紀代に位置付けられるものであり、衣原古墳群は後期の群集墳ととらえられる。

衣原古墳群は、標高約25～85mの尾根上を中心として展開する。最も高所にあるのが1号墳であり、本書で報告する11号墳が最も低所に位置する。11号墳は第二東名建設事業に伴う発掘調査によって新たに発見された古墳であり、調査以前は10基の古墳の存在が知られていた。このうち、8～10号墳は第二東名の建設予定地内に所在する。しかし確認調査の結果、この3基の古墳は遺存しないことが判明した。残る7基の古墳は、いずれも調査が行われていない。ただし、1号墳は現存し、横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることは明らかである。

なお、衣原古墳群の北側、標高90m前後の尾根上には、寺家山古墳群(57)が展開する。寺家山古墳群も衣原古墳群と同様に、古墳時代後期の群集墳として知られているが、昭和30年代に発見された横穴式石室からは、前期に位置付けられる銅鏡が出土している(藤枝市 2007)。そのため、付近に前期の古墳が存在する可能性がある。志太地域の事例を踏まえると、衣原古墳群・寺家山古墳群が所在するこの丘陵にもいわゆる初期群集墳が存在する可能性は否定できない。

表6 周辺の古墳時代遺跡地名表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	衣原古墳群	17	衣原山古墳群	33	曹山古墳群	49	中畑古墳群
2	平座・谷古墳群	18	子孫原古墳群	34	女池・谷古墳群	50	中畑1遺跡
3	本郷1古墳群	19	藤原宮古墳群	35	水守遺跡	51	新向古墳群
4	本郷2古墳群	20	入野原古墳群	36	高畑稲倉前1・2号墳	52	二ヶ池遺跡
5	立石古墳群	21	入野西古墳群	37	日根田遺跡	53	芦山遺跡
6	本郷山古墳群	22	高野・山崎古墳群	38	ニッ南古墳群	54	跡ヶ谷五塚古墳群
7	山田古墳群	23	敷布庵ノ原古墳群	39	斎沢古墳群	55	跡ヶ谷山ノ神古墳群
8	本郷西古墳群	24	大森古墳群	40	下原口・大谷古墳群	56	三沢古墳群
9	堀ヶ谷古墳群	25	中ノ原古墳群	41	下飯田・山崎古墳群	57	寺家山(中ノ谷)古墳群
10	坂本遺跡	26	坂原古墳群	42	岩崎古墳群・東浦遺跡	58	上平谷古墳群
11	衣原古墳群	27	衣原川古墳群	43	岩崎遺跡	59	岩下古墳群
12	神神古墳群	28	瀬尾遺跡	44	足形エダ遺跡	60	熊倉古墳群
13	松崎古墳群	29	古宮遺跡	45	下野野遺跡	61	中ノ谷(堀之内)古墳群
14	松崎遺跡	30	湯加原古墳群	46	中ノ谷遺跡	62	廣鏡寺(堀之内)古墳群
15	清水遺跡	31	八幡・大谷遺跡	47	廣鏡・中田古墳群	63	寺家前遺跡
16	堀内遺跡	32	松ノ下遺跡	48	中畑1遺跡	64	中ノ谷イノ山遺跡・古墳



図13 衣原古墳群の位置

6世紀後半～7世紀代に位置付けられるものであり、衣原古墳群は後期の群集墳ととらえられる。

衣原古墳群は、標高約25～85mの尾根上を中心として展開する。最も高所にあるのが1号墳であり、本書で報告する11号墳が最も低所に位置する。11号墳は第二東名建設事業に伴う発掘調査によって新たに発見された古墳であり、調査以前は10基の古墳の存在が知られていた。このうち、8～10号墳は第二東名の建設予定地内に所在する。しかし確認調査の結果、この3基の古墳は遺存しないことが判明した。残る7基の古墳は、いずれも調査が行われていない。ただし、1号墳は現存し、横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることは明らかである。

なお、衣原古墳群の北側、標高90m前後の尾根上には、寺家山古墳群(57)が展開する。寺家山古墳群も衣原古墳群と同様に、古墳時代後期の群集墳として知られているが、昭和30年代に発見された横穴式石室からは、前期に位置付けられる銅鏡が出土している(藤枝市 2007)。そのため、付近に前期の古墳が存在する可能性がある。志太地域の事例を踏まえると、衣原古墳群・寺家山古墳群が所在するこの丘陵にもいわゆる初期群集墳が存在する可能性は否定できない。

表6 周辺の古墳時代遺跡地名表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	衣原古墳群	17	水津山古墳群	33	青山古墳群	49	中田日遺跡
2	平沼・谷古墳群	18	子母飯古墳群	34	女池・谷古墳群	50	中田1遺跡
3	本郷1古墳群	19	高瀬古墳群	35	水守遺跡	51	谷崎古墳群
4	本郷2古墳群	20	入野西古墳群	36	高瀬原古墳1・2号墳	52	二ヶ所遺跡
5	立石古墳群	21	入野西古墳群	37	中瀬田遺跡	53	沙田遺跡
6	本郷南古墳群	22	原宿・山崎古墳群	38	三ツ池古墳群	54	崎・谷五鬼色古墳群
7	山田古墳群	23	原宿・山崎古墳群	39	倉沢古墳群	55	崎・谷山ノ神古墳群
8	本郷西古墳群	24	大龜古墳群	40	下瀬田・大谷古墳群	56	三沢古墳群
9	崎・谷古墳群	25	中ノ河古墳群	41	下瀬田・山崎古墳群	57	寺家山(中ノ谷)古墳群
10	稲津遺跡	26	堀沢古墳群	42	原崎古墳群・東浦遺跡	58	上平谷古墳群
11	向原古墳群	27	牧野沢古墳群	43	宮脇遺跡	59	岩下古墳群
12	伊藤古墳群	28	瀬遺跡	44	上瀬田セミア遺跡	60	駒形古墳群
13	伊藤古墳群	29	宮野遺跡	45	下瀬田遺跡	61	中ノ谷(堀之内)古墳群
14	松崎遺跡	30	尾崎古墳群	46	中ノ谷遺跡	62	蔵藏寺(堀之内)古墳群
15	清水遺跡	31	八幡・大谷遺跡	47	堀型・中田古墳群	63	寺家の遺跡
16	横内遺跡	32	松下遺跡	48	中田日遺跡	64	中ノ谷イモ山遺跡・古墳

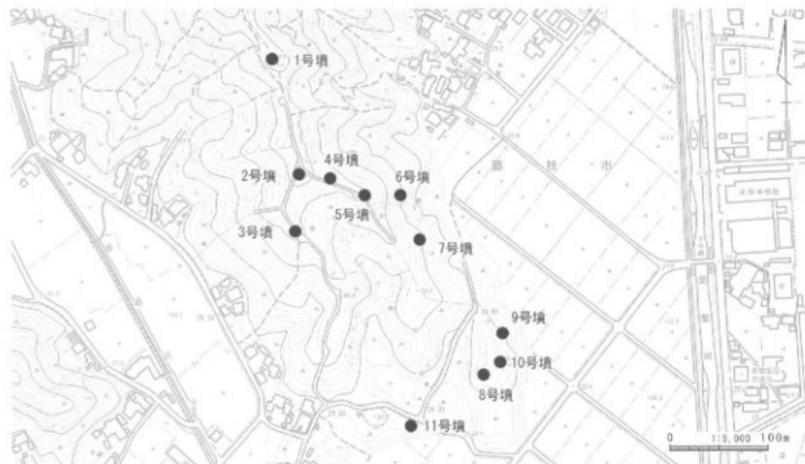


図13 衣原古墳群の位置

第2節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

衣原古墳群の本調査は平成13年度に実施した確認調査の結果を受け、平成14年7月1日～15年1月23日に衣原遺跡の調査と併せて実施した。

調査は、バックホウを用い表土除去作業を行い、人力で遺構検出、包含層掘削、遺構掘削を行った。調査区内には、測量基準点を国土座標に基づいて設定した。また、これとは別個に、古墳は主体部の主軸に沿って基準杭を設置した。実測図はこれらの基準点を基にトータルステーションを用いて作成し、縮率は1/20、1/100を基本とした。また、空中写真撮影により全体図作成と地形測量も行った。

調査の状況ならびに遺物の出土状況、遺構については、実測図と併せて写真撮影により記録を残した。写真撮影は35mm判カラーネガフィルム、6×7判カラーリバーサル・モノクロネガフィルムを使用した。また、6×4.5判カラーリバーサル・モノクロフィルムを使用し、ラジコンヘリによる空中写真撮影も実施した。なお、基準杭の設定、空中写真撮影・測量は株式会社フジヤマに委託した。

基礎的作業の一部は上記の作業と併行して実施したが、第二東名に関わる調査は、現地調査を優先させる方針であったため、資料整理は、藤枝地区の現地調査が一段落着いた平成17年度から開始した。作業は藤枝地区における他遺跡の作業と併行して第二東名藤枝地区事務所にて実施した。なお、劣化の著しい金属器は、発泡ウレタンで補強をした上で取り上げ作業を実施し、当研究所保存処理室にて保存処理作業を実施した。また、出土遺物の写真撮影は、当研究所写真室にて実施し、4×5判と6×7判のカラーリバーサルフィルム・モノクロフィルムを使用した。



写真13 本調査作業状況1



写真14 本調査作業状況2



写真15 本調査作業状況3



写真16 本調査作業状況4

2. 現地調査の経過

衣原古墳群の本調査は、衣原遺跡の調査と併行して平成14年7月1日から15年1月23日に実施した。なお、当該範囲の確認調査は平成14年2月6日から3月20日にNo.83地点「確認調査その1」として実施している。

調査にあたっては、始めに資機材の搬入等の準備工と、調査範囲の確認を行った。安全通路を確保した上で、7月8日から重機による表土除去作業に取りかかった。表土除去作業が終了した範囲については、7月25日に測量用基準杭の設定を行った。

7月29日には重機掘削が終了したため、人力による遺構検出作業に着手した。遺構検出作業を実施したところ、8月26日には、古墳主体部の石材の一部を検出し、横穴式石室を主体部とする古墳が存在することが明らかとなった。なお、この古墳は、このたびの調査で新たに発見された古墳であり、衣原11号墳として登録された。

9月13日には、主体部の上半部を検出し終え、天井石が残存しないことが判明した。次に、主体部の主軸に基づいて基準杭を設置し、土層帯を残しながら主体部覆土の掘削を開始した。なお、9月19日からは衣原遺跡の調査を優先させる為に衣原11号墳の調査は一時中断した。衣原11号墳の作業は10月16日から再開した。11月初頭には、主体部床面の検出作業に着手した。床面を検出する過程で、奥壁付近を中心として副葬品が出土したため、これらの出土状況を図面と写真撮影により記録に残した。記録を取った遺物については取り上げ作業を実施した。1月10日には、鉄製品など劣化の著しい遺物を発泡ウレタンで補強した上で、取り上げ作業を行った。なお、副葬品の調査と併行して、主体部の実測ならびに撮影、墳丘や外部施設の調査も併行して実施している。遺物の取り上げ作業は1月14日に終了し、石室の解体作業に着手した。解体と併せて、必要箇所は実測や写真撮影を行い、1月23日に現地調査を完了した。

資料整理は、前頁に記したとおり、基礎的作業の一部は現地調査と併行して実施したが、本格的な作業は平成17年度から着手した。作業は、始めに土器類の接合・復元を実施し、次いで遺構に関わる作業に取りかかった。これらの作業と併行し、大刀や馬具等の保存処理作業を行った。その過程で、大刀の鏝に銀象嵌が施されていることが判明した。

平成17年度からは、報告書作成作業にも取りかかった。出土遺物の図化作業から着手し、続いて遺構図・遺物図の編集作業と製図作業を実施した。上記の作業と併行し、本文の執筆と編集作業を行っている。一連の作業を経た資料については収納作業を実施し、平成22年3月、本書の刊行をもってすべての作業を完了した。

表7 11号墳調査工程表

作業内容	7月					8月					9月					10月					11月					12月					1月				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
準備・撤去工	■																																		
表土除去	■	■	■	■	■																														
遺構検出																																			
遺構調査																																			
測量																																			

第3節 調査の成果

1. 概要

衣原古墳群はこれまでに10基の古墳の存在が知られていた。このたびの第二東名建設事業に伴う発掘調査で調査を実施した衣原11号墳は、既知の古墳ではなく、新たに発見した古墳である。

衣原11号墳は、横穴式石室を埋葬施設とする古墳時代後期の古墳であることが、調査の結果判明した。ただし、後世の開墾等により外部施設は遺存しなかったため、墳形やその規模については不明である。横穴式石室についても、天井石を含め石室の上半部は残存しなかった。しかし、床面付近は最終埋葬時の状況を留めており、奥壁付近からは副葬品が出土した。副葬品には、馬具や大刀などの武器も見られた。注目できるのは、大刀とともに出土した鐙である。この鐙には銀象嵌が施されていた。

衣原11号墳はこれらの副葬品や、須恵器、石室形態から6世紀後半の築造であることが判明した。



図14 11号墳と周辺の地形

2. 衣原11号墳の調査

(1) 外部施設

衣原11号墳の調査では、墳丘等の外部施設を確認することはできなかった。もっとも、元来は石室全体を覆う程度の墳丘は有していたはずであり、後世の開墾等により削平されたものと考えられる。また、周溝や墓道についても存在を確認できなかった。ただし、周辺の古墳の事例から推測すると、埋葬施設である横穴式石室の開口部付近を除いた部分には、周溝が巡っていた可能性はある。

(2) 埋葬施設

残存状況 埋葬施設は横穴式石室であった。石室は南に開口し、主軸方位はN-17°-Wである。この石室は、外部施設と同様に上半部を欠き、開口部付近も石材は遺存しなかった。残存した側壁は、基底石を含めた2段程度、奥壁は基底石のみである。

なお、石室内には側壁を構成していたと推定される礫が多数存在しており、この古墳は石室が崩壊した後に、上部が削平されたものと考えられる。ただし、冒頭に記したとおり、床面は盗掘を受けた様子はなく、最終埋葬時の状況をほぼ示すものといえる。

形状と規模 上述したように、横穴式石室は後世の破壊を受けているため、立面構造は不明である。ただし、基底石の痕跡からは、この石室が両袖式であることと、全長が約6mであることが推測できる。

玄室の平面形は、ごくわずかに中央部が張るものの、長方形と見なすことができる。玄室の規模は長さ4.7mと推定でき、奥壁幅1.6m、最大幅は奥壁から2.0mの距離で1.9mある。

玄門部の石材は遺存しなかったが、基底石の痕跡から1m前後の幅であったと推測される。残存高は、最も残りの良い奥壁と左壁の接点付近で床面上から測り、1.0mである。なお、羨道に関しては、石材が一切遺存せず、基底石の痕跡も見つからなかった。ただし、墓坑を見る限りでは1m程度の羨道があったことがうかがえる。

床面 床面奥壁から羨道に至るまではほぼ水平に保たれており、床面の造作による石室内の空間区分の様子はいかかえなかった。敷石は見られなかったものの、主軸線よりも右側壁においては、奥壁から0.6m離れた箇所にも最大幅40cmと30cmの扁平な角礫2個が主軸と直交するように並べられていた。さらに、この2石から、2.0m開口部側には同様に2つの角礫が並べられていた。この4石は、その状況から棺台と考えられる。

また、主軸線より左側壁においても、奥壁から1.0mの所に最大幅50cmの扁平な角礫が置かれていた。右側壁のように対となる石材を発見することはできなかったが、棺台であった可能性は高い。石材を検出できなかった背景には、この付近が床面にまで破壊が達していたことも一因となっていると考えられる。なお、棺の痕跡は、ともに発見できなかった。

石材と用法 衣原11号墳の石室に使用されるのは、砂岩の角礫である。割石と自然石が併用されており、基底石においては、石室内に向けられた面が平坦になるように加工されているものが存在する。

奥壁は基底石のみが遺存した。奥壁には扁平な石材が用いられ、基底石は3石で構成されている。中央に大きめの石材を配し、その左右に最大幅が中央の石材の半分程度の石材を縦位に据えている。石材の大きさは中央のものが、縦横ともに80cm、厚さ40cm、向かって右側の石材は、高さ90cm、幅40cm、厚さ25cm、左側のものは高さ80cm、幅35cm、厚さ30cmである。

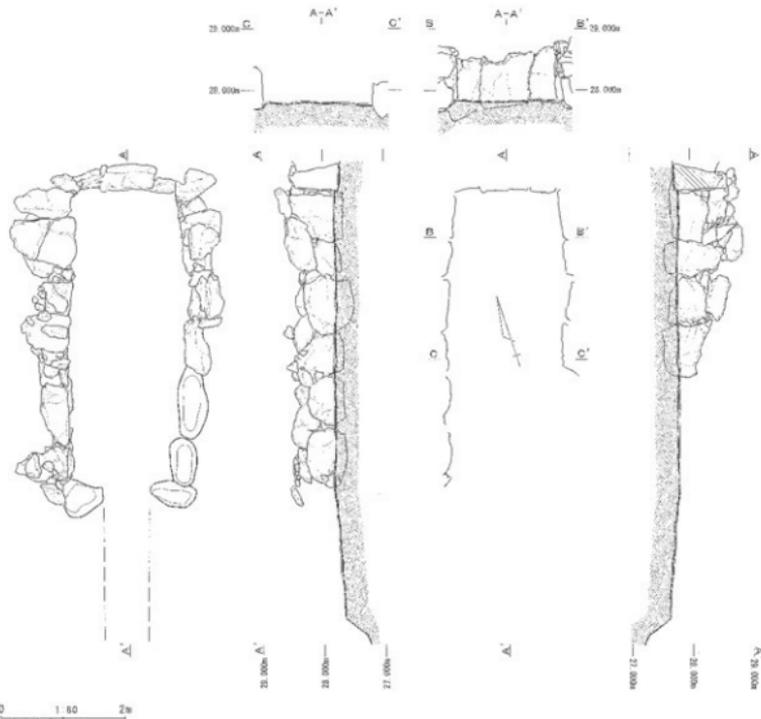


図15 11号墳石室展開図

側壁は基底石と2段目の一部が残存した。基底石は広口面を石室内側に向けてるように掘えられているものが、ほとんどである。2段目は、横口横みと小口積みと混在する。

側壁を構成する主要な石材の大きさは、最大幅が40～100cm程度である。基底石は2段目よりも一回り大きめの石材を用いる傾向にあるが、石材の大きさに加え石材の設置方法の違いから、玄室内から見ると、基底石は2段目に比べて大きく見える。特に左壁最奥部は扁平な石材の広口面を向けている様子が明らかであり、視覚的効果を意識していることがうかがえる。なお、上述した残存状況であるために、持ち送りの状況については不明である。

墓坑と墓道(図16) 石室の墓坑は長方形の平面形をとり、検出面での全長は6.8mである。幅は奥壁側と開口部側で4.2m、最大幅は4.4mである。検出面からの深さは、最大で1.0mである。なお、側壁と奥壁の基底石設置にあたっては、特別な造作がされている様子はない。また、石室側壁と墓坑壁面の間には、砂礫等の使用はない。

墓道は、0.7mの長さが検出できたに過ぎず、墓坑との接続部分での幅は1.1m、深さは0.3m程度である。墓道は、さらに斜面下方へ向かい続いていた可能性はあるが、後世における地形の改変が著しく、推測の域を出るものではない。

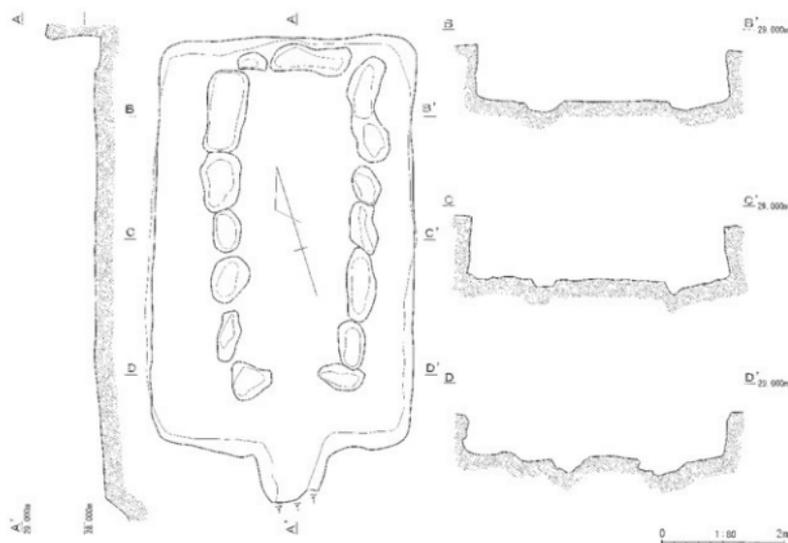


図16 11号墳池形

遺物出土状況(図17) 石室内からは、鉄刀や鉄鏝といった武器類、櫛や辻金具などの馬具などに加え、装身具、須恵器、土師器が出土した。いずれも、ほぼ最終埋葬時の位置を留めている。

出土位置は、A群：奥壁際、B群：石室中央部の左壁寄り、C群：石室中央部の右壁寄り、に大別できる。次に、各グループ単位で、詳細を記す。

A群：奥壁際は、最も多くの遺物が出土した箇所である。このグループは、さらに左壁寄りの一群(A-1群)と右壁寄りの一群(A-2群)に細分できる。A-1群からは、鉄鏝(1~26、28~54)・両頭金具(1~3)・土師器(土器19~39)・須恵器(土器1~18)が出土し、A-2群からは、馬具(1~6)・須恵器(土器40、41)が出土している(図18~20)。

左壁寄りのA-1群は、特に遺物が集中した範囲である。ここには、最大幅40cmの角礫が1石、床面上に存在した。この礫の直上から、提瓶が1点出土している。この石材は偶発的にこの位置に存在するとは考えがたく、埋葬時に意図的に設置されたものと考えられる。

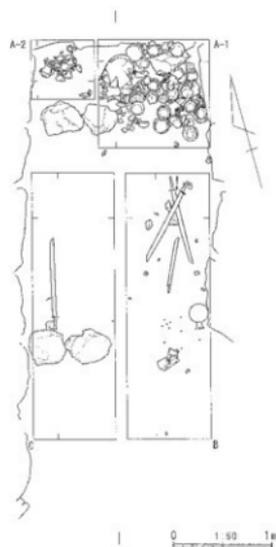


図17 11号墳遺物出土状況

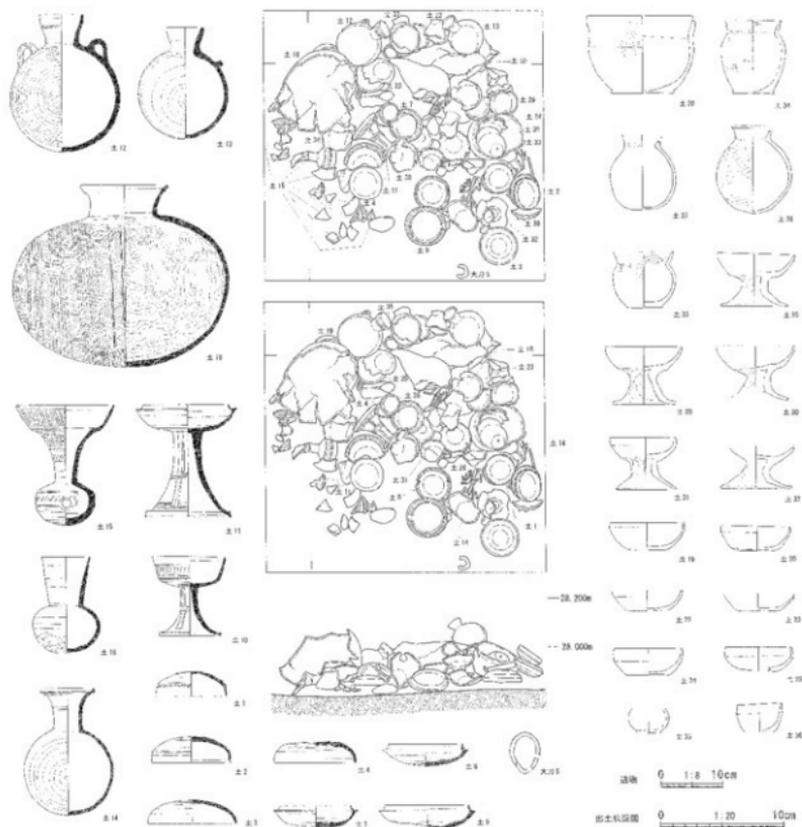


図18 11号墳 A-1群(上)遺物出土状況

また、A-1群から出土した土器類や鉄鏡は床面より離れたものもあり、それらは追葬時に片づけられたものと考えられる。鉄鏡は、10本前後の3つの束に分かれて出土した。それぞれの群は鏡身の方向がそろい、何らかの容器に収納されていた可能性も想定できるが、容器の痕跡は見られなかった。このような出土状況であることから、この位置から出土した遺物は、初葬に伴うもので、葬送儀礼の終了後あるいは追葬時に片づけられたものと考えられる。

奥壁際の右壁寄りであるA-2群からは、2点の有蓋高坏と馬具が出土している。この位置から出土した遺物は、埋葬時の状況をほぼ留めているといえ、高坏のうち1点は、床面上に据え置かれた状況のままの出土である。出土した高坏は、この古墳出土土器の中でも古相のものであることから、この位置出土の遺物も初葬に伴うものと考えられる。

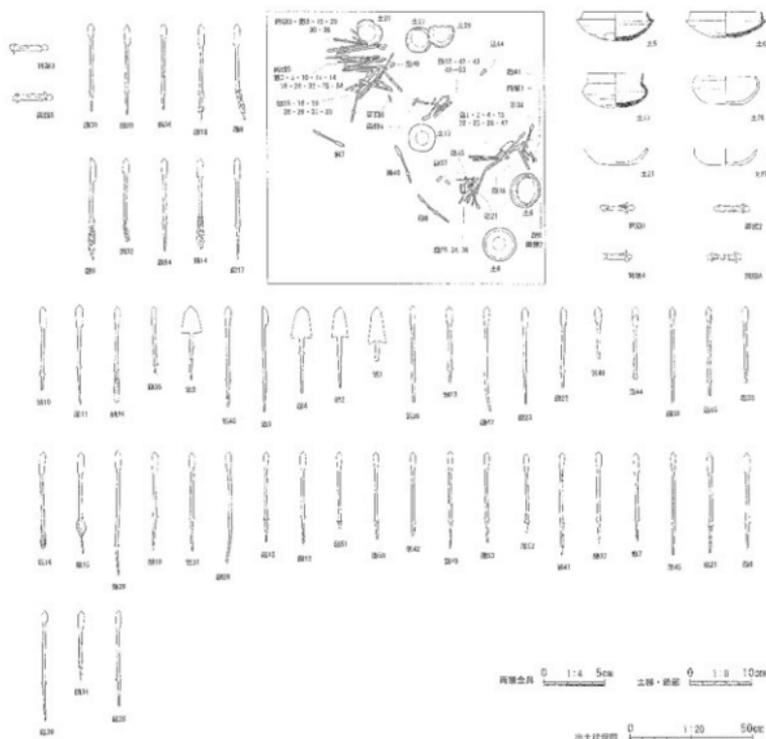


图19 11号墳 A-1群(下)遺物出土状況

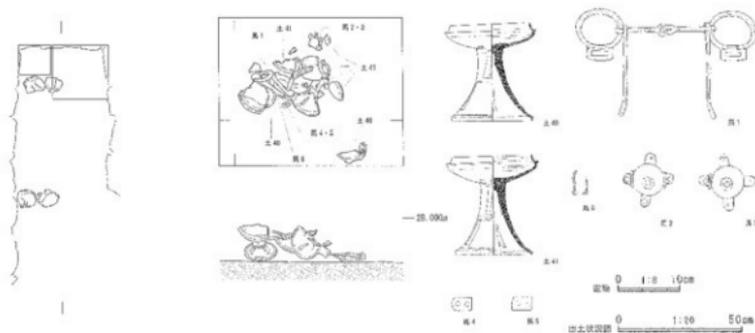


图20 11号墳 A-2群遺物出土状況

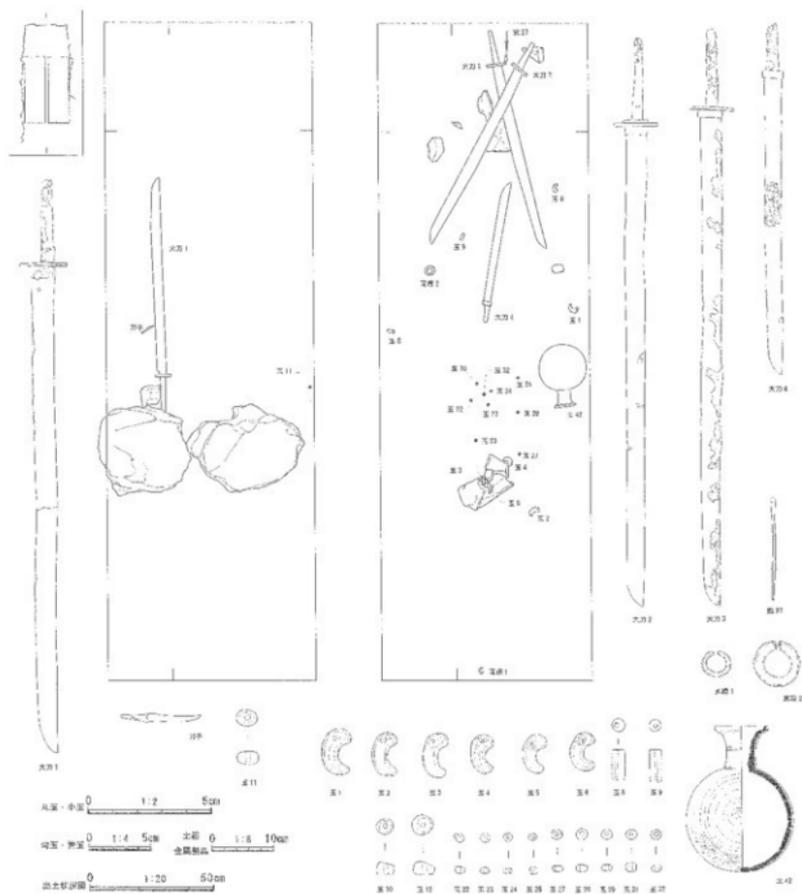


図21 11号墳B・C群遺物出土状況

B群：石室中央部の左壁寄りからは、鉄刀3点と装身具、須恵器（土器42）が出土している。このうち、鉄刀3点と装身具は棺が置かれていたものと想定される箇所からの出土である。ただし、鉄刀の1点は、棺台と考えられる石材の下から錆付金具が出土していることから、副葬時期が異なるものと考えられる。また、装身具類は、この位置に埋葬された被葬者に伴うものとは考えられるが、散在的な出土状況であることから、2次的な移動を受けているものと考えられる。なお、須恵器はこれらとは少し離れた開口部寄りからの出土である。

C群：石室中央部の右壁寄りからは、鉄刀が1点出土している。この鉄刀の出土位置は、棺台と考えられる2対の石材の間からの出土であることから、棺内に入れられていた可能性も考えられる。

(3) 出土遺物

衣原11号墳の石室内からは、馬具6点、鉄刀4点、刀装具1点、鉄鏃60点、両頭金具8点、刀子1点、耳環3点、玉類32点、須臾器21点、土師器21点が出土した。出土状況は先述のとおり、最終埋葬時の原位置をほぼ留めるものであり、大きく4つの群に分けることができる。注目できるのは、鉄刀のうち1点が鐔に銀象嵌が確認できたことである。以下、種別に出土遺物について記す。

① 馬具 (図22・23)

馬具は、轡1点、辻金具2点、飾金具2点、鉸具1点が出土している。いずれも奥壁際の右壁寄り(A-2群)からの出土である。

環状鏡板付轡 (図22-馬具1) 鉄製の環状鏡板付轡である1は、ほぼ完形で出土した。轡は二連式で、長さは右側が8.80cm、左側が8.70cmである。鞆金は左右とも円形を呈し、外径は右が2.15cm、左が1.95cmである。轡先環は左右とも円形を呈し、鞆金とはほぼ直角に向きを違え、引手と鏡板を絡ませている。外径は右側が2.60cm、左側が2.75cmである。

鏡板は、左右とも楕円形で、大型の矩形立開をもつ。外径は右側が長径8.90cm、短径6.35cm、左側は長径7.80cm、短径6.50cmである。立開は右側が幅4.30cm、高さ2.25cm、左側が4.30cm、高さ2.25cmで、左右とも頭部が弧を描く。

引手は、引手壺が外反する「くの字引手」である。引手の長さは、右側が15.80cm、左側が15.00cmである。引手壺は円形で、右側が2.40cm、左側が2.45cmである。轡と連接する端環は円形を呈し、外径は右側が2.15cm、左側が2.40cmである。この轡は、引手の端環が「C」字状の構造をとる点に特徴がある。柄の端部が二手に分かれ、柄と反対側で接することで、環状部を形成している。周辺での類例としては、袋井市八幡山3号横穴、藤枝市板沢9号墳、函南町柏谷D22号横穴など数例があげられる程度である。また、富士宮市別所古墳は轡先環が同様の構造をとり、板沢9号墳は鞆金も同様の構造、八幡山3号墳は引手壺以外が同様の構造である。

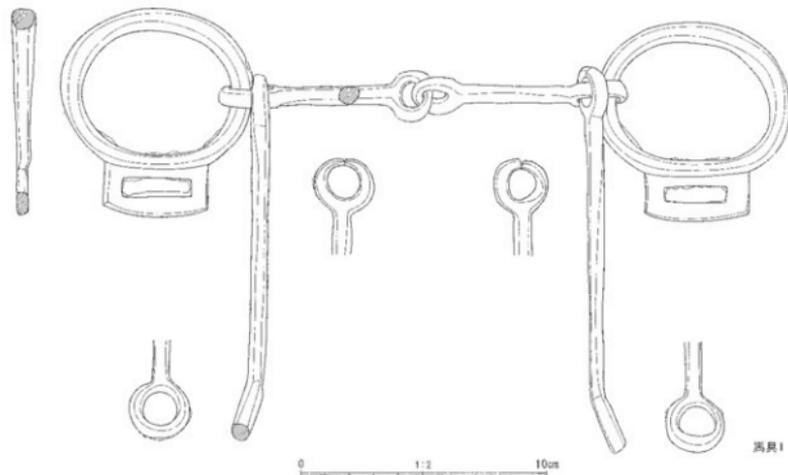


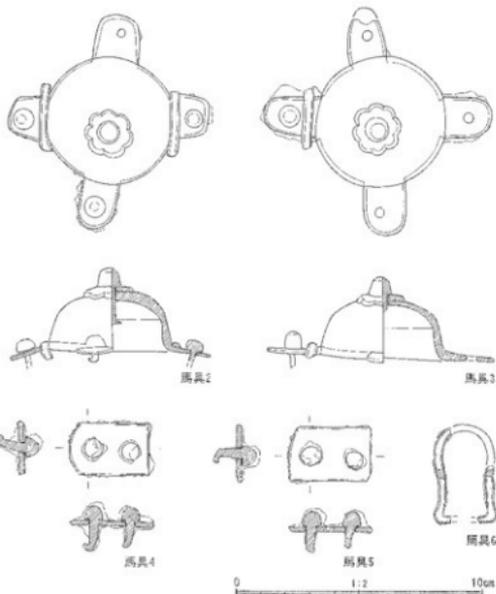
図22 11号墳出土馬具1

辻金具(図23-馬具2・3) 辻金具は2点出土している。辻金具1(馬具2)は鉄製で、稜をもたない半球状の鉢に、別造りの花形座金具と宝珠飾をもつ4脚の辻金具である。花形座金具は7弁、宝珠飾は鉢状である。宝珠飾の紙脚は、先端部がつぶされており、鉢との間には隙間があることから、何らかの有機物が本来存在した可能性も考えられる。脚は、等間隔で配置され、それぞれ中央に1箇所の紙孔をもつ。このうち、3脚は紙が遺存し、さらにうち2脚は1木の貴金具も遺存した。貴金具が遺存した脚は、鉢を挟んで対となり、端部は角が丸みを帯びるものの、方形脚に分類できる。一方、残る2脚は端部が丸みをもち、半円形脚といえる。方形脚と半円形脚が交互に付くと換言できる。

各部の寸法を見ると、最大幅8.75cm、高さ3.90cmである。鉢部は直径5.20cm、高さ2.30cm、花形座金具は最大幅2.15cm、高さ0.35cm、宝珠飾は直径0.95cm、高さ0.80cmである。なお、宝珠飾の紙脚は長さ1.45cmで、紙脚の先端部と鉢との間には0.85cmの隙間がある。脚は、貴金具が遺存する2脚が幅1.85cm、長さ1.30cm、貴金具がない2脚は幅1.60~1.90cm、長さ2.85~2.95cmである。前2者より、後2者が長い。紙頭は扁平で、直径0.75~0.85cm、高さ0.40cm、紙脚は3点のうち2点は先端を欠損し、1点は折り曲げられている。貴金具は幅0.30~0.35cmである。

辻金具2(馬具3)は、1と同様に稜をもたない鉄製の半球状の鉢に、別造りの花形座金具と宝珠飾をもつ4脚の辻金具である。ただし、花形座金具が8弁である点は1と異なる。脚は、1紙半円形脚が等間隔で配置される。うち1脚には紙と貴金具が遺存した。遺存する紙は、半楕円の側面視を呈し、貴金具は1本である。

各部の寸法を見ると、最大幅は9.20cm、高さ3.70cmであり、鉢部は直径5.30cm、高さ2.55cm、花形座金具は最大幅2.10cm、高さ1.00cm、宝珠飾は直径1.00cm、高さ0.75cmである。なお、宝珠飾の紙脚は欠損している。脚は最大幅1.50~1.75cm、長さ1.90~2.30cmである。紙頭は直径0.70cm、高さ0.70cm、紙脚の残存長は0.80cmである。貴金具は刻み目などもなく、幅0.40cmである。



飾金具(図23-馬具4・5)

鉄製の飾金具が2点出土している。ともに一端が弧状を呈する爪形の飾金具で、紙が2箇所に配される。革帯の先端に取り付けられたと見られる金具である。ただし、帯金具2(馬具5)の弧状を成す端部は、帯金具1(馬具4)に比べると片側の曲率が小さい。

寸法は、1が長さ3.45cm、幅2.10cm、2が長さ3.40cm、幅2.20cmである。紙頭は直径0.70~0.80cm、高さ0.60~0.65cmである。紙脚は先端部が折り曲げられている。

図23 11号墳出土馬具2

絞具（図23—属具6） 輪金と見られる鉄製の金具片が出土している。復元される長さは4.00cm、幅は2.50cmである。

纏年の位置付け 鉄製環状鏡板付帯は、立間が大型有頭であることや引手・銜共連であることから、6世紀第4四半期以降に位置付けることができる（註1）。

辻金具1は半円方形脚であることから、TK209型式期以降に位置付けられる（註2）。一方、辻金具2は、半円形の脚のみであるという違いをもつ。ただし、衣原11号墳に副葬された馬具は1組のみであることから、辻金具の2点は、細部の形状が異なるものの、時期差はないととらえられる。そのため、衣原11号墳の辻金具は、半円方形脚出現期の所産と位置付けることが妥当といえよう。

以上から、衣原11号墳出土の馬具は、TK209型式期でも早い時期ととらえることができ、6世紀末に位置付けられる。

②武器

武器は、鉄刀と刀装具、鉄鏃、両頭金具が出土している。

②-1 鉄刀（図24～26）

鉄刀は4点出土し、これらとは別個に刀装具が1点出土している。鉄刀のうち、3点は全長90cmを超え、鐔を伴う。このうちの1点は八窓透かしで、耳には銀象嵌が確認できる。残る1点は、全長57.40cmと上記の3点に比べ、小ぶりである。

出土位置は、銀象嵌鐔をもつものが、石室中央の右壁寄り（C群）、残る3点の鉄刀が石室中央の左壁寄り（B群）である。

刀装具の1点は奥壁際の左壁寄り（A-1群）からの出土である。

鉄刀1（図24・25） C群の出土遺物である。この鉄刀は、切先から茎尻まで完存し、全長は93.80cmで、銀象嵌の施された八窓鐔を伴う。刀身は平造りで、長さ77.60cm、身部幅3.50cm、棟幅0.70cmである。断面は長三角形を呈する。なお、X線写真撮影の結果、繩本孔をもつことも判明した。繩本孔は、直径0.50cmで、鬨から2.10cm、刃部から1.20cmの位置に孔の中心がある。

鬨は直角の片鬨で、鉄製繩の一部が遺存する。

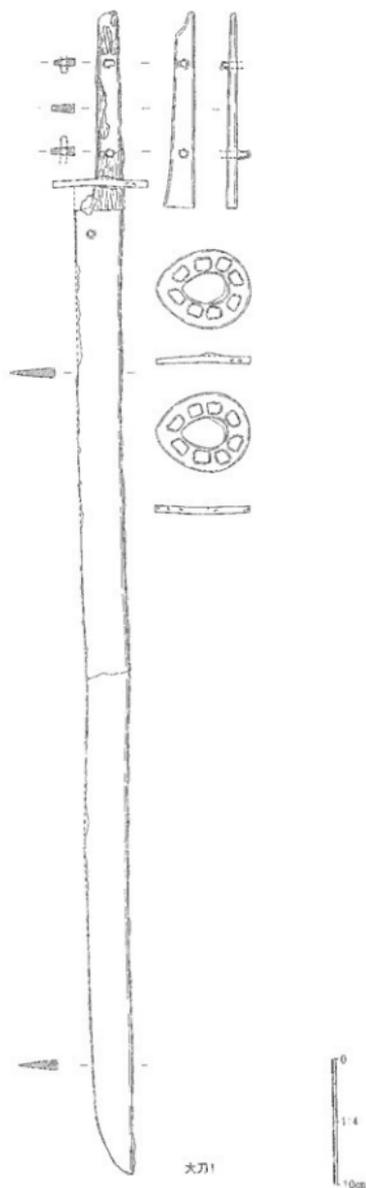


図24 11号墳出土大刀1

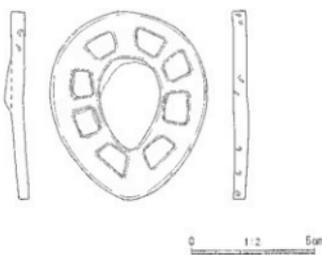


図25 11号墳出土象嵌鏡

茎は、長さ16.10cmであり、2箇所の目釘孔がある。また、一部には木質が遺存し、茎尻は隅状尻である。

鐸は、円形に近い倒卵形の八窓鐸で、長径7.70cm、短径6.40cm、厚さは0.50cmである。断面は長方形である。側面には、交互C字文の象嵌をもつ。ただし、象嵌の遺存状況は非常に悪い。

鉄刀2（図26-大刀2） B群の出土遺物である。切先から茎に至るまで残存し、全長は92.90cmである。刀身は平造りで、長三角形の断面形をもち、長さ77.00cm、身部長3.30cm、棟幅0.70cmである。

関は楕円で、棟側の切れ込みがやや浅い不均等の両関であり、鉄製の鐮が遺存した。鐮は、倒卵形で、長径3.60cm、短径2.60cm、厚さ0.50cmである。茎は木質が付着し、長さ15.90cmであり、2箇所の目釘穴をもつ。幅は2.90cm、厚さは、0.50cmである。茎尻の形態は栗尻である。

鐸は円形に近い倒卵形の無窓鐸である。長径は7.20cmで、長軸の中間部よりもわずかに峰側で幅は最大幅となり、その寸法は6.00cmである。断面は長方形を呈し、厚さ0.50cmである。

鉄刀3（図26-大刀3） B群の遺物である。この鉄刀も切先から茎までが遺存し、全長は104.10cmである。刀身は平造りで、長さ79.70cm、身部長3.40cm、棟幅0.70cm、断面形は長三角形を呈する。刀身には木質が付着するため、鞘に納められた状態で副葬されたものといえる。

関は楕円で、棟側の切れ込みがやや浅い不均等の両関であり、鐮が遺存した。鐮は倒卵形で、長径4.00cm、短径2.10cm、幅1.30cm、厚さは最大で0.40cmである。茎は、長さ14.50cm、幅は茎尻に向け先細となり、1.40～1.90cmである。茎尻は栗尻である。なお、茎には木質が遺存し、2箇所の目釘穴をもつ。

鐸は、刃部側が尖り気味となる倒卵形の無窓鐸であり、完形で出土した。寸法は、長径7.40cmであり、最大幅はそのほぼ中間部にあり6.00cmとなる。断面は長方形で、厚さは0.20～0.50cmである。

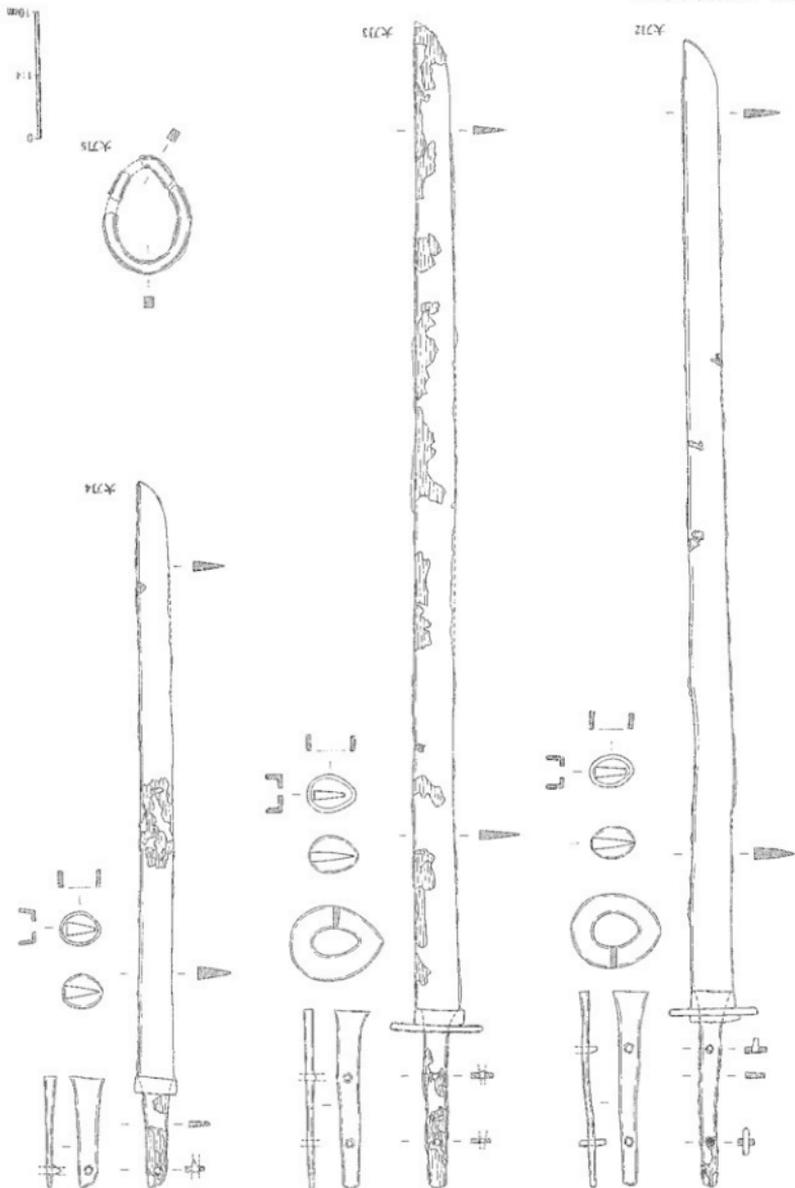
鉄刀4（図26-大刀4） B群の出土遺物であるが、切先は奥壁に向けられ、向所から出土した3とは逆方向である。この鉄刀も切先から茎尻までが遺存したが、全長は57.40cmと鉄刀1～3に比べ短い。また、鐸を伴わなかった点も異なる。刀身長は48.40cm、平造りで幅2.90cm、棟の厚さは0.90cmである。刀身の一部には、木質が付着することから、鞘に納められていた可能性がある。

関は楕円の均等両関で、鐮が遺存した。鐮は、倒卵形で長径3.40cm、短径2.90cm、長さ1.30cm、厚さ0.30cmである。茎は一部に木質が遺存し、目釘穴を1箇所にもつ。長さは9.00cmで、幅は最も狭い茎尻で1.50cm、厚さは0.30～0.70cmである。茎尻は斜めになる。

鍔金具（図26-大刀5） 鉄製で、倒卵形の鍔金具である。この金具は、1～4からはやや離れたA-1群から出土している。そのため、これら4点とは別の鉄刀に伴う金具である可能性もある。大きさは外寸で長径が6.80cmと推定され、短径は4.90cmである。幅と厚さは0.50～0.70cmで、断面形は正方形に近い長方形である。

鐸の位置付け 1を見ると、茎は直角片隅状細茎であることから6世紀後半～7世紀初頭、鐸は西沢分類の有窓鐸A類に分類できることからTK43～TK209型式期に位置付けられる。（註3）。また、鐸は耳にC字文の象嵌をもつことから、TK43～TK209型式期の所産ととらえることができる。

以上を助案すると1は、TK43～TK209型式期の所産ととらえることができる。2は、茎と鐸の形状の両者から、TK43～TK209型式期に位置付けられる。3は、鐸が西沢分類のC類に該当することから



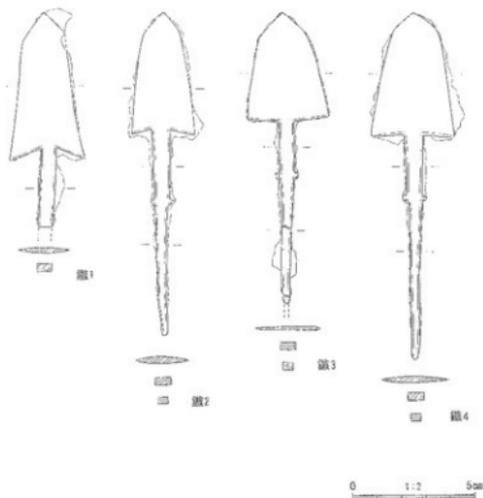


図27 11号墳出土鉄鏃 1

から、五角形鏃ととらえることもできる。尖根系長頸鏃は、2点が片刃箭式、残る52点は柳葉式である(註4)。なお、柳葉式の鏃は、鏃身部の形状の差から3タイプに細部することができる。

平根系脇長三角形式短頸鏃(図27-鏃1・2) 2点が出土している。1は茶開付近から茶を欠くが、2は鏃身から茶までが残存した。鏃身は、ともにフクラが張り、平造りである。なお、1は、フクラにわずかながらも角をもつことから、五角形鏃ととらえることができる。鏃身間の逆刺は両者とも浅く、2の茎間は棘間である。

鏃身の大きさは、1が長さ6.05cm、最大幅3.00cm、厚さ0.20cmであり、2は長さ5.90cm、最大幅2.60cm、厚さ0.25cmである。頸部と茎は、これが残存する2では、頸部長3.05cm、幅0.60~0.70cm、厚さ0.30cm、茎長5.35cmである。

平根系長三角形式短頸鏃(図27-鏃3・4) 3は茎の先端を欠くが、ともに全貌をうかがうことはできる。鏃身は平造りで、両者ともフクラが張り、わずかに角をなすため、五角形鏃に近い形状といえる。鏃身間は直角間、茎間は棘間である。

寸法は、3の鏃身が長さ4.45cm、最大幅3.35cm、厚さ0.15cm、頸部が長さ2.40cm、幅0.55~0.60cm、厚さ0.30cm、茎の残存する長さは5.10cmである。4は、鏃が長さ5.15cm、最大幅3.40cm、厚さ0.25cm、頸部が長さ2.70cm、幅0.60~0.70cm、厚さ0.30cm、茶が長さ6.70cmである。

尖根系片刃箭式長頸鏃(図28-鏃5・6) 出土点数は2点である。5は鏃身から茎に至るまで残存し、全長は16.65cmである。鏃身は平造りで、長さ3.90cm、幅0.90cm、棟の厚さ0.20cm、間は直角間である。頸部は長さ6.50cm、幅0.50~0.60cm、厚さ0.30cm。茎間は棘間で、残存する茶長は6.15cmである。茎には、矢柄の木質が残り、樹皮と見られる口巻きも遺存した。矢柄の残存径は1.0cm前後である。

TK209型式以降に位置付けられるため、TK209型式の所産ととらえることができる。4は、刃身が短いこと、均等両面であることから7世紀代の可能性が高いといえる。

以上、1と2がTK43~TK209型式期、3がTK209型式期、4が7世紀代のものととらえることができる。

②-2 鉄鏃(図27~31)

鉄鏃は、鏃身が確認し得るものが58点、頸部から茎部のみが残存したものが2点出土している。このうち、平根系短頸鏃が4点、尖根系長頸鏃が54点である。鏃身部の形態を見ると、平根系短頸鏃は、2点が脇長三角形式、2点が長三角形式といえる。ただし、フクラにわずかながらも角があること

0 1:2 5cm

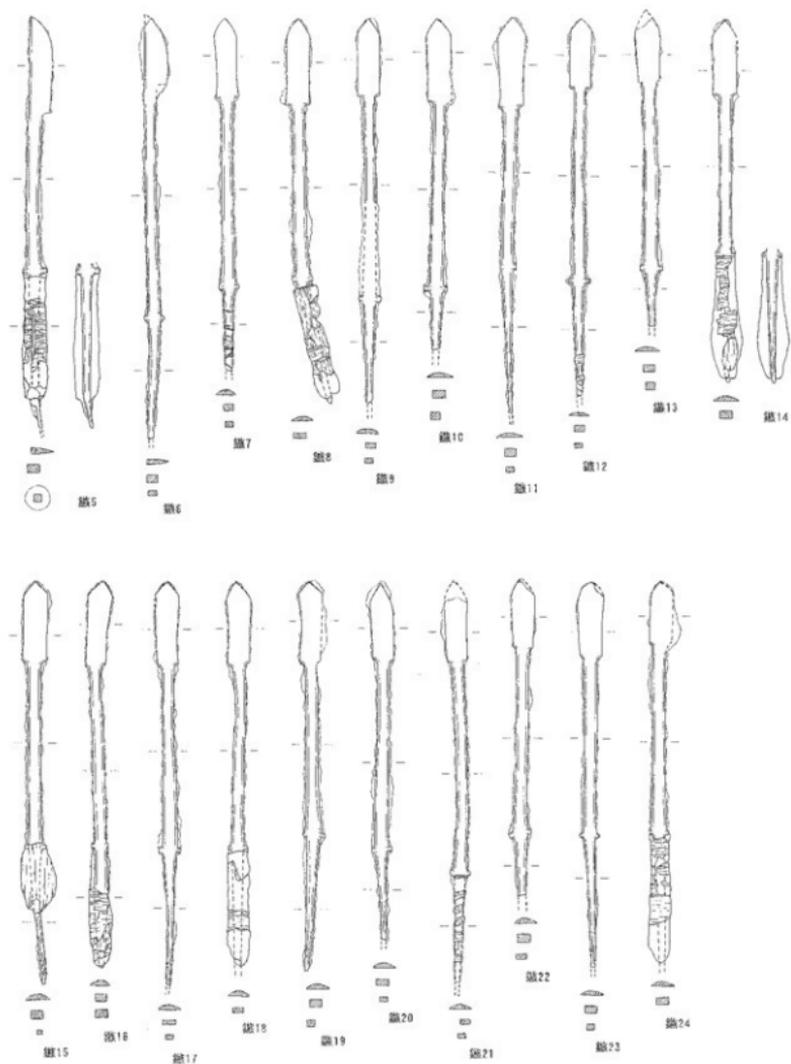


图28 11号墳出土鉄鏃 2

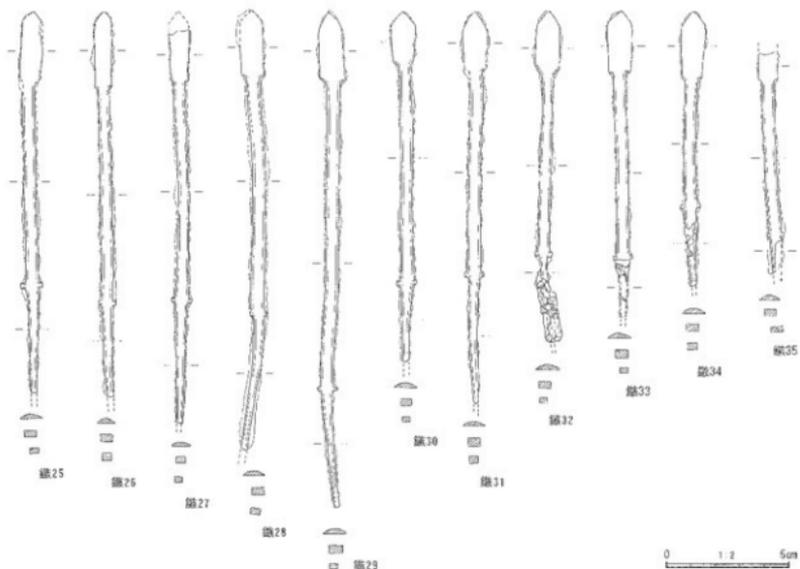


図29 11号墳出土鉄鏃 3

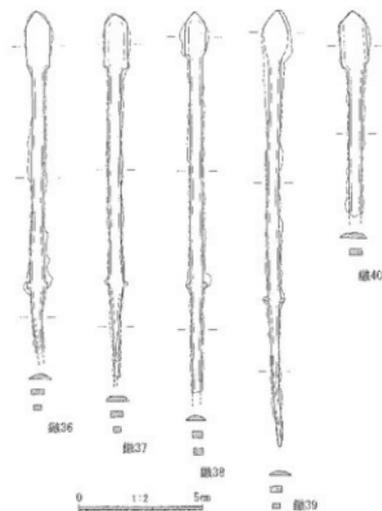


図30 11号墳出土鉄鏃 4

6は、鏃身と茎の端部を欠き、残存長は17.15 cmである。鏃身は、関付近の錆化が著しいため、詳細を把握し難いが、関は直角関と考えられる。鏃身長は、鏃身長は2.80m前後に復元でき、幅は1.00cm、柄の厚さ0.20cm、頸部は、長さ9.60cmと推定される。幅は0.45～0.50cm、厚さは0.30cmである。茎関は棘関であり、茎の残存長は4.80cmである。

尖根系柳葉式長頸鏃1類(図28～30—鏃7～40)

尖根系柳葉式長頸鏃のうち、鏃身関が直角関ないしは直角に近い棘関で、フクラと関の幅がほぼ同じとなるものを、1類とした。7～40の34点が該当する。8・14～17・19・29・39は、鏃身から茎の先端に至るまで遺存した。29は全長20.30cmと、出土鉄鏃の中では最も長い。8・14～17・19・39は、全長14.70～17.90cmである。

柳葉式長頸鎌1類の鎌身は、7のように刃部が緩やかなS字状を呈し、間がやや強調されたものも見られるが、多くは、鎌身部の外縁が直線的でフクラは角を成す。後者は、鉄鎌製作時の鑿打ちの工程によって生じた直線部分をそのまま刃部として研ぎ出したものにとらえられる鉄鎌である(註5)。

いずれも鎌身の断面形は片丸造りである。鎌身長は1.80~3.70cm、幅は0.90~1.00cm、厚さは0.2cm前後である。なお、30・36~40は鎌身長が1.75~2.40cmと、鎌身が短い一群といえる。また、53は鑿箭式の可能性もあるが、錆化のため判断としない。

頸部は、最も短い34が5.25cm、最も長い29が12.65cmであるが、7cmを0.5cm程度前後するものが多い。幅は0.5cm前後、厚さは0.3cm前後である。茎間はいずれも線間であり、頸部や茎との境は、ほぼ直角となる。茎は、4.85~6.00cmの長さである。

7・8・14~16・18・24・32~34の茎には、矢柄の木質が遺存した。8・14・18・24・32からは、矢柄の直径が0.80~1.30cmであることがうかがえる。さらに、8・15・18・32においては、樹皮による口巻きも遺存した。樹皮は、2~4mm程度の幅で巻き付けられているようである。なお、7・12・21は、茎に巻き付けられた紐が確認できた。

尖根系柳葉式長頸鎌2類(図31-鎌41~54) 41~54の14点が、2類である。このタイプの特徴としては、鎌身が鎌身間に向かって幅を狭める点にある。ただし、片丸造りで鎌身の縁辺が直線的となり、フクラが張り角をなすものが少なからず見られる点など、細部には1類と共通する要素が見られる。

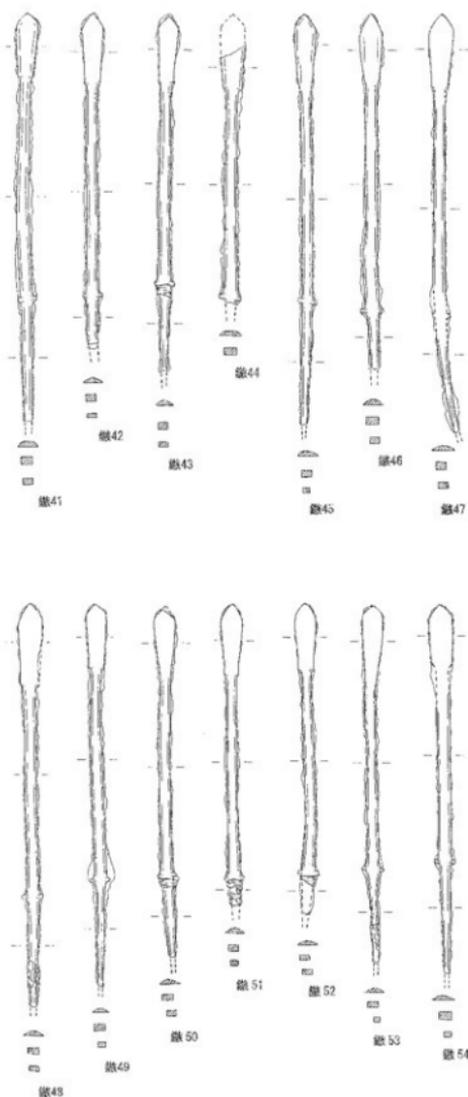


図31 11号墳出土鉄鎌6

鐵身間は、榑間が主体ではあるが直角間に近いものもある。鐵身長は2.65～3.50cm、鐵身の最大幅は0.9cm前後、厚さは0.2cm前後である。

頸部は、長さ7.60～9.30cm、幅0.4cm前後、厚さ0.3cm前後であり、榑間を介して茎へとつながる。榑間は、頸部や茎との境が明瞭である。茎の端部まで遺存するのは45のみであるが、その長さは4.85cmである。なお、48と50～53は茎に矢柄の木質が遺存した。口巻きは樹皮のようであるが、錆化のため判然としない。

編年の位置付け 衣原11号墳出土の鉄鍔は、茎間がすべて榑間であるため、TK43型式期以降の所産であることが、まずいえる。また、尖根系片刃箭式長頸鐵を除くものは、フクラが角張り、鐵身の外縁が直線的になる傾向をもつ。これらは、刃部の鑿打ちの工程によって生じた直線部分をそのまま研ぎ出し加工するという、TK43～TK209型式期以降の志太地域で多く見られる製作方法によるものととらえられる（長谷川 2003）。

特に、1・3は、五角形式ともいえるほど、フクラが角張る。ただし、1と全体的な形状と寸法が近似する2、3と似る4は、1・3程には、フクラが角張らないことから、これらの鉄鍔すべてが、制作時段階において五角形を強く意識したものではないことがうかがえる。五角形式の鉄鍔は、長三角形式の鉄鍔におけるフクラの研ぎを省略化して、TK43型式期に出現したといわれる（大谷 2003b）。そのため、五角形を意識して製作したとはいえない衣原11号墳出土の平根系鐵は、五角形鐵が出現する段階であるTK43型式期の所産と位置付けることが妥当であろう。

付近の古墳を見ると、平根系の1～4は、約4.5km南方に所在しTK43～TK209型式期に位置付けられる秋合12号墳に、尖根系柳葉鐵1・2類は、約7.5km南西に所在するTK43型式期の古墳である波田1号墳に、それぞれ類例が求められる。なお、尖根系片刃箭式長頸鐵は、志太地域でも一定量の出土は認められるものの、衣原11号墳で見られたような、鐵身間が明瞭な直角間をもつものは少ないことから、時期は特定し難い。

以上、衣原11号墳出土の鉄鍔は、形態と製作技法、類例から、TK43～TK209型式期に位置付けることができる。

②-3 両頭金具（図32—両頭1～8）

両頭金具は奥壁際の左壁より（A-1群）から、8点が出土した。このうち、1と2、4と6、3と5が、それぞれ近くから出土している。

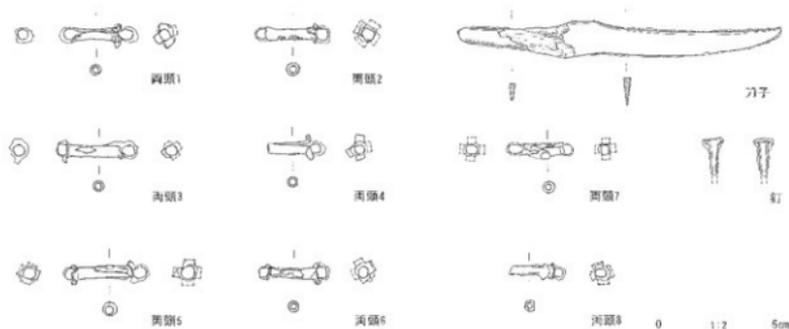


図32 11号墳出土両頭金具・刀子・釘

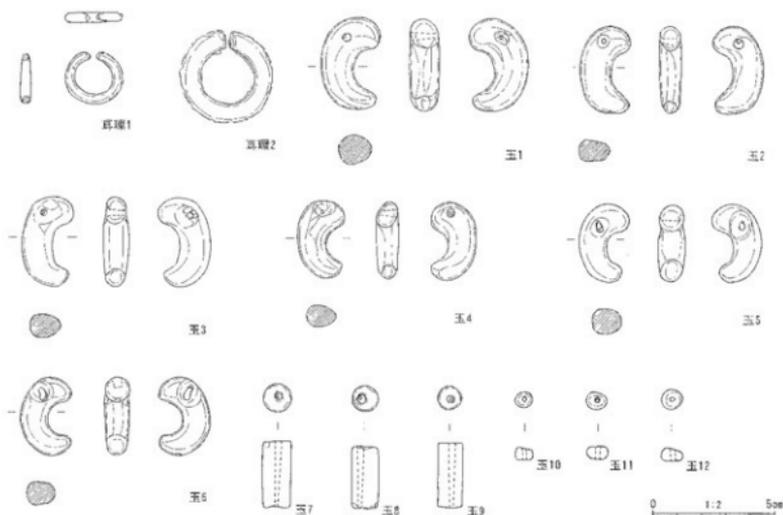


図33 11号墳出土装身具 1

8点の両頭金具は、いずれも筒金と芯棒ともに鉄製である。4と8は筒金と芯棒の約半分を欠くものの、残る6点はいずれも全貌をうかがうことはできた。これらの全長は、2.60～3.45cmである。筒金は全長1.75～2.50cm、直径0.5cm前後で、1・2・4・5・7には、木質が付着する。花卉は、いずれも錆化が著しいうえに欠損する弁も多く、判然としなが、復元できるものはすべて4弁である。

編年の位置付け 駿河・遠江において、両頭金具はTK43型式期に出現し、MT2i型式期に終焉を迎えることが指摘されていることから（村田 2000・井鍋 2003）、衣原11号墳出土のものもこの時期に位置付けることができる。ただし、この間、時間の経過とともに小型化する傾向があるものの、型式的な変化に乏しいとも併せて指摘されており、詳細な時期を特定することはできない。

③工具等

刀子（図32） 石室中央部の右側（C群）の出土遺物である。切先から茎の先端まで遺存し、全長は13.20cmである。ただし、関付近は錆化が著しい。刀身は平造りで、推定される長さは8.40cm、幅は1.10cm、棟側の厚さは0.25cmである。関は両関で、撫関のようであるが確証を得るものではない。茎は、栗尻で関付近には木質が遺存し、幅と厚さはそれぞれ最大で0.70cm、0.20cmである。

その他（図32） 石室内の覆土をふるいにかけてところ、頭部をもつ棒状の鉄製品が出土した。頭部は不定形で幅0.70cm、先端部を欠損し、残存長は1.55cmである。釘あるいは鉾と考えられるが、特定することはできなかった。

④装身具（図33・34）

装身具としては、耳環が3点、勾玉が6点、管玉と丸玉がそれぞれ3点、小玉が20点以上出土している。ただし、耳環のうち1点は、劣化が著しく図示していない。出土位置は、いずれも石室中央部の左壁側（B群）である。ただし、副葬時の原位置を留めるものとはいえない。なお、耳環のうち2点はそれぞれ離れた所から出土し、図化しえなかった耳環は覆土をふるいにかけてところ出土した遺物である。

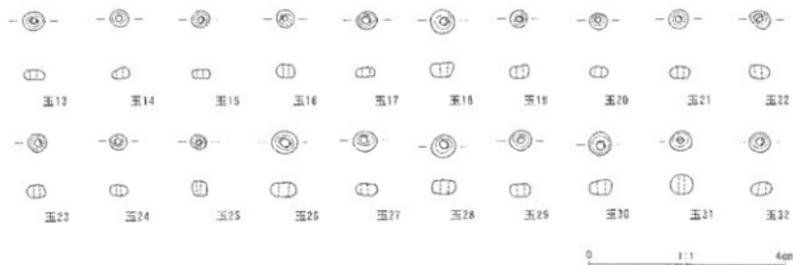


図34 11号墳出土装身具 2

④-1 耳環 (図33-耳環 1・2)

1は表面の剥離が著しく、金属箔については不明である。遺存部分は銅製であり、銅芯の耳環といえる。最大径は2.40cm、断面径は0.30~0.45cmと、小型の耳環である。

2も表面の劣化が著しく、金属箔は遺存しなかった。遺存部分は鉄製である。断定はできないが鉄製の耳環であることも想定可能である。最大径は、3.80cm、断面径は0.8cm前後であり、1よりも大きい。

出土位置に加え、両者は大きさも、材質も異なることから、対になるとは考え難い。

④-2 玉類 (図33・34-玉 1~32)

勾玉 (図33-玉 1~6) 頭部と尾部の大きさがほぼ等しくなるものが、6点出土している。このうち、1~4が乳白色の瑪瑙製、5と6は緑色を呈する蛇紋岩製である。5と6は、使用による頭部の摩滅が著しい。瑪瑙製の勾玉はいずれも片側穿孔である。ただし、1・3・5・6と、2・4とでは穿孔方向が異なる。

大きさを見ると、1~3は、長さ3.55~3.80cm、幅2.10~2.40cmであり、長さ3.15~3.20cm、幅1.85~2.05cmの4~6よりも幾分か大きい。

管玉 (図33-玉 7~9) 3点とも碧玉製である。また、いずれも片側穿孔であり、表面は丁寧に磨かれている。7は、片方の端部をわずかに欠損している。残る2点は、8が高さ2.50cm、9が高さ2.63cmである。直径は、0.98~1.18cmである。

丸玉 (図33-玉 10~12) 10と11が濃紺色のガラス製、12が土製である。最大径は0.70~0.85cm、高さは0.51~0.55cmである。

小玉 (図34-玉 13~32) 20点を図示したが、このほかにも数点分の破片が出土した。いずれもガラス製で、濃紺色の16・18・21以外は明るい青色を呈する。直径は0.32~0.51cm、高さは0.19~0.38cmである。

⑤土器 (図35~40)

須恵器が21点、土師器が21点出土している。ほとんどは奥壁際の左壁寄り (A-1群) からの出土であった。ここでは出土位置ごとに、出土した土器について記すことにする。

なお、出土須恵器の器種と点数は、坏蓋 4点、坏身 5点、無蓋高坏 1点、有蓋高坏 3点、フラスコ形長頸瓶 1点、提瓶 2点、俵形横瓶 1点、埴 1点、短頸壺 1点、甕 1点である。土師器の器種と点数は、坏身 9点、高坏 5点、模倣瓶 2点、小型壺 2点、小壺 1点、鉢 1点、小型碗 1点である。

A-1群 (奥壁際左壁寄り) 出土の土器 (図18・19)

衣原11号墳において、もっとも土器が集中した箇所である。ここからは、須恵器18点、土師器が21点出土している。



图36 11号墳出土土器 1

須恵器坏蓋(図35-土器1~4) 4点とも、完形で出土した。口径は11.40~14.40cm、器高3.50~4.25cmである。焼成はいずれも良好で、灰色系の色調である。細部には、それぞれ異なる特徴を見出すことができる。細部の特徴や調整は、1と2、3と4が、それぞれ近い特徴をもつ。1と2は、直立的な口縁部をもち、頂部との境には明確な稜を有する点が共通する。また、外面頂部に同心円のヘラ削りが行われることも共通する。ただし、口唇部が、2は内面に強い沈線をもつが、1はもたないという違いがある。3と4は、外面頂部に回転ヘラ削りが行われている点や、稜をもたない点が1・2とは異なる。なお、4のみ、内面頂部がロクロナデの後にナデが行われている。

須恵器坏身(図35-土器5~9) 5点とも受部をもつ坏身で、完形で出土した。いずれも焼成は良好で、灰色ないしは青灰色、暗青灰色を呈する。5~8は、口径10.40~11.90cm、最大径12.80~13.90cm、器高3.60~4.80cmであるが、焼き歪みの大きい9は口径13.60cm、器径15.70cmと数値的にはやや大きい。なお、9は受部の先端に薄く降灰しており、蓋を合子状にかぶせた状況で焼成したことがうかがえる。

細部を見ると、受部の下方がわずかにくぼむという点は共通するが、5と6については、ほかの坏身とは異なる特徴をそれぞれもつ。5は、外面底部に同心円のヘラ削りにより調整が行われている点が、ほかの坏身とは異なる。6は、立ち上がりが直立的で口唇部は内側に面を有する点が、ほかとは異なる。なお、6と7のみ、受部と立ち上がりの接点に工具による沈線がめぐる。また、見込みの調整は、5~7はロクロナデであるが、8はナデであり、9は一部にナデが行われている。

須恵器無蓋高坏(図35-土器10) はほぼ完形に復元でき、器径ともなる口径は11.80cm、器高は13.10cm、脚部高は7.90cm、脚部径は9.90cm、基部径は3.00cmである。焼成は良好で内面は灰色、外面は明オリブ灰色を呈する。坏部は中央部に櫛状工具による刺突文が施される。刺突文の上下はそれぞれ1条の沈線により区画される。脚部は中央に2条の沈線をもち、2段3方向の長方形の透かしをもつ。調整は坏部の底部が回転ヘラ削り、その他はロクロナデである。

須恵器有蓋高坏(図35-土器11) 衣原11号墳では、3点の須恵器有蓋高坏が出土しているが、このうち1点がA-1群から出土した。この高坏は、ほぼ完形に復元でき、坏部の口径は13.90cm、器高は18.50cm、最大径は16.50cmで、脚部高は14.10cm、基部径は5.20cm、脚部径は13.90cmである。焼成は良好で内面は青灰色、外面は灰色を呈する。坏部の立ち上がりは外反気味に内傾し、端部は丸く収め、受部の下側がくぼむ。脚部は楕部と中央部にそれぞれ2条の沈線があり、透かしは上下2段にそれぞれ3方向にあげられる。調整は坏部の外面底部が回転ヘラ削りであり、その他はロクロナデである。体部の見込みには、脚部との接合時にできたと見られる当て具痕が確認できる。

須恵器提瓶(図35-土器12・13) 12は完形であったが、13は把手を欠く。ともに焼成は良好で、12は暗青灰色、13は青灰色を呈する。なお、13は自然釉が薄く付着する。

12は口径6.80cm、器高22.50cm、胴部最大径17.85cm、頸部高5.05cmである。13は口径5.60cm、器高18.25cm、胴部最大径14.80cm、頸部高4.00cmであり、12よりも一回り小さい。両者は細部にも違いが見られる。12は頸部中央に2条の沈線をもち、体部にカキ目が見え、その他はロクロナデによる調整である。一方、13は体部の片面がカキ目、片面が回転ヘラ削りのようである。ただし、自然釉のため判断としない。その他はロクロナデによる調整である。

須恵器フラスコ形長頸瓶(図36-土器14) はほぼ完形に復元することができ、口径8.40cm、器高20.65cm、胴部最大径14.45cm、頸部径4.90cm、頸部高6.65cmである。焼成は良好で内面は灰色、外面は青灰色であるが一部灰白色を呈する。頸部には2条の沈線をもつ。体部外面はカキ目が見える。体部内面の一部はナデであるが、その他はロクロナデである。口縁部から体部の外面、口縁部の内面には自然釉が付着する。

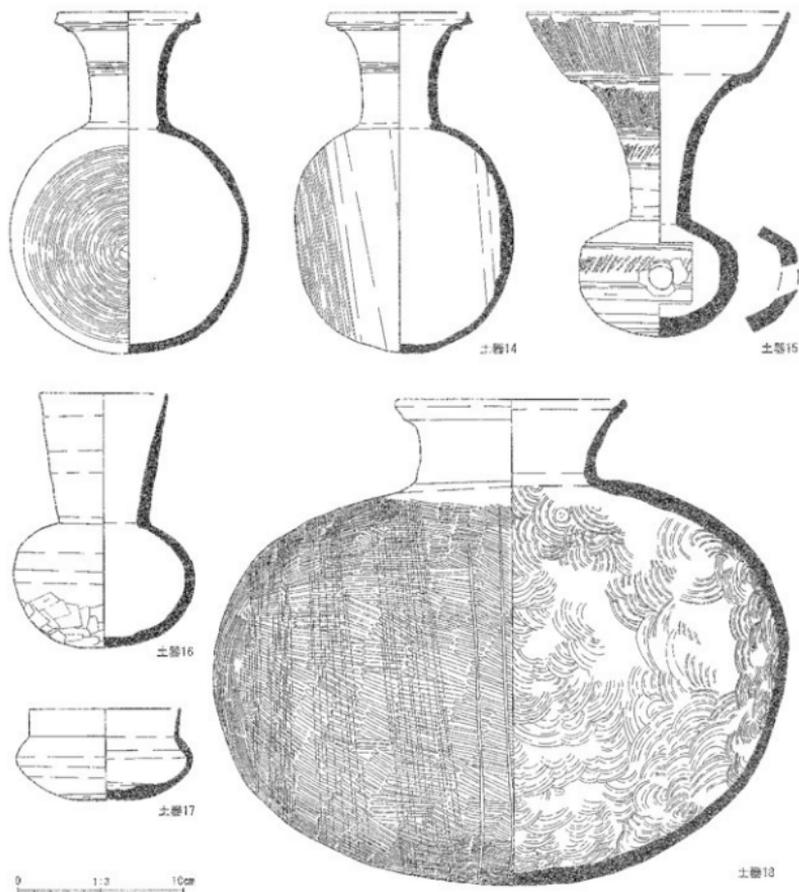


図36 11号墳出土土器 2

須恵器種（図36-土器15） 注口の周辺をわずかに欠損するが、ほぼ完形に復元できた。器高は19.65cm、口径は15.80cm、頸部径は3.80cm、胴部最大径は9.70cmである。焼成は良好で、内外面とも青灰色を呈する。頸部上半と口縁部外面に丁寧な櫛描文がなされ、頸部中央部と体部中央部は沈線で区画された中に、櫛状工具により刺突文が施される。注口は穿孔がなされるのみである。体部下半は回転ヘラ削りにより調整が行われる。

須恵器種（図36-土器16） 口縁部の一部以外は遺存した。口径は7.70cm、器高は15.65cm、胴部最大径は11.00cmである。焼成は良好で暗青灰色を呈する。調整は底部が手持ちヘラ削りで、その他は口クラナデが行われる。

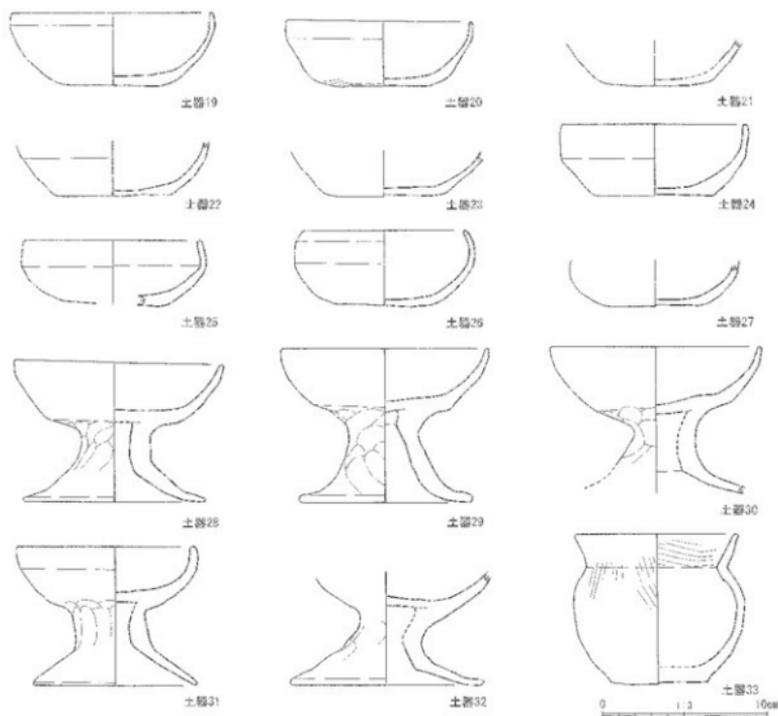


図37 11号墳出土土器 3

須恵器小型短頸壺(図36-土器17) 完形で出土し、口径9.10cm、器高5.60cm、最大径10.70cmである。焼成は良好で内面は暗青灰色、外面は青灰色を呈する。頸部外面にはカキ目が観察でき、底部外面は回転ヘラ削り、その他はロクロナデによる調整が行われている。

須恵器椀形横瓶(図36-土器18) 口縁部の一部以外は、接合・復元することができた。口径は13.60cmと推定され、器高は28.50cm、胴部最大径は34.70cmである。焼成は良好であるが焼き歪みが見られ、青灰色を呈する。頸部から口縁部はロクロナデ、胴部はタキによる調整が行われる。

土師器坏身(図37-土器19~27) 9点が出土している。完存したものはなく、21~23・27は底部から体部のみで遺存に留まった。焼成はいずれも良好で、褐色あるいはにぶい橙色やそれに近い色を呈する。調査は、表面の風化が進むものが多く判然としないが、概ね底部外面がナデ、その他は横ナデである。20のように底部外面にハケ目が観察できるものや、21や24~27のように底部に木葉痕が確認できるものもある。19は、底部外面にヘラ状工具による不定方向の刻み目が見られる。口縁が遺存するものを見ると、19・20・24・25は体部と口縁部の境で屈曲する。26は屈曲が強く口縁部を狭めるため、別の器種ともとらえられる。底部はいずれも平底である。26以外は、口径11.00~12.00cm、器高3.85~4.50cm、最大径11.20~12.40cm、26は口径9.70cm、器高4.65cm、最大径10.90cmである。

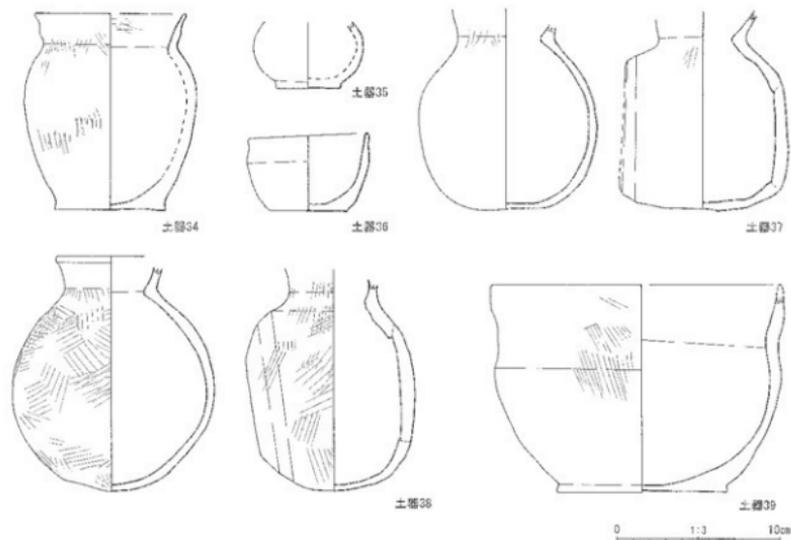


図38 11号墳出土土器 4

土師器高坏（図37—土器28～32） 5点出土した。遺存状況は良好とはいいがたいが、脚の端部を欠く30や、口縁部を欠く32以外は全体の様子をうかがうことができた。焼成はいずれも良好で、明黄褐色や橙色、あるいはそれに近い色調である。表面の風化により、不明な部分もあるが、脚部内面や脚部と坏部の接合部がナデ、その他は横ナデによる調整といえる。口径は10.60～12.60cm、脚部径は9.75～11.40cm、器高は8.50～9.35cmである。31は脚部内面に煤が付着する。

脚部裾の形状から、屈曲が認められる28・29・32と、屈曲しない30・31に2分できる。

土師器小型壺（図37—土器33・図38—土器34） 2点とも口縁部や体部の一部を欠損するが、全体の様子は把握できた。内面は赤褐色系、外面は橙褐色系の色調を呈する。焼成は良好であるが、表面の風化は著しい。そのため調整については、外部上面から口縁部にわずかにハケ目が観察できる程度で、その他は横ナデのようであるが判然としない。法量は、33が口径9.60cm、器高9.20cm、胴部最大径10.30cm、34が口径9.00cm、器高11.50cm、胴部最大径10.40cmである。なお34は底部外面に木葉痕があり、煤が付着する。

土師器小壺（図38—土器35） 頸部から口縁部を欠くが、小壺と考えられる。残存高は4.10cm、胴部最大径は6.60cmである。焼成は良好で内面が明赤褐色、外面が橙色である。表面の風化が著しく調整は不明な部分が多いが、底面には木葉痕があり、外面は横ナデにより調整される。

土師器小型碗（図38—土器36） 口径7.10cm、器高4.80cmの小型の碗である。口縁部を一部欠く。焼成は良好で、内面が橙色、外面が明赤褐色である。底面はへら切りの後にナデが行われており、その他は横ナデによる調整が行われている。

土師器模倣瓶（図38—土器37・38） ともに須恵器の提瓶を模倣した土師器ととらえられる。両者とも、口縁部付近を欠損するが、その他は遺存した。赤褐色系の色調を呈し、37は残存高12.20cm、胴部最大径10.80cm、38は器高14.25cm、胴部最大径は12.20cmである。

ともに、焼成は良好ではあるが、表面は風化が進む。調整は明らかにできない部分が多いが、ハケ目
を施した上に横ナデを行っているようである。

土師器鉢 (図38—土器39) 全体の9割程度が残存した。焼成は良好であるが焼き重みが著しく、内
外面とも褐色を呈する。口径は最大で17.40cm、器高は12.65cm、底径は10.20cmである。表面の風化は著
しいが、体部外面には一部ハケ目が残り、概ね横ナデによる調整が行われている様子がうかがえる。底
部には木炭痕が確認できる。

A-1群出土土器の編年的位置付け 既述のように、A-1群からは須恵器が18点、土師器が21点出土し
ている。いずれも古墳時代後期の所産である。このうち須恵器について、さらに検討をする(註6)。

蓋環を見ると、天井部と口縁部の境界に稜をもたない環蓋の3・4、立ち上がりが内傾し器径が14cm
を超える環身の7～9が、TK43型式併行期に位置付けることができる。これらと同時期に位置付けら
れるのは、長脚で長方形の透かしを2段3方向にもつ無蓋高環の10と有蓋高環の11、体部より頸部が長
く口縁部の径が大きい甕の15、直線的に口頸部が立ち上がる埴の16、体部が横長化するもの著しくは
ない横甕の18、以上の5点があげられる。小型短頸甕の17も同時期の所産と考えられる。

一方、天井部と体部の境界に稜をもつ環蓋の1・2、立ち上がりが直立的である環身の5・6は、こ
れよりも一段階古く位置付けられる。また、口縁部に段をもつもの胴部がわずかに扁平なフラスコ形
長頸甕の14は、TK209型式期に位置付けることができる。

ただし、一段階古く位置付けられる可能性をもつ蓋環の4点は、胎土の相違からA-1群出土のほか
の14点の須恵器とは、生産地が異なる可能性がある。形態の違いは時期によるものではなく、製作地の
差による可能性がある。出土状況を見ても、A-1群出土のTK43型式併行期の須恵器と同時期の埋葬に
伴う状況がうかがえることから、この4点の蓋環についても、ほかの蓋環と同時期ととらえたい。

以上、A-1群出土の須恵器は、1～13・15～18がTK43型式併行期、14がTK209型式併行期に位置付
けられることがいえる。

A-2群(奥壁左壁寄り)出土の土器(図20)

A-2群からは、2点の須恵器有蓋高環が出土している。出土状況から、A-1群の土器とは違う扱いを
受けていた様子がうかがえる。なお、この高環の蓋に相当すると見られるものは出土しなかった。

須恵器有蓋高環(図39—土器40・41) ともにほぼ完形に復元することができた。焼成は良好で、衣
原11号墳出土のほかの須恵器に比べると赤みがかかった色調を呈する。40は外面が褐灰色、内面が灰褐色
色～にぶい橙色であり、41は外面がにぶい赤褐色、内面は脚部が灰褐色、環部ににぶい橙色である。

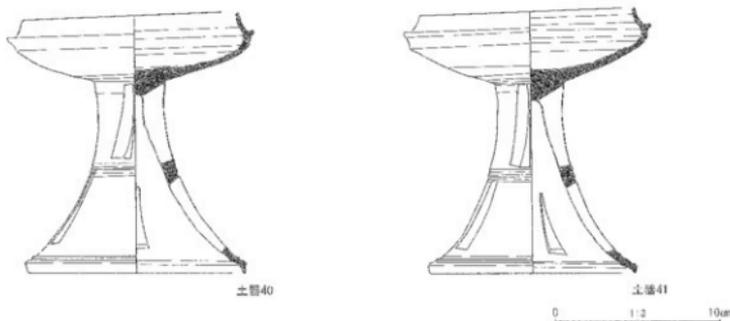


図39 11号墳出土土器5

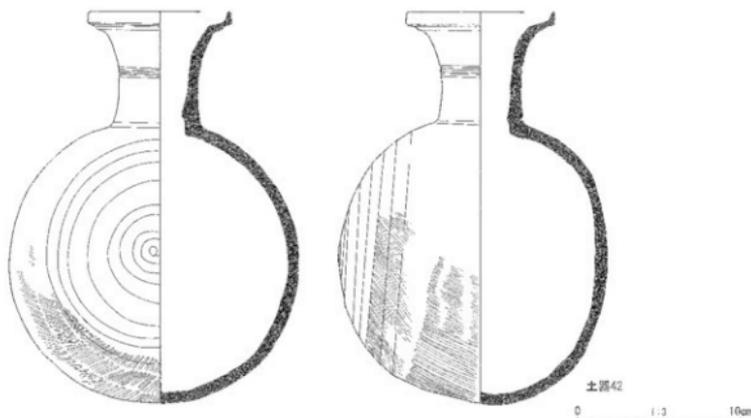


図40 11号墳出土土器 5

この2つの高坏は、形状、法量、調整が近似することも特徴である。ともに、坏部は立ち上がり外反気味に内傾し、端部は丸く収め、受部の下方はわずかにくぼむ。脚部は、中央をめぐる2条の沈線により上下に区画され、上下段ともに3方向の長方形透かしをもつ。透かしは、上段と下段では位置が互い違いになる。異なるのは、受部下方の屈曲が41の方が、より強い点である。

法量を見ると、40は口径13.00cm、器高16.00cm、最大径15.00cm、脚部径13.00cm、基部径4.40cm、脚部高11.80cm、41は口径12.90cm、器高16.30cm、最大径15.10cm、脚部径12.30cm、基部径は4.90cm、脚部高は11.70cmである。調整は、坏部底部外面に回転へう削りが行われる以外は、ロクロナデである。また、坏部の見込みに脚部との接合に伴う指頭による圧痕が、2者とも残る。

A-2群出土須恵器の纏年の位置付け A-2群の高坏は、坏部の径が大きめで長脚に2段3方向の透かしをもつ。ただし、透かしが上段と下段で方向を違える点は、A-1群の高坏と異なる。このような透かしをもつ高坏は、駿河・遠江では類例が少ないものの、掛川市山體横穴例等から、長脚2段3方向透かしをもつ有蓋高坏の中では古相のものといえ、TK10~TK43型式併行期に位置付けることができる。なお、この2点の高坏も胎土が11号墳出土のほかの須恵器とは異なる。形態差は製作地の違いに起因することも想定できる。

B群（石室中央部左側）出土の土器（図21）

B群における出土遺物のうち、土器は須恵器のフラスコ形長頸瓶1点のみである。

須恵器フラスコ形長頸瓶（図40-土器42） 完形で出土し、口径は8.40cm、器高は23.80cm、胴部最大径は17.50cm、頸部の長さは6.90cm、頸部の直径は胴部との接合部で5.20cmである。頸部には、2条の沈線をもつ。焼成は良好で、内外面とも灰色を呈し、口縁部内外面から体部外面には自然釉が厚く付着する。体部はカキ目が確認でき、体部下半にはタタキ目も残る。

B群出土須恵器の纏年の位置付け B群から出土したフラスコ形長頸瓶は、口頸部に段をもつものの、やや扁平な胴部であることから、A-1群出土のフラスコ形長頸瓶と同時期のTK209型式併行期に位置付けられる。ただし、体部下半はへう削りやロクロナデが十分に行われず、タタキによる調整が残る。この点を重視すると、フラスコ形長頸瓶が定型化する直前の段階のものともとらえることができる。A-1群のものよりも、わずかながら先に製作された可能性もある。

第4節 まとめ

衣原11号墳は、墳丘などの外部施設が失われていたものの、両袖式の横穴式石室を埋葬施設とすることが、調査の結果判明した。また、石室内からは馬具や武器などの副葬品がまとまって出土した。志太地域における6世紀後半の古墳を考える上では、良好な資料を得ることができる調査であったといえる。そこで、ここでは埋葬施設と古墳について、若干の検討を加え、その位置付けを行う。

1. 衣原11号墳の埋葬施設

石室の形態 衣原11号墳は、遺存状況が上述したとおりではあるが、埋葬施設である横穴式石室（以下、石室）は、残存した石材、ならびにその掘付痕から、両袖式の石室であることが判明した。玄室の平面形は、側壁がわずかに弧状をなすものの、長方形と見なし得る。玄門には、石室内側に突出傾向にある立柱石を使用したことが推測され、羨道は玄室より幅を狭めるが、短いものと推定される。

類列の特徴 志太地域では、両袖式、片袖式、無袖式の石室が見られる。ただし、両袖式はそのほとんどが、玄室と羨道の幅の差がなく側壁に立柱石を使用することで玄室と玄室外を区画する「疑似両袖式」ともいわれるタイプである。

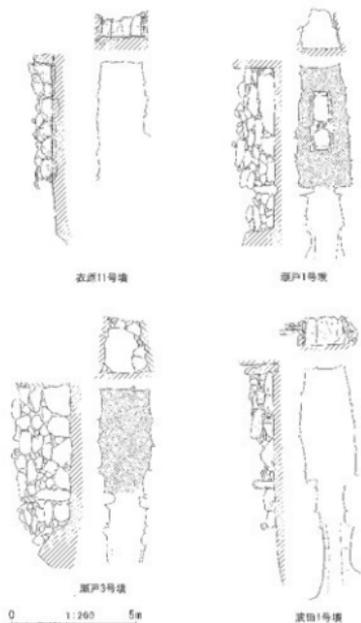


図41 両袖式石室をもつ古墳1

衣原11号墳の石室は、玄室よりも羨道が幅を狭め、袖部の屈曲が明らかであることがうかがえる。玄室と羨道の幅が顕著でない疑似両袖式石室とは異なるタイプである。志太地域で主流となるのは、疑似両袖式石室ではある。しかし、数は少ないものの、衣原11号墳のように玄室に対し幅を狭める短い羨道が両袖式に付く石室は存在する。瀬戸3号墳、波田1号墳など、9基の古墳である(図41・42・43)。そこで、この9基について、その特徴を概観したうえで、衣原11号墳を対比させ、その位置付けを検討する。なお、瀬戸1号墳に代表される9基の両袖式石室について、ここでは便宜的に両袖式A類と呼称する。

両袖式A類は、袖部の造作や羨道が短い点のほかに、玄室の平面形と側壁の基底石の状況に特徴を看取できる。玄室の平面形は、胴張り気味になるものが多い。ただし、瀬戸3号墳のように、衣原11号墳と同様に長方形ととらえられるものも存在する。側壁の基底石は、上段に使用される石材よりも大きめの石材を使用する傾向をもつ。これには、石材の設置方法による、見かけ上の場合も含む。

時期を見ると、最も古く位置付けられるのは、波田1号墳と瀬戸1号墳で、TK43~TK209型式期の

築造であり、TK217～TK46型式期の兎沢1号墳が最も新しい。遺物は、兎沢4号墳を除き、大刀や鉄鏡が出土し、馬具を供伴した古墳もある。出土遺物から、波田者は一定程度以上の階層であるといえる。

両袖式A類は、志太地域では先行して導入されている瀬田2号墳を典型とする無袖式石室には直接的な系譜関係を求め難いことから、6世紀後半代に新たに導入された形態といえる。初現的な2基は、地理的状況と細部の違いから、それぞれが別個に導入したと考えられる。玄室平面形は波田1号墳が、より胴張り傾向にあり、玄室床面は瀬戸1号墳が小腰敷きであるが、波田1号墳は敷石がない。なお、両袖式A類のうち、7世紀代に位置付けられる萩ヶ谷A-3号墳や兎沢1号墳、兎沢4号墳は、瀬戸1号墳や波田1号墳よりも胴が張る傾向にあり、羨道も長くなる。これには、両袖式A類よりも一段階遅れて当地に導入される、疑似両袖式石室の影響があると見られる。

対比と位置付け 衣原11号墳は、玄室の平面形が長方形であるものの、袖部の造作や羨道の状況に加え、側壁基底石の状況も両袖式A類と共通する。そのため、衣原11号墳の石室は両袖式A類とみなすことができる。

先述のとおり、衣原11号墳は玄室平面形が長方形である。両袖式A類は、7世紀代になると、より胴張りを指向する傾向があることを勘案すると、衣原11号墳は両袖式A類の中では、より古い可能性が高い。初現的な2基と衣原11号墳を対比させると、奥壁と床面、玄室平面形に見られる共通点と、相違点に注目できる。奥壁は、衣原11号墳と波田1号墳が基底部に複数の板状石材を使用するのに対し、瀬戸1号墳では1石のみである。床面は、衣原11号墳と波田1号墳は敷石を使用しないが、瀬戸1号墳は玄室全面に敷石が見られる。しかし、玄室平面形は、瀬戸1号墳と衣原11号墳が長方形的であるのに対し、波田1号墳は緩やかではあるもののなだらかな曲線を描いているという違いが認められる。

以上の点から、衣原11号墳は、初現例である波田1号墳や瀬戸1号墳のどちらか一方のみの系譜を引くものではないといえる。衣原11号墳は、この2基とは別個に両袖式A類を導入したという考え方で、両者からの系譜を引く折衷形態という考え方ができる。

前者の観点については、波田1号墳と瀬戸1号墳が地理的關係から、両者が別個に両袖式A類を導入したものと理解できるのと同様に、この両者と水系を異にする衣原11号墳も、独自に両袖式

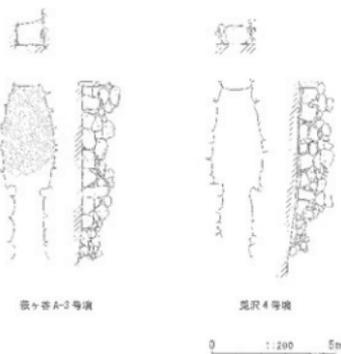


図42 両袖式石室をもつ古墳2



図43 両袖式石室分布図

A類を導入した可能性が考えられる。この場合、衣原11号墳は、瀬戸1号墳や波田1号墳とほぼ同時期のTK43～TK209型式期の所産ととらえられる。

一方、衣原11号墳が両者からの系譜を引く折衷形態であると考えた場合、疑似両袖式石室の影響がうかがえないことから、瀬戸1号墳や波田1号墳よりは後出するものの、疑似両袖式石室盛行以前であるTK43～TK209型式期の概然性が高いといえる。

いずれの場合であっても、衣原11号墳は石室形態から、TK43～TK209型式期の可能性が高いことがいえる。なお、独自に導入したと見るならば、衣原11号墳は、瀬戸1号墳や波田1号墳の被葬者と拮抗する力をもった被葬者像が想定されよう。

2. 衣原11号墳の出土遺物

出土遺物の概要 衣原11号墳は、石室内から鉄刀4点（うち1点は銀象嵌鏝をもつ）、馬具6点、鉄鏃58点以上、両頭金具8点、刀子1点、玉類32点以上、須臾器21点、土師器21点が出土している。

当地の横穴式石室の中では、質・量ともに注目できる内容であることに加え、最終埋葬時の状況をほぼ留めていることも注目できる。また、金銅製の馬具と飾大刀をもつことから、階層的には比較的上位の被葬者像がうかがえる。各遺物の特徴と時期については前節に記したが、あらためて概要を記す。

馬具 馬具は、大型矩形立開式環状鍔板付轡1点、辻金具2点、飾金具2点、絞具1点が、A-2群から出土した。いずれも鉄製である。副葬時の状況をほぼ留めているとみなせることから、1セットの馬具ととらえることができる。時期は、轡と辻金具から、TK209型式期においても早い段階のものと考えられる。

鉄刀 鉄刀は4点が出土し、1点は銀象嵌の八窓鏝、2点は無窓鏝をもち、残る1点は鏝をもたず、前3者よりも小さい。出土位置は、銀象嵌の八窓鏝をもつものがC群、無窓鏝を伴う2点と鏝をもたない1点がB群である。時期は、八窓鏝をもつ大刀と無窓鏝の1点がTK43～TK209型式期、無窓鏝のもう1点がTK209型式期、鏝をもたないものが7世紀代に位置付けられる。このほか、離れたところから鞆の責金具が1点出土しているが、どの鉄刀に伴うものか、あるいは、上記の4点とは別個の鉄刀に伴うのかは、不明である。

鉄鏃 鉄鏃は、鏃身が確認できるものがA-1群から58点以上出土している。このうち、4点が平根系短頭鏃、残る54点が尖根系長頭鏃である。鏃身部の形状は、平根系短頭鏃は三角形形式と腸状長三角形式がそれぞれ2点、尖根系長頭鏃は片刃筒式が2点、鑿箭式が1点、残る51点が柳葉式である。柳葉式は、細部の形状から、さらに細分できる。いずれも茎間は轉開であり、片刃筒鏃を除き鏃身の外縁が直線的になる傾向をもつ。後者は、刃部形成時の鑿打ちの工程によって生じた直線部分を、そのまま研ぎ出すという製作技法に起因する。これらの特徴から、鉄鏃はTK43～TK209型式期に位置付けられる。

両頭金具・刀子 芯棒、筒金ともに鉄製の両頭金具が、A-1群から8点が出土している。2本以上の飾り弓があったものと推測される。錆化により、不明な点も多いが、花卉が復元できるものは、いずれも4弁である。時期を詳細に特定することはできないが、6世紀後半から7世紀代の所産であることはいえる。

刀子は、C群から1点、出土している。

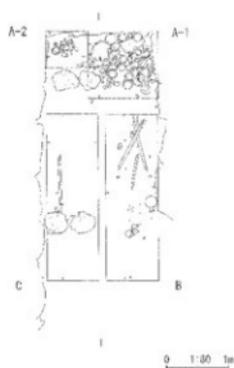


図44 11号墳遺物出土区割り図

装身具 耳環3点、珊瑚製の勾玉4点、蛇紋岩製の勾玉2点、碧玉製の管玉3点、土製丸玉1点、ガラス製丸玉2点、小玉20点以上が出土している。いずれもC群からの出土で、玉類は、一連の飾りであったものと推測される。

須恵器 坏蓋4点、坏身5点、無蓋高坏1点、有蓋高坏3点、フラスコ形長頸瓶2点、提瓶2点、俵形横瓶1点、埴1点、短頸壺1点、甕1点が出土している。

坏蓋と坏身のうちの各2点はTK10型式期、A-2群出土の有蓋高坏2点がTK10～TK43型式期、フラスコ形長頸瓶の2点がTK209型式期に位置付けられ、そのほかはすべてTK43型式に位置付けられる。ただし、出土状況を勘案すると、TK10型式期の坏身と坏蓋は、大主体をなすTK43型式期の須恵器と同時期の埋葬に伴うと考えられる。

土師器 土師器は坏身9点、高坏5点、模倣瓶2点、小型壺2点、小壺1点、鉢1点、小型碗1点、合計21点が出土している。いずれも、A-1群出土であり、同時期の所産と考えられる。供伴する須恵器から、TK43型式期に位置付けることができる。土師器の数が多いことは、この古墳の特徴の一つといえる。

3. 埋葬時期と副葬品

遺物は、最終埋葬時の状況をほぼ留めていると考えられる。ここでは、出土状況と遺物の時期から、埋葬回数と、それぞれに伴う遺物の組み合わせを、次のように考えたい(註7)。

初葬時の遺物 初葬に伴う遺物としては、馬具、八窓罽をもつ鉄刀、鉄鎌、フラスコ形長頸瓶2点を除く須恵器、土師器、鉄鎌、両頭金具である。

出土位置は、八窓罽をもつ鉄刀がC群、須恵器のうち2点と馬具がA-2群、残るものはA-1群である。明確な編年的位置付けが困難な土師器と両頭金具については、A-1群から供伴した須恵器や鉄鎌との出土状況から、時期をとらえることができる。A-1群においては、奥壁と左側壁が形成する石室の隅に接するように、角礫が設置されている。A-1群の遺物は、須恵器のみならず、この角礫の周辺からの出土であるが、1点のみ、角礫の上から出土した遺物がある。それは、提瓶(13)である。ほかの須恵器が角礫の周りに乱雑に集められているのに対し、この提瓶のみが角礫の上に置かれている。追葬に伴い片づけられたそのほかの須恵器とは異なる扱いを受けている。

これらの点から、フラスコ形長頸瓶は追葬時の遺物で、その他の須恵器は追葬に伴い片づけられたととらえることができる。この角礫の周囲からは、須恵器に混ざり土師器や鉄鎌が出土している。土師器や鉄鎌は角礫の下からも出土している。フラスコ形長頸瓶を除く須恵器はTK43型式期が中心、鉄鎌はTK43～TK209型式期であり、時期的にも齟齬はない。須恵器や土師器の下からは、両頭金具が出土し

表8 埋葬時期

	800				850
	TK10	TK43	TK209	TK217	TK46
石室					
馬具					
大刀1					
大刀?・3					
大刀4					
鉄鎌					
須恵器(奥)					
須恵器(前)					

● ● ●
初葬 追葬1 追葬2

ており、片づけ行為が行われる以前の副葬品ととらえることができる。以上の観点から、A-1群出土の土師器、鉄鏃、両頭金具は、フラスコ形長頸瓶を除く須恵器と同時期の埋葬に伴うものと考えられる。

次に、各遺物の編年の位置付けから、埋葬の時期を探る。各遺物は、八窓罫をもつ鉄刀がTK43～TK209型式期、馬具がTK209型式期初頭、鉄鏃がTK43～TK209型式期、須恵器がTK10～TK43型式期に位置付けられる。両頭金具と土師器は、上述の出土状況からTK43～TK209型式期といえる。ここで問題となるのは、馬具と須恵器における時期差である。ただし、馬具の轡は、正位置で握えられた2点の有蓋高坏に挟まれるように出土している。そのため、轡はこの須恵器とともに副葬されたと考えられる。

有蓋高坏はTK10～TK43型式期、馬具はTK209型式期初頭にそれぞれ位置付けられるため、TK43型式期の最終末頃からTK209型式期の初頭に初葬が行われたものと考えられる。

なお、八窓罫をもつ鉄刀は初葬時の遺物の中では、唯一C群の出土であり、ほかの遺物とは扱いが異なる様子が見ええる。棺内副葬の可能性も十分に考えられる。ただし、C群に設置された棺台は、初葬時のものではない。棺台の4石のうち、開口部側の2石の下から、八窓罫の鉄刀が出土している。

追葬時の遺物 追葬に伴うといえる遺物としては、B群から出土した鉄刀3点とフラスコ形長頸瓶1点、A-1群から出土したフラスコ形長頸瓶1点である。これらが、1回の追葬に伴うものととらえることもできるが、ここでは、B群における鉄刀3点の出土状況から、追葬は2回あったものと考えたい。

B群からは、上記のとおり、3点の鉄刀が出土している。このうち、1点はほかの2点に比べ、小ぶりで、切先の方向を違えている点が注目できる。この小ぶりの鉄刀は、衣原11号墳から出土した鉄刀の中では、最も新しい時期の所産ととらえることができる。同所から出土した2点の鉄刀より後出する要素をもつことと、出土状況の違いから、時期を違える追葬に伴うものとして位置付けたい。

2点のフラスコ形長頸瓶についても、わずかながら形態的差異があり、別個の追葬に伴うものとして、とらえることが可能である。このうち、より古く位置付けられるのがB群から出土したもので、A-1群出土のものが、後出的要素をもつ。

以上から、衣原11号墳では、1回目の追葬時にB群出土の鉄刀2点とフラスコ形長頸瓶が副えられ、2回目の追葬時に小ぶりの鉄刀と奥壁際出土のフラスコ形長頸瓶が副えられたものと考えられる。

なお、2回目の追葬に伴うとらえたフラスコ形長頸瓶は、出土状況が注目できる。この須恵器は初葬時の土器と混ざって出土している。そのため初葬に伴う副葬品と1回目の追葬に伴う副葬品は、2回目の追葬時に一括して石室隅に片づけられたものととらえることができる。

次に、追葬の時期を考えたい。1回目の追葬に伴うとらえた遺物のうち、フラスコ形長頸瓶はTK209型式併行期に位置付けられる。鉄刀2点もTK209型式期の所産ととらえられるため、1回目の追葬は、TK209型式併行期に位置付けることが妥当であろう。

2回目の追葬については、フラスコ形長頸瓶はTK209型式併行期、鉄刀は7世紀代に位置付けられる。フラスコ形長頸瓶は、1回目の追葬に伴うものよりも後出的要素をもつことは、先述のとおりである。そのため、2回目の追葬は7世紀初頭の可能性が高いといえる。

なお、衣原11号墳においては、右壁寄りに棺台と見られる石材が存在するが、これは初葬に伴うものではない可能性は、前頁に記したとおりである。1回の追葬は、ともに左壁寄りから遺物が出土している。右壁寄りの棺台を使用した追葬が、さらにもう1回行われ、衣原11号墳では計4回の埋葬が行われたことも想定できる。しかし、追葬のうちの1回が、右壁寄りの棺台を使用し、鉄刀を棺外副葬した可能性もある。この場合、初葬と時期が近接する1回目の追葬よりも、一定程度時期を経た2回目の追葬時に棺台を使用している可能性が高いといえよう。

この観点に立つならば、初葬に加え、1回目の追葬者は、あらかじめこの古墳への埋葬が予定されていた人物であったものとも考えられよう。2回目の追葬時には、初葬における埋葬者の位置に関する情

報は薄れており、石室内の空いている空間を利用して埋葬が行われたものと考えられる。

3. 結論

以上、記したように、衣原11号墳は、埋葬施設である横穴式石室が6世紀後半における当地の有力墳に採用される形態であることや、副葬品として馬具や節大刀をもつことなどから、被葬者の階層が後期群集墳築造階層の中では高いものであったことがいえる。

志太地域における横穴式石室の導入自体は6世紀前半に遡るが、単発的な導入であった。志太地域で、横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が形成されるのは6世紀後半以降のことである。その契機となる古墳の中には、衣原11号墳と同じ形態の石室を採用するものも少なからず見られる。このタイプの石室は、6世紀前半に当地にもたらされていたものとは、別個のルートで新たに導入されたものと考えられる。このような状況を鑑みると、衣原11号墳は、衣原古墳群の形成の嚆矢となった古墳の可能性があるとともに、その被葬者は他地域との交流のもと、この地にいち早く新来の墓制である横穴式石室を導入し得た人物といえる。衣原11号墳の石室内からは多数の須恵器が出土している。そのため、この被葬者集団は、墓制のみならず横穴式石室における葬制も同時に導入していることがうかがえる。

これまで、衣原古墳群の所在する葉梨川流域は、瀬戸川流域に比べ古墳の調査数が少ないこともあり、古墳時代の様子については、不明な点が多かったことは否めない。このたびの衣原11号墳の調査によって、葉梨川流域においても、瀬戸川流域と軌を一にして横穴式石室が導入されていることや、階層的にも遜色ない被葬者が存在していたことが明らかとなったことは、大きな成果といえよう。立地状況などを見る限り、衣原古墳群の被葬者集団は、古墳群の東側山裾に所在する寺家前遺跡や、後節で報告する衣原古窯群との関わりが深いものと考えられる。衣原古墳群をはじめとするこれらの遺跡を包括した当地の古墳時代像の解明は、今後の検討課題としたい。

註

- 1 鉄製環状鍔板付審については、岡安 1984・1985を参照した。なお、衣原11号墳出土例は、岡安のいう第IV期に位置付けることができる。
- 2 辻金具については、宮代 1966等を参照した。
- 3 象嵌罽については西沢 2002、橋本 1993を参照した。なお、西沢分類では、象嵌罽は面象嵌のものを対象としている。しかし、衣原11号墳出土の象嵌罽は、C字文であり、C字文は象嵌罽A類との関連が深いことも指摘されていることから、ここでは、あえて象嵌罽の分類を使用した。なお、有意罽として分類した場合、有意罽A類に分類できる。有意罽A類は象嵌罽A類の影響を受けて出現したことが指摘されている。また、有意罽A類は、TK43型式期に初現を置いているが、TK43型式期の出現を予見している。そのため、有意罽A類、象嵌罽A類のいずれであっても、衣原11号墳出土の象嵌罽の位置付けは変わるものではない。
- 4 鉄鍔の分類・各部名称は大谷 2003aの整理を参照した。
- 5 長谷川 2003において指摘される鳥田市鶴田1号墳出土の鉄鍔を典拠例とする駿河西部で特徴的に見られるタイプと同タイプといえる。
- 6 須恵器の編年については、田辺昭三による編年（田辺 1981）、鈴木敏則による静岡県下の須恵器編年（鈴木 2004）を参照した。
- 7 須恵器と土師器は、「副葬品」として扱われていたものではないが、表記が煩雑になるため、ここではあえて副葬品の中に入れて論をすすめる。

表9 11号出土大刀觀察表

種類No.	図版No.	出土位置	遺物名	重量(g)	全長(cm)	刃部(cm)			基部(cm)			備考
						長	幅	厚	長	幅	厚	
大刀1	10	石室内	鉄刀	99.80	77.60	3.20~3.50	0.70	16.10	1.40~2.40	0.70		
大刀2	10	石室内	鉄刀	99.90	77.00	2.80~3.30	0.60~0.70	15.90	1.10~2.90	0.50		
大刀3	10	石室内	鉄刀	104.10	79.70	2.70~3.40	0.70	14.50	1.40~1.90	0.30~0.40		
大刀4	10	石室内	鉄刀	57.40	43.40	2.40~2.90	0.80~0.90	9.00	1.50~2.50	0.30~0.70		

表10 11号出土両頭金具觀察表

種類No.	図版No.	出土位置	遺物名	全長(cm)	筒長(cm)	筒径(cm)	環部径(cm)		備考
							(上)	(下)	
両頭1	15	石室内	両頭金具	2.80	2.00	0.40	0.45	0.40	1弁・木質残存
両頭2	15	石室内	両頭金具	3.00	2.10	0.50	0.50	0.45	4弁・木質残存
両頭3	15	石室内	両頭金具	3.10	2.23	0.45	0.45	0.45	1弁以上
両頭4	15	石室内	両頭金具	2.10	(1.80)	0.40	0.40		3弁以上・木質残存
両頭5	15	石室内	両頭金具	3.45	2.30	0.50	0.50	0.50	2弁以上・木質残存
両頭6	15	石室内	両頭金具	2.75	2.10	0.45	0.45	—	2弁以上
両頭7	15	石室内	両頭金具	2.60	1.75	0.45	0.50	0.40	1弁以上・木質残存
両頭8		石室内	両頭金具	2.20	1.20	0.30	0.45	—	1弁以上

表11 11号出土鉄鍔觀察表

種類No.	図版No.	遺物名	出土位置	重量(g)	全長(cm)	總身径(cm)			環部径(cm)			備考			
						長	幅	厚	長	幅	厚				
鍔1	12	鉄鍔	石室内	11.78	(8.95)	0.05	3.00	0.20	(3.30)	0.60	0.30				
鍔2	12	鉄鍔	石室内	17.56	13.20	5.00	3.60	0.25	3.06	0.60~0.70	0.80	3.35	0.25~0.50	0.25	成形 木質付巻小?
鍔3	12	鉄鍔	石室内	10.16	(11.90)	4.45	3.35	0.15	2.40	0.55~0.60	0.30	(3.10)	0.25~0.50	0.30	木質残存
鍔4	12	鉄鍔	石室内	13.60	14.20	5.15	3.40	0.25	2.70	0.60~0.75	0.30	5.70	0.30~0.55	0.30	成形
鍔5	12	鉄鍔	石室内	14.62	(16.65)	3.90	0.90	0.20	6.50	0.50~0.60	0.30	(6.15)	0.15~0.45	0.30	樹皮残存
鍔6	12	鉄鍔	石室内	8.59	(17.15)	(2.70)	1.00	0.20	(9.35)	0.45~0.50	0.50	(4.80)	0.15~0.40	0.20	
鍔7	12	鉄鍔	石室内	7.04	(4.23)	3.25	0.90	0.20	7.80	0.45~0.55	0.25	(3.25)	0.35~0.40	0.30	木質残存
鍔8	12	鉄鍔	石室内	9.72	15.65	3.50	0.55	0.20	7.20	0.30~0.55	0.30				成形 樹皮・木質残存 不整形状不明
鍔9	12	鉄鍔	石室内	11.13	(15.70)	3.20	0.90	0.20	8.40	0.45~0.55	0.30	(4.10)	0.20~0.50	0.20	
鍔10	12	鉄鍔	石室内	8.38	(13.50)	3.50	1.00	0.20	7.75	0.50~0.55	0.3	(2.35)	0.20~0.20	0.20	
鍔11	12	鉄鍔	石室内	9.14	(16.05)	3.65	1.15	0.20	6.65	0.45~0.60	0.30	(3.85)	0.10~0.45	0.20	木質残存
鍔12	12	鉄鍔	石室内	7.22	(15.53)	2.80	0.55	0.15	8.00	0.40~0.50	0.35	(1.55)	0.20~0.45	0.20	樹皮残存
鍔13	12	鉄鍔	石室内	9.00	(12.45)	2.65	1.00	0.20	7.75	0.30~0.60	0.30	(2.25)	0.15~0.50	0.30	
鍔14	12	鉄鍔	石室内	10.94	(4.70)	3.10	1.00	0.20	6.50	0.45~0.60	0.20	(5.10)	0.15~0.45	0.20	樹皮残存
鍔15	13	鉄鍔	石室内	12.01	16.55	3.50	1.00	0.20	7.60	0.50~0.55	0.30	3.50	0.10~0.50	0.20	成形 木質残存
鍔16	15	鉄鍔	石室内	10.57	15.85	3.00	1.00	0.20	7.40	0.40~0.50	0.30	4.90	0.10~0.55	0.30	成形 木質残存
鍔17	13	鉄鍔	石室内	9.48	(18.50)	3.05	0.55	0.20	7.68	0.40~0.60	0.20	(5.33)	0.30~0.50	0.20	
鍔18	13	鉄鍔	石室内	10.61	(15.75)	3.60	1.00	0.20	7.50	0.40~0.50	0.20				樹皮残存 不整形状不明
鍔19	15	鉄鍔	石室内	8.30	16.00	3.45	1.00	0.20	7.20	0.40~0.60	0.30	3.65	0.10~0.50	0.25	成形
鍔20	13	鉄鍔	石室内	8.63	(4.70)	3.35	0.90	0.20	7.80	0.45~0.55	0.25	(3.55)	0.20~0.45	0.20	成形
鍔21	13	鉄鍔	石室内	7.59	(15.05)	(2.70)	0.90	0.20	8.75	0.40~0.50	0.20	(4.33)	0.15~0.40	0.20	樹皮残存
鍔22	13	鉄鍔	石室内	7.40	(12.63)	7.65	0.90	0.20	7.75	0.45~0.60	0.30	(7.40)	0.30~0.50	0.20	
鍔23	18	鉄鍔	石室内	9.00	(15.75)	3.25	1.05	0.20	7.35	0.45~0.55	0.30	(3.25)	1.30~0.45	0.20	
鍔24	15	鉄鍔	石室内	12.85	(8.70)	2.65	1.00	0.20	7.70	0.30~0.60	0.30				樹皮・木質残存 基部形状不明
鍔25	15	鉄鍔	石室内	9.11	(13.60)	2.95	0.90	0.20	8.45	0.45~0.50	0.25	(4.30)	0.20~0.45	0.20	
鍔26	14	鉄鍔	石室内	8.00	(15.70)	3.20	0.70	0.20	8.80	0.45~0.55	0.30	(3.75)	0.25~0.50	0.30	
鍔27	14	鉄鍔	石室内	8.65	(16.10)	(2.16)	0.80	0.15	9.05	0.40~0.55	0.25	(4.90)	0.20~0.45	0.20	
鍔28	14	鉄鍔	石室内	12.15	(18.00)	2.80	0.95	0.20	9.80	0.50	0.30	(5.45)	0.30~0.50	0.20	
鍔29	14	鉄鍔	石室内	10.87	20.30	2.90	1.00	0.20	12.65	0.50~0.60	0.30	4.75	0.20~0.40	0.20	成形
鍔30	15	鉄鍔	石室内	7.40	(4.30)	2.20	1.00	0.20	9.00	0.45~0.55	0.25	(3.15)	0.20~0.45	0.20	
鍔31	13	鉄鍔	石室内	9.19	(18.05)	3.45	0.90	0.20	8.50	0.45~0.55	0.30	(5.13)	0.20~0.40	0.25	

表11 11号墳出土鉄鍔観察表

種別No.	図版No.	遺物名	出土位置	重量(g)	全長(cm)	鍔身部(cm)			頸部(cm)			茎部(cm)			備考
						長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚	
鉄32	13	鉄鍔	石室内	7.42	(13.55)	2.50	1.00	0.20	7.40	0.35~0.50	0.25	(3.50)	0.15~0.30	0.20	切欠・木質残存
鉄33	13	鉄鍔	石室内	8.85	(18.50)	2.85	1.00	0.20	7.70	0.50	0.30	(2.35)	0.20~0.40	0.20	木質残存
鉄34	13	鉄鍔	石室内	7.15	(11.25)	2.80	1.00	0.20	5.25	0.15~0.50	0.25	(3.30)	0.20~0.50	0.25	木質残存
鉄35	13	鉄鍔	石室内	4.95	(9.10)	(1.15)	0.80	0.20	6.40	0.50	0.20	(1.30)	0.50	0.20	
鉄36	13	鉄鍔	石室内	7.97	(14.00)	2.40	1.00	0.20	9.00	0.40~0.60	0.20	(2.65)	0.20~0.50	0.20	
鉄37	13	鉄鍔	石室内	7.74	(14.90)	3.20	1.00	0.20	8.85	0.45~0.50	0.25	(3.75)	0.15~0.50	0.20	
鉄38	13	鉄鍔	石室内	10.13	(23.30)	1.75	0.80	0.20	9.60	0.45~0.50	0.30	(4.20)	0.30~0.45	0.20	
鉄39	13	鉄鍔	石室内	11.01	(17.90)	2.00	1.00	0.20	10.00	0.45~0.50	0.25	(6.00)	0.10~0.50	0.20	
鉄40	15	鉄鍔	石室内	6.54	(8.40)	2.40	(1.10)	0.20	(6.20)	0.45~0.65	0.25				
鉄41	15	鉄鍔	石室内	12.84	(18.45)	2.65	0.90	0.20	9.15	0.40~0.60	0.30	(4.70)	0.20~0.45	0.25	
鉄42	14	鉄鍔	石室内	6.51	(13.65)	2.90	0.90	0.20	8.65	0.10~0.30	0.25	(2.10)	0.35~0.60	0.15	
鉄43	14	鉄鍔	石室内	7.35	(14.60)	2.60	0.80	0.20	8.25	0.25~0.50	0.30	(3.45)	0.20~0.50	0.20	木質残存
鉄44	14	鉄鍔	石室内	6.00	(10.65)	(2.05)	0.95	0.20	8.45	0.45~0.55	0.25				
鉄45	14	鉄鍔	石室内	7.33	(16.70)	2.90	0.50	0.20	9.00	0.40	0.25	(4.85)	0.20~0.40	0.20	
鉄46	14	鉄鍔	石室内	10.19	(14.45)	3.00	0.90	0.20	9.30	0.40~0.55	0.30	(2.25)	0.30~0.40	0.25	
鉄47	14	鉄鍔	石室内	11.00	(11.65)	3.40	1.00	0.20	9.10	0.40~0.50	0.30	(4.65)	0.20~0.50	0.20	
鉄48	14	鉄鍔	石室内	8.33	(18.40)	3.50	1.00	0.20	8.55	0.40~0.60	0.25	(4.35)	0.20~0.50	0.20	木質残存
鉄49	14	鉄鍔	石室内	8.07	(15.70)	3.00	0.80	0.15	8.85	0.25~0.50	0.20	(4.30)	0.15~0.40	0.20	
鉄50	14	鉄鍔	石室内	6.51	(14.35)	(2.80)	0.90	0.15	8.25	0.40~0.50	0.25	(3.25)	0.20~0.40	0.20	木質残存
鉄51	14	鉄鍔	石室内	5.02	(12.85)	3.05	0.90	0.20	8.35	0.35~0.50	0.25	(1.00)	0.30~0.50	0.20	木質残存
鉄52	14	鉄鍔	石室内	5.72	(12.80)	3.10	0.85	0.15	8.10	0.25~0.50	0.20	(1.80)	0.20~0.50	0.20	木質残存
鉄53	14	鉄鍔	石室内	6.72	(11.70)	3.00	0.85	0.20	8.10	0.35~0.50	0.20	(3.72)	0.15~0.50	0.20	木質残存
鉄54	14	鉄鍔	石室内	6.99	(15.10)	3.00	0.95	0.20	7.60	0.50~0.35	0.30	(4.43)	0.20~0.45	0.20	

表12 11号墳出土勾玉観察表

種別No.	図版No.	出土位置	遺物名	石材名	全長(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
玉1	15	石室内	勾玉	麻痺	3.80	2.40	1.20	1.20	0.10~0.30	13.37	突起、片面、孔の両側に使用痕?
玉2	15	石室内	勾玉	麻痺	3.55	2.10	0.86	0.86	0.15~0.40	9.00	突起、片面、孔の両側に使用痕?
玉3	15	石室内	勾玉	麻痺	3.62	2.10	0.95	0.95	0.18~0.25	8.60	突起、片面、孔の両側に使用痕?
玉4	15	石室内	勾玉	麻痺	3.15	1.85	0.90	0.90	0.15~0.32	6.44	突起
玉5	15	石室内	勾玉	花紋岩	3.20	2.00	1.10	1.10	0.30~0.50	8.00	突起、片面、孔の両側に使用痕?
玉6	15	石室内	勾玉	花紋岩	3.20	2.05	0.95	0.95	0.12~0.51	7.65	突起、片面、孔の両側に使用痕?

表13 11号墳出土管玉観察表

種別No.	図版No.	出土位置	遺物名	石材名	直径(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
玉7	15	石室内	管玉	暗緑色緑閃石質頁岩	1.18	(2.72)	0.10~0.32	6.58	片割欠損
玉8	15	石室内	管玉	暗緑色緑閃石質頁岩または暗緑色緑閃石質頁岩	1.11	2.50	0.10~0.35	5.16	突起
玉9	15	石室内	管玉	暗緑色緑閃石質頁岩	0.88	2.63	0.15~0.28	4.50	片割欠損、片面からの空孔

表14 11号墳出土小玉・土玉観察表

種別No.	図版No.	出土位置	遺物名	色	直径(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
玉10		石室内	ガラス小玉	濃褐色	0.70	0.51	0.14~0.16	0.33	突起
玉11		石室内	ガラス小玉	濃褐色	0.65	0.51	0.15~0.20	0.08	突起
玉12		石室内	土玉		0.85	0.55	0.18~0.20	0.21	片面からの空孔
玉13		石室内	ガラス小玉	水色	0.45	0.19	0.08~0.19	0.04	突起
玉14		石室内	ガラス小玉	水色	0.36	0.21	0.14	0.08	突起
玉15		石室内	ガラス小玉	水色	0.37	0.20	0.10~0.11	0.04	突起
玉16		石室内	ガラス小玉	濃褐色	0.35	0.28	0.10	0.04	突起
玉17		石室内	ガラス小玉	水色	0.38	0.19	0.16	0.05	突起
玉18		石室内	ガラス小玉	濃褐色	0.57	0.29	0.10~0.13	0.08	突起
玉19		石室内	ガラス小玉	水色	0.37	0.25	0.15	0.05	突起

表14 11号墳出土小玉・土玉観察表

墳区別	区域別	出土位置	遺物名	色	直径(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)	質量(g)	備考
下20	石室内	ガラス小玉	水色	0.39	0.22	0.15	0.04	宛形	
玉21	石室内	ガラス小玉	透明色	0.40	0.22	0.15	0.01	宛形	
玉22	石室内	ガラス小玉	緑白	0.40	0.28	0.12~0.15	0.04	六角形	
玉23	石室内	ガラス小玉	水色	0.36	0.26	0.12~0.14	0.04	宛形	
玉24	石室内	ガラス小玉	水色	0.37	0.22	0.12	0.03	宛形	
玉25	石室内	ガラス小玉	水色	0.32	0.31	0.12	0.04	六角形	
玉26	石室内	ガラス小玉	水色	0.51	0.29	0.19~0.23	0.08	宛形	
玉27	石室内	ガラス小玉	水色	0.45	0.24	0.10~0.13	0.05	宛形	
玉28	石室内	ガラス小玉	水色	0.47	0.23	0.16	0.07	六角形	
玉29	石室内	ガラス小玉	水色	0.42	0.26	0.15	0.05	宛形	
下30	石室内	ガラス小玉	水色	0.45	0.28	0.15~0.18	0.08	宛形	
玉31	石室内	ガラス小玉	水色	0.48	0.39	0.11~0.12	0.06	六角形	
玉32	石室内	ガラス小玉	水色	0.41	0.26	0.15~0.18	0.06	宛形	

表15 11号墳出土土器観察表

墳区別	区域別	種別	器種	出土位置	注記	残存率	焼成	色調	調整等の特徴	備考
土1	16	須恵器	杯蓋	石室内	口径 11.4 最大径 4.1	100	良	内:2N6/灰色 外:N6/灰色	内面紅ナテ 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ	天井部内面に粘土付着。口縁部付着部は焼土
土2	16	須恵器	杯蓋	石室内	口径 12.8 最大径 4.25 器高 14.4	100	良	内:2N6.5/青灰色 外:N6/灰色	内面紅ナテ 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ	底部内面に少量の粘土片付着
土3	16	須恵器	杯蓋	石室内	口径 14.4 最大径 3.9	100	良	内:5B5/黄灰色 外:2N6.5/黄褐色	内面紅ナテ 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ	
土4	16	須恵器	杯蓋	石室内	口径 13.2 最大径 3.5	100	良	内:5B4/暗青灰色 外:10C3/緑灰色	内面紅ナテ、青 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ	内面中心付近に黒線あり
土5	16	須恵器	杯蓋	石室内	口径 10.4 最大径 4.8 器高 4.8	100	良	内:2Y7R赤灰色 外:7.5Y6.5/灰色	内面紅ナテ 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ	外周縁に隆起。天井部中心付近にヘラによる傷あり
土6	16	須恵器	杯蓋	石室内	口径 11.6 最大径 4.3	100	良	内:10D6/青灰色 外:7.5Y6.5/灰色	内面紅ナテ 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ	
土7	16	須恵器	杯蓋	石室内	口径 11.4 最大径 3.6	100	良	内:5B4/黄灰色 外:5B4.5/黄褐色	内面紅ナテ 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ	
土8	16	須恵器	杯蓋	石室内	口径 13.9 最大径 3.8	100	良	内:5B3.5/灰褐色 外:10G6/緑灰色	内面紅ナテ、青 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ	
土9	17	須恵器	杯蓋	石室内	口径 16.7 最大径 3.85	100	良	内:1A6.5/灰色 外:8.5/灰色	内面紅ナテ、青 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ	蓋あり。受部に蓋と接し
土10	17	須恵器	高杯	石室内	口径 11.6 器高 13.1	100	良	内:7.5Y6.5/灰褐色 外:2.5C2Y6.5/明オリーブ灰色	内面紅ナテ 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ、紅転ヘラケズリ	2段1方造かし。基部径3.00cm、器高7.90cm、器底径9.90cm
土11	17	須恵器	高杯	石室内	口径 13.9 最大径 10.5	100	良	内:10B3.5/黄灰色 外:N6/灰色	内面紅ナテ、青 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ、紅転ヘラケズリ	2段1方造かし。基部径5.20cm、器高14.10cm、器底径13.90cm
土12	18	須恵器	短筒	石室内	口径 6.8 最大径 17.85 器高 22.5	95	良	内:5B4.5/青灰色 外:5B4.5/1	内面紅ナテ 外:1段筒部紅ナテ 柱形ナテ、紅ナテ、紅転ヘラケズリ	器底径5.30cm、器高17.50cm、体高12.40cm
土13	18	須恵器	短筒	石室内	口径 5.6 最大径 18.35	95	良	内:5B5.5/1/灰褐色 外:5B5.5/青灰色	内面紅ナテ 外:1段筒部紅ナテ 柱形ナテ、紅ナテ、紅転ヘラケズリ	内面の筒部接合部分に粘土付着。器底径4.70cm、器高14.50cm、体高9.60cm
土14	18	須恵器	フラスコ形長頸瓶	石室内	口径 15.8 最大径 20.65	100	良	内:N6.5/灰色 外:5B6/黄灰色	内面紅ナテ 外:紅ナテ、青	外周縁に隆起。器内面に粘土付着。器底径5.90cm、器高6.60cm
土15	17	須恵器	短筒	石室内	口径 5.8 最大径 19.65	100	良	内:5B5.5/青灰色 外:5B6/黄灰色	内面紅ナテ 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ	器底径5.50cm、器高7.10cm
土16	17	須恵器	短筒	石室内	口径 7.7 最大径 11.0 器高 15.85	100	良	内:4P83.5/暗青灰色 外:5P83.5/黄褐色	内面紅ナテ 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ	外周縁部に粉砂付。器底径5.40cm、器高6.70cm
土17	17	須恵器	短頸蓋	石室内	口径 10.7 最大径 5.6	100	良	内:5P84.5/暗青灰色 外:3P85/1/黄灰色	内面紅ナテ 外:紅ナテ、紅転ヘラケズリ、カキ目	

表15 11号墳出土土器観察表

器名	図版No.	種別	器種	出土位置	法量	残存率	焼成	色調	製型等の特徴	備考
土18	30	須恵器	碗	石室内	口径 13.0 最大径 54.7 高さ 28.3	90	良	内:SPB5.2/19灰色 外:SB3/19灰色	内:口縁部凹みナデ 体部ナデ キ、カト目 外:口縁部凹みナデ 体部ナデ	明葉側面に焼成時の遺灰の痕跡あり。底厚11.00cm
土19	30	上野器	杯	石室内	口径 12.0 最大径 12.4 高さ 4.5	90	良	内:5YR6.5/6褐色 外:7.5YR7/4にふい褐色	内:横ナデ 外:横ナデ、ナデ	底面にへら状工具による刻み目あり。底厚5.00cm
土20	20	土師器	杯	石室内	口径 (11.1) 最大径 3.85	60	良	内:7.5YR6/5にふい褐色 外:5YR6/4にふい褐色	内:横ナデ 外:横ナデ、ハケ目	底径5.00cm
土21		土師器	杯	石室内	口径 7.0 最大径 2.8	90	良	内:2.5YR5.0/明赤褐色 外:5YR6.5/4にふい褐色	内:横ナデ? 外:横ナデ 底部木葉痕	底径6.10cm
土22		土師器	杯	石室内	口径 7.0 最大径 2.8	70	良	内:7.5YR5.5/4にふい褐色 外:5YR6/4褐色	内:横ナデ 外:横ナデ 底部木葉痕	底径7.07cm
土23		土師器	杯	石室内	口径 7.0 最大径 2.8	50	良	内:5YR6/4褐色 外:5YR6/5にふい褐色	内:横ナデ 外:横ナデ、ナデ	底あり
土24	20	土師器	杯	石室内	口径 (11.0) 最大径 11.5 高さ 4.4	70	良	内:7.5YR 褐色 外:10YR5.5/明黄褐色	内:横ナデ 外:横ナデ 底部木葉痕	著しく歪む。底径5.80cm
土25	30	土師器	杯	石室内	口径 (10.3) 最大径 4.0	90	良	内:5YR5.5/明赤褐色 外:5YR6/6褐色	内:横ナデ 外:横ナデ 底部木葉痕	
土26	20	土師器	杯	石室内	口径 (9.7) 最大径 4.05	60	良	内:7.5YR6.5/4にふい褐色 外:5YR6.5/4にふい褐色	内:横ナデ 外:横ナデ 底部木葉痕	底径5.80cm
土27	22	土師器	杯	石室内	口径 7.0 最大径 2.8	70	良	内:2.5YR5.5/4にふい赤褐色 外:2.5YR6/4にふい褐色	内:横ナデ? 外:横ナデ 底部木葉痕ナデ消	内面割傷。底径3.20cm
土28	22	土師器	高杯	石室内	口径 (12.4) 最大径 8.65	80	良	内:10YR6.5/6黄褐色 外:10YR7/4にふい黄褐色	内:内縁部ナデ 脚部横ナデ、ナデ 外:外縁部ナデ 脚部横ナデ、ナデ	歪みあり。脚部内面は黒色化。底厚10.80cm
土29	22	土師器	高杯	石室内	口径 (12.4) 最大径 9.85	80	良	内:7.5YR6.5/6褐色 外:7.5YR6.6/褐色	内:内縁部ナデ 外:外縁部ナデ 脚部横ナデ、ナデ	脚部径10.20cm
土30	土師器	高杯	石室内	口径 (12.4) 最大径 9.0	70	良	内:7.5YR6.5/6褐色 外:7.5YR6.5/6明褐色	内:内縁部ナデ 脚部横ナデ 外:外縁部ナデ 脚部横ナデ、ナデ	著しく歪む。基部径3.70cm	
土31	22	土師器	高杯	石室内	口径 (10.6) 最大径 8.5	80	良	内:10YR7/4にふい褐色 外:10YR7/4にふい黄褐色10YR7/4にふい褐色	内:内縁部ナデ 脚部横ナデ、ナデ 外:外縁部ナデ 脚部横ナデ、ナデ	歪みあり。脚部内面は黒色化。基部径4.40cm、脚部径0.70cm
土32	22	土師器	高杯	石室内	口径 7.0 最大径 2.8	60	良	内:10YR7/4にふい黄褐色 外:7.5YR6.5/6褐色	内:内縁部ナデ 外:外縁部ナデ 脚部横ナデ、ナデ	著しく歪む。脚部径11.40cm
土33	21	土師器	小型壺	石室内	口径 (9.6) 最大径 10.3 高さ 9.2	90	良	内:2.5YR5.5/4にふい赤褐色 外:5YR6/6褐色	内:横ナデ、ハケ目 外:横ナデ、ハケ目	外面割傷。縁部径8.55cm、底径5.50cm
土34	21	土師器	小型壺	石室内	口径 (9.0) 最大径 10.4 高さ 11.3	70	良	内:10YR4.5/4暗赤褐色 外:7.5YR6.5/4にふい褐色	内:横ナデ、ナデ 外:横ナデ 頸部7.7cmハケ目 底面木葉痕	厚底気味。縁部径8.10cm、底径6.70cm
土35	23	上野器	小壺	石室内	口径 (7.1) 最大径 3.85	100	良	内:5YR6.5/6明赤褐色 外:5YR6/6褐色	内:不明 外:横ナデ 底部木葉痕	内面は割傷のため観察不能。底径3.80cm
土36	23	上野器	小型壺	石室内	口径 (7.1) 最大径 3.85	80	良	内:2.5YR6.5/褐色 外:5YR6/6褐色	内:横ナデ 外:横ナデ、底部へ切り	
土37	21	土師器	模倣碗	石室内	口径 10.8 最大径 12.3	90	良	内:10H5.2/5暗褐色 外:2.5YR5.5/4にふい暗褐色	内:横ナデ、ナデ 外:横ナデ、ハケ目	頸部径5.00cm
土38	21	土師器	模倣碗	石室内	口径 (6.2) 最大径 12.2 高さ 14.25	90	良	内:2.5YR6/6褐色 外:7.5YR7/6褐色	内:横ナデ、ナデ 外:横ナデ 体部ハケ目	頸部径5.60cm
土39	21	土師器	鉢	石室内	口径 (17.4) 最大径 12.65	90	良	内:2.5YR6/6褐色 外:5YR6/6褐色	内:横ナデ 外:横ナデ、ハケ目 底部木葉痕	底径10.20cm
土40	19	須恵器	高杯	石室内	口径 15.0 最大径 15.0 高さ 15.0	100	良	内:7.5YR7/4にふい褐色 外:7.5YR4/1暗灰色	内:内縁部ナデ、指部押さえる外縁部凹みナデ、凹みヘラックズ目 外:外縁部ナデ、凹みヘラックズ目	2段3方遮かし。基部径4.40cm、脚部径11.80cm、脚部径13.00cm
土41	19	須恵器	高杯	石室内	口径 12.9 最大径 15.1 高さ 16.3	100	良	内:7.5YR7/3にふい褐色 外:2.5YR4/3にふい赤褐色	内:内縁部ナデ、指部押さえる外縁部凹みナデ、凹みヘラックズ目	2段3方遮かし。基部径4.00cm、脚部径11.70cm、脚部径12.30cm
土42	19	須恵器	フラスコ形灰皿	石室内	口径 17.5 最大径 23.8	100	良	内:5E.2/ 灰色 外:10E.2/ 灰色	内:内縁部ナデ 外:内縁部ナデ、カト目、ツクネ	自然割裂く付着。外縁部径と底径に10mm程度の差。底厚5.20cm、体高17.10cm

参考文献

- 藤枝市史編さん委員会 2007 『藤枝市史』 藤枝市
- 岡安光彦 1984 「いわゆる「素麗の櫛」について-環状鏡板付櫛の形式学的分析と編年-」『日本古代文化研究』創刊号
古墳文化研究会
- 岡安光彦 1985 「環状鏡板付櫛の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第2号 古墳文化研究会
- 宮代栄一 1986 「古墳時代霊珠・社金具の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 古墳文化研究会
- 西沢正晴 2002 「遠江・駿河における鉄製板鐙の変遷と展開」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第9号
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 橋本博文 1993 「亀甲雲鳳凰文象嵌大刀再考」『考古学』
- 大谷宏治 2003a 「地域区分、時期区分と鉄鍔分類」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第10号
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2003b 「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鍔の変遷とその意義」
『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第10号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 長谷川睦 2003 「静岡県における鉄鍔の地域色と生産・流通」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第10号
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 井鍋誓之 2005 「静岡県内の誇り弓について-両頭金具をもつ被葬者の性格-」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第10号
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 村田淳 2000 「静岡県内の両頭金具について」『静岡県指定史跡 井田松江古墳群調査整備事業報告書』戸田村教育委員会
- 田辺昭二 1981 『須恵器大成』角川書店
- 鈴木敏則 2004 「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

第3章 衣原遺跡

第二東名No.82・83地点

第1節 位置と環境

1. 地理的環境

赤石山脈に端を発し、静岡県のはぼ中央を流れる大井川。大井川は下流に志太平野と呼ばれる沖積平野を形成する。志太平野には、大井川以外にもいくつかの河川が流れ、駿河湾に注いでいる。大井川左岸の藤枝市を流れる代表的河川としては、瀬戸川、葉梨川、朝比奈川があげられる。このうち、藤枝市北西部の上大沢に源をもち、市域北部を東に流れるのが、葉梨川である。流域の丘陵には、遺跡の存在が確認されている。その一つが、衣原遺跡である。

衣原遺跡は、葉梨川右岸の丘陵平坦面に所在する。この丘陵は、市域北部の山塊から連なる丘陵であり、遺跡は丘陵裾の標高約25～30mの平坦面に広がる。丘陵の南から東にかけて広がる平野との比高差は5～10m程度であり、JR 藤枝駅からは北北東に5.5kmの距離である。なお、衣原遺跡の所在する丘陵は尾根に沿って古墳群が存在する。遺跡の北東に隣接するのが、前章に記した衣原古墳群、さらに衣原古墳群北方には寺家山古墳群が展開する。ともに後期の古墳群である。また、遺跡の北には第4章に記す古墳時代の窯跡である衣原古窯群が存在する。調査開始前、衣原遺跡とその周辺の一部が宅地、多くが茶畑として利用されていた。大規模な地形の変更を受けている様子は見受けられなかったが、丘陵部であるため表土層は薄く、遺構は後世の開発の影響を受け、上部は破壊されていた。

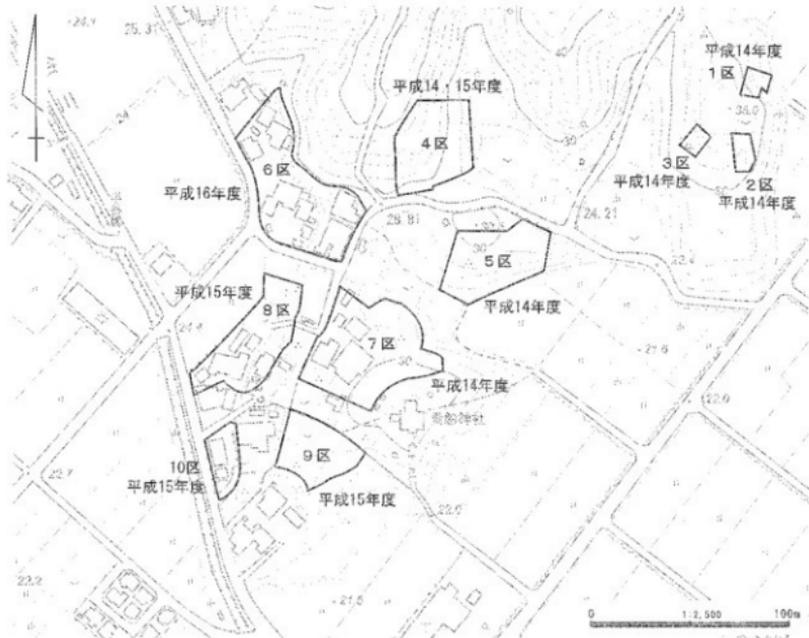


図45 衣原遺跡の位置

2. 歴史的環境

衣原遺跡では、弥生時代中期～後期、古墳時代後期～近世の遺構や遺物を調査した。遺跡周辺の歴史的環境は、第1章、第2章、第4章でも、概要を記している。そこで、ここでは、衣原遺跡に関わる時代のうち、弥生時代と古代～中世初頭に関して、葉梨川流域における遺跡の立地状況を概観する。

弥生時代 葉梨川流域における、代表的な弥生時代の遺跡としては、上敷田川の下遺跡(12)と上敷田モミダ遺跡(14)があげられる。前者が中期中葉～後半、後者が後期の集落跡である。なお、中期初頭以前の遺跡は、葉梨川流域では発見されていない。中期初頭以前の遺跡は、荘館山遺跡(25)や稲ヶ谷遺跡(28)などが、瀬戸川流域では見つかっている。ただし、これらの遺跡では、住居跡は検出されていない。なお、志太地域では、瀬戸川右岸の丘陵裾部に所在する秋ヶ谷遺跡を除くと、この時期の多くの遺跡は、丘陵上に所在する。一方、中期中葉～後半の上敷田川の下遺跡は、低地に所在する集落跡である。朝比奈川左岸の清水遺跡(5)や、瀬戸川と葉梨川の間際に位置する郡遺跡(17)も同時期に位置付けられる低地部の遺跡である。この時期の遺跡は、低地部に所在する傾向がうかがえる。

上敷田モミダ遺跡は、葉梨川流域のみならず、志太地域を代表する弥生時代後期の遺跡であり、出土した土器は、当地の基準的な資料ともなっている。この遺跡も立地は低地部である。しかし、後期に位置付けられる遺跡の中には、烏内遺跡(11)や東浦遺跡(10)のように、再び丘陵上に所在する集落跡が散見できる。白砂ヶ谷遺跡(24)や荘館山遺跡、稲ヶ谷遺跡も同様の立地である。これらの集落遺跡の多くは、後期後半から集落が形成されることがうかがえ、この時期、丘陵上に集落が展開する背景には、何らかの社会的理由も想定される。なお、東浦遺跡や白砂ヶ谷遺跡では、方形周溝墓も発見されている。前者は、中期に遡る可能性もある。本章で報告する衣原遺跡でも、後期の土器が出土している。また、隣接する寺家前遺跡(2)でも同時期の集落と水田跡を調査している。寺家前遺跡は、出土土器

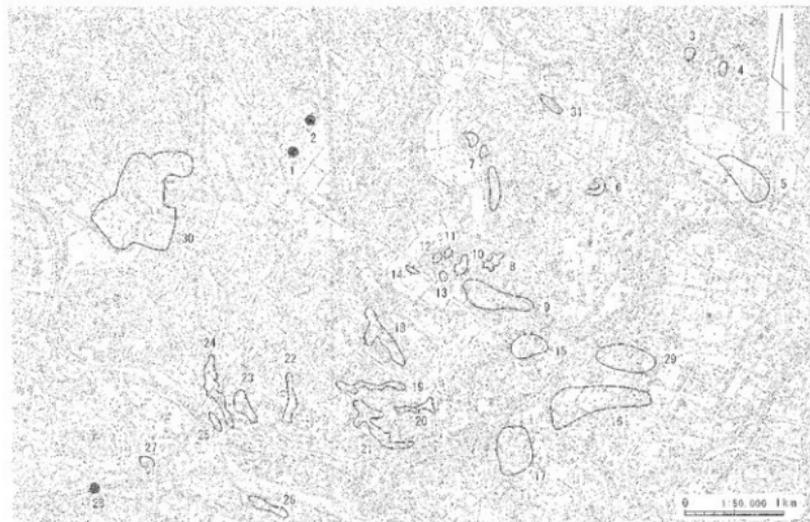


図46 衣原遺跡と周辺の弥生～中世遺跡分布図

が上敷田モミダ遺跡と近似する時期であるとともに、集落が低地と丘陵の境に展開している点は、当地の弥生時代後期中頃の集落のありかたを考えると、貴重な資料といえる。また、土器以外にも、木製品などもまとまって出土しており、遺構、遺物ともに注目し得る遺跡といえる。

古代～中世初頭 奈良時代～平安時代における葉梨川流域の遺跡で、注目できるのは平島遺跡(16)と水守遺跡(23)である。ともに、官衙に関連する遺構や遺物が発見されている。律令期の志太地域には、志太郎と益津郡が置かれる。両郡の境は瀬戸川付近とされ、葉梨川流域は益津郡に属する。ただし、大東急記念文庫本の和名類聚抄には、夜梨の名が志太郎の郷として記されている。衣原遺跡周辺をこれに比定する見解もあるが、益津郡の沢倉郷(高山寺本では沢会)に比定する見方もある。益津郡の郡衙に比定されるのが、瀬戸川と葉梨川の間にある郡遺跡である。水守遺跡と平島遺跡は、これに関連する遺跡である。また、水守西遺跡(15)は、一般的集落とされるものの、郡衙との関連が強いと考えられる遺跡である。なお、志太郎衙に比定されるのが、瀬戸川右岸に所在する御子ヶ谷遺跡である。この遺跡の周辺でも屏の機能と考えられる秋合遺跡、工房跡と推定される山廻遺跡など、官衙に関連する遺跡が見つかっている。

郡衙関連以外の遺跡としては、葉梨川左岸の湖山南西端に所在する東浦遺跡で、小規模ながら平安時代前半の集落が発見されている。律令期の遺物は衣原遺跡(1)や寺家前遺跡でも出土している。立地状況が東浦遺跡と似ることから、この地にも集落が広がっていたものと推定される。なお、衣原遺跡から出土した律令期の須恵器は、8世紀後半から9世紀初頭に操業された助宗古窯群(30)で生産されたものと推定される。助宗古窯群は、その後、操業を一時停止するが、10世紀後半には、灰陶陶器の生産を開始し、12世紀まで山茶碗の生産が行われる。助宗古窯群は、衣原遺跡からは、南西の丘陵尾根を隔てた位置に所在する。葉梨川では、古墳時代に単発的ではあるが、須恵器生産が行われていた経緯がある。そのため、衣原遺跡周辺で、律令期あるいは中世初頭の窯跡が存在する可能性はあるだろう。このほか、生産に関わる遺跡としては、上敷田モミダ遺跡や下敷田遺跡(9)で、律令期の水田跡が確認されている。寺家前遺跡でも、この時期に水田が営まれていた可能性はある。

衣原遺跡では、平安時代末～鎌倉時代前半の遺物も出土している。北に隣接する寺家前遺跡でも、平安時代の終わり頃から鎌倉時代前半の遺物や遺構も確認されている。寺家前遺跡では、丘陵裾部に集落が展開する様子が確認されているが、湖山を隔てた北東に所在する仮宿塚ノ坪遺跡(31)でも、丘陵裾部で集落跡が確認されており、12～13世紀の遺構・遺物がまとまって出土している。この時期においても、集落の中には丘陵裾部に展開するものがあるといえる。一方、弥生時代や古墳時代、律令期に見られたように、平野部の微高地上にも集落は展開していたものと推測される。しかし、葉梨川流域においては、この時期の集落は確認されていない。

表16 周辺の弥生～中世遺跡地名表

No	遺跡名	時代	類別	No	遺跡名	時代	類別
1	衣原遺跡	弥生・古代・近世	住・墓	17	郡遺跡	弥生～中世	集落
2	寺家前遺跡	弥生・古墳・中世～近世	集落	18	跡・跡・五輪瓦葺跡	弥生	墓・墓
3	上原遺跡	弥生	集落	19	山谷遺跡	縄文・弥生	集落
4	大九郎遺跡	弥生	集落	20	約の池原遺跡	弥生・古墳	集落
5	康水遺跡	弥生・古墳	集落	21	志子下遺跡	縄文・弥生・中世	墓・跡
6	宮原遺跡	弥生・古墳・古代	墓・集	22	跡ヶ谷遺跡	弥生	集落
7	中敷田遺跡	弥生・古墳	墓・集	23	環状山遺跡	弥生	集落
8	下敷田・山崎遺跡	弥生	集落	24	山谷・山原跡	弥生	集落
9	下敷田遺跡	弥生・古墳・古代	集落	25	長瀬山遺跡	弥生	集落
10	東浦遺跡	縄文・弥生・古代～近世	住・集	26	西之平遺跡	弥生・中世～近世	集落
11	湖内遺跡	弥生・古代・中世・近世	住・集	27	宮崎原遺跡	弥生・中世～近世	集・墓
12	上敷田中の丁遺跡	弥生	集落	28	跡ヶ谷遺跡	弥生・(後)・古代	集落
13	行歌遺跡	弥生・古墳・古代	墓・集	29	水守遺跡	縄文～近世	集・集
14	上敷田モミダ遺跡	弥生・古墳・古代	集落	30	助宗古窯群	古代	窯
15	水守西遺跡	古代	集落	31	仮宿塚ノ坪遺跡	縄文～近世	集・集
16	平島遺跡	弥生・古墳・古代	集落				

第2節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

現地調査

衣原遺跡の本調査は、平成12～14年度に実施した確認調査の結果に基づき、平成14年7月から平成16年12月にかけて、断続的に実施した。

調査対象範囲は地形と調査年次から10の地区に分けることができ、調査は区ごとに行った。いずれの調査区においても、表土除去作業には重機を用い、包含層掘削、遺構掘削、遺構検出等の作業は人力で実施した。また、調査区内には、国土座標に基づいた測量基準点を設け、これを基に調査区内に10m単位のグリッドを設定し、記録図を作成した。なお、全体図ならびに地形測量図の作成は、空中写真撮影により行っている。記録図は1/20、1/100を基本としたが、必要に応じてほかの縮率も使用している。

記録図の作成と併せ、撮影による写真記録も行った。写真撮影には、35mm判カラーネガフィルム、6×7判モノクロフィルム・カラーリバーサルフィルムを使用した。また、ラジコンヘリを使用した空中写真撮影も行っており、6×4.5判モノクロフィルム・カラーリバーサルフィルムを使用している。なお、基準杭の設定、空中写真撮影・測量は株式会社フジヤマに委託した。

整理作業・報告書作成作業

整理作業と報告書作成作業は、藤枝地区事務所にて平成16年度から一部を着手し、平成17年度から本格的な作業を実施した。出土遺物は洗浄・注記作業を行った上で、分類・仕分け作業を行い、続いて接合・復元作業を行った。一連の作業を終えた遺物のうち、必要のあるものは図化を行い、さらに、写真撮影を実施した。写真撮影には、6×7判と4×5判のカラーリバーサルフィルム・モノクロフィルムを使用した。撮影は、当研究所本部写真室にて実施している。遺物に関わる作業と併行して、図面修正等の遺構に関わる作業も行った。

上記の作業を経て、遺構図と遺物図について、それぞれ版組を行い、次にトレース作業を実施した。また、これらの作業と併行して、執筆作業と編集作業を行った。すべての作業を経た、遺物や記録類については、将来の保管・活用に備えるべく、収納作業を実施した。

整理作業・報告書作成作業は、平成22年3月、本書の刊行をもって終了した。

表17 衣原遺跡調査工程表

	平成14年度												平成15年度												平成16年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1区																																				
2区																																				
3区																																				
4区																																				
5区																																				
6区																																				
7区																																				
8区																																				
9区																																				
10区																																				

2. 調査の経過

衣原遺跡の現地調査は、平成14～16年度に実施した。調査対象面積の合計は、12,760㎡である。調査は、区単位で実施した。各調査区の調査は、始めに資材や機材の搬入などの準備作業を行い、調査範囲の確認を行った上で、重機を用いて表土を除去した。その後、測量基準点の設置と、人力による遺構検出と遺構掘削を実施している。図や写真による記録は、掘削作業と併行して実施した。

平成14年度の調査 平成14年度は、1～5区と7区の調査を実施した。1～3区は「№82地点本調査Ⅰ期」として500㎡を対象として12月1日から翌年の1月31日まで、4区は「№83地点本調査Ⅱ期」として1,560㎡を対象に10月23日から調査を実施した。5区は「№83地点本調査Ⅰ期」として1,600㎡を対象とした調査を7月1日から翌年の1月23日まで、7区は11月1日から翌年の3月20日まで、「№83地点本調査Ⅲ期」として3,000㎡を対象に調査を行った。このうち、10月から実施した4区の「№83地点本調査Ⅱ期」は、平成15年8月29日まで調査を実施している。

始めに調査に着手したのは5区である。5区の調査は、7月に重機掘削、基準杭の設置を行い、10月初頭まで人力掘削を行った。実施作業や写真撮影作業は10月末に終了した。ただし5区では、前章に記した衣原11号墳も検出したため、古墳の調査も併せて実施した。そのため、5区としての調査を終了したのは、古墳の解体調査が終了した平成15年1月23日である。

次に着手したのは4区である。4区は10月から掘削作業に着手し11月には遺構検出作業を終えた。4区では古墳時代の須恵器窯跡などを検出したこともあり、作業の中心となったのは、窯跡群である。窯跡群の調査は、年度内で終了せず、次年度も継続して調査をすることとなった。

続いて7区の調査を11月から開始した。重機掘削を終えた箇所から随時、人力掘削にとりかかった。2月には遺構検出を終え、3月には遺構掘削と記録に関わる作業を終えた。

12月1日からは1～3区の調査にも着手した。調査は2区と3区から開始し、12月中頃には3区の調査を終了した。3区の調査を終えた段階で1区の調査に取りかかった。1区の調査は、12月末には完了した。2区は1月前半に中世～近世の遺構検出面の調査を終え、続けて下層遺構の確認作業を行った。1月末には2区の調査も終了した。

平成15年度の調査 平成15年度は前年度から引き続き4区の調査に加え、8～10区の調査を行った。8～10区は「№83地点本調査Ⅳ期」として、4月1日から翌年の1月15日まで3,600㎡を対象に調査を実施した。なお、4区の調査も4月1日から開始しており、8月29日に作業を完了した。

8～10区の調査では、4月から重機掘削を開始し、終了箇所から人力による遺構検出に取りかかった。遺構は、ある程度検出が終わった時点で検出状況を記録にとり、掘削に着手した。重機掘削は6月まで行い、遺構検出は11月まで行った。遺構掘削と、測量、写真撮影は12月まで行い、1月には調査区の原状復旧作業を終えて調査を完了した。なお、6月と12月にはラジコンヘリによる空中写真撮影を行っている。

平成16年度の調査 平成16年度は、6区の調査を行っている。6区は「№83地点本調査Ⅴ期」として4月1日から12月17日まで、2,500㎡を対象に実施した。

重機掘削は4月から6月まで実施し、ほかの調査区同様に重機掘削終了箇所から人力による遺構検出を開始した。遺構検出は8月まで行い、検出遺構は随時遺構掘削に取りかかった。遺構掘削と測量作業、写真撮影は11月まで行い、12月に撤去工と原状復旧作業を終えて作業を完了した。

資料整理・報告書作成 平成17～21年度に実施した。作業は、遺物に関わる作業と遺構に関わる作業を併行して行い、平成22年3月本巻の刊行をもって、作業を終了した。

第3節 調査の成果

1. 概要

藤原川右岸、中ノ合～下之郷地区の丘陵部は衣原古墳群として古くから古墳の存在が知られていた。このたびの第二東名建設事業に伴う発掘調査を実施した衣原遺跡は、既知の遺跡ではなく新たに発見された遺跡である。平成14～16年度の3ヶ年にかけて行った調査の結果、弥生時代～古墳時代、古代～近世まで多岐にわたる遺構と豊富な遺物が見つかった。前章の衣原11号墳（6世紀後半）をはじめとして、弥生時代の住居跡、古墳時代の須恵器窯や奈良時代の炭窯などがある。注目されるのは、県内初の横口付炭窯が2基発見されたことであろう。

衣原遺跡の調査区は1区から10区までである。1～3区は藤枝市指定史跡衣原古墳群の範囲内であったが、古墳はなく、石切場跡や堅穴住居跡、近世墓などの調査を行った。4～10区までは試掘・確認調査の結果、新たに遺跡の存在が確認されたため、本発掘調査を実施した範囲である。4区では志太地区で3基目となる衣原1号窯（須恵器焼成窯）が発見された。その直上で検出した衣原2号窯は県内では初の発見例となる横口付炭窯である。窯跡の操業年代は奈良時代以降と思われる。上層部では近世墓群も検出した。5区は横穴式石室墳である衣原11号墳（古墳時代後期6世紀後半～7世紀）を調査した。その他平安期の土坑1基や近世の火葬遺構群、礫石経を伴う土坑1基などが見つかった。

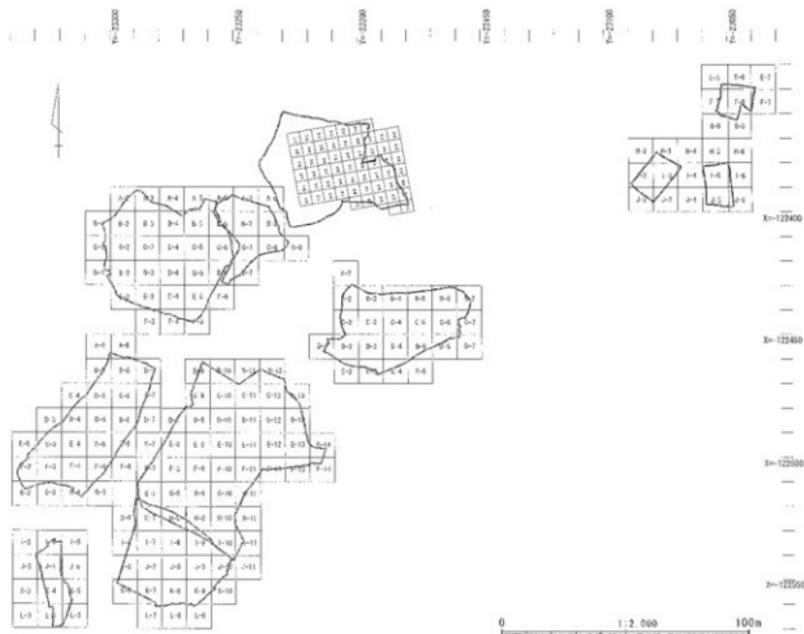


図47 1～10区グリッド配置図

表18 各区の調査期間と面積

	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	調査期間	調査面積
1～3区									平成14年12月～平成15年1月	500㎡
4区									平成14年10月～平成15年8月	1,560㎡
5区									平成14年7月～平成15年1月	1,600㎡
6区									平成15年4月～平成16年12月	2,500㎡
7区									平成14年11月～平成15年3月	3,000㎡
8・9・10区									平成15年4月～平成16年1月	3,600㎡
基礎神岡遺跡 調査再行区									平成17年4月～平成22年3月	

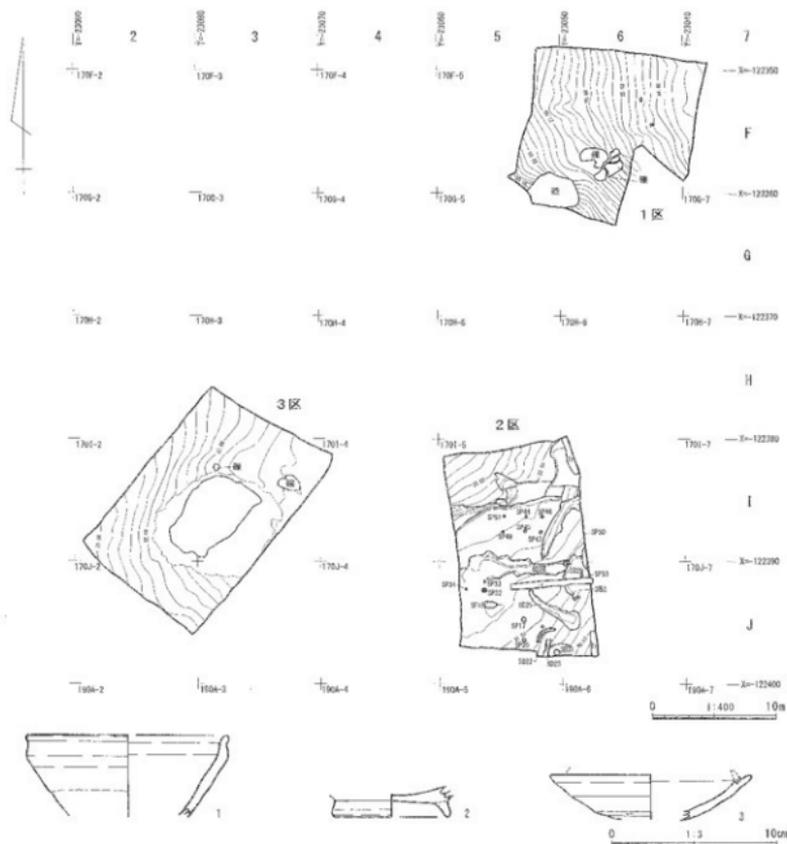


図48 1～3区遺構全体図・出土遺物

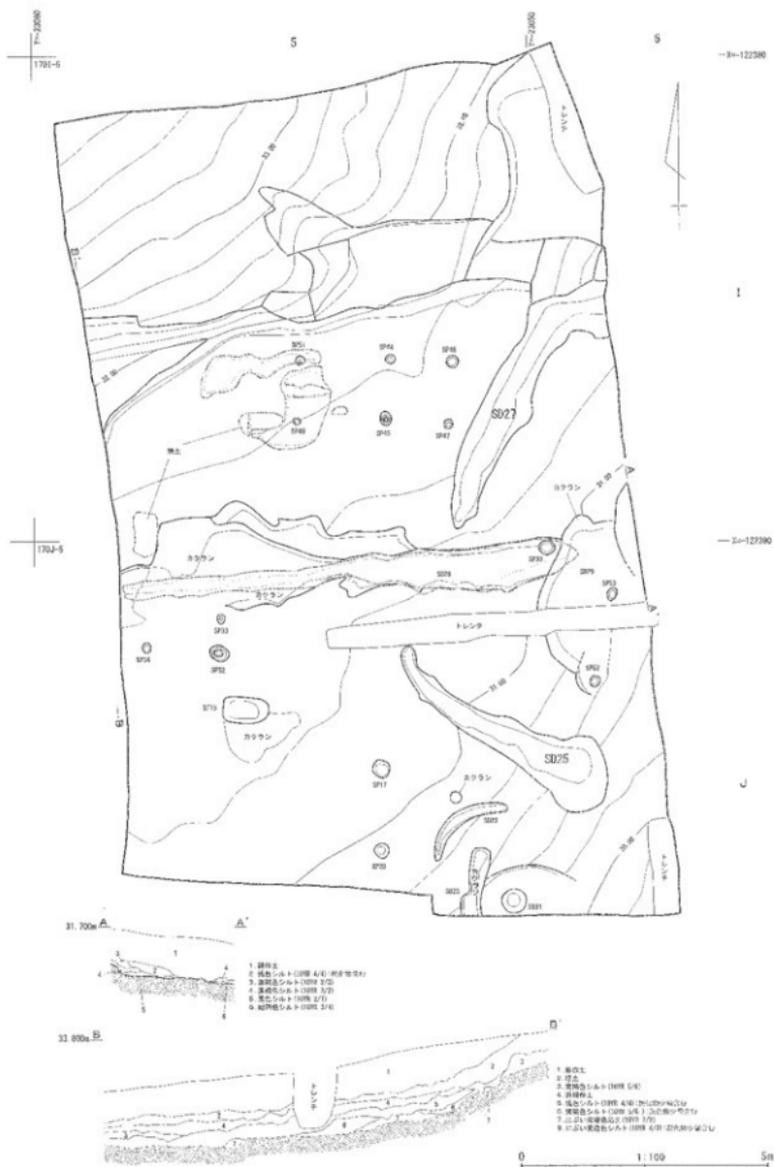


図49 2区遺構全体図・土層断面図

多量の礫石経の出土は県内でも珍しく貴重な資料といえる。6区では4区で発見された炭窯とほぼ同時期の横口付炭窯(衣原3号窯)を調査した。ほかに掘立柱建物跡が複数見つっている。7区は弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡3軒、奈良時代から中世までの掘立柱建物跡10棟が見つかった。谷部包含層から弥生時代中期～近世までの土器が出土した。8区・9区・10区では、弥生時代から奈良時代までの竪穴住居跡や掘立柱建物跡を複数検出した。出土土器から見ると弥生時代～中近世にわたるものであることから断続的に集落が続いていたと考えられる。以降、調査区ごとに記述する。

2. 1～3区

調査対象地は茶畑であったため、表土層はかなり改植の影響を受けていた。確認調査は平成12年～14年まで実施した。出土遺物は少量であったものの、縄文土器から近世までの幅広い時期の土器や石器・金属製品などが出土した。当地は藤枝市指定文化財衣原古墳群の周知内に位置し、古墳時代の須恵器も数点出土している。しかしいずれも茶畑の耕作土中から出土している小片であり、原位置を留めていない。本調査対象となった範囲は確認調査で遺構が確認された場所を拡張する形で3箇所限定した。本調査は平成14年12月から平成15年1月まで行った。調査区は北側から順に1区、2区、3区と付し、500㎡の記録保存のための発掘調査を実施した(註1)。

1区では調査区西側の急傾斜地に崩落した巨石を検出した。確認調査では古墳と考えられていたが、南端の巨石が割れ落ちたものであった。巨石下の黒色シルト層からは須恵器坏身が1点出土した(3)が、古墳特有の立ち上がりや掘形もなかったことから、巨石が割れた際に偶然入り込んだと思われる。調査区北東斜面では柱穴が2箇所確認された。検出の過程で山茶碗・灰釉陶器の小片が数点出土したが原位置を留めるものとは考えにくい。覆土内に遺物はなく、遺構の年代は不明である。

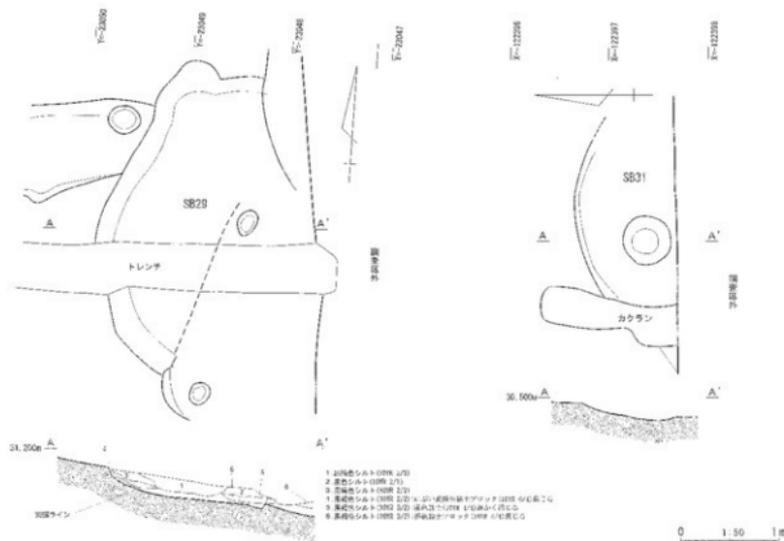


図50 2区竪穴住居状遺構 SE29・31

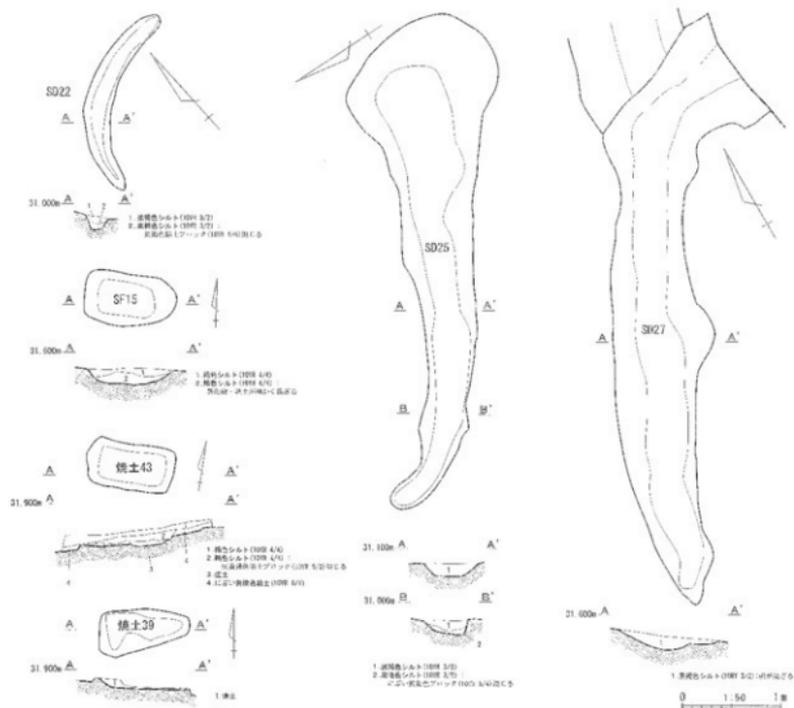


図51 2区溝状遺構・土坑・焼土

2区は上層で焼土や柱穴や溝跡・土坑、下層で竪穴住居跡2軒と溝跡、柱穴跡、土坑などが見つかった。焼土39・43(図51)はSP49・51よりも上層で検出した。SP44・45・46・47・49・51(図49)は柱間の違いはあるものの、遺構覆土は炭化物混じりの褐色土と似ているため同一遺構と考えられる。SP17からは陶磁器が出土、SP30からは挿鉢が出土した。住居跡に近接するSP30は覆土が「にぶい黄褐色」でその他の柱穴とは若干異なるが、近世の溝跡の下層で検出している。SF15(図51)は楕円形を呈する土坑である。覆土下層に炭化物層があり焼土も検出した。覆土上層からは灰軸陶器碗(2)や化粧土のかかった天目鼠茶碗等出土していることから近世の墓跡と考えられる。

下層で検出したSB29(図50)は竪穴住居跡と考えられる。東斜面の傾斜地に立地しているため、東側の住居プランは見られなかった。床面は一部硬化している範囲が確認できた。SB29では何軒かの住居が切り合っている可能性がある。当初SP52を住居の南西角の柱穴と想定したが、SP53へ続く住居プランは確認できなかった。西側の住居の後にSP52・53を伴う住居に建て替えられた可能性がある。SD27・25(図51)は、当初、住居跡に伴う周溝と考えられていたが、SB29に伴う溝跡であるかどうかは断定できない。溝跡はSD27が先行して溝として機能しており、その後、地山の褐色土と混ざりながら埋没し、SD25と一体になりほぼ直線的に機能していた。覆土は黒褐色シルトである。

SB31(図50)も竪穴住居跡である。住居は斜面地に立地し、東側谷部には黒色土が堆積していたが、

南東側の住居プランは検出できなかった。西側は攪乱を受けている。SP56は住居内に位置するが、非常に浅く、住居に伴う柱穴かどうかは不明である。SB31も当初はSD22（図51）が住居跡の崩溝と考えられたが断定はできない。

住居跡は、規模・形状・壁溝の有無、柱穴の配置、炉跡の有無等の情報がほとんどなく、遺物も微少な破片しか出土しなかった。竪穴住居跡は調査時に黒色土を覆土とする溝（周溝）を伴うと考えられたが、遺構内からの遺物がなく、確実に住居の周溝であるとは断定できなかった。一部攪乱も受けていることから所属時期が不明である。そのため今回は住居跡と溝跡は個別報告するに留めた。周囲に周溝をもつ形態の住居跡は高田市（旧金谷町）駿河山遺跡A区や掛川市上ノ平遺跡（註2）で見られる。本調査区の住居が周溝をもつものならば弥生時代後期の住居跡とも考えられる。

近世では墓1基と柱穴があったことから小規模な屋敷があった可能性がある。

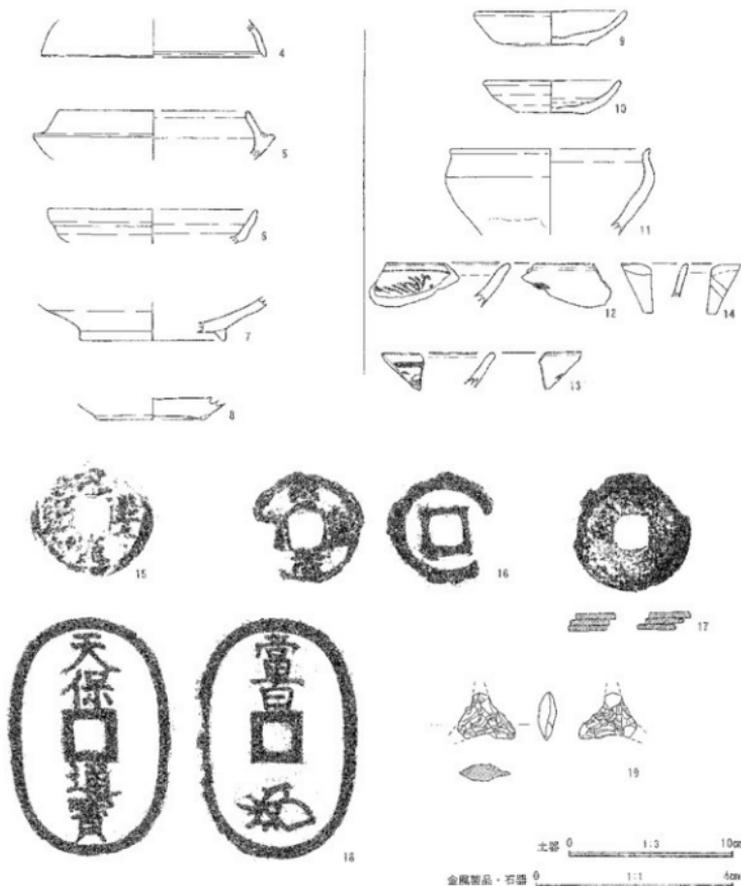


図52 1～3区確認調査他出土遺物

3区では馬蹄形の岩が露出していた箇所があったが、調査の結果、巨石を削り抜いた石切り場であったことがわかった。中心部には楔を入れたためと思われる「筧」跡が6箇所確認された。周辺は風化が激しく脆くなっている。そのため岩石の中心部のみ切り取っていたと考えられる。灰釉陶器等の土器は出土しているが、近年まで塚地として残っていたため近代の遺物も含まれていた。埋没状況から近世以降の遺構とも考えられるが、出土遺物がなため機能年代は不明である。

調査対象地は現代まで茶畑として利用されており、表土層はすでにかかなりの攪拌を受けていた。そのため調査区内での出土遺物は数少なかった。確認調査および表面採集された遺物がわずかにある(図52)。4～8は表面採集、9～13は確認調査で出土した土器である。6世紀代の須恵器を含むもの、土器の大半は近世に属する。4は須恵器坏蓋。5は須恵器坏身。6は須恵器だが器種不明。須恵器の年代は6世紀代。7・8は灰釉陶器碗。平安時代(9～11世紀代)と考えられる。9・10はかわらけ。焼成不良で歪みがあり摩滅している。11は天目茶碗。図48と同様、胎土から見て地元で焼かれた製品の可能性が高い。12・13は染め付けの磁器である。接合点はないが同一個体の可能性もある。14は青磁片。小片のため器種が特定できない。外面にヘラ削り文様があることから、おそらく青磁碗と思われる。金属製品は確認調査で銭貨が6枚出土した。15は「元豊通寶(?)」、16は「熙寧通寶」、17は3枚が重なり、文字面が内側のため種類は不明である。15～17は遺存状態が極めて悪い。18は「天保通寶」。比較的遺存状態がよい。石器は小型の打製土織が1点出土している(19)。先端部と片方の脚部を欠く。

3. 4区

平成14・15年度に本調査を行った4区では東向き斜面部から古墳時代後期の須恵器を焼成した窯跡1基と、横口付炭窯と呼ばれる特異な形態をもった遺構1基を検出した。冒頭の概要でも述べたとおり、須恵器焼成窯は志太地区で3基目の発見例となる。この発見により、当該地が衣原古窯群として遺跡が新規登録されたほか、平成19年に編纂された『藤枝市史(資料編1 考古)』(2007 藤枝市)で衣原古窯群の1号窯として掲載された。その1号窯の直上で検出した2号窯は県内では初の発見例となる横口付炭窯である。灰原等から多量に出土した須恵器片の年代から、1号窯は古墳時代後期(6世紀後半代)に操業していたことが明らかとなった。2号窯は1号窯の構築後につくられたことが確認されているが、窯跡のみの単独の発見であるため、製品の用途は推定の域を出ない。また窯の年代も明確ではないが1号窯との関係から奈良時代以降のものと思われる。その後の平成16年度の現地調査では、6区から横口付炭窯がさらにもう1基と、近世の炭窯が2基見つかった。2号窯に続き、6区の横口付炭窯は3号窯、近世の炭窯はそれぞれ4号窯・5号窯と付した。その他の遺構として、上層部では中・近世墓群や土坑、斜面地下の低地部では流路跡も検出した。1号窯～5号窯および4区の遺構・遺物については、第4章に「衣原古窯群」としてまとめて記載した。詳細は次章を参照されたい。



図53 4区近世土坑

4. 5区

炭窯（2号窯）や須恵器窯（1号窯）のあった丘陵の南斜面地は農道を挟んで5区と設定した。平成13年度の確認調査後、本調査は平成14年度に行われた（1,600㎡）。5区はもともと4区と同一丘陵であったと思われるが、後世にその途中を農道で分断されている。丘陵頂部は発掘調査前まで茶畑として利用されていた。5区からは横穴式石室をもつ古墳が1基と、火葬墓9基、礫石経を伴う土坑1基、土坑1基、溝状遺構などを検出した。発見された古墳は藤枝市指定史跡である衣原古墳群のうちの衣原11号墳となった。調査の結果、大型の礫によって構築された石室があった。墳丘は後世の地形の改変によって原形を留めていないが、おそらく円墳であったと思われる。石室は幅約4.2m、残存部分の長さ約6.8mの大型の掘形をもつもので、大型の角礫によって石室を構築している。石室の幅は約1.8m、玄室の残存長は約5mで、一部基底石も抜き取られていたものの、基底石の痕跡から両袖式であると確認できた。石室内床面からは、大刀を始めとした武器、馬具、装身具や刀子、須恵器や土師器などの副葬品が数多く出土した。須恵器の年代から6世紀後半頃の築造、7世紀初頭までの追葬が行われたものと考えられる。衣原11号墳についてはすでに第2章で詳細を述べている。本項では古墳以外の遺構と出土した遺物についての記載をする。

土坑（図55）

丘陵南面の斜面下位で平安時代の土坑1基を検出した。土坑内よりほぼ完形の灰軸陶器が1点出土している。20は完形に復元でき、口径は13.00cm、器高は4.05cm、高台径は6.10cmである。焼成は良好で、ツケガケで施釉される灰軸の発色も良好である。体部内面から外面にかけては自然釉が付着する。底部は糸切りされ、体部は内外面とも横ナデである。見込みはナデである。H72号窯式以降に位置付けられ、11世紀代の所産と考えられる。東遠江産である。器壁はやや厚い。外面は2.5Y7/1.5灰白色、内面は2.5Y7/2.5灰黄色を呈する。このほかにも表土（茶畑の耕作上中）より灰軸陶器片が出土しているほか、この直下で検出した横穴式石室（衣原11号墳）の覆土中よりも完形の灰軸陶器が出土している（414）。この時期に当地でも生活の一部があったことが想定される。

杭列（図56）

火葬遺構群の南東側に柱穴群がある。掘立柱建物跡の柱穴のように並ぶものではなく、ほぼ等間隔に列状に並ぶ。木質の柱状のものが立っていた痕跡が見えることから、櫛列の可能性も考えられる。火葬遺構とはほぼ同年代であろう。

火葬遺構群 SF 1～5、7～10

（図57・58、図版27）

横穴式石室墳と同一丘陵上において近世の火葬遺構群を検出した。土坑は茶毘跡が4基、その他土坑、溝などが近接して検出された。茶毘の痕跡が折り重なるように切り合って検出され、その周辺には焼土や炭化物が広がっていた。同一丘陵上には礫石経（一文字石経）の礫が詰まった土坑1基が見つかった。

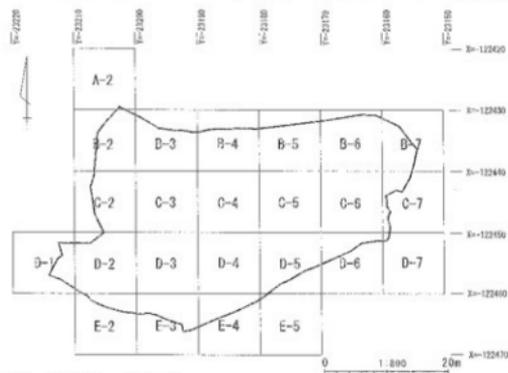


図54 5区グリッド配置図



图55 5区遺構全体図・出土遺物

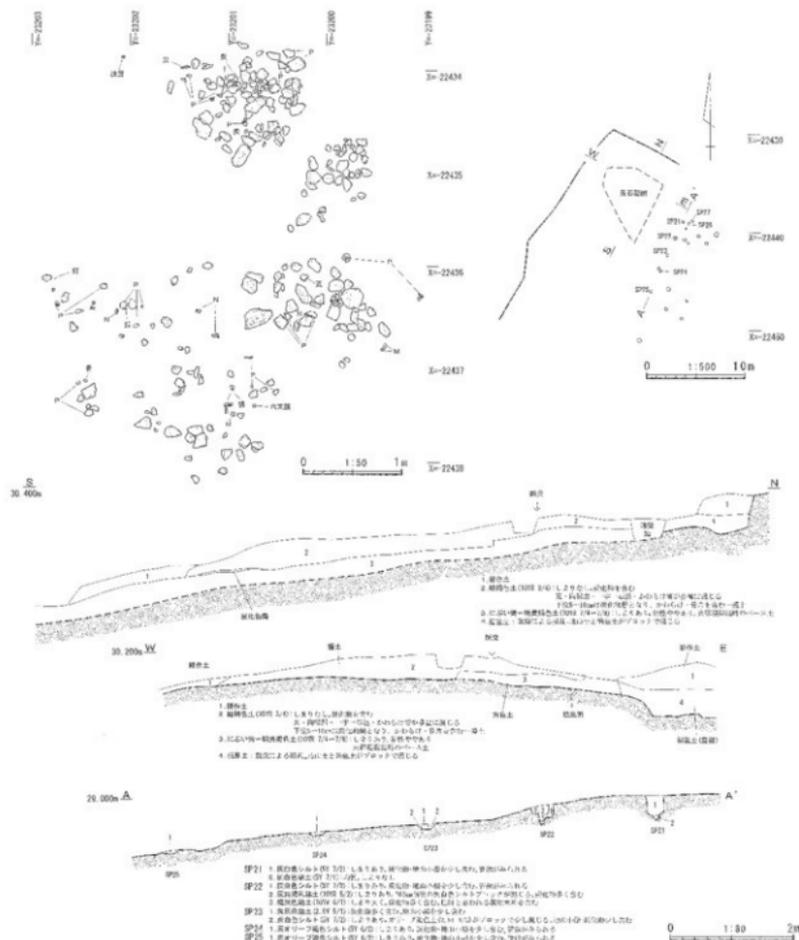


図56 5区集石範囲と土層断面

火葬遺構群からは人骨片やかわらけ、銭貨、煙管、ガラス玉、釘、陶磁器類のほか、用途が不明な金属製品も出土している。

5区西半部の表土は茶畑の耕作土(1層)が厚く堆積していた。かわらけや陶磁器片、礫石経(一字一石経)などを多量に含む2層(暗褐色土層)を除去中に集石の範囲が見られた(図56)が、さらに3層(にぶい黄~明黄褐色土層)を掘り下げると地山層上面近くで火葬遺構群が見つかった。調査区の一部には茶畑の改植による攪乱が入っていたが、北西隅は攪乱を免れて比較的良好に遺構が残っていた。火葬遺構群の北東隅には礫石経が大量に詰まった土坑が見つまっている。礫石経と火葬遺構とに切り合いはなく、覆土もほぼ同じであることから同時期に構築された可能性が高い。これらの年代は出土する

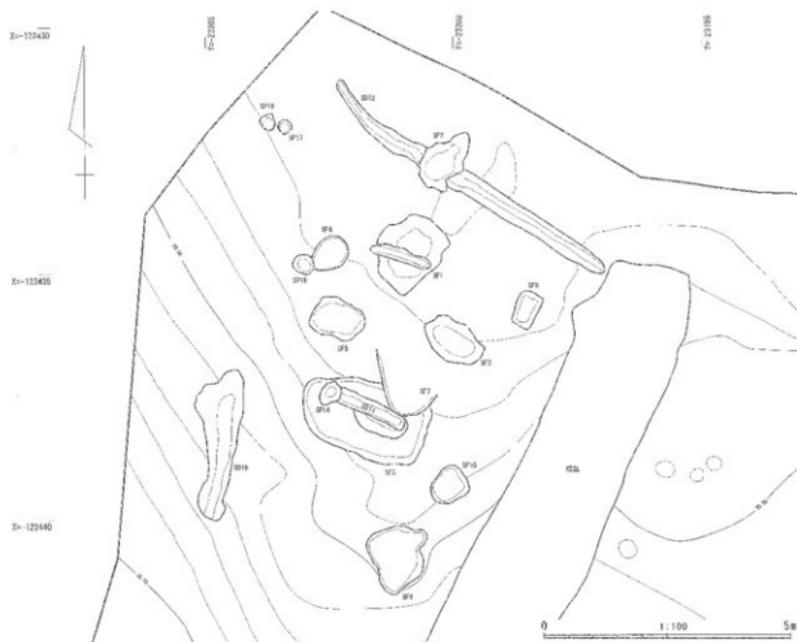


図57 5区火葬遺構群全体図

陶磁器類や銭貨から近世中期～後期と考えられる。

SF1は不定形な浅い皿状を呈する。床面に石列を伴い、茶毘を行った際の炭化物が多量に残っていた。遺存状態は非常によい。床面の石列は木棺を据え置いた棺座であろう。棺座に使われた礫は自然の川原石で、15～18cm大の角礫である。石列の面は30cm程あるが、その隙間に5～10cm強の川原石が敷き詰められたように並べられていた。炭化物は木棺または燃焼材であろう。検出状況から板を釘で打ち付けて作られた木棺と思われる。棺座と思われる礫の間隔から見て、木棺の大きさは長さ100～110cm、幅45cm程であったと推定される。床面下には溝跡を検出した。溝跡には礫や遺物は混入していないが炭化物が多量に入っている。溝の役割については排水や空気層を作るためなどの目的が考えられるが正確な用途は不明である。SF1からは骨片、かわらけ6片(275・276)、陶磁器片ほか15、釘33(294～324)、用途不明金属製品1(325) 煙管1(326)、火打金1(327)、銭貨1(328)が出土した。このほかにガラス小玉が1～2個体分(329)出土している。

SF2も不定形な浅い火葬遺構である。SD12と切り合っているがSF2の方が新しい。底面には19箇所の杭状の穴を検出したが、その目的用途は不明である。炭化物、かわらけが12片(277～279)、磁器片が2点出土している。

SF3はやや不正形な楕円形の火葬遺構である。覆土中の遺物出土位置に規則性はない。図中の網掛けは被熱・焼土の範囲であるが、遺構中央部分は「焼却→攪乱(収骨?)→投棄」という火葬一連の行為のため焼土が攪乱を受けている。攪乱を受けなかった範囲だけ焼土が残ったと考えられる。礫や遺物についても同様に攪乱行為を受けて元の位置を留めてはいないと思われる。SF3からは骨、シジミ集積、

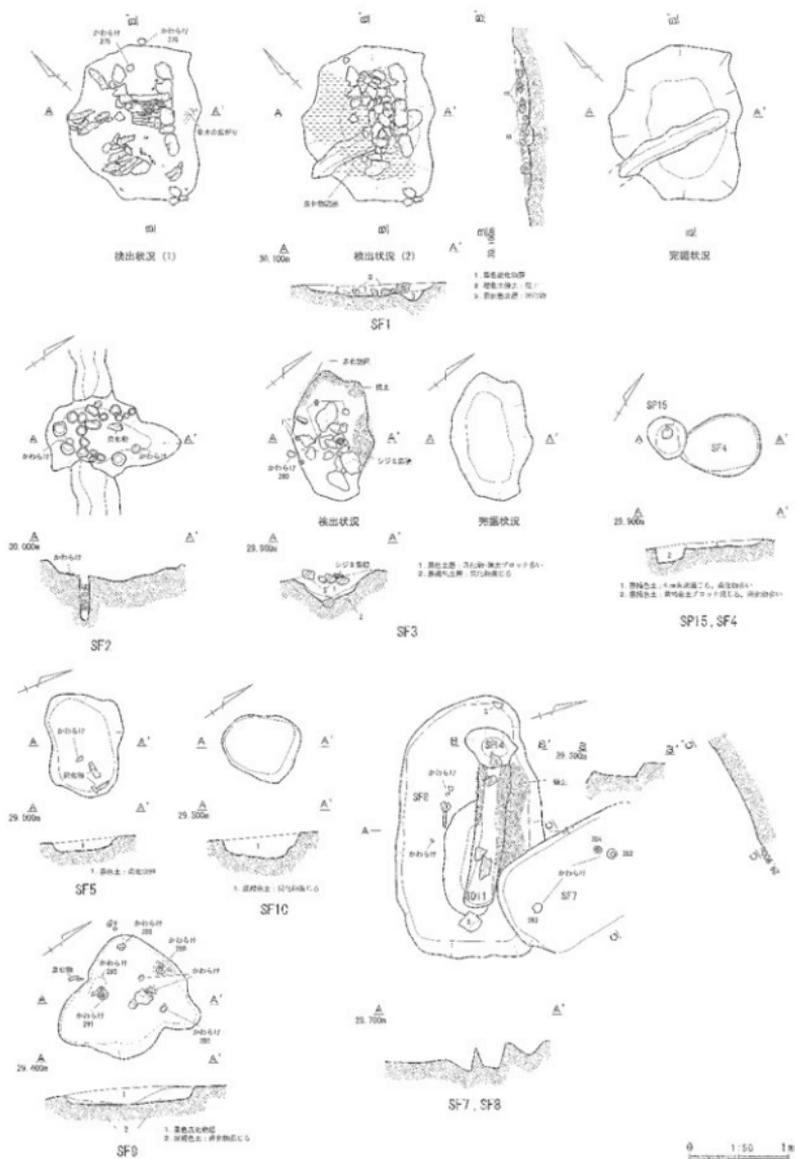


図58 5区火輝遺標 SF1~5・7~10, SP14・15

かわらけ7片(280)、近世陶磁器7片、釘9(330~338)、銭貨7(339~343)、煙管(雁首)1(344)が出土した。

SF4は浅い楕円形を呈する。南西隅をSP15と切り合っている。礫はなく被熱部分もないが、覆土は炭化物を多く含む。覆土からはかわらけ片5、須恵器の破片1が出土している。

SF5はやや不定形な浅い楕円形の土坑である。覆土中に礫はなく被熱もしていないが炭化物を多く含む。遺構内では炭化物、かわらけ片8(281)、陶磁器、須恵器の破片1、銭貨2(350)が出土した。銭貨は銅銭と鉄銭が熱により癒着している。

SF7は浅い隅丸の長方形を呈する土坑である。北東方向のプランが不明瞭になっている。被熱は見られない。南西隅がSF8と切り合っている。新旧関係ではSF7の方が新しい。遺構内覆土からはほぼ完形のかわらけが3点(282~284)出土した。

SF8は長楕円形の火葬遺構である。北東隅をSF7と切り合い、遺構内では中央長軸方向にSD11、SD11の西端にSP14が切り合っている。SD11の掘形上部(総掛け)は高く盛り上がり、被熱のため赤化している。SD11の両端には15~20cm大の被熱した跡が据え置かれている。溝や穴の用途は不明だが遺構の長軸方向に平行していることから、あるいはこの位置に木棺を据えたかもしれない。SF8覆土内からは炭化材、かわらけ片9(285・286)、須恵器破片1、釘4(345~348)がある。SD11からは、かわらけ片5、陶磁器片2、銭貨5(351)、釘4(352~355)、SP14からはかわらけ片5(287・286)、釘1(356)が出土した。

SF9は不定形な浅い土坑である。覆土には炭化物が多量に混じる。床面のほぼ中央に礫があるほかはかわらけ片5(289~293)が散らばっていた。遺構の掘形外の際から鉄製の鎌が1点(349)出土している。

SF10は円形に近い土坑である。被熱していないが覆土には炭化物を多く含む。出土遺物はかわらけ片が1点のみである。

礫石経(一字一石経)(図59~63・76・77、図版27-4)

横穴式石室墳と同一丘陵上において礫石経(一字一石経)を埋納した土坑1基を検出した(SF6)。埋納坑の大きさは長軸が0.8m、短軸は約0.47m、深さ0.26m程で、隅丸の長方形である。埋納坑内には小型の扁平な石に墨で一字を書いた礫石経(一字一石経)が詰まっていた。確認調査時に同様の礫石経が5m程北側の攪乱土中から多量に採集されている。こちらの遺構自体はおそらく破壊されてしまったであろうが、周辺部に複数の礫石経が存在したものと推定される。

SF6は火葬(茶毘)跡と近接している。しかし火葬(茶毘)跡の遺構とは切り合っていない。火葬遺構とともに遺構の上には表土(茶畑耕作土)が堆積していたが、礫石経埋納坑の覆土には炭化物は混入していない。火葬遺構(茶毘跡)群の遺構の覆土と同一であることから、ほぼ同時期の遺構の可能性がある。

SF6から出土した遺物は2~4cm大の扁平な石に経文を墨書した礫石経のみである(図59~63)。

総数は25,922個あり、のうち肉眼観察の結果、文字があるものは4,041個であった。さらにこのうち文字の判別が可能なものは2,137個、文字の判別が不可能だったものは1,904個であった。SF6から出土した礫石経は4,201個ある。このうち墨書があるのは2,764個である。文字判別が可能な礫は1,474個、文字判別が不可能だった礫は1,230個である。埋納坑から出土した礫すべてに写経している訳ではなく、写経していない例はいくつかあり、特殊なことではないようである。文字がある4,041個の礫石経のうち、多字のものは1個(21)、表裏に文字のあるものは1個(112)のみである。またすべて墨書であった。

経文は「法華経」である。文字集計の結果、出土した礫石経は一經典分だけというわけではないようである。文字の種類とその数の集計結果については、巻末の表24にある。

本報告書ですべての図化は困難であったため、文字のある礫石経のなかからSP6出土分200個、包含層出土分100個、計300個を抽出・図化し掲載した(21~274、546~620)。個別の判読文字や計測値は巻末の観察表一覧に掲載している(表23)。抽出に際しては①文字の種類ごとに1点ずつ、②同種の場合は筆跡の異なるもの、③多字のもの、④表裏に墨書のあるもの、などを基準とした。

実測した文字の判読できる礫石経のうち、任意に20点を抽出し、石材同定を実施した(註3)。石材は「粘板岩」、「砂質粘板岩」、「珪質粘板岩」、「チャート」、「中粒砂岩」、「細粒砂岩」、「凝灰質細粒砂岩」、「粗粒砂岩」などであった。色調は「黒色」から「黒褐色」、「暗灰色」、「灰色」、「淡灰色」、「灰オリーブ色」が多く見られた。使われている石は、伊藤通玄氏(静岡大学名誉教授)の同定によれば「河川礫」ではなく「海浜礫」であるという結果であった。丸い小型の扁平礫は、河川流域ではここまでの形状にはならず、河川の河口近くや海浜などで採集できる。採集地は遠州灘海岸である可能性が高く、地理的に近い焼津浜や安倍川河口では採集が難しいということである。全体に黒色粘板岩が多いと思われたが、文字が判読できる礫石経は、むしろ灰白色の粘板岩のほうが多い。これは墨書する目的があるため、意図的に墨書が目立つ灰白色の礫を選択しているという可能性がある。

今回の調査では経碑などは出土していないが、近くの長慶寺(註4)の境内にこの遺構の近くから移したといわれる石碑(万霊の碑?)がある。茶畑の農道を敷設した際に移動し、同寺に預けられたと聞く。地元の話からも、周辺に複数基、同様な遺構が存在したものと推定される。地域の聞き取りによると、「昔、ほかから礫石をこの場所に移してきた」ともいわれている。以前はお遍路さんの通り道(註5、廃絶した街道?)であり、茶店もあったという。また、葉もあり、藪道もあった(衣原古窯群の近辺)ようである。以上のことから考えると、埋納坑は必ずしも火葬遺構と同時期に存在したとはいえないようである。

火葬遺構群と礫石経について

今回調査で検出した火葬遺構群と礫石経の関係について、若干の考察を加えたい。

火葬遺構群は複数基存在するが重複関係は見られない。低い丘陵頂部の比較的狭い範囲に一群をなしていることから、村墓というよりは一族一統の墓地であった可能性が考えられる。土葬が一般的であった近世の時代に火葬するということは「寧ろ供養である。茶毘は基本的に1箇所につき1回行われるものである。本来は石碑があったものと思われるが、明治期に入ると新しい墓地へ移動するため、葉標だけが持って行かれ、茶毘跡だけが残ったのであろう。茶毘後は収骨するため、攪乱を受けたような跡が残る。

これらの火葬遺構群の時期の決め手になるものは陶磁器と銭貨である。遺構や包含層から出土した銭貨は古寛永から文銭、新寛永も存在する。1点だけ「熙寧元寶」(波来銭)が発見されている。文字と銭の大きさは本銭としてもいいが、火を受けていて本銭か模倣銭かは断定できない。火葬遺構出土の銭貨は、新寛永と古寛永の組み合わせや、銅銭と鉄銭が密着しているものもある。以上の銭貨から見て火葬遺構の年代は、17世紀後半から19世紀まで下る。特に鉄銭との組み合わせは18世紀後半から19世紀の年代に至る。火を受けている銭貨は「茶毘銭」、火を受けていない銭は「供養銭」と思われる。

周辺で大量に出土した礫石経は墓の供養のためのものであろう。礫石経の書き手は血縁と考えられることから、一族の何人かが書き手であったのであろう。使用された礫が海辺で採集される海浜礫であったことは先述したが、「勸進僧(勤める人)」が遠州灘の海浜礫を拾える地域の人であったかもしれない。調査区内から出土した陶磁器類には志戸呂焼の短頸壺などがある。骨壺として使われていた可能性もある。陶磁器も銭貨とはほぼ同じ年代である。

礫石経は中世の頃から一般化(民衆化)してきた背景がある。近世に盛行するようで、特に後半期に各地で類似例が増える。藤枝市内では今のところ礫石経の事例はほかにない(註6)。

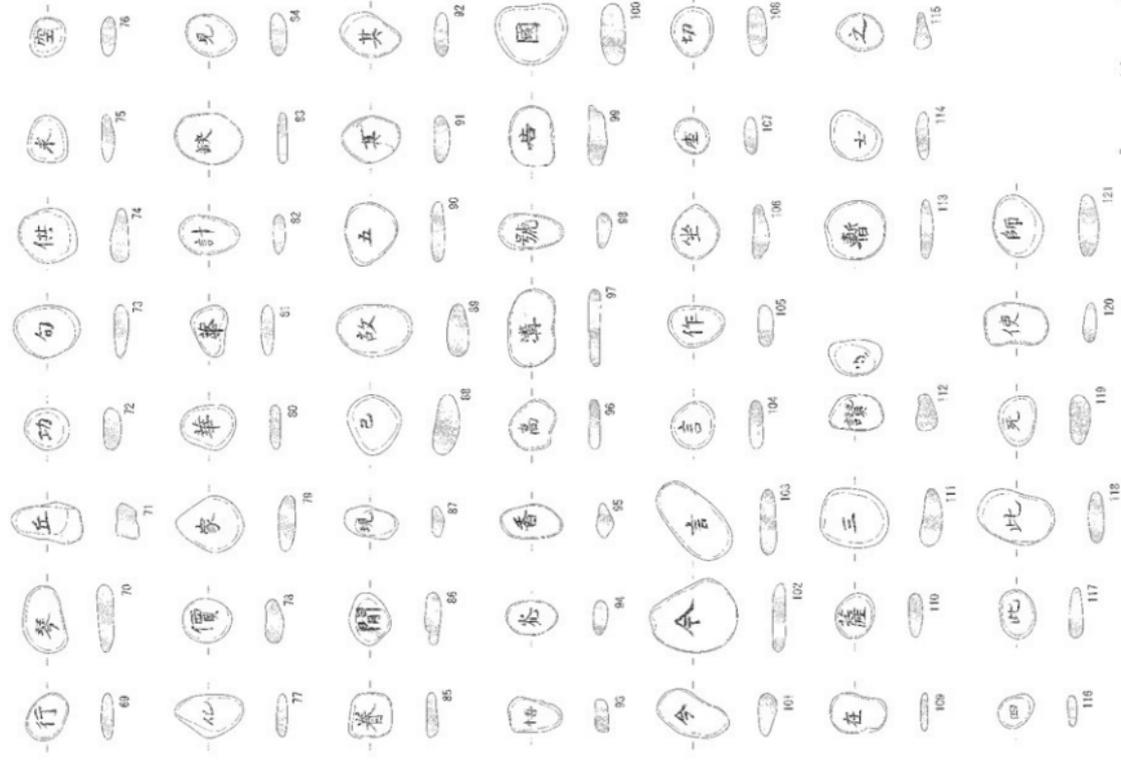
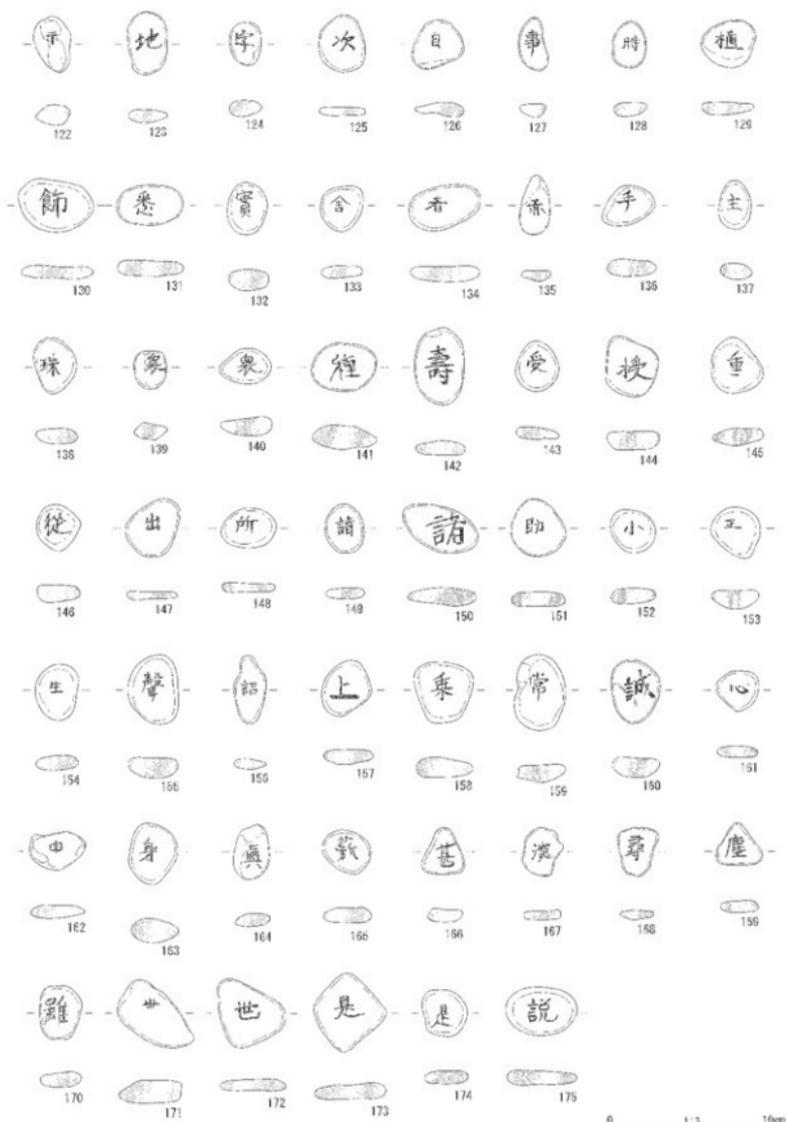


圖 60 5 區火葬遺跡 SF6 出土碑石銘 2



0 1:3 10cm

图61 5区火葬遺構 SF6 出土殘石 3



图62 5区火葬遺物 SF6 出土礎石經 4

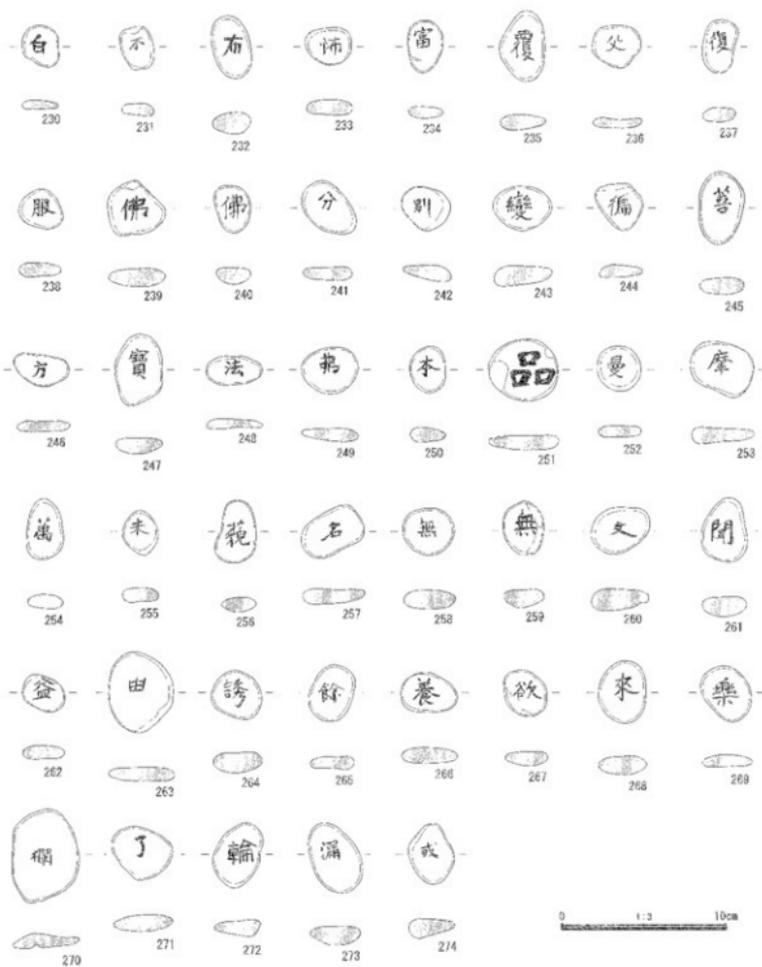


圖63 5区火葬遺構 SF8 出土礎石繸 5

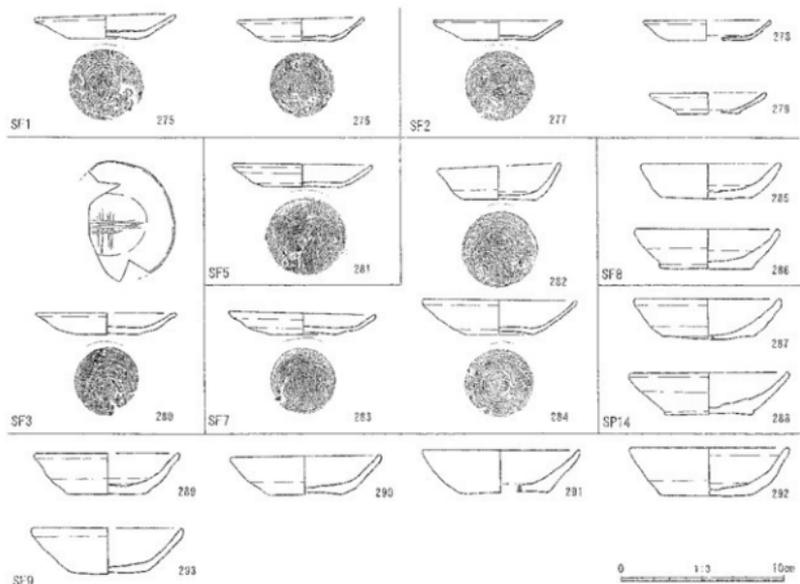


図64 5区火葬遺構群出土遺物

火葬遺構群出土遺物について

275～293は火葬遺構より出土したかわらけである。SF1出土のかわらけ6個体のうち275・276はほぼ完形である。280は内面の底にへら状工具による沈線が十字状に刻まれている。胎土もやや赤味が強い褐色である。SF14は火葬遺構SF8の中にある同じ副葬品の一部として考えられる。SF1～SF7のかわらけは口唇部が外側に開き非常に薄手の作りであるが、SF8～SF9のかわらけは口径がやや小振りで厚手のものである。内・外面に煤が付着し黒ずんでいる、あるいは表面が摩滅して剥離しているものもあることから、茶毘に付された木棺内に副葬され被熱しているのであろう。遺構内にはかわらけの破片もかなり含まれていたことから1箇所に4個体以上のかわらけが副葬されていたと思われる。

294～328はSF1より出土した金属製品である。294～324は茶毘に付された木棺に伴う釘である。SF1-4出土の釘は3cm弱のものが7本、4cm前後が9本ある。SF1では3cm前後が13本、4cm強が3本ある。322は釘2本が癒着している。324は木片が付着している。325は用途不明の鉄製品である。鉄の薄板の上部を環状にして二つ折りにしている。下部の先端は尖っている。326は煙管の雁首片である。327は火打金。328は寛永通寶（古寛永）である。古寛永の鑄造年代は1636～1659年であることから、火葬遺構SF1は17世紀中～後半以降の年代と考えられる。329はコバルトブルーの小玉である。径は0.57cm、高さは0.53cm、孔径は0.14～0.16cm、重量は0.051g程ある。もう1点は破損して小破片多数であるが、透明のガラス小玉1個体分であったと思われる。325～329は茶毘に付される際、木棺内に副葬されたものであろう。

330～344はSF3より出土した。釘（330～338）は3cm強と4cm前後の釘が混在している。339～343は鉄銘が見えるものはすべて寛永通寶である。341は4枚癒着しているが、合計8枚が出土した。かなり被熱していることから茶毘銭と思われる。寛永通寶には文銭と新寛永が混じっていることから、年代

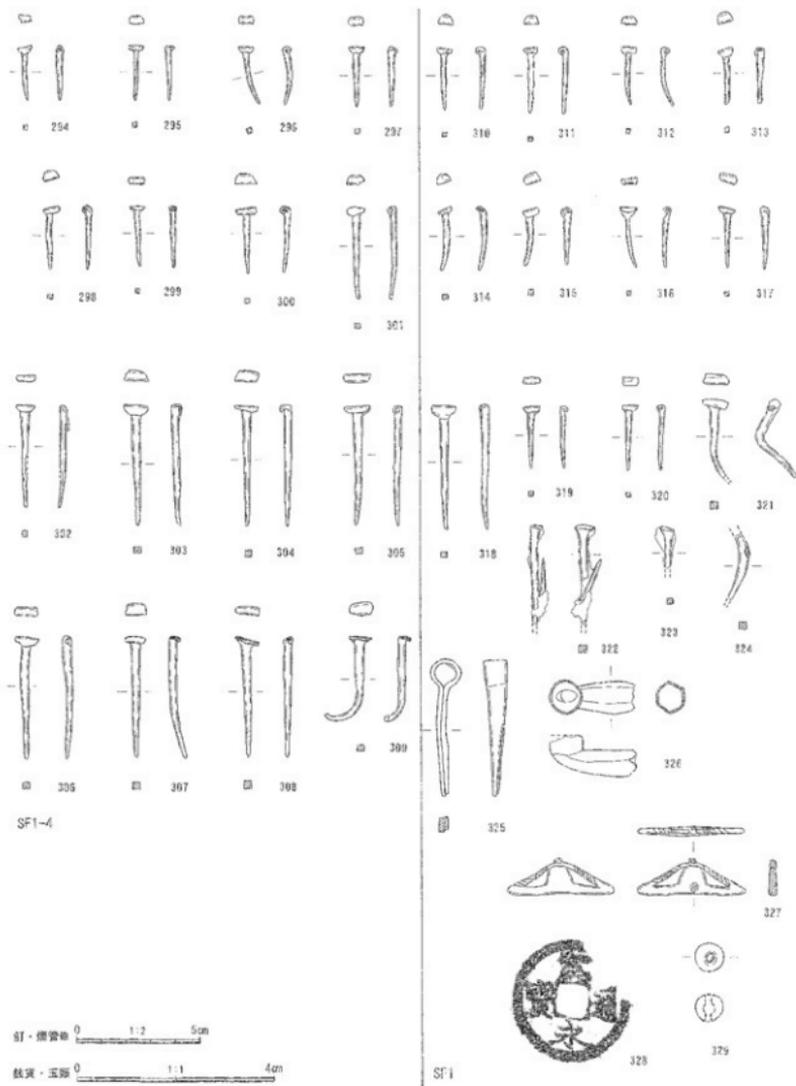


図65 5区火葬遺構 SF1-4・SF1 出土遺物

は18世紀以降であろう。このほかに煙管の雁首(344)も出土している。345は不明鉄製品である。全体に木質が残る。346~348はSF8から出土した釘である。346も釘全体に木質が残り、347はさらに炭化物が付着している。SF9では鉄製の鎌が1点出土している(349)。350はSF5から出土した銭貨である。

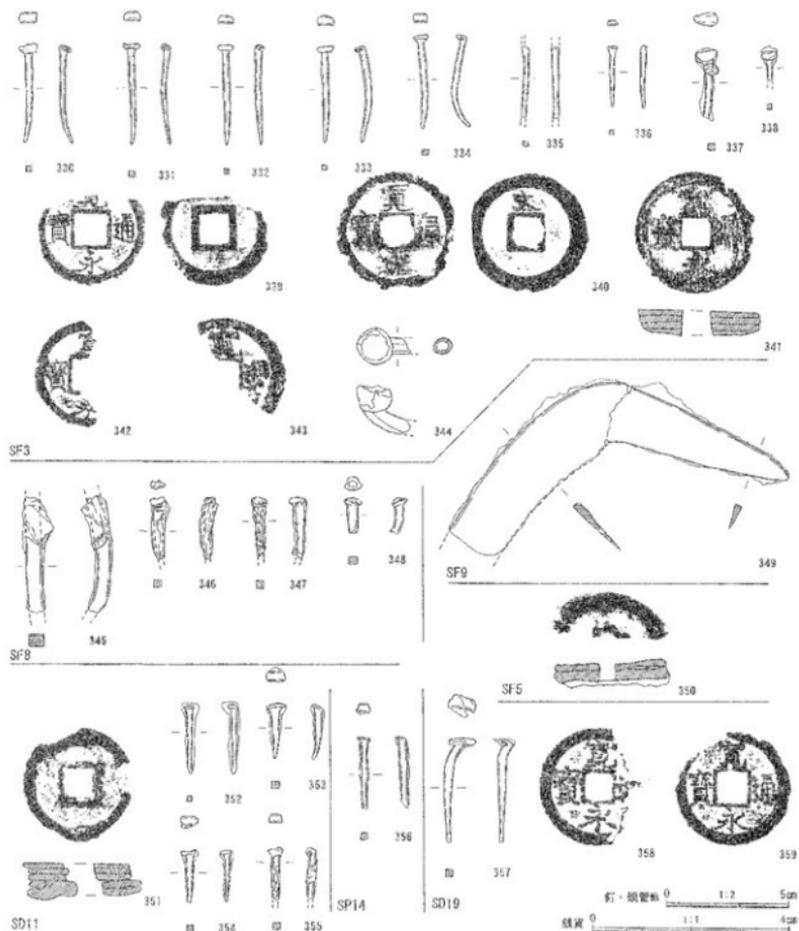


図66 5区火葬遺構 SF3~8 他出土遺物

銅銭と鉄銭が2枚癒着している。鉄銭が混入していることからSF5の年代は18世紀後半~19世紀に位置付けられる。351~355はSD11より出土した。SD11は火葬遺構SF8の内にある溝状遺構である。銭貨5枚が熱によって癒着している。銭文は癒着側にあるため見えないが、これも茶毘銭であろう。釘(352~355)は2cm強のものが4本出土している。SP14からも釘(356)が出土しているがこれもSF8の中にあるため、345~356はSF8の木棺材と副葬品と考えてもよいであろう。357~359はSD19より出土した金属製品である。357は4cm前後の釘である。残存状態は極めて良い。このほかに寛永通寶が2枚出土している。358は古寛永、359は新寛永に属するものと思われる。銭貨の年代から時期は17世紀後半から18世紀の年代であろう。

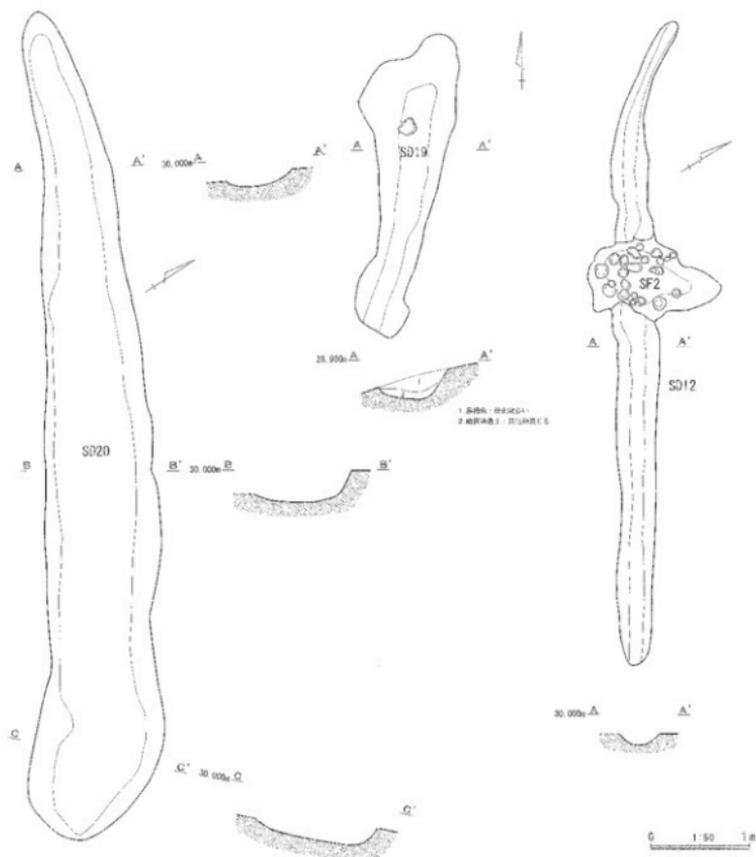


図67 5区溝状遺構

溝状遺構 SD12・SD19・SD20 (図67)

火葬遺構群周囲に溝状遺構3本を検出した。SD19は火葬遺構群の西端、SD12とSD20はほぼ並行して群の北縁を走っている。墓域群の区画であるためか、あるいは排水機能をもたせたものか、溝状遺構の性格は不明である。SD12は火葬遺構群の北端にあり中央に火葬遺構SF2が切り合っている。覆土に須恵器の高坏脚部片が含まれていた。隣接する1号窯から流れ込んだ可能性がある。遺構の新旧関係はSD12の方が古い可能性がある。SD19は丘陵の西端斜面で検出した。火葬遺構群より西側に位置する。形状は不定形で斜面上部では1m幅であるが南側は0.5m程に狭まり斜面下へ落ち込む。覆土は炭化物が多く混じる。遺構覆土より釘1点(357)、銭貨2枚(358・359)が出土している。時期が特定できる遺物がないものの、覆土の状況から火葬遺構群とはほぼ同時期の遺構と考えられる。SD20は火葬遺構群の北側にある浅い溝状を呈する遺構である。遺物は伴っていないがほとんど同様であろう。

衣原遺跡出土の土器について

調査によって採集された土器は全体でポリコンテナ111箱分に当たり、その量は決して少なくはないが、多くは破片であり、全体の器形を知ることのできるものは少ない。出土した土器の年代幅が広いことから理解できるように、遺跡は長い間、様々な用途に使われている。したがって、遺構の遺存状態は良くなく、遺構からまとまって出土した土器も多くはなかった。

出土した土器には須恵器・土師器・灰釉陶器などがあるが、最も多いのは須恵器である。遺物は各時代に及んでいるが、多くは包含層からの出土であり、小破片に砕かれているものが多く、全体をうかがうことのできる資料は多くはなかった。各調査区から年代幅の広い土器群が出土するが、各調査区での中心となる時期は、それぞれ多少の差があるようである。

丘陵の稜線に近い平坦部に位置する7区・9区からは弥生土器・土師器の出土が見られるが、出土量は比較的少ない。丘陵の西側斜面に当たる6・8・10区からは奈良時代の須恵器あるいは灰釉陶器が多く出土する。また、5区には衣原11号墳および近世の墓地在り、墓坑および墓域全域から近世のかわらけ・銭貨などが数多く出土している。

以下、出土した土器の概要を簡単に説明しよう。

出土した土器には古墳時代の須恵器・土師器、奈良時代の須恵器・土師器、平安時代の須恵器・灰釉陶器・土師器、中世から近世にわたる施釉陶器などがある。これらを大きく古代の土器、中・近世の土器と分けて検討をする。

古代の土器は、先に述べたように、多くは小破片で、遺構からまとまって出土したものも少ないので、遺物の時期区分も細分することを控え、坯類を中心に、1群：古墳時代の土器、2群：奈良時代前期の土器、3群：奈良時代中期から後期の土器、4群：平安時代初頭の土器、5群：平安時代中期の土器とし、中世・近世の陶器をすべて6群と、大きく6つに分けておこう。

5群とした土器群の終わりを灰釉陶器の消滅の時期にしている。5群とした灰釉陶器は猿投竈編年の折戸53号窯式・東山72号窯式・百代寺窯式に併行する、いわゆる「第5段階」の灰釉陶器（楳崎 1983）である。この段階には東遠江を含めて各地域でも灰釉陶器の生産を開始しており、省力化、雑器化ともいべき猿投窯での灰釉陶器生産の大きな流れには沿っているが、細部では必ずしもそれとは一致していない部分があり、各地域での灰釉陶器の編年の整備が求められている時期である。衣原遺跡出土の灰釉陶器にも施釉方法、器形、高台の形等かなりの差があり、細分が可能であるが、各生産地での分類の詳細が必ずしも明らかになっていないこともあり、ここではすべて大きく5群としてひとまとめにしておくことにした。

以下、それらを概観してみよう。

1群土器 古墳時代の土器である。なかには古墳時代前期の土師器があるが、量的には多いものではない。一部には弥生土器も含まれているが、ここでは一括しておく。

1群土器の大半は古墳時代後期の須恵器と土師器であるが、それらの多くは遠江の須恵器編年Ⅲ末からⅣ前半にかけてのものである。この段階には入野高岸古窯群に見られるように、在地でも須恵器生産が始まっており、衣原遺跡出土の土器も胎土・焼成などに差のあるものが含まれているが、外見上での生産地の識別はまだ明らかになっていない。総体的には湖西古窯群から供給された須恵器が多い。

2群土器 奈良時代前期の土器には須恵器・土師器があるが、坯類は須恵器の出土量が大半を占め、土師器は甕類が中心で坯はごくわずかに認められるだけである。

須恵器の坯身を観察すると、多くは「付け高台」で、胎土に砂粒を多く含むこと、あるいは明灰色の色調などから、湖西古窯群から供給されたと考えられるものが認められる。この段階には、すでに志太平野でも須恵器生産が始められているが、形態は良く似ており、製品によって両者を区別することは難

しい。坏には高台をもった有蓋の坏と無高台の坏とがある。

土師器の量は多くはないが甕のほかには坏がある。底部が平坦で、体部が垂直に立ち上がる比較的大型の坏がある。この手の土器は内面に丹を染めている場合が多い。甕が出土しているが、口縁部の特徴から3つに分けられる。①は外側にくの字に大きく屈曲し、胴部が張ったもの、②は強く張った胴部にヘラ磨きを施した甕、③は口縁が横に大きく開いた長胴の甕である。②は駿河東部に広がる「駿東甕」であり、③は遠江以西の地方に分布の中心をもったいわば遠江型の甕で、①がこの地域の甕であろう。当然のことながら①が中心で②・③の量は少なく、客体的な存在である。

3群土器 助宗古窯で本格的に須恵器生産が始まった奈良時代中葉から後葉の土器である。坏身の成形・高台の形などから細分がされているが、ここでは資料に小破片が多いこともあり、細分をしないでまとめて3群としておく。この段階には坏は有蓋・無蓋の両者があり、口径によってそれぞれ大・中・小に分けられる。

土師器には体部が垂直に立ち上がり、口縁付近を横ナデした「箱形の坏」がある。

4群土器 削り出しの高台をもった坏に代表される段階で、つまみをもたないで、頂部にヘラ削りをした蓋が伴う。助宗古窯群での須恵器生産の最終段階に当たるもので、やはり口径から大・中・小の3者に分けられる。またこの期にも無高台の箱坏が含まれている。静岡平野の内荒遺跡で見られるように猿投窯編年のK14号窯式あるいはK90号窯式などの古手の灰軸陶器（猿投窯の第5段階）と伴出する例（山田 1988）が多いが、衣原遺跡からはこの手の灰軸陶器は出土していないらしい。

5群土器 猿投窯編年の折戸53号窯式およびそれ以後の東山72号窯式あるいは百代寺窯式に併行する灰軸陶器である。この段階には浜北古窯群、清ヶ谷古窯群、旗指古窯群など東遠江を含めて遠江各地域で灰軸陶器の生産が行われており、助宗古窯群でも灰軸陶器の生産が行われているらしい。豊橋の二川古窯とよく似た様相を示している浜北古窯はともかく、それ以外の窯場での製品は今のところ識別がされていない。また、各古窯群での形態変化も十分明らかになっていないので、ここではかつて楢崎彰一氏が述べたように「第6段階」の灰軸陶器としてひとまとめにしておきたいと思う。この時期の土師器は今ひとつ明らかになっていない。

6群土器 いわゆる山茶碗とそれ以降の段階である。この段階には全面に施釉をした中世陶器あるいは近世の陶器が含まれている。一部に竜泉窯に代表される青磁、あるいは白磁等の輸入陶磁も含まれている。かわらけなどの土師器系の土器もある。

6群に分けた衣原遺跡出土の土器の概要を簡単に触れてきたが、以下、各調査区ごとに出土した土器を説明しよう。最初に各区とも遺構から出土した土器を見ることで、遺構の年代を整理し、それに続いて包含層の土器について触れることにする。

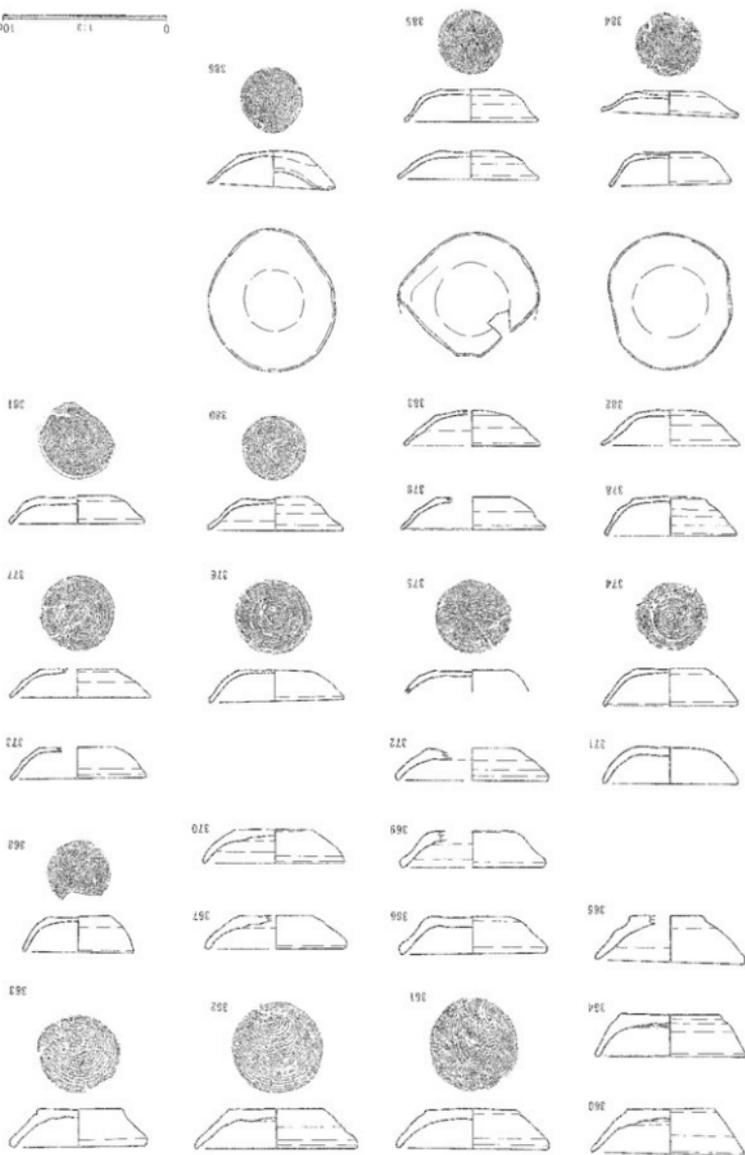
5区包含層出土の遺物（図68～77）

この区では火葬墓群が営まれていたこともあって、近世の土器が多く、古代の土器の出土は多くはない。一部分を図70上段に示した程度である。

360～412は火葬遺構群上層から出土したかわらけである。本来火葬墓に伴っていたものであろう。当初、集石と思われた範囲の炭化物層より出土した。かわらけの大半は地元で焼かれたものと考えてよいだろうが、これまでに近隣でかわらけの焼かれた窯跡の存在は明らかになっていない。かわらけの用途は火葬墓への副葬もしくは供養のため置かれたと考えられる。

413・414は高台のある碗であるが、前者は底部に糸切り痕を残している。口径は比較的小さく、釉の発色も見えない。後者は11号墳の石室の覆土から出土したものである。いずれも5群の土器である。

415に示したものは高台も高く比較的小さい。坏の部分も胴部が外に張って、器高も高い深碗のタイプである。口縁部にツケガケによる施釉をしているが、釉の発色は悪く、わずかに釉の流れた跡が観察で



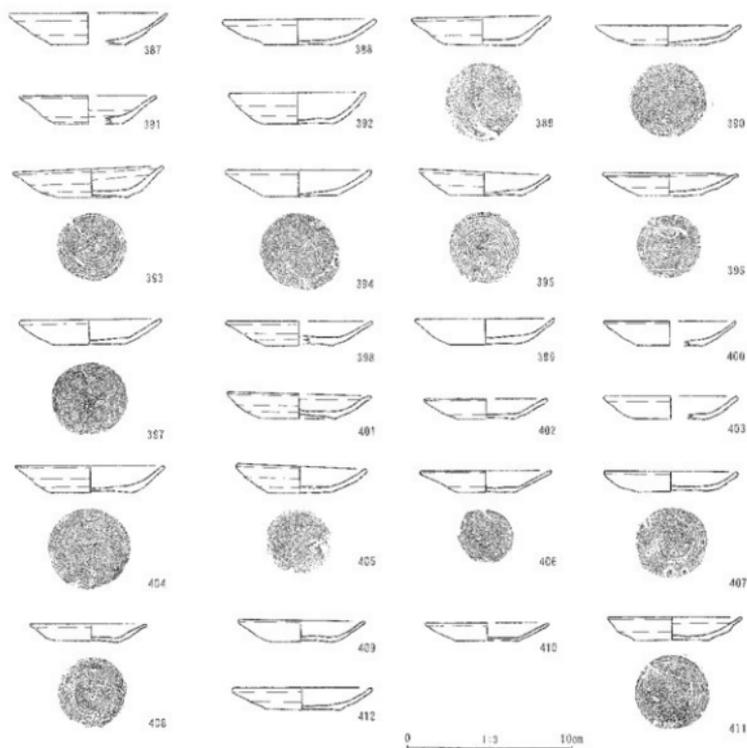


図69 5区包含層出土遺物 2

きる。見込みには重ね焼きのあとが見える。降灰による自然の釉がわずかに発色している。胎土には鉄分が多いらしく、黒い吹き出しが多い。5群とした東山72号様式段階の灰軸陶器であるが、遠江産の灰軸陶器であろう。

416～438は近世陶磁器である。416は土瓶、注口部分は良く残っている。19世紀代の所産と思われる。417～419は天目茶碗である。墓地で見られるのは珍しいがこれも供養品であった可能性がある。419はC-5区斜面から出土した天目茶碗である。口縁部から体部下半の約1/4が残存した。焼成は良好で、釉の発色も良好である。瀬戸・美濃産で、口径は11.6cmと推定され、残存高は5.6cmである。大窯Ⅲ期であろうか。420は志戸呂焼の丸碗である。第四期（17世紀前半～18世紀初頭）に属する（註7）。421は志戸呂焼の壺で、火葬遺構群の上面にあたる泉石範囲より出土した。蔵骨器として使われていた可能性がある。422は19世紀代の志戸呂焼小皿。423は瀬戸焼の壺蓋で、18世紀末～19世紀半ば（登窯Ⅷ～Ⅺ期）の年代であると思われる。424は乗燧。425は酒海壺（酒会壺）の蓋の破片である。盛土層中より出土した。青磁（貿易陶磁器）で、輸入当初は酒壺として使われていたものであるが、鎌倉時代には骨壺や調度品（飾り物）として使われていた。室町時代に入ると完全に調度品化している。滅多に出土しないため、類似例が非常に少ない。類似資料としては宮里城等からの出土品がある。これらの調度品を所有す

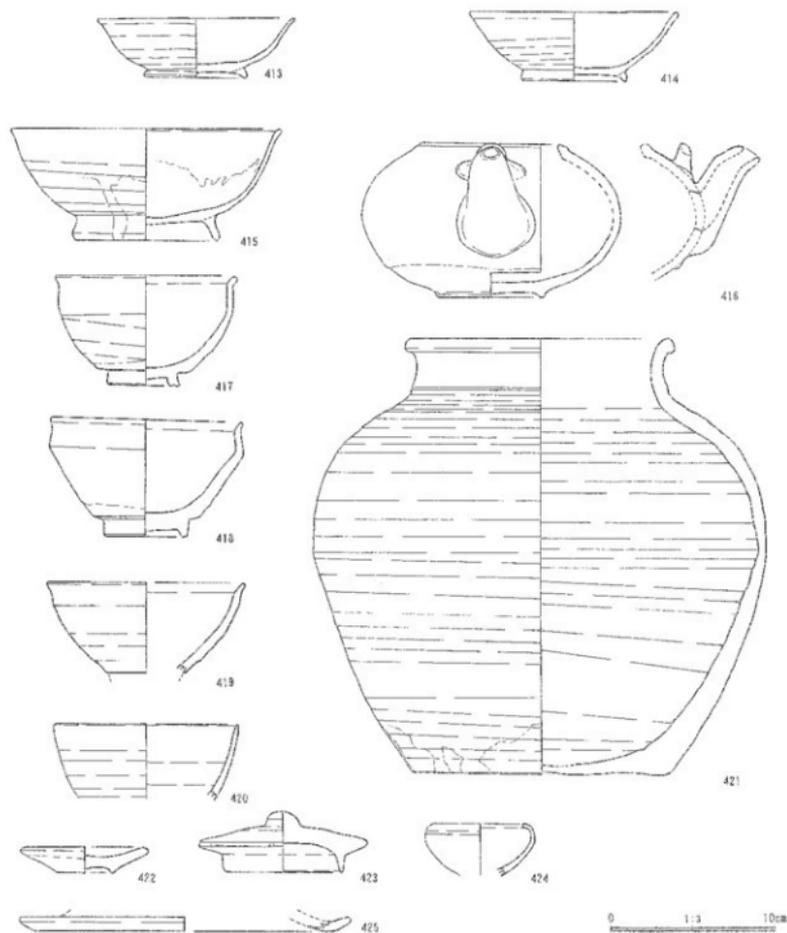


図70 5区包含層出土遺物 3

るのは、ある程度の身分をもつそれ相当の人物であった可能性がある。426は美濃焼の片口鉢、登窯8・9（18世紀末～19世紀初頭）期の時期である。427は志戸呂焼の片口鉢である。第IV期の時期に属するものであろうか。428は同じく志戸呂焼の徳利。429～432は搦鉢。429は底部で登窯8～11期。430は底部片で大窯I～III期。431は口縁部片で大窯I期。432は胴部片で16世紀後半（大窯IV期後半）のものであろう。これらは混入品と考えられる。433は瀬戸美濃焼の広東碗、19世紀半ば以降の時期である（登窯10期）。434は瀬戸焼丸碗で、火葬墓群上層より出土した。435は瀬戸焼の磁器で端反碗。唐草文の染め付けが施されている。436は瀬戸美濃焼の磁器で端反碗。いずれも19世紀半ばの製品である。437は瀬戸焼の石皿で、内碗面には笹葉状の染め付けがある。438は瀬戸焼の徳利、19世紀半ばのものであろう。

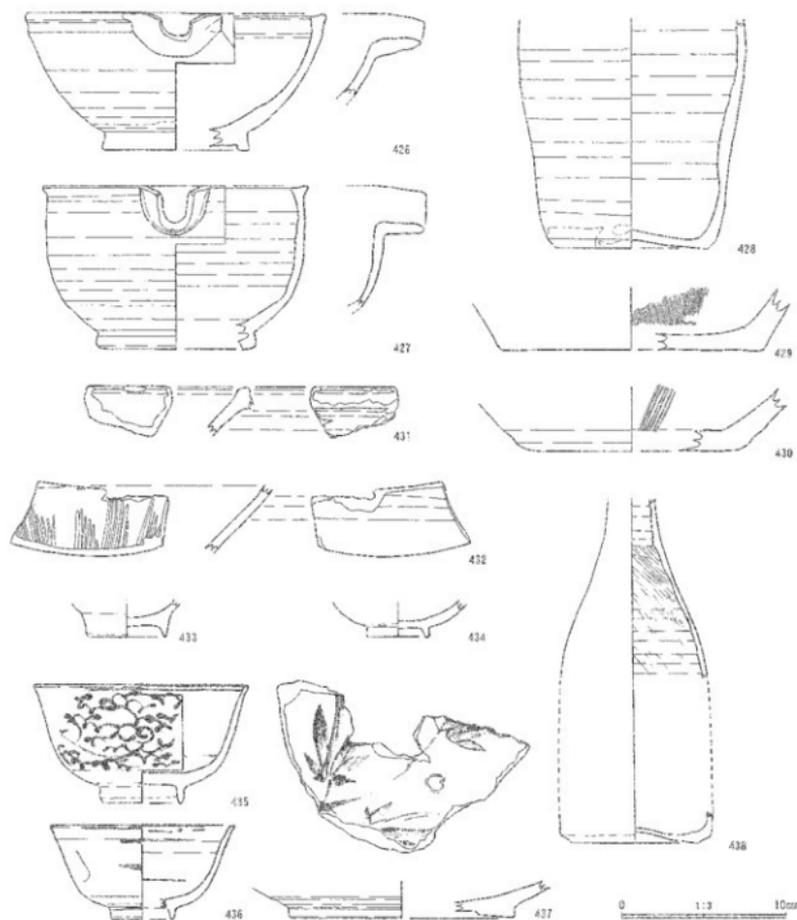


図71 5区包含層出土遺物4

近世の火葬墓から出土した陶磁器としては、様々な種類が存在する。時期幅としては17世紀後半～幕末にかけてのものがあるが、これは火葬遺構群から出土した銭貨の年代ともほぼ一致する。かわらけと同様に副葬されたものか、あるいは墓の供養品として使われたものであろう。

439～472は包含層より出土した釘である。火葬遺構群の上層より出土していることから、茶毘に付された木棺に付属するものだろう。釘の頭部は扁平に敲き潰して折り曲げ、下端部は尖らせてある。釘の断面形は0.2～0.3cmの角柱状を呈し、完存するものの長さは3cm強の長さをもつもの、または4cm強の長さのものが多い。

473・474は長い板状の金属製品である。473は孔に針金状のものが通してあることから極めて新しい

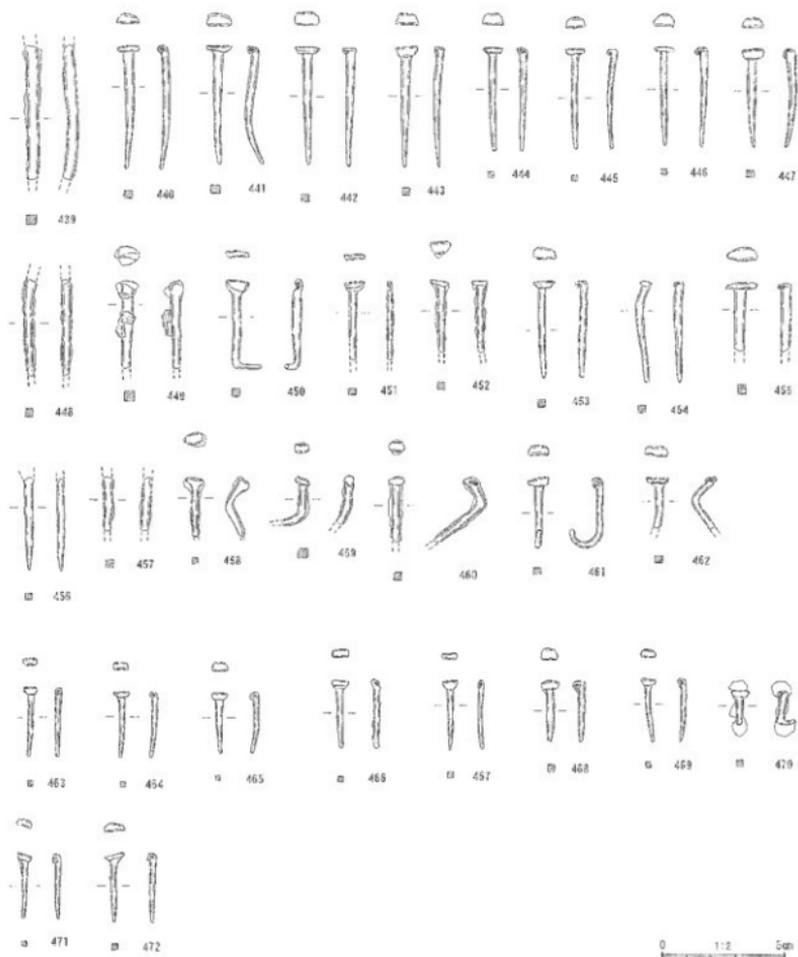


図72 5区包含層出土遺物5

時期の製品と思われる。474は表面に木片のような有機質が付着している。どちらも用途は不明である。475～480は煙管である。477～479は雁首、475・476・480は吸口側になる。475は内側の土砂に煤が混じっている。476は合わせ目に銀ろうがある。477は内側に一割木質が残存している。合わせ目に銀ろうがあり全体にも所々付着している。478も内側に木質が残る。479と480は同一個体であったと思われる。雁首と煙管本体との接合部には繊維状の痕跡がある。いずれも破損しており残存状態は悪い。481～483は鉄製、484は銅製の環状製品である。いずれも火葬遺構上層から出土している。遺存状態が極めて悪いが、鋳造品と考えられる。485～492は板状金属製品。485～489は扁平なコの字形の似たような形状であ

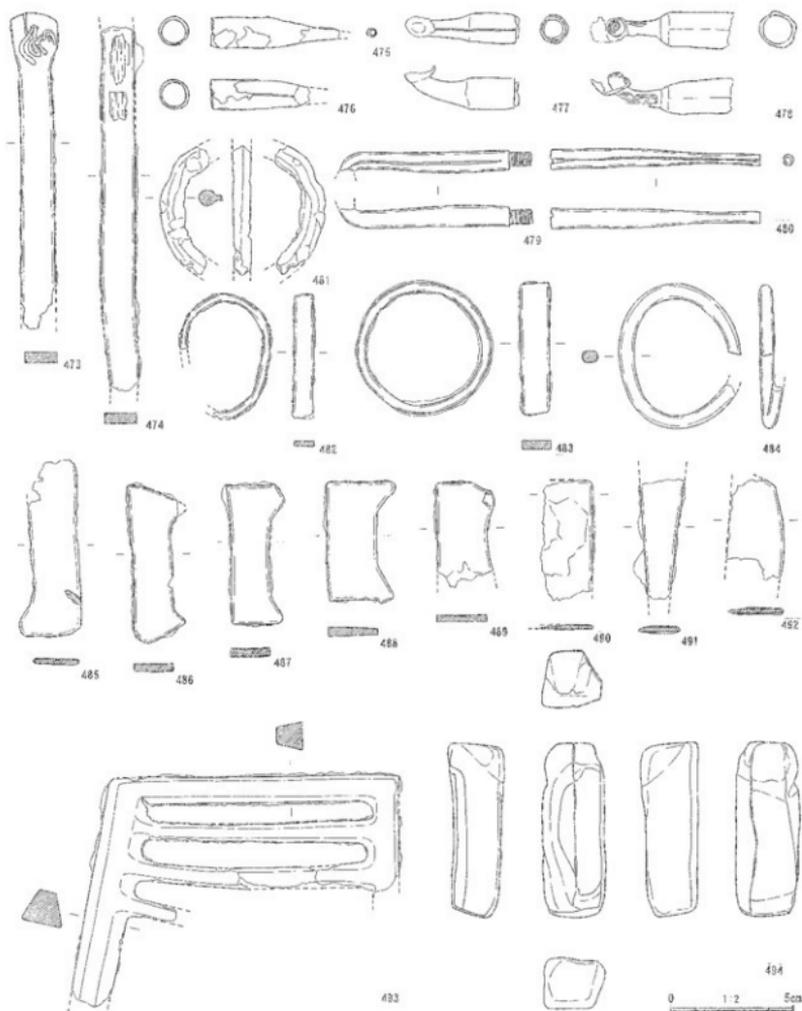


図73 5区包含層出土遺物 6

るが、用途不明な製品である。出土地点が火葬遺構の上層ではないため、火葬墓に伴うものではない可能性がある。493は五徳のような形状を呈する金属製品だが、用途は不明、近・現代の製品である可能性が高い。

494は小型の砥石と思われる石製品である。火葬遺構群からは外れた暗褐色上層より出土していることから火葬墓に伴うものではない。表面の一面が使用によりかなり使い減りしている。完存品であるこ

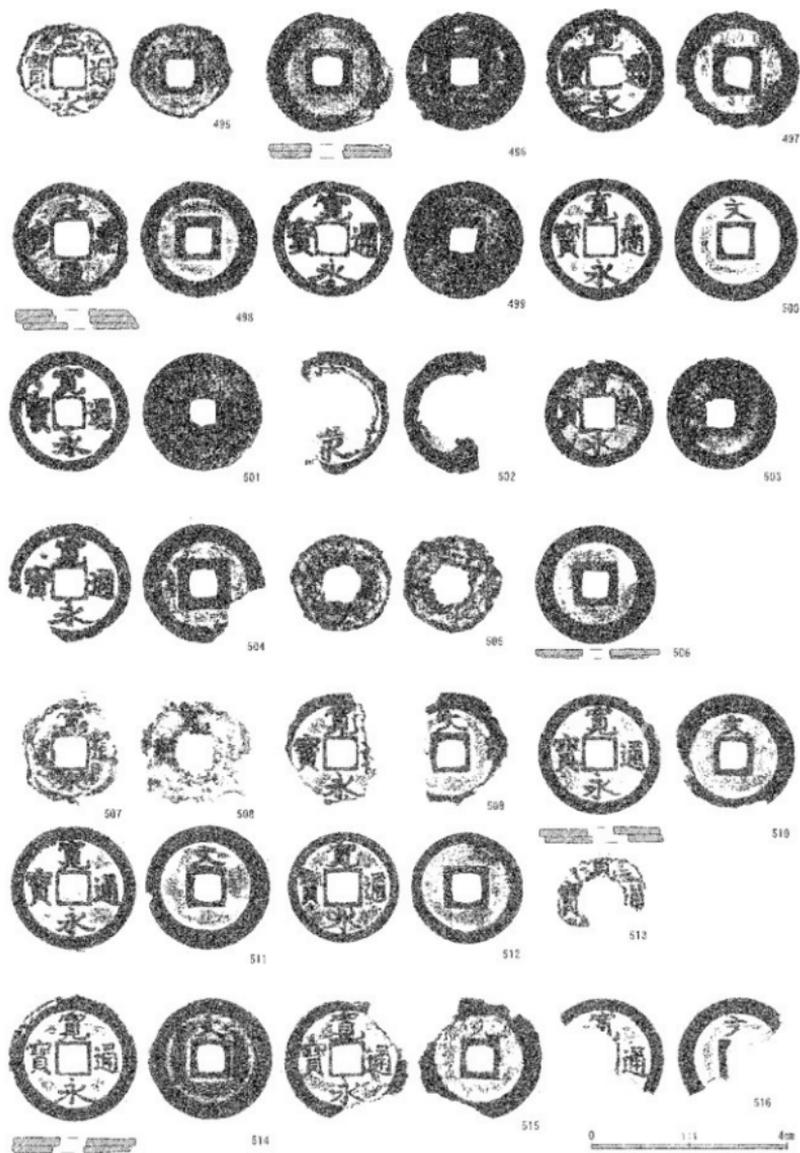


图74 5区包舍层出土遗物7

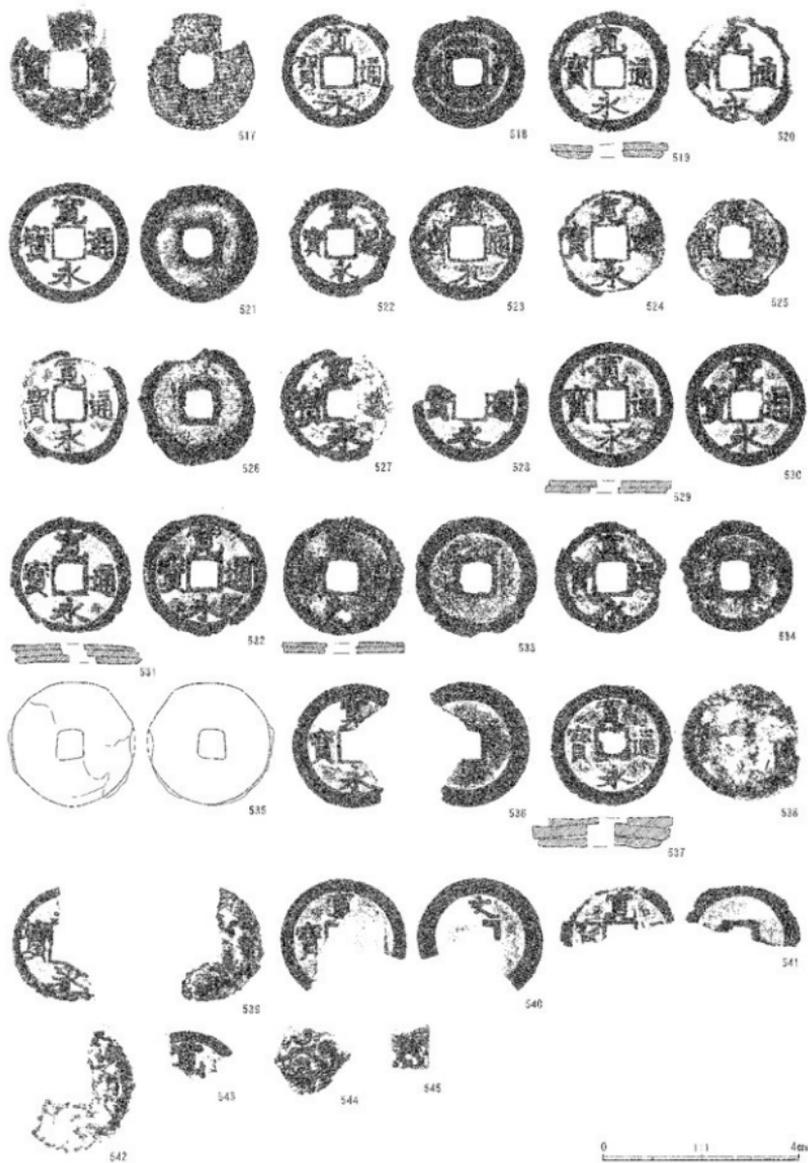


图75 5区包衣层出土遗物 8

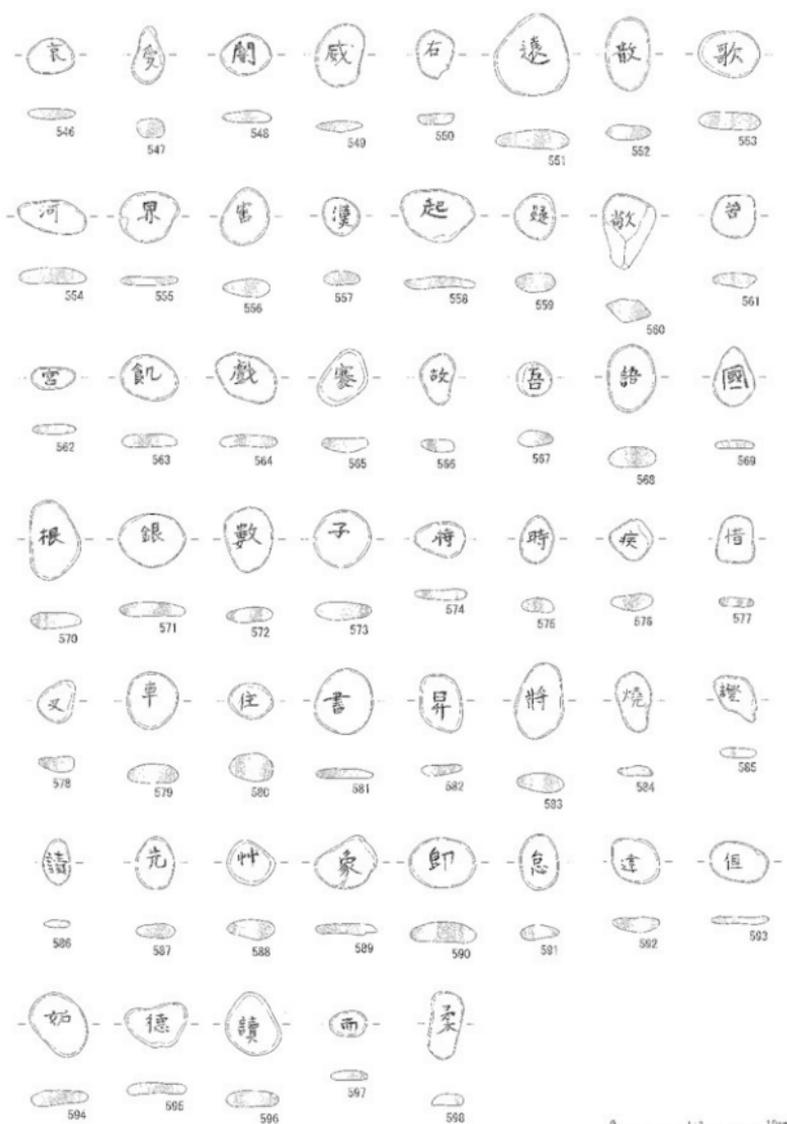


图78 5区包舍層出土漢石經1

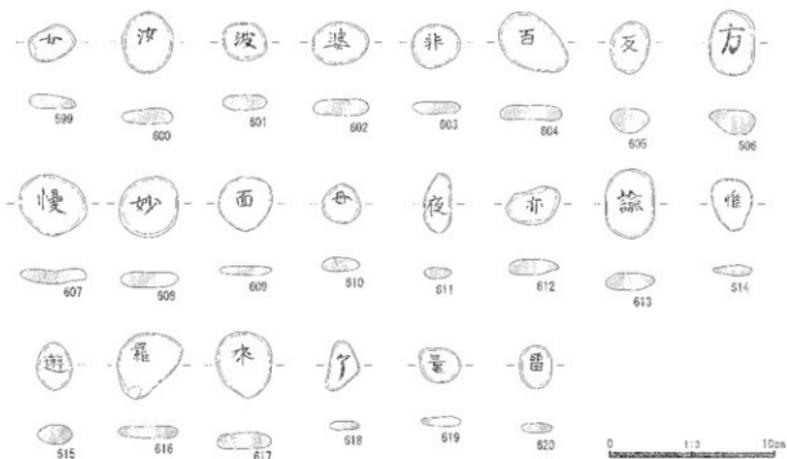


図77 5区包含層出土礎石種2

とから携帯用であった可能性がある。石材は灰白色凝灰質泥岩で砥石材としては適している。

495～545の銭貨は包含層より出土した。銭貨の大半が調査区の西側より見つかったことから、火葬遺構群に伴うものであろう。茶昆に付される際に副葬された銭貨であったか、または火葬墓や万葉塔供養や供献のためのものであったろう。前述した475～484も銭貨と同様に副葬品の一部であったと考えることもできよう。495・497は「寛永通寶」。496は2枚が癒着し銭名が読みとれないが「寛永通寶」と思われる。498は3枚が癒着し銭名が読みとれるものは「元豊通寶」のみである。499～505は「寛永通寶」である。500は文銭、503は4枚が癒着している。表面の腐食が激しく、癒着している銭貨が多いのは、ともに茶昆に付されたためであろう。506は銭名が内側に隠れて読みとれない。507～516も「寛永通寶」である。507・508は2枚が癒着している。509・510・511・514～516は文銭である。このうち510は2枚が癒着している。514はもともと518と3枚が癒着していた。517は波来銭の「熙寧元寶」（真書）である。518～541は「寛永通寶」。519・520は2枚が癒着している。519～526は「新寛永」。529・530は2枚、531・532は3枚、533は2枚が癒着している。535は鉄銭であるが錆がひどく、銭名は不明である。537・538は3枚癒着しているが、間に鉄銭が入っているため錆がひどく付着している。539・542・545は鉄銭である。540は文銭。542以下は錆の付着や小破片のため銭名の判別が不可能である。

546～620は包含層より出土した礎石種である。SF6の調査前に上層部より大量に出土したものである。そのためこれらもSF6の覆上から出土したものである可能性が高い。包含層出土の礎石種もSF6での抽出基準と同様に文字の書いてあるものから選別し実測を行った。詳細は一覧表を参照されたい。

5区の確認調査（確認その1）で低地部から木製品が1点出土している。図96-697（図版67）は172.0cmの板状木製品である。幅は15.5cm、厚さは3.4cmである。右側面以外の3面は断面のまま未調整になっている。上端部は切断されている。下端部の傷は調査時によるものである。5区南側の水田（本調査区外、試掘調査時のB区低地部のTP5）より出土していることから、水田耕作で使われていたものと想定されるが、どの時期に属するものかは不明である。

社

- 第二東名N82地点本調査1期にあたる。
- 岡田市(旧金谷町)駿河川遺跡は第二東名掛川工区N91地点、掛川市上ノ平遺跡は第二東名掛川工区N104・105地点になる。
- 石材同定については静岡大学名誉教授伊藤通玄氏にお願いし、石材に関する指導・助言を受けた。
- 長慶寺は、藤枝市下之郷に所在する臨濟宗寺院で、山号は大揚山と号する。付近にはこの長慶寺をはじめ、花倉城や道願光寺等、今川氏縁の旧跡が点在する。これは建武2年(1337)に足利尊氏が今川範国に駿河国葉梨荘を与えたことに由来し、駿河国における今川氏最初の所領となったのが、長慶寺を含む一帯なのである。駿河国守護の今川氏は範国を初代とし、2代目範氏、3代目は泰範と代を継いでいく。その3代目泰範が長慶寺の礎基とされ、応永16年(1409)に泰範は死去し、「長慶寺院」と呼ばれるようになる。今川氏はその後、長慶寺を「先祖之菩提所」として保護するようになり、9代目義元の権位を務めた當宗(駿河国人庵原氏出身)が、寺の再興を推進したとされる。當宗は弘治元年(1555)に死去するが、彼の遺言により大沢院(今川一族の菩提所か?)と安樂院(九州探題今川了俊の曾孫、範師の菩提所)の3ヶ寺が長慶寺の塔頭に組み込まれ、さらに長慶寺はその西側に位置する修善院を含め、塔頭3ヶ寺を有するようになっていく。なお今川氏は8代目氏輝の菩提寺である臨濟寺を頂点とする本末関係を構築しているが、長慶寺もその中に組み込まれている。

寺領は葉梨庄内や寺周辺以外に、寿村(中御門宣胤の領で、7代目氏親の正室)朱印状によれば「うつたり(旧岡部町内谷)」にもあったとされる。さらに15世紀代には泉庄(藤枝市?清水町?)を有していたとする見方もある。また弘治2年(1556)の今川義元の判物によれば、「嗣宣藏者々所請役免許之事」とあることから、長慶寺は「嗣宣錢」(亡者供養、堂社の修造・運営を目的・名分として、信者から勧進により集められた)を資本として金融活動をも展開し、その活動は今川氏により保護が加えられていたようである。

- 衣原古墳群の位置する丘陵の東端に道路状遺構を検出している。道路状遺構は寺家前遺跡(N81地点)の発掘調査で記録保存を行っている。
- 案内では飯飯塚塚(大井川飯塚)長寺寺所有の礎石経がある。時期年代は不明である。そのほかにも西ノ平塚塚(旧岡部町西ノ平)、万年寺墓山の中腹に室町時代の礎石経があると静岡県史に記載がある。また掛川市本郷字古城に所在する長福寺でも数点の礎石経がある。
- 足立順司 1994 「消費地出土の初山、志戸呂焼-原川遺跡を中心に-」『向坂綱二先生還暦記念論集 地域と考古学』向坂綱二先生還暦記念論集刊行会

表19 長慶寺開蓮年表

年月日	出来事	文書名	巻次	頁次
徳永4年 元永1年	1307 9月28日	足利尊氏が、今川範国に駿河国葉梨荘(葉梨)を賜与する。	足利範邦1文書『今川宗氏文書』	2-118 2-165
		今川範邦が葉梨庄下之郷に長慶寺を建立する。		
応永7年	1400 2月3日	足利範邦が長慶寺に寺領として(葉梨?清水町?)を安堵する。	足利範邦御書『今川宗氏文書』	2-1272 2-1282
応永16年	1409 9月28日	今川泰範死去。法名を「嗣宣」(長慶寺山号)にす。	『今川氏』遺書上	3-1446 3-201
応永19年	1417 5月24日	足利範邦が長慶寺に物部國定(即休寺?清水町?)を安堵する。	足利範邦御書『今川宗氏文書』	2-1479 2-200
天文5年	1528 8月11日	今川了俊が長慶寺(後に長慶寺の塔頭)の塔を譲渡する。	『岡部寺文書』	3-716 3-243
天文13年	1542 3月11日	今川了俊が安慶院(後に長慶寺の塔頭)の塔を譲渡する。	『岡部寺文書』	3-1577 3-284
天文19年	1547 4月1日	壽村(今川氏領)が當地地所、うつたり(旧岡部町内谷)の長慶寺を安堵する。	壽村寺文書『岡部寺文書』巻上七十七	3-1830 3-220
天文19年	1549 11月23日	壽村氏が長慶寺に寺領として、うつたりの郷の長慶寺を安堵する。	『長慶寺文書』	3-1985 3-206
天文20年	1551 7月15日	今川了俊が長慶寺塔頭の大沢院(後に長慶寺の塔頭)に寺領を安堵する。	『長慶寺文書』	3-2007 3-211
天文20年	1551 7月15日	今川了俊が長慶寺塔頭の安慶院(後に長慶寺の塔頭)に寺領を安堵する。	『長慶寺文書』	3-2008 3-212
天文22年	1553 8月23日	今川了俊が長慶寺塔頭の修善院に寺領を加える。	『長慶寺文書』	3-2201 3-212
		大澤院(今川氏領)が長慶寺に譲渡。寺の再興が形ある。		
弘治元年	1545 10月19日	長慶寺を焼失した五郎重忠が死去。	大澤院寺文書	3-2268
弘治7年	1556 11月20日	今川了俊が長慶寺の寺領に葉梨、葉梨寺縁にあった大澤院と安慶院が長慶寺の塔頭となる。壽村氏が葉梨寺の寺領を譲渡する。	今川了俊文書『長慶寺文書』	3-2425 3-243
弘治13年12月	1560-	この頃、長慶寺は開蓮33年(大澤院、修善院、安慶院)を有する臨濟宗の寺であった。	物部國定御書『岡部寺文書』	3-2762 3-283
永享7年	1564 12月18日	壽村氏が長慶寺に寺領として、うつたりの郷の長慶寺を安堵する。	寿村寺文書『長慶寺文書』	3-2261 3-283
永享8年	1566 3月21日	長慶寺の寺領を譲渡。永享8年(長慶寺の塔頭の長慶寺)に寺領を譲渡する。	長慶寺文書『長慶寺文書』	3-2355
永享12年	1569 正月18日	この頃、長慶寺は開蓮37年(大澤院、修善院、安慶院)の寺領を譲渡している。	長慶寺文書『長慶寺文書』	3-2362 3-219
永享13年	1569 7月3日	長慶寺が長慶寺塔頭の修善院(長慶院)塔頭を譲渡する。	長慶寺文書『長慶寺文書』	3-2363 3-219
天正13年	1587 10月4日	壽村寺の寺領を譲渡(となくとも?)が長慶寺の寺領に譲渡された後に行う。その寺領が長慶寺の寺領となる。長慶寺の寺領となる。	長慶寺文書『長慶寺文書』	3-1985 3-278

5. 6区

6区は本調査V期として平成16年4月1日から12月17日まで9ヶ月間の発掘調査を実施した。調査対象面積は2,500㎡である。調査区の位置は須意器窯（1号窯）が発見された4区の南西側にあり、同一丘陵上の南向き斜面地から裾部にあたる。調査区の中央部は東西にかけて宅地造成等で攪乱を受けている。また北端の丘陵面についても茶樹改植を行った際の重機による攪乱を受けており、古い遺構を検出することはできなかった。グリッドは図78のとおり、調査区の北西隅に基点を置いてX軸は1～9、Y軸はA～Fまで設定し、ほぼ全域に10m×10mのグリッドを配置した。また、本区は炭窯の発見により東側斜面にかけて遺構の広がりが懸念されたため、東側へ調査区を拡張した。しかしこれより東側では遺構は発見されなかった。

6区で見つかった主な遺構は、調査区北東部に横口付炭窯1基と近世の炭窯（4・5号窯）、および土坑SX1503・1446、南部では竪穴住居状の遺構と、伊跡状の焼土坑を検出した。調査区南西部では2面の遺構面が確認され、奈良時代～中世の包含層と近世の包含層が存在した。ここでは多くの柱穴群が見つかっていることから、掘立柱建物が繰り返し建て替えられていた可能性がある。その北側では溝跡や近世の井戸跡などが複数見つかった。遺構に相伴する遺物が限られていたため、年代を特定できる遺構が少なかったが、おおよそ古墳時代後期から近世の遺構群である。本調査区で発見された横口付炭窯（3号窯）および近世の炭窯（4号窯・5号窯）については、第4章の古窯群に含めて詳しく記載している。本項ではこれ以外の遺構・遺物について記述する。

調査区内の土層断面については図80・81に示した。土層断面は主に西側～南西側にかけての堆積土層を区化してある。前述のように調査区北端丘陵～中央部にかけては宅地造成や茶樹改植の際に重機で攪乱を受けているため、攪乱土を除去すると地山層となっている。調査区南西部の平坦面は、基盤層まで確認した結果、もとは谷地形となっており、北端の丘陵面より中央部の谷頭を通り、半谷川に向かって流れ込んだ土砂の堆積により作られた地形であることがわかった。土層観察を行った結果、奈良時代から中世の包含層が下位で検出され、中間層を挟んで、上位に近世の包含層が存在することがわかった（図81）。

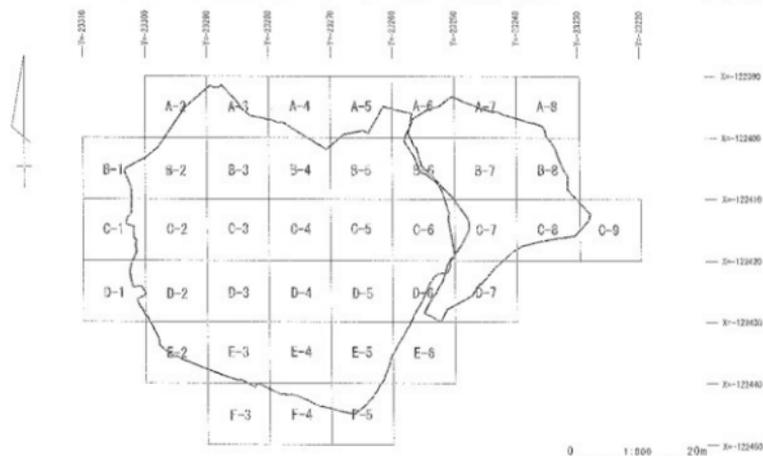


図78 6区グリッド配置図



图79 6区遺構全体図

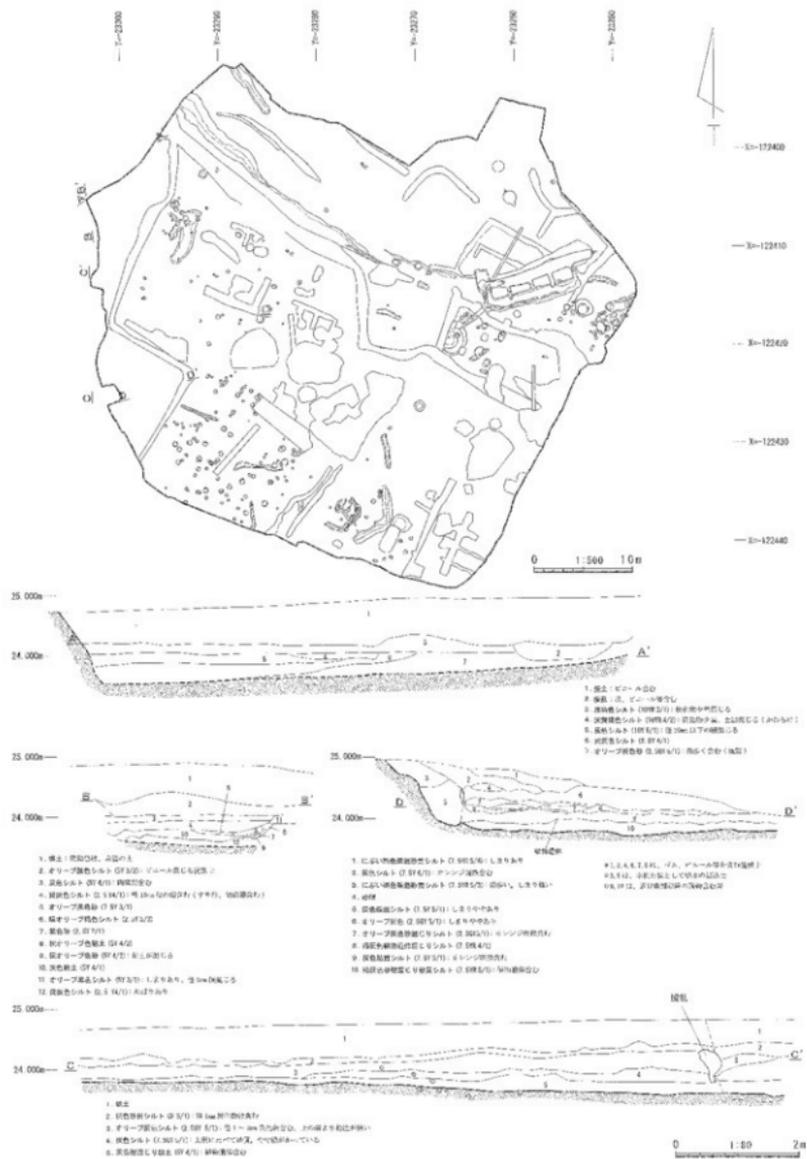


图80 6区土層断面図

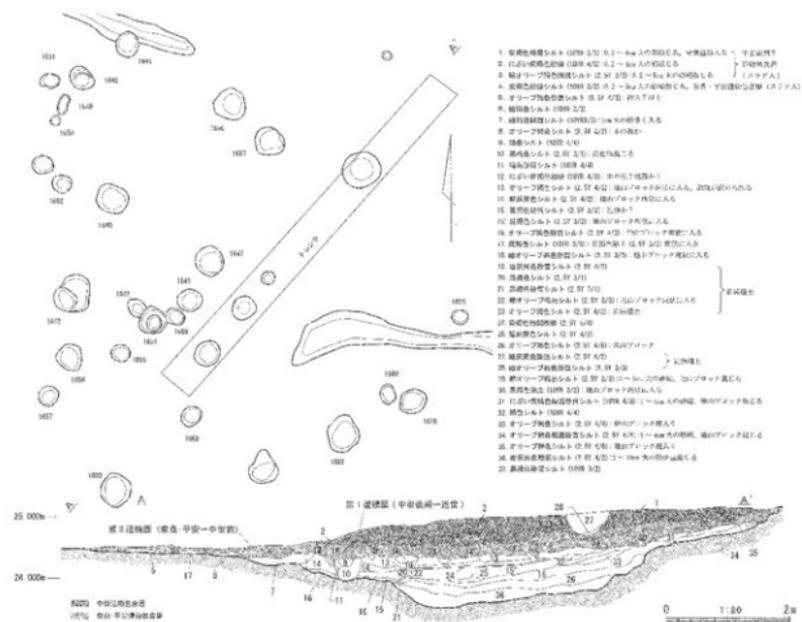


図81 6区低地部土層断面図

調査区内は奈良時代から近世まで長期にわたって居住域として利用された土地であったと思われるが、遺構内から出土した遺物が数少なく限られており、さらに後世になってからの茶樹栽植や宅地造成等の攪乱をかなり受けているために、各時代の遺構面としてとらえることが困難であった。そのため、本項では個々の遺構の事実記載に留め、確実に遺構から出土した遺物については、その推定年代を記載した。

竪穴住居状遺構 SB01・02 (図82)

調査区南西部隅で竪穴住居状の遺構 SB01・02が見ついている。近世整地層除去後に E-4グリッドで西側に開く半円状の溝が検出された。西側半分については後世の地形改変で削られ、南西部の包含層へ流れ込んでしまったものと思われる。溝跡は2本が切り合っているが、竪穴住居跡だとすると塹溝になる部分と思われる。しかし支柱穴や地床炉などの関連施設が見あたらず、竪穴住居跡と断定するに至らなかった。関連遺構としては SP1757・1758・1759がある。遺物は SX1311 (SB01溝溝) より須恵器の甕小片 (古墳時代後期～奈良時代) が出土している。しかし竪穴住居状遺構と関連する遺物と断定できず、周辺の柱穴跡で出土した灰胎陶器等があることから、奈良～平安時代の遺構であると推定される。

鍛冶遺構 1757・1758 (図83)

E-4グリッド内の SB01・02のすぐ北側で検出した。当初、竪穴状遺構との関連で竪穴住居跡の炉跡と考えられたが、遺構の構造からして別の遺構であると判断した。1757は1758に切られている。1758の西側は木根の攪乱が著しく壁面が残っていない。ここ以外は壁面に粘土が貼られ、非常に強く焼けている。鍛冶炉の可能性も考えられるが、鉄滓等の遺物も出土していないため、断定はできない。この詳細については第5章第1節考察にまとめている。

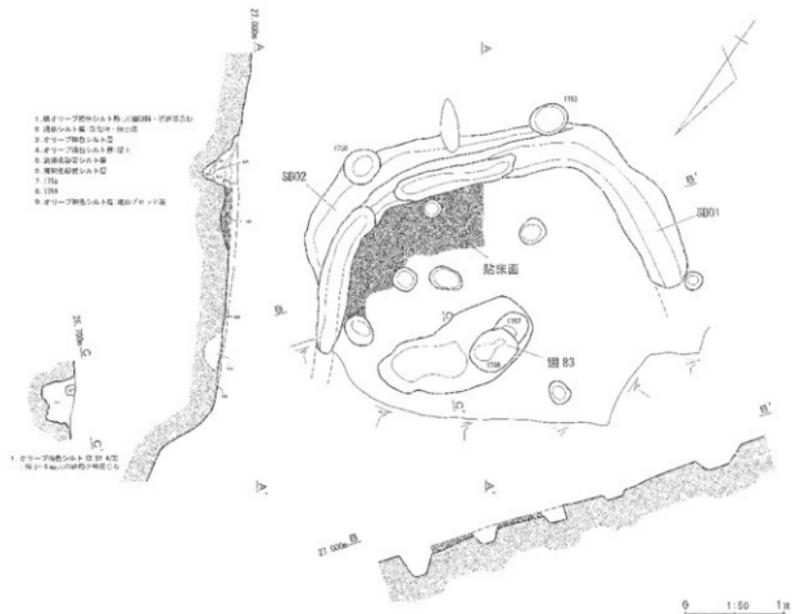


図82 6区空穴住居状遺構 SB01・02

掘立柱建物跡 (図84～88)

調査区南西部では2面の遺構面を検出した。図81の1～3層は中世の遺物を含む。第1遺構面とした面は近世面である。その下層の4層では古墳時代から奈良・平安時代までの遺物を含む包含層がある。そのため第2遺構面は古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構面と考えられる。

本報告では両遺構面の柱穴を合成して、建物跡の検討を行った。その結果、11棟の掘立柱建物跡を復元した。SH103～113については、第2分冊の巻末の一覧表に計測値を掲載した。

南西部の柱穴群ではほかに柱根が出土している柱穴列がある。柱根については実測図ではなく、巻末の写真図版に掲載した。第1遺構面では、SP1348・1354・1360・1361で樹皮の付いた状態の直径20cm大の柱根を検出した。いずれもクリ材の柱で、柱穴の間隔は約1.8mである。SP1361からは山茶碗が出土しているが、流れ込みである可能性がある。柱根に表皮が付いていることや覆土の点からも、近世以降の掘立柱建物跡か、もしくは棚列であったと考えられる。SP1358・1587・1585・1599・1603では、遺物はなく、柱根もなかったことから、時期の決め手はないが、前述のSP1354とSP1353との切り合い関係から、前述の柱列よりは古いものである。やはり中・近世の掘立柱建物跡が存在した可能性がある。SP1363・1367・1372の柱穴列は覆土が下面の土であることから古い時期かと思われたが、出土土器の年代幅が広く、やはり中・近世の時期であろう。この面では包含層東側の攪乱や谷部の包含層中であったため、出土遺物がその遺構の年代観に直結するものとは言い難く、建物跡として復元するには至らなかった。

第2遺構面ではSP1640・1664・1694の柱穴列がある。覆土は上層に粘りけの強い粘土、下層は砂質

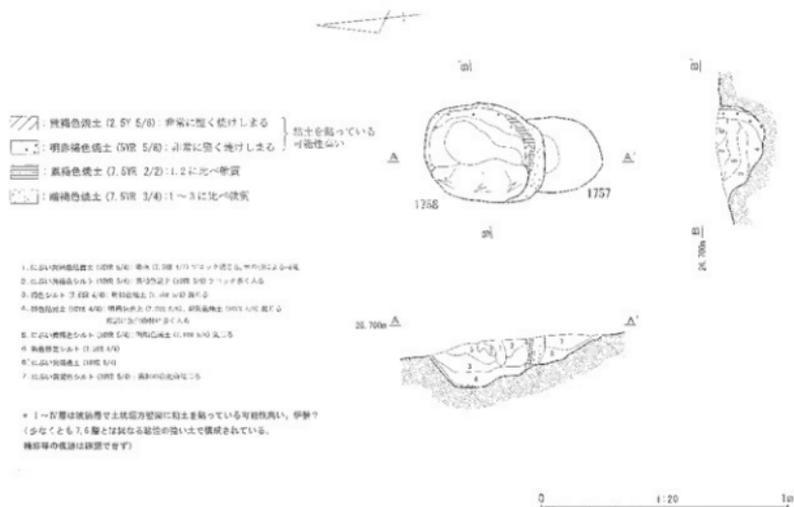


図83 6区排水遺構 1757・1758

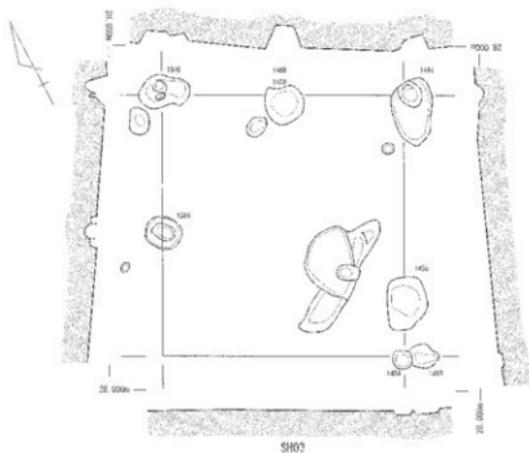
混じりの粘土質シルトと共通しており、SP1640・1664では須恵器片も出土している。柱穴の大きさや出土遺物を踏まえると何らかの関連があると思われる。しかしこれに伴う遺構は周辺に見られず、住居跡などに結びつく手がかりを得なかった。このほかにもSP1647・1641・1590・1591・1658・1680など、須恵器が出土している柱穴がある。しかし遺構に絡む遺物がほとんどなく、遺物包含層からは須恵器・上師器とともに灰釉陶器・山茶碗など幅広い年代の土器が多く出土している。そのため第2遺構面の年代は古墳時代後期～奈良・平安時代までの時期と考えられる。

井戸跡 SE1313 (図89)

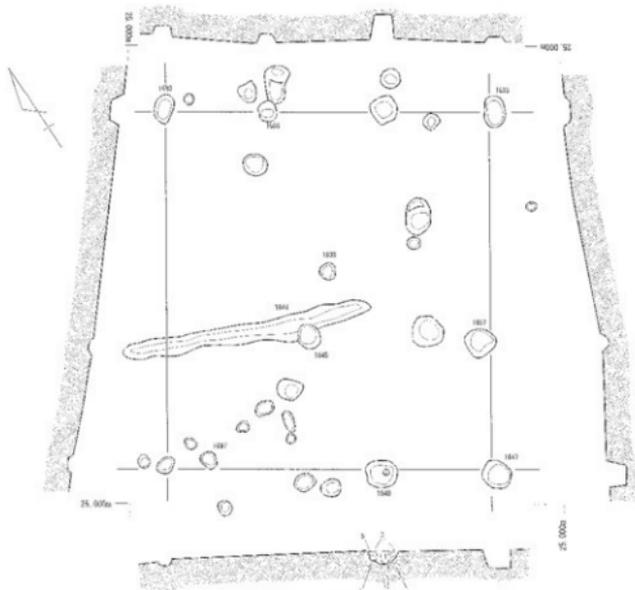
桶を2個体並列して埋め置きしたと見られる十坑である。両桶ともに底板・側板は抜き取られ竹製のタガのみが残っていた。桶底面から椀瓦片やスギ板、木片、竹などが出土した。長軸は約2m、短軸は約1m、深さは1m程ある。井戸枠上面0.3~0.4mは砂混じりの攪拌土が埋没しており、土のしまりはない。上面が鈍い赤褐色土に比べて、下面は砂混じりの攪拌土であった。SE1534と口径がほぼ同じで井戸枠の構造から判断して、近世末～近代の時期と思われる。井戸跡として本書へ掲載したが、あるいは二連便槽の可能性もある。土器等の遺物は出土していない。

井戸跡 SE1415 (図89)

6区D-5グリッド内より素掘りの井戸を検出した。井戸跡はほぼ円形を呈する。直径が約1m、深さは1m程ある。井戸枠などは確認出来なかった。井戸底面(最下層)から幅広い年代の土器が複数出土している。遺物は山茶碗片や土師器片、陶磁器片など11片と、漆碗片が1点ある。土器はいずれも小片であるため図化できたものは621・622の山茶碗のみである。621・622は井戸の最下層より出土したもので、接合点はないが、胎土から見て同一個体の可能性が高い。土器の年代は12世紀代と思われる。623はブナ材で作られた漆碗の底部破片で、口縁部と高台部分が欠損している。高台径は約5.8cm。内側面は皿状に開く。外側面は高台上部に稜をもち口縁部側へ立ち上がる形態である。内外面ともに下地に黒漆を塗り、その上を赤漆で塗り仕上げている。山茶碗片の年代は中世初頭であるが、陶磁器なども出土



SH02



SH03

- 1 圆形遗迹 (直径 4.0m) 遗迹中心点, 坐标为 (15.7, 15.7)
 2 圆形遗迹 (直径 3.0m)
 3 圆形遗迹 (直径 2.0m)
 4 圆形遗迹 (直径 1.5m)
 5 圆形遗迹 (直径 1.0m)

⑤—柱基

0 1:20 2m

图84 6区掘立柱庵物跡 SH03·04

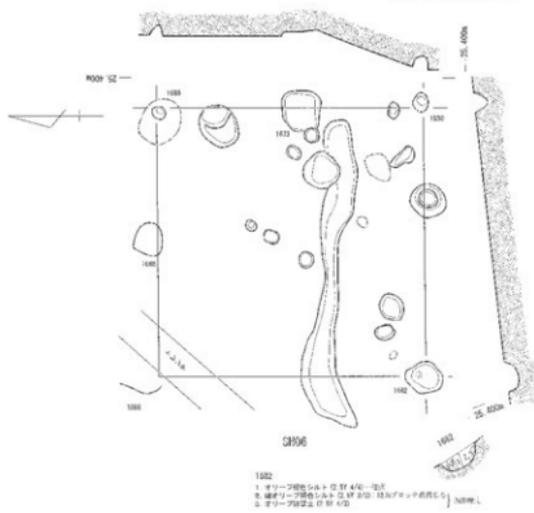
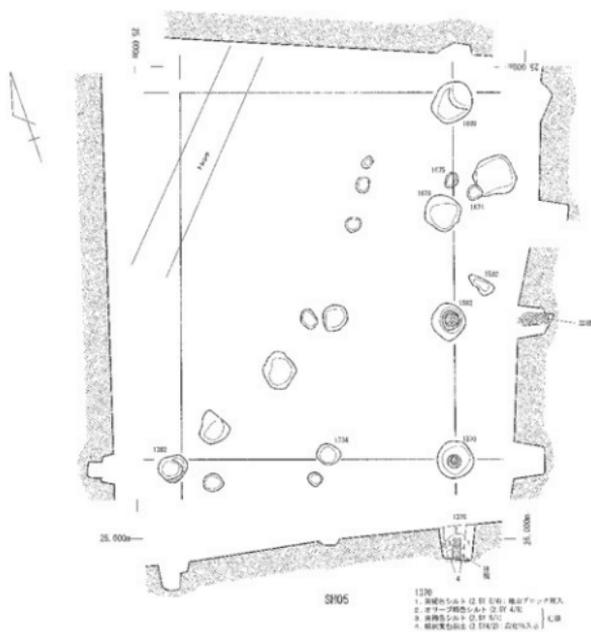
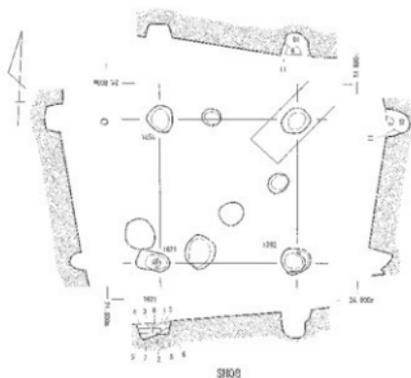
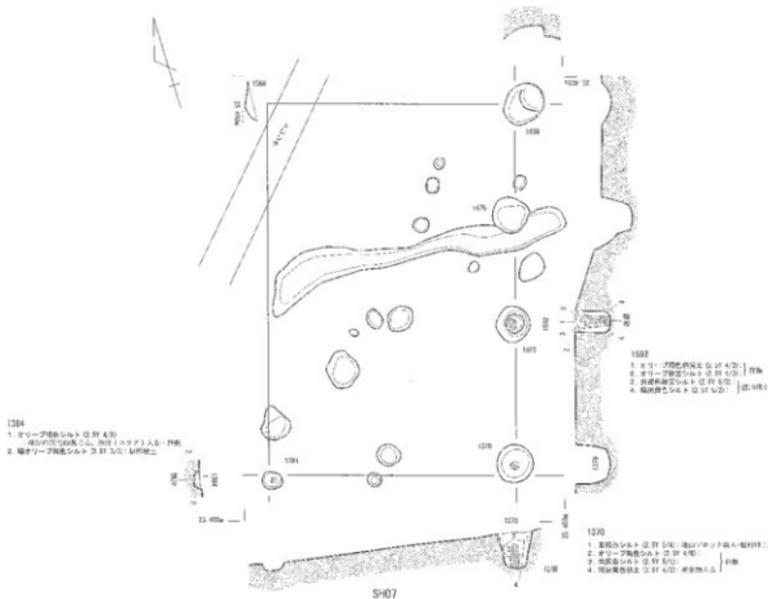


図86 B区獨立柱礎物跡 SH05・06



1621

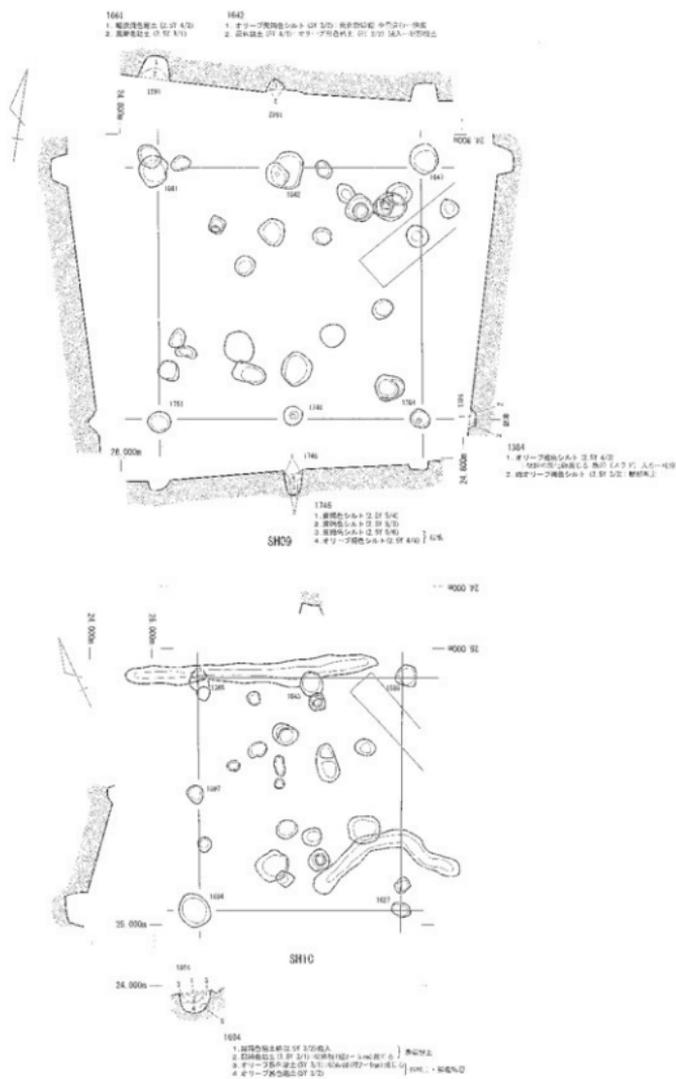
1. 1号柱位置 (Column 1 position)
2. 2号柱位置 (Column 2 position)
3. 3号柱位置 (Column 3 position)
4. 4号柱位置 (Column 4 position)
5. 5号柱位置 (Column 5 position)
6. 6号柱位置 (Column 6 position)
7. 7号柱位置 (Column 7 position)
8. 8号柱位置 (Column 8 position)

9. 9号柱位置 (Column 9 position)
10. 10号柱位置 (Column 10 position)
11. 11号柱位置 (Column 11 position)
12. 12号柱位置 (Column 12 position)

一柱版

0 1:50 2m

図86 6区榫立柱建物跡 SH07・08



② 一級遺

0 1.00 2.00

図87 6区掘立柱建物跡 SH09・10

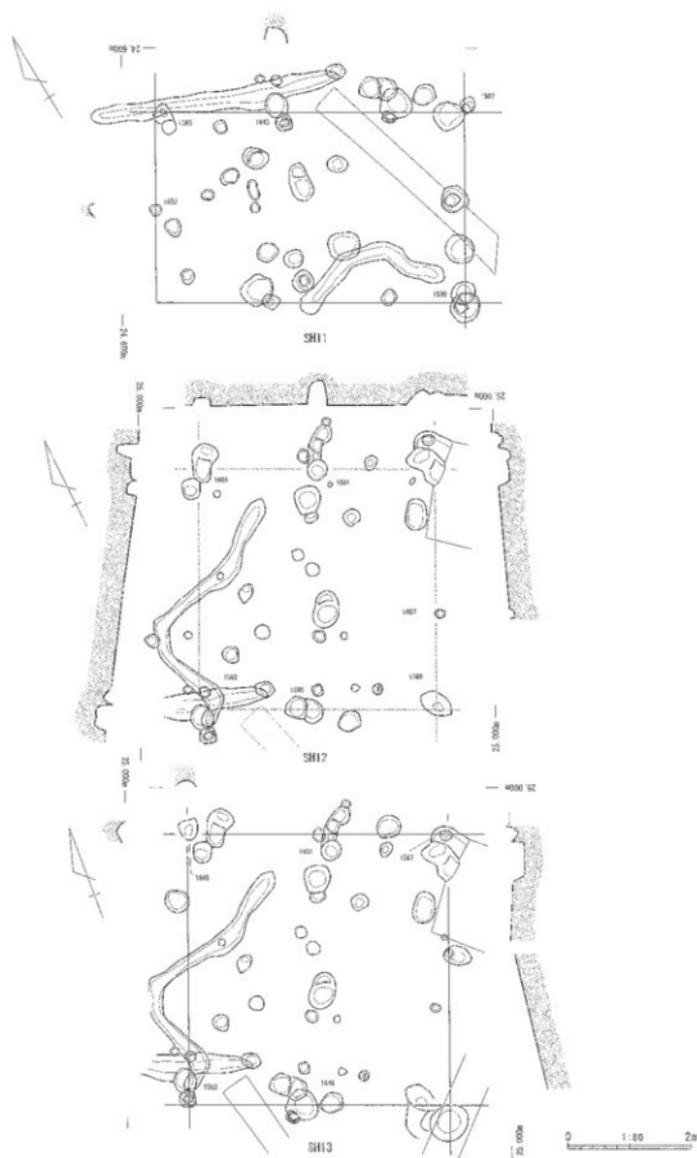


图88 6区竖立柱建物跡 SH11~13

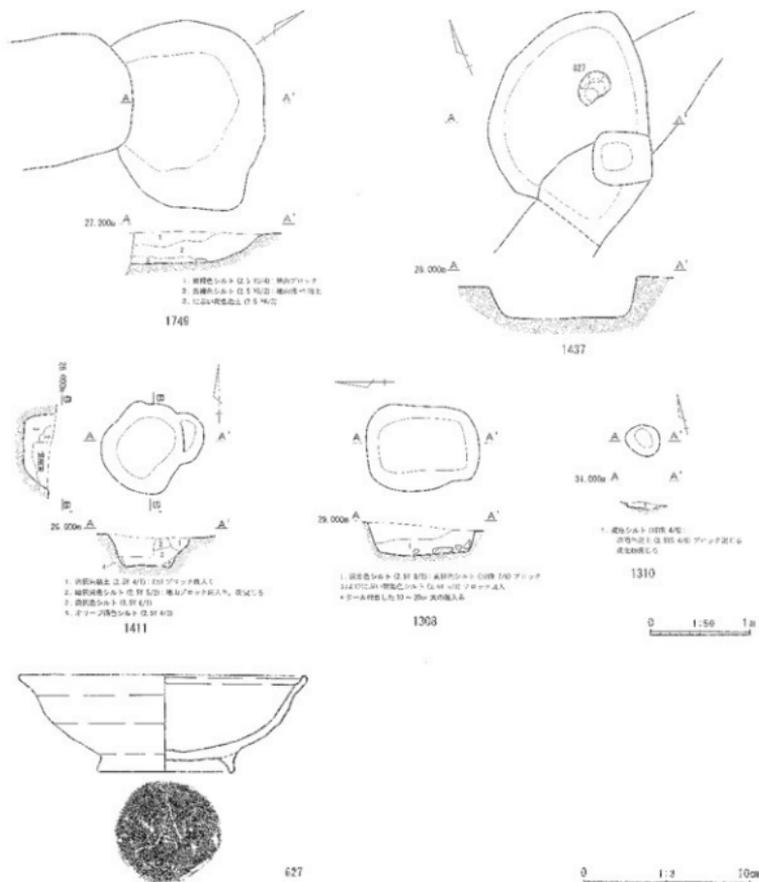


図90 G区土坑状遺構図・出土遺物

永通寶」、ほか1枚は極着しており錆のため銭文は不明である。624・625は「古寛永」、626は銅銭と鉄銭が癒着している。銭貨は井戸枠底面の際で出土しており、この状況から見て銭貨は井戸構築時に納められた「井戸祭祀」とも考えられる。出土銭貨は古寛永だけでなく鉄銭が混入していることから、井戸は18世紀後半～19世紀に使われていたものであろう。

井戸 SE1405 (図89)

C-3・4グリッド内で検出したほぼ円形の井戸跡である。井戸底に竹製の桶柄のみが残っていた。井戸内の覆土には巻大の隙が詰め込まれていた。井戸底からは木片が出土している。年代は近世以降と思われる。

そのほかにもSE1745・SE1575・1579などの井戸跡が検出されたが、いずれも近・現代のものと思わ

れることから、本書への掲載は割愛した。

土坑 SF1749 (図90)

E-5グリッド内で検出した不定形な楕円形土坑である。井戸跡 SE1313に遺構の縁辺部の一部を切られている。長軸で1.9m、短軸で1.3m、深さは最大0.4mある。1・2層は攪拌されたような斑状の堆積土であったが、3層はシルト質のしまりのある上であった。近世以前と思われるが出土遺物はなく、遺構の年代は不明である。

土坑 SF1437 (図90)

D-5グリッド内、SX1446の東側で検出された土坑は不定形な楕円形を呈する。ほぼ完形に近い山茶碗が遺構覆土より1点出土している(627)。土器の年代からSF1437は12世紀代の遺構と考えられる。

土坑 SF1411 (図90)

C-3グリッド内で検出した不定形土坑である。土坑径は広いところで1mあり、深さは0.25m程である。出土遺物はF-876がある。土師器の甕底部で底部径は18cm程あることから、かなり大型の甕であったものと思われる。遺構覆土から近世後期の遺構であろう。

土坑 SF1308 (図90)

C-5・6グリッドで横口式炭窯(3号窯)を切り込む位置に検出した。底部に焼石が数個入っていた。隅丸方形の土坑である。出土遺物はないが遺構覆土から見て近世末から近代の遺構であろう。

土坑 SF1310 (図90)

4号窯に伴うものと思われる。炭化物、灰、焼土が入る。時期は近世と思われる。

不明遺構 SX1446・SF1503 (図91)

横口式炭窯(3号窯)の南西側に、複雑に切り合った土坑、柱穴群を検出した。土坑はほぼ円形に近い形状であったと思われるが、北西側のほぼ半分は丘陵面西側のちょうど谷頭にあたる部分で、丘陵から流れる土砂等により削り取られたと見られる。土坑は浅いくぼみ状になっており、長軸で約3m、短軸は2m程残っている。SX1446では須恵器片を中心とした土器が多く出土した。奈良時代の土器も多く含まれていたが、少量ながら山茶碗も含まれている。遺物の出土状況を見ると水に流された等の自然要因ではなく、明らかに人為的な形跡を残している。この遺構の周りに溝状の掘り込みがある点から、当初は竪穴住居跡として調査していた。しかし竪穴住居跡にする決め手はなく、本書では不明遺構(SX)として掲載した。複数の遺構が切り合っていることから年代の決め手がないが、以下、出土土器による年代を見てみる。

6区からは3群以後の須恵器および5群とした灰釉陶器を中心に出土しているが、特に灰釉陶器の出土量が多い。灰釉陶器の多くは小破片であるが、SX1446およびこれと重複しているSF1503からはまとまった土器が出土している。特にSF1503からは形態を推定することができる5群の甕が複数出土している。口径の大きな浅い土坑であるSX1446からは、1群の須恵器杯蓋(632)、3群とした高台杯(635)・蓋(633・634)、5群とした灰釉陶器が出土している。最も多かったものは5群の灰釉陶器であるが、これらは小破片が多い。

632に示した杯蓋は焼け歪みがあり、不良品である。口径は比較的大きく、頂部周辺にヘラ削りを施しているが、肩にはすでに沈線をめぐらさくなっており、遠江須恵器編年Ⅲ末と考えることができよう。衣原1号窯の製品に少数であるが同様の杯蓋がある。胎土・焼成も良く似ている。

633~635は高台杯蓋と身である。助宗古窯産のもので、3群に含まれる。636は平城宮跡の報告で葦Gと分類された長頸の壺で、器高は20cm程、胴部には全面に回転ヘラ削りの跡を残している。3群に含めておく。

637~651は灰釉陶器で5群土器である。いずれも小破片で、高台の形から見ると多少の時間差が認め

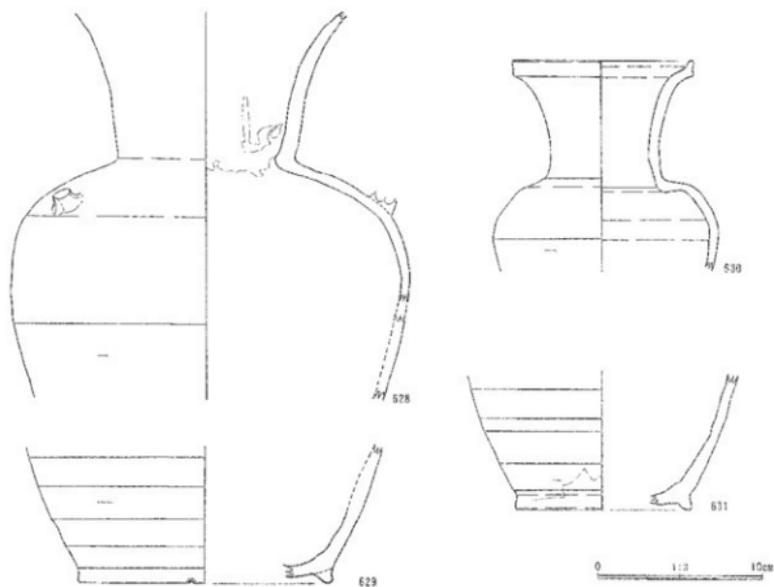
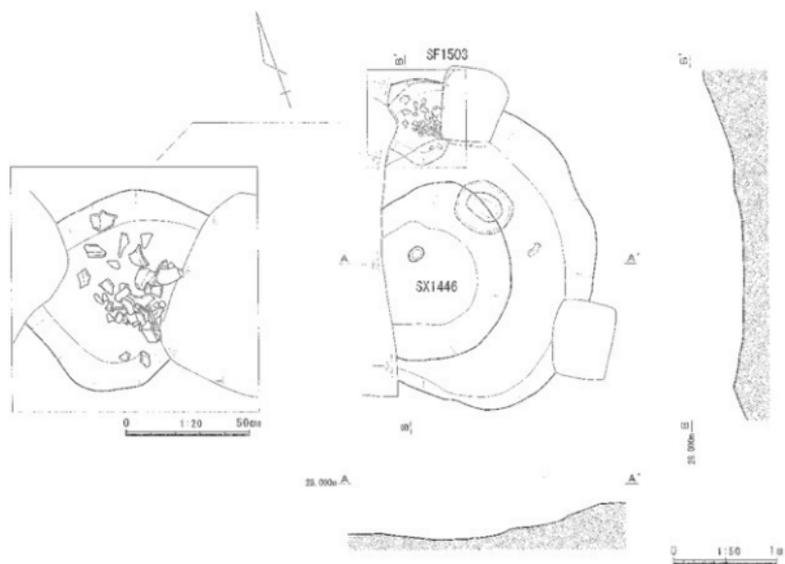


图91 6区不明遗物 SX1446·SF1503 遗物图·SF1503 出土遗物

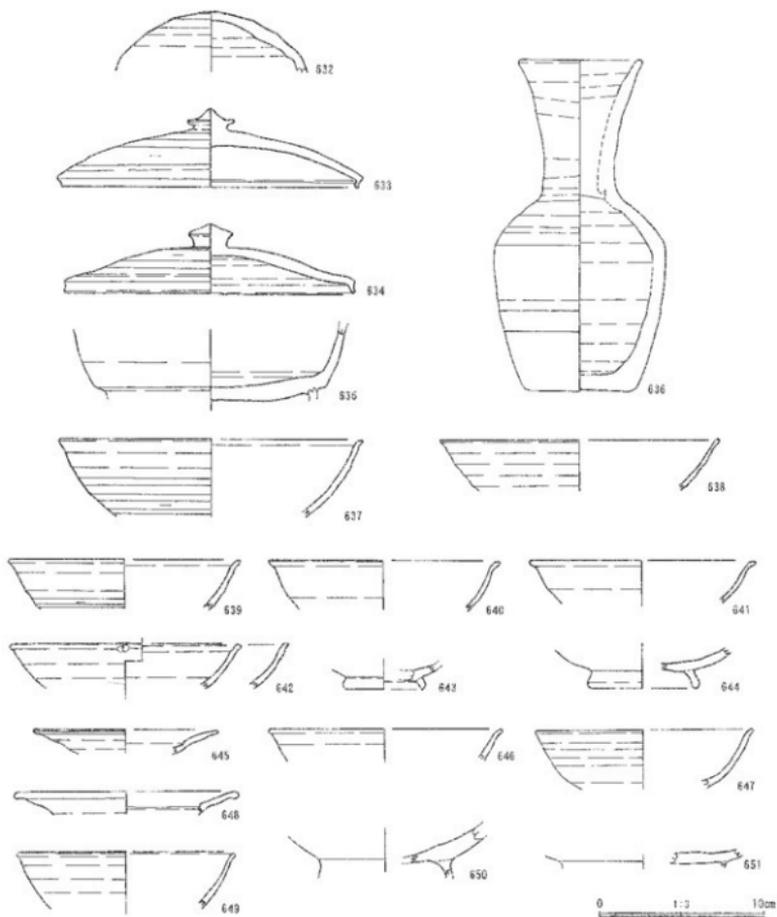


図82 6区不明遺構 SX1446 出土遺物

られる。645・648は段皿で、642には輪花が施されている。

出土した土器の点数は5群とした灰袖陶器が最も多いが、これらはいずれも小破片であり、3群とした須恵器が最もまとまっている。したがって、SX1446の年代を3群土器の年代に求め、奈良時代中期から後期としておく。

SX1446の一部を掘り込み形でSF1503が作られている。ここからは3個体以上の壺が出土している(628～631)。いずれも5群土器に伴う灰袖陶器の壺であるが釉の発色は認められない。胎土などからもいずれも遠江産のものであろう。したがってSF1503は5群土器の年代である10世紀代に位置付けられ

るものであろう。

溝状遺構 SD1428 (図93・図版49)

C-6グリッド内、横口式炭窯(3号窯)の上層で検出した。総延長は約10mある。上層は灰黄色砂質土、下層は3~6cm程度の礫混じりの層である。この礫層から須恵器の澁などの小片が数点出土しているが、時期年代の決め手になるものではなかった。また、この地区の地山は、本来、礫を含む土壌ではなく、この溝状遺構にある礫もほかの場所から持ち込まれて溝の底部に敷き詰められた可能性がある。そのため、出土した土器片も礫と一緒に持ち込まれている可能性がある。SD1428の時期年代は明確に出来なかったが、3号窯よりも新しい時期であることには間違いない。近くに近世の炭窯(4号窯)も検出されていることからほぼ同時期と考えられる。

溝状遺構 SD1429 (図79)

3号窯の南側で検出した近世以降の攪乱である。遺物は655~657が出土している。655は登窯8~9期の瀬戸焼の植木鉢である。656は揺鉢の口縁部、657は全体に施釉のある美濃焼の鉢である。

溝状遺構 SD1535 (図94)

調査区北西部の上段、B・C-2グリッド内で検出した。溝は不定形をしており人為的な痕跡が認められないことから自然流路の可能性がある。上層より頁岩製の剥片石器が1点出土している(1083)。剥片石器は出土状況から見て二次堆積の可能性がある。その他、時期を特定するような土器片が出土していないことから溝の正確な年代は不明である。

溝状遺構 SD1377 (図94)

調査区南西部のE-3グリッドで検出した。調査区境であったため区外へ連続する。底面で須恵器杯Bが出土していることから、溝状遺構の年代は奈良時代末~平安時代と考えられる。近くに同時期と思われる柱穴が検出されているが、住居跡などの遺構に伴うものではない。溝跡の断面は逆台形に近い。

溝状遺構 SD1644 (図94)

調査区南西部のD-2グリッドで検出した溝状遺構である。長さ4mでほぼ真直ぐ伸びる。溝内からは須恵器(灰釉?)杯が出土した。ほかに宝珠形のつまみを有する坏蓋片も出土していることから奈良時代末~平安時代の遺構であろう。周辺で検出された掘立柱建物跡の築行方向とほぼ併行するが、どの遺構に関連するものであるか特定できなかった。

溝状遺構 SD1731 (図94)

D・E-4グリッド内で検出した溝状遺構である。南西側にはSB01・02がある。北端部は斜面下方で消滅している。出土遺物がなかったため、時期年代は不明である。

溝状遺構 SD1730 (図94)

E-4グリッド内にあり、西側斜面下にはSB01・02がある。溝中央で90°に屈曲する。周辺に関連する遺構は見られなかった。溝内から出土した遺物もなく、遺構の年代は不明である。

溝状遺構 SD1520 (図94)

調査区のほぼ中央、C-4グリッド内で単独に検出した。溝内の覆土はオリーブ褐色のシルト質層であった。5群とした灰釉陶器の碗が出土している。口縁を外側に引き出した碗(652・653)および比較的高い高台をもった碗(654)は深碗になろう。遺構の時期は中世と考えられる。

溝状遺構 SD1462 (図94)

調査区北東部のC-5グリッド、3号窯の西側に接する位置で検出した。覆土はオリーブ褐色土である。灰釉系陶器の小皿(666)と剥片(S-212)が出土した。出土土器の年代から中世の時期であろう。

このほかの遺構から出土した土器を図95に示した。658はSD1644より出土した須恵器の坏蓋である。宝珠状のつまみを有し外面は回転ヘラ削りによる整形を施している。659はSP1680から出土した坏蓋

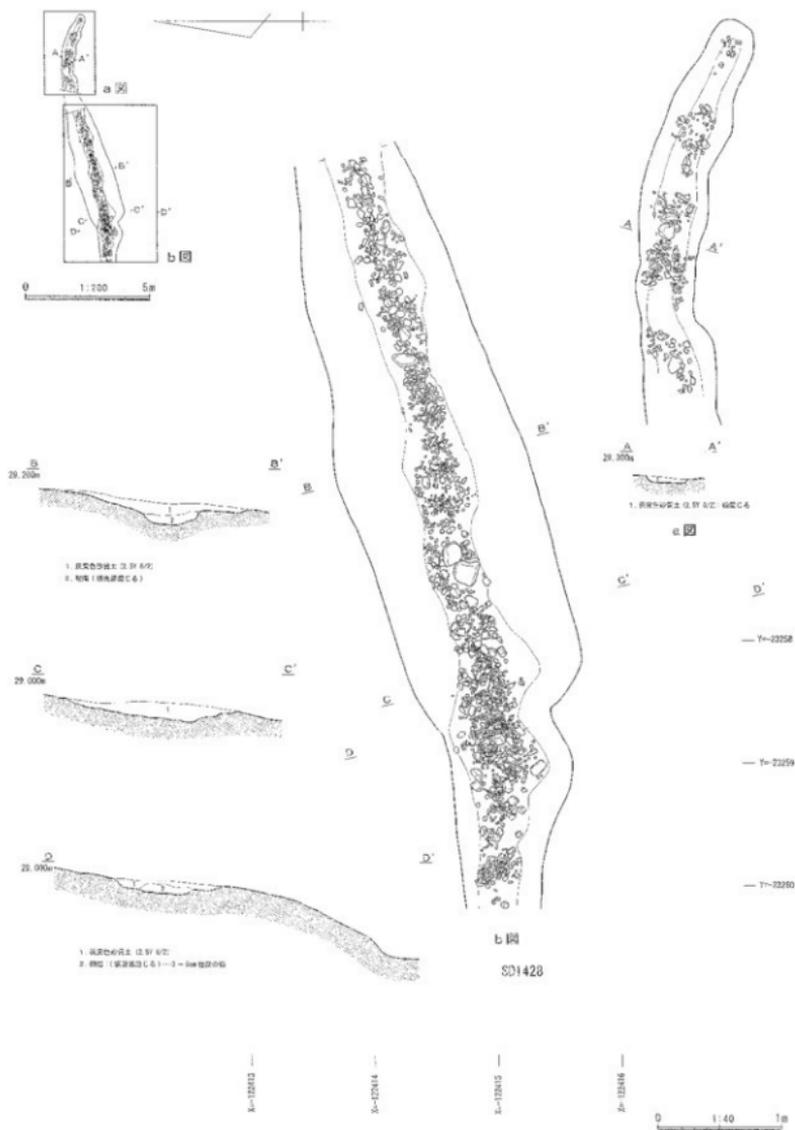


图93 E区滑状遗構 SD1428

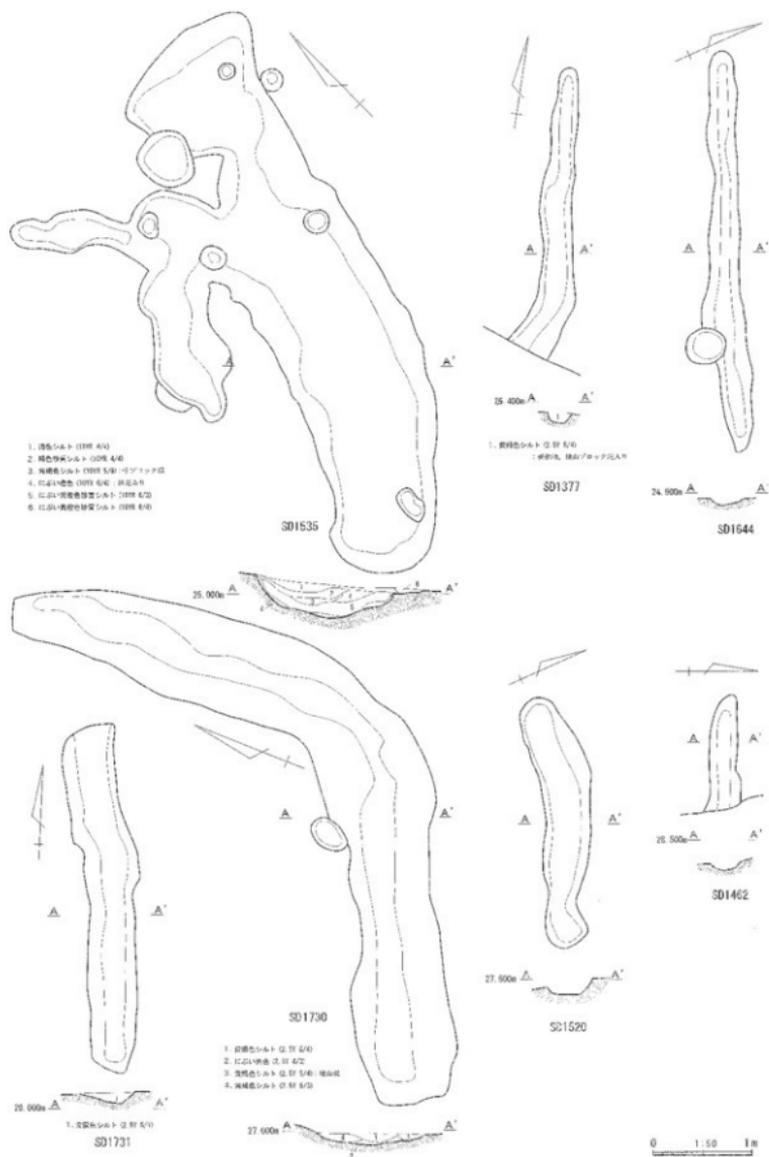


図94 6区土器遺構

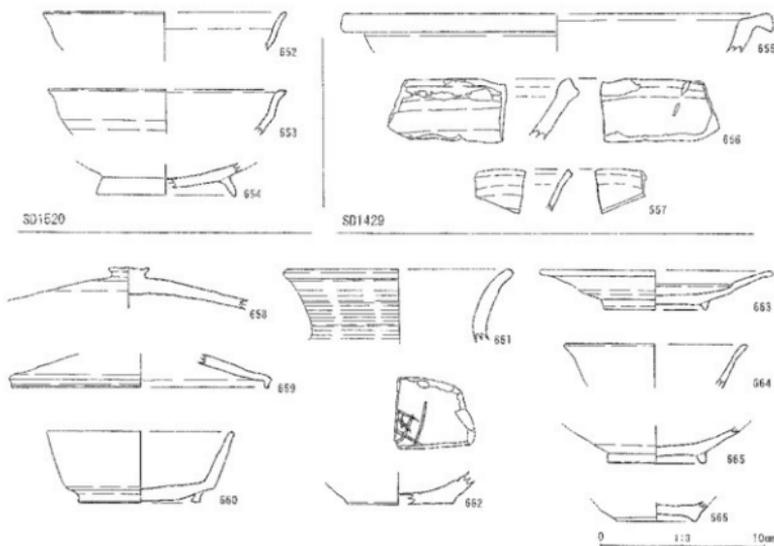


図95 6区溝状遺構・土坑出土遺物

である。外面の縁に自然降灰軸が付着している。660は須恵器の坏身である。SD1377より出土した。口径が10cm程度でやや小振りである。外面全体に自然釉が付着していることから、意図的に伏せて焼成した可能性がある。661は須恵器の甕の口縁部である。SP1574から出土している。口縁部の外面には幅広のカキ目があり、その上には自然釉が付着している。662は須恵器の瓶類の底部と思われる。SP1593の掘形内より出土した。内面の底にはヘラ状工具の線刻があり降灰軸が見られる。663はSX1446の上層で検出されたSD1527より出土している灰釉陶器の段皿である。664はE-2グリッド内のSP1642より出土した山茶碗である。665は陶器の碗である。C-5グリッドのSD1461より出土した。口縁部は欠損しているが、体部に施釉の痕跡がある。灰釉系陶器の小皿である666はSD1462より出土した。底部に高台を貼り付けているが全体に粗雑な作りが目立つ。

攪乱 1373 (図79・96)

調査区の南西隅にくぼ地を検出した。もともとは丘陵の掘部分に自然流路または池等があったものと思われ、くぼ地内には護岸または土留めの丸太・杭があった。ここから幕末～近現代の陶磁器が出土し、上層～中層にかけては現代の造成土であることも判明した。特に攪乱(1373)の北側は近世以降に大きく削平を受けており、この土砂をくぼ地へ埋めた可能性もある。近代に大がかりな造成が行われたと思われる。地山に近い底部では須恵器が出土している(670・671)。奈良時代(8世紀代)の上器である。この時期の土器が最も古く、攪乱土の中から出土したその他の土器片は陶磁器片などがあり時期幅が広い。

668・669は黄灰色礫混粘土層より出土した。同じ攪乱内より須恵器の底部片～陶磁器が出ていることから、これらの年代は奈良時代～近世に属する木製品と思われる。668は曲物の側板部分である。ヒノキの薄い柱目材を使って作られている。側板の高さは4.80cm、厚みは0.50～0.35cm程ある。側板の縦じ合わせが2箇所残っている。カギ紐の部分には菱形に漆を塗って補強している。左側面に大小3箇所の孔が貫通している。曲物内面は赤茶色に塗られ、外面には赤茶色の上から黒漆が塗られている。また

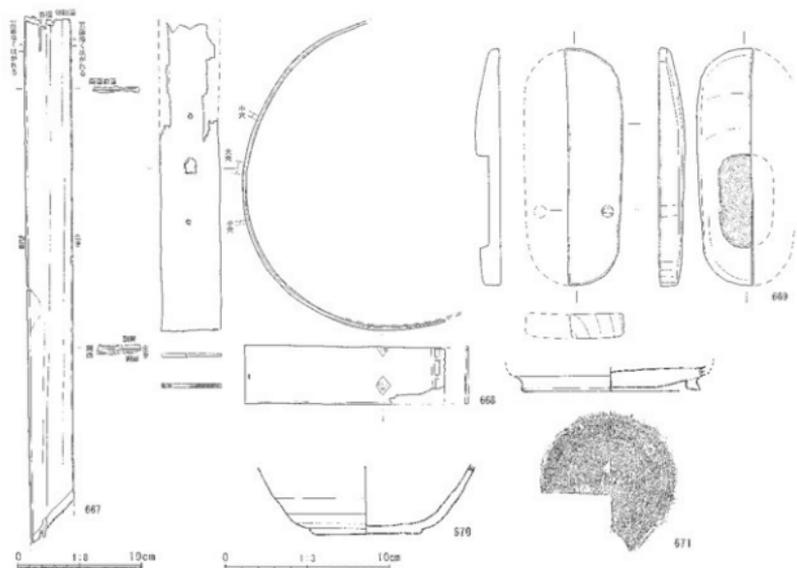


図96 6区1373(捜乱)出土遺物

底板との接着部分にも厚く黒漆が付着していることから、側板と底板とを結合する際、接着の役割も果たしていたと思われる(円形曲物ではなく折敷であった可能性もある。)669は「無歯下駄」で平面形は小判形を呈する。スギの芯去材で木表面が台表面にあたる。長さは19.40cm、残存幅は4.40cm、厚さは最大2.10cmある。「木履(はっくり)」と呼ばれるもので、「歯が両小口のみでなく、側面も台板と一連であるもの」(木村 2005)である。台表面は平坦、台裏面は後頸寄りの部分が隅丸方形に削り抜かれ、前頸側が爪先に向かって薄く削られている。孔は円形で後蓋の1箇所が残存している。孔は台表から裏面の削り抜かれた部分に向かって穿孔しているため、やや斜めに開いている。表面の一部に赤い顔料の痕跡、裏面には黒い顔料が残っていることから赤漆と黒漆塗りの下駄であったと思われる。

6区包含層出土の遺物(図97~100)

6区からは古墳時代および奈良時代の須恵器、灰釉陶器、中世の施釉陶器と各時代にまたがる各種の土器が出土しており、その量も比較的多い。量的に中心的な位置を占めるのは5群とした折戸53号窯式あるいはそれ以後に併行するいわゆる「第6段階」の灰釉陶器である。

須恵器は1点の古墳時代のもの(672)を除けば、高台をもった坏に代表される奈良時代のもので、高台を底部の外側寄りに付けたものと比較的内側に付けられた角張った高台をもったもの、あるいは削り出しの高台をもったものがある。後2者は助宗古窯産の須恵器であり、底部の外寄りに高台をもったものは助宗古窯での生産が本格的に始まる以前のもので、奈良時代前期に位置付けられる。胎土から一部に湖西古窯産と思われる坏も含まれている。

削り出し高台をもった坏は、先にも述べたように静岡市内荒遺跡では狼投古窯跡群のK14号窯式あるいはK90号窯式段階の灰釉陶器と伴出しており、これらの須恵器が、少なくとも一部は9世紀代に及んでいることが分かっている。また駿河のいくつかの遺跡では内荒遺跡と同様に両者が伴出している例

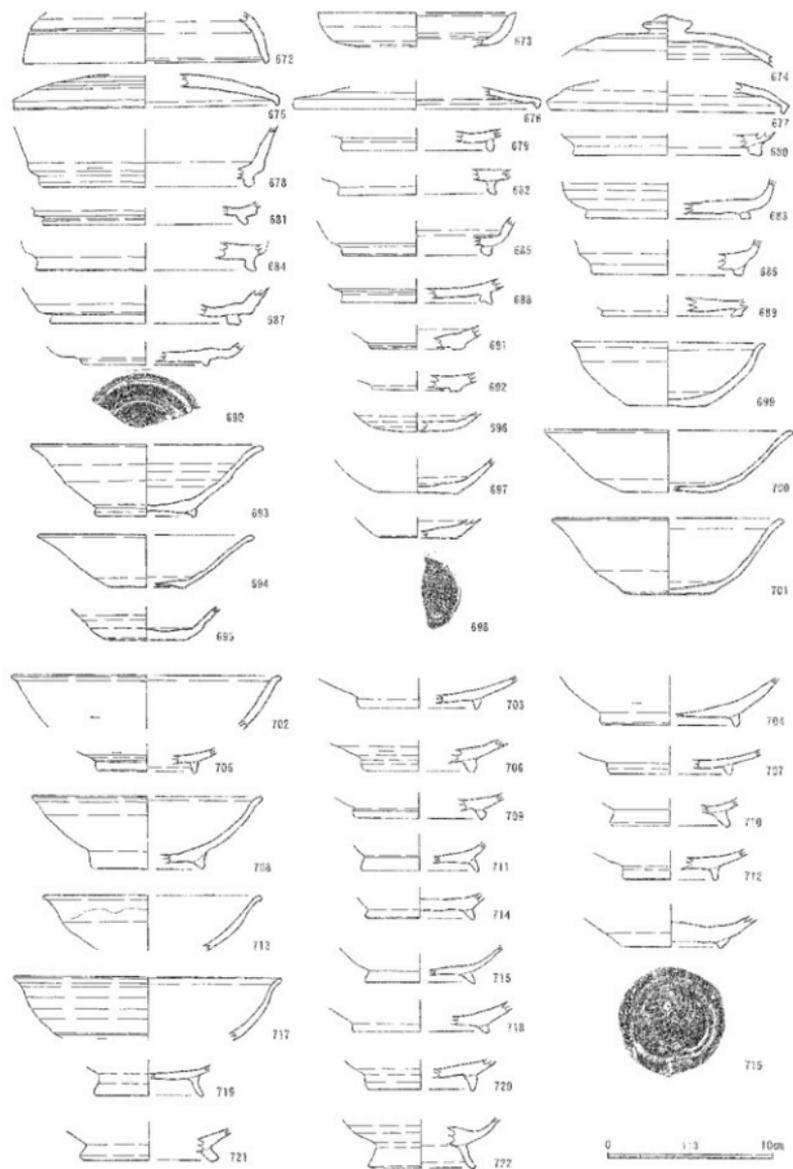


图67 0区包含层出土遗物 1

が認められており、その多くは官衙推定遺跡である。K14号窯式・K90号窯式段階の灰釉陶器を多量に出土する遺跡の性格が地方官衙あるいはこれに類する遺跡に限られるらしいことも理解されてきているので、逆にこれらの土器群をもたない衣原遺跡の性格を推定することができよう。

5区から出土した土器の量は5群の灰釉陶器が最も多い。小破片が多く、復元できたものは少ないが底部を中心に復元したものを図化した。碗・皿の類が大半である。釉の発色はほとんど認められない。

1群土器には672の坏蓋がある。推定口径15cmと比較的大ぶりの蓋である。天井部と口縁部の境に1条の沈線をめぐらせている。

2群土器には付け高台をもった坏と坏蓋がある。高台の位置は底部の外側（鉢部に近い位置）に付けているものが多い。673に示した須恵器皿も認められる。

3群土器は高台の断面が角になり、底部の比較的内側に付けられたものをここに含めた（678～689、696・697・699）。699のように高台をもたない坏もある。

4群土器 高台をもたない坏（694～698・700・701）で、底部は平坦なものが多い。削り出し高台をもった須恵器である（690～692）。量は多くはない。

5群土器 折戸53号窯式およびそれ以後の灰釉陶器で、胎土から東遠江産の灰釉陶器であろう（702～715・717～722）。高台部分の形態から、高台断面が三月型になるもの、それが崩れて、三角形になるもの、外側に張り出しているもの、あるいは高台が高くなっているものなどいくつかに分けることができる。

6群土器 716に代表されるように高台は三角になり、低く目立たない。底部は糸切り痕を留めている。いわゆる山茶碗である。

723～732は壺・甕・甗類、その他である。723は須恵器の小片だが、蓋の類になるものであろうか。724も須恵器の小型蓋の類になろうか。725は須恵器の大壺類の口縁部である。水甕としての用途が考えられる。726は灰釉陶器の碗である。年代は11世紀後半～12世紀初頭のもので山茶碗が登場する直前の時期であろう。727は灰釉陶器の壺底部片である。728は須恵器の壺で底部は平底を呈する。729は灰釉陶器の壺胴部で、猿投産であろう。外面は施釉し、肩から胴部にかけておそらく2箇所の耳をもっていたものと思われる。耳には工具による円形孔が穿たれている。730・731は須恵器長頸壺である。いずれも頸部片のみで、口縁や体部は欠損している。732は土師器の甕である。

733～755は近世の上器である。本調査区で出土した陶磁器はいわゆる生活域によく見られる種類であるが、遺構の種類などから見てもここが当時の人々の居住域であったことは間違いないであろう。居住者の所有物であった陶磁器を見ると、その身分は比較的裕福な層であったと想像される。733・734は美濃焼の片口で18世紀末ごろの所産である。735は志戸呂焼の天目茶碗で、17世紀初頭から始まった連房登り窯の製品であると思われる。736は筒型香炉である。体部には厚く施釉されている。737・738は暗褐色シント層（地山直上）から出土したかわらけである。呑みをもつが比較的薄手のつくりである。739は須恵器の壺の口縁部である。740は瀬戸焼の片口だが、近現代（19世紀後半）のものであろう。741～748は播鉢である。このうち741～745・747は瀬戸焼の播鉢である。いずれも19世紀前半～後半のものである。746・748は志戸呂焼の播鉢で、746は後IV期新段階、748は第IV～V期の所産である。749・750は近世の炭窯である5号窯（計1）から出土した陶磁器である。いずれも瀬戸焼の水甕で、内面底部にトチン振やタール状の黒い付着物がある。750の外面にはへう描き文様がある。751も瀬戸焼の水甕である。体部には棒状の波状沈線がある。752～754は瀬戸・美濃焼きの片口である。752・753は美濃焼で登窯8または9期（18世紀末～19世紀初頭）、754は瀬戸焼で18世紀末～19世紀半ばの時期である。755は志戸呂焼の碗である。時期は18世紀代と思われる。

冒頭で述べたとおり、本調査区から出土した土器は古墳時代から近・現代まで幅広く年代があるということが特徴である。特に灰釉陶器以降、継続的に居住域として使われていたと思われる。近世以降

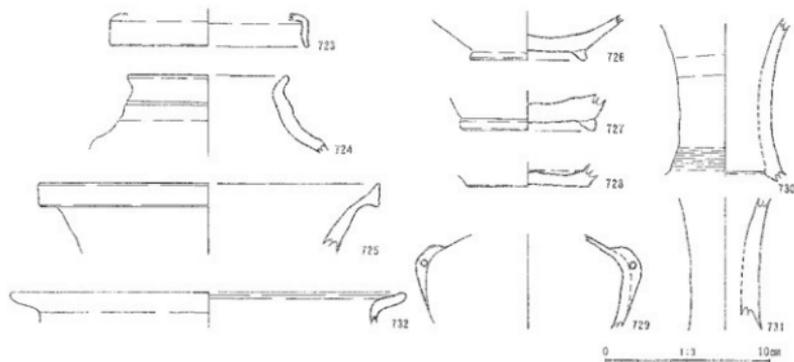


図98 6区包含層他出土遺物2

も生活域としては変わらず、あるいは5区で見つかった火葬墓はこの居住者のものであった可能性も指摘できよう。

756～762は金属製品である。756・757は板状の鉄製品だが、遺存状態が悪く用途は特定できない。758も用途不明な銅製品である。長さ7cm程の細長く薄い銅板をU字形に折り曲げ、途中2箇所に同一素材の釘が打ち込まれている。759は1451より出土した棒状の鉛製品である。釘のような形態をもつが上下端部が欠損しているため用途は特定できなかった。760～762は金属製の釘である。いずれも6cmを超える長さをもっていたと思われ、他の集落内の釘と比較して大型の部類に入る。760は1436から出土した釘である。遺存状態は極めて悪く、先端部も欠損している。761は1441から出土した。762は下半分が折損している。

763～766は6区の遺物包含層より出土した石製品・石器である。763は淡褐灰色凝灰質泥岩製の小型砥石である。携帯用の手持ち砥石であったと思われる。長方形であるが使い減りして中央部分が細くなり折損したのであろう。5面とも擦り面でかなり使い込まれている。764は磨製石斧であろう。暗灰色細粒砂岩製で全面研磨され上端部には面を作り出してある。対する下端部は刃部状になっており、刃を作り出していたと思われる。現在刃部は敲き潰されている。基部側面に浅い抉り込みがあるが、欠損している部分である。形状から見て小型ではあるが縦斧として利用されていた石斧であろうと思われる。磨製石斧の存続時期は静清平野でも弥生時代後期になると鉄器化が進み石斧は姿を消すが、縦斧は部分的に後期末まで存続することがわかっている（註2）。765は大型の砥石である。灰色中粒砂岩製、使用面は3面ある。全体に被熱しており、特に正面側の範囲が最も著しい。最大長は23cmを超えることから据え置き型の砥石であったであろう。766は黒色珪質粘板岩製の打製石鏃である。基部中央部の両側面がわずかに突出している。形態は無蓋凹基式であるが、脚部はどちらも欠損している。

767は土罐である。長さ2.9cm、最大径1.4cmで孔の内径は0.5cmをはかり、管状を呈する。重量は4.736g。表面はかなり摩滅している。

冒頭で述べたように、調査区南西部では奈良時代～中世の包含層と、近世の包含層が確認できた（図81）。この包含層中より鉄滓が67点出土している（表50）。調査区南西部は中世～近世にかけての時代に、大規模な地形の改変を受けている可能性がある。もともとは丘陵の裾部の谷地形となっており低地部は利用されていなかったと思われるが、後世（奈良時代以降）に造成されてから建物が建てられていたようである。

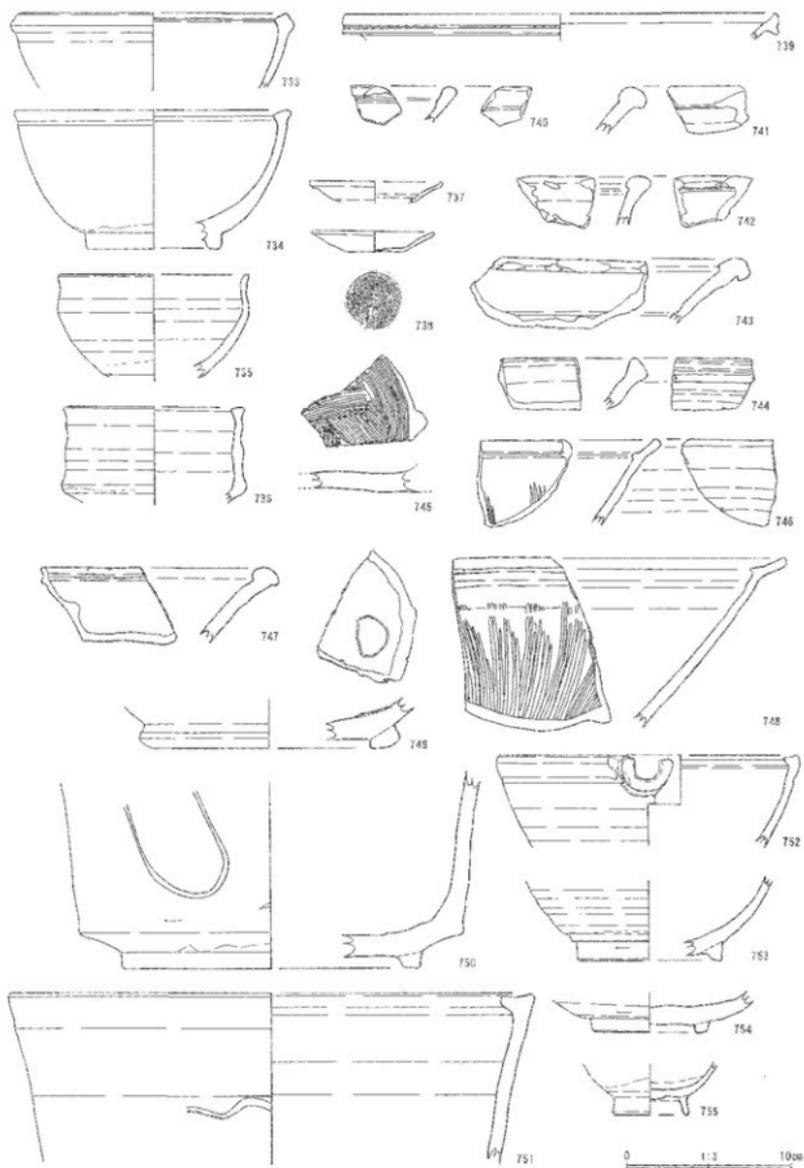


図96 6区遺構・包含層他出土遺物 1

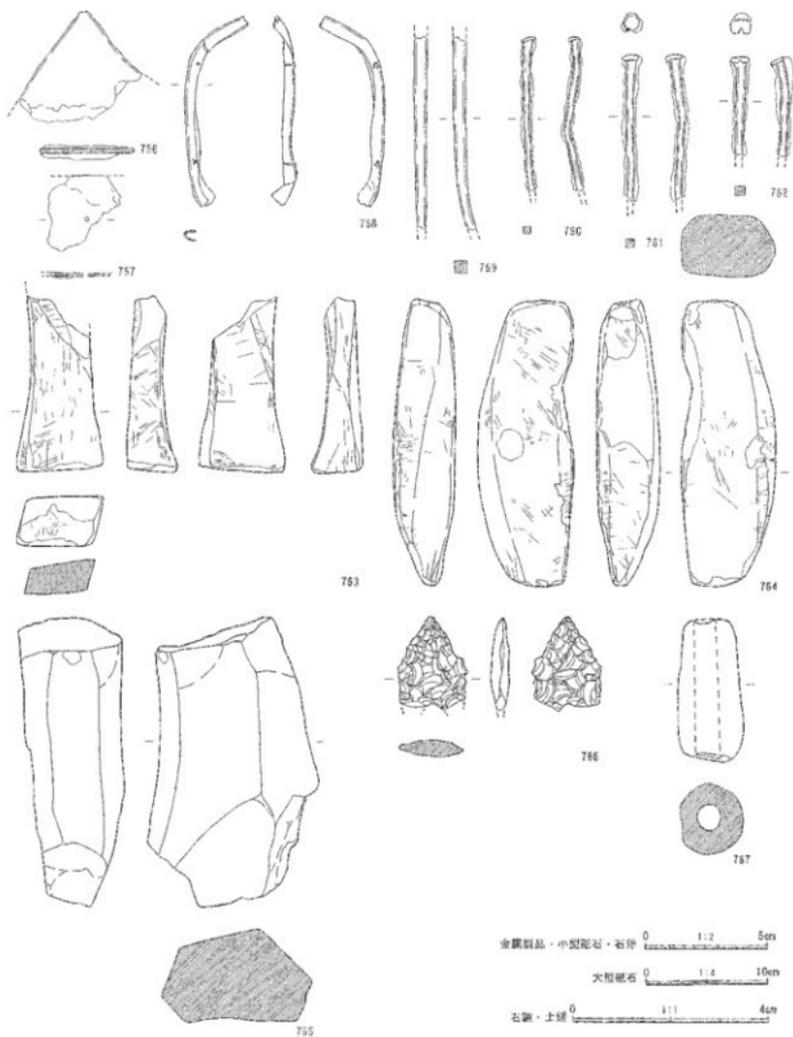


図100 6区遺構・包含層他出土遺物 2

註

- 1 5号室についての詳細は第4章に掲載している。
- 2 平野吾郎 1986 「東海地方における弥生時代の石器について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要1』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

6. 7区

7区は本調査Ⅲ期として平成14年11月1日～平成15年3月20日までの約5ヶ月間、調査が行われた。調査区の位置は衣原古墳群が立地する丘陵からさらに南へ延びた標高約20mの河岸段丘頂部にあたり、現存する貴船神社の北側である。調査対象地は現代の宅地造成や茶樹の改植の際に重機による攪乱を受けているため、遺構の残存状況はかなり悪い状態であった。そのため遺構検出面は某壁面直上の1面のみである。遺構面の上層は茶畑等の耕作土であった。グリッドは調査区全域をカバーするように配置した(図101)。遺構密度はそれほど多くはなく、調査区西側と東側に片寄っている。調査区のCグリッド以北とHグリッド以南にはほとんど遺構が検出されなかった。調査区南西の平坦部に掘立柱建物跡10棟、北東部の斜面部に竪穴住居跡3軒および柱穴群を検出した。掘立柱建物跡のうち大型のものは、柱穴が0.7～1.0mあり、1間×3間以上の建物であったと考えられる。またその他の柱穴は径0.30m程度が多く、検出面からの深度は0.25～0.30m程度であった。なかには0.50m以上の深さをもつ柱穴も見ついている。柱穴の覆土はほとんどが単層で暗褐色土層(炭化物、1～5mmの小礫含む)や黄褐色土層(炭化物、1cmの小礫含む)等であった。柱穴内や遺物包含層中からは小片ながら須臿器・土師器・山茶碗等が出土した。竪穴住居跡は調査区の南東端の斜面地で見ついている。住居跡は楕円形が2軒、隅丸方形を呈するものが1軒ある。同時期の住居跡は当遺跡の東に隣接する寺家前遺跡でも見ついているが、本調査区の住居跡はそれらとはやや離れた場所に立地しており、周囲に群をなす様相もない。あるいは南側の調査区外へ広がる可能性もあるが、現段階では明らかにはできない。出土した土器の年代から見て、竪穴住居跡は弥生時代後期末～古墳時代前期、掘立柱建物跡や柱穴群は奈良時代～中世の遺構と考えられる。その他の調査区内には柱穴列や焼土跡、土坑1基、溝状遺構などがある。調査区の基本

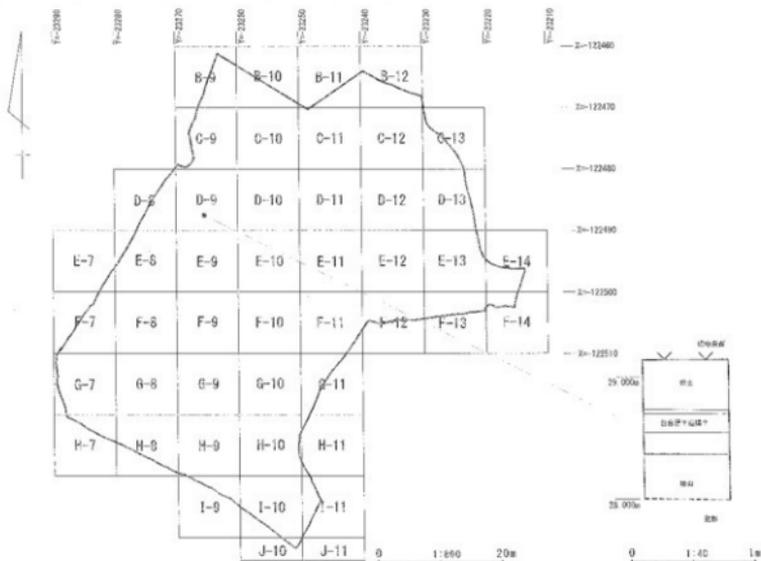


図101 7区グリッド配置図・基本土層



図102 7区遺構全体図

層序は図101に示す通りである。

竪穴住居跡 SB01 (図103)

調査区の南東境、南側に緩く傾斜する斜面で検出した。後世の擾乱による破壊が激しくほとんど残っていない。南側の壁溝の一部と柱穴が確認されたのみである。主軸方向はN-11°-W、竪穴住居の構造体を呈す。規模は長軸で6.5m、短軸は6.0m、主柱穴は4箇所ある。柱間は長軸3.25m、短軸3.25mあり、壁溝は南面側しか残っておらず、斜面下部側は確認できなかった。炉跡や床面、排水溝などの施設は残存していなかった。また、壁溝の形状から方形の住居跡と考えられる。壁溝や柱穴に重複などがないことから、建て替えはなかったものと思われる。

768・769はSB01の壁溝より出土した壺底部片である。どちらも表面が摩滅しており調査が見えない。出土土器の年代からの判断が難しいが、住居の形状などから古墳時代前期と推定される。768は壺底部の破片である。胎土に小礫の含有物を多量に含む。表面調整は剥離が激しくほとんど残っていない。769は復元底径で10cmを超えることから大型の壺であろう。土器の年代は底部片からでは特定が難しい

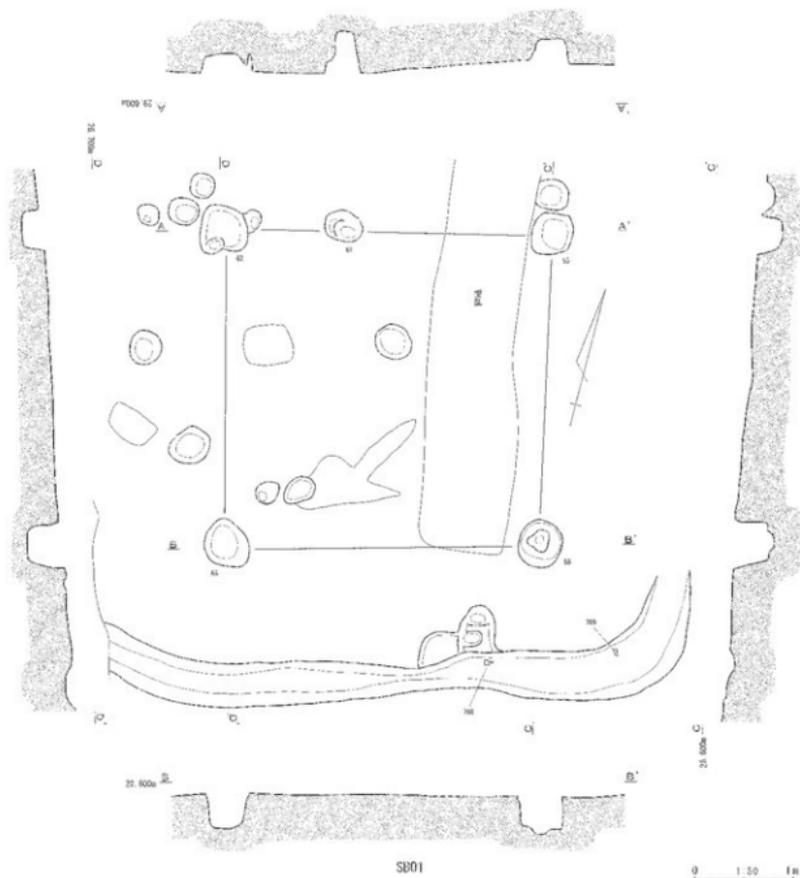


図103 7区竪穴住居状遺構 SB01

がおおよそ弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。

竪穴住居跡 SB02・03 (図104・105)

調査区の南東隅、竪穴住居跡 SB01の10m程東側で SB02と SB03を検出した。住居跡は北東側に傾斜した斜面の際に立地する。竪穴住居跡は残存部の状態が良好で、検出面から床面までの深度は深いところで0.5m程ある。2 軒は切り合っている状態で発見された。まず SB02が建てられ、その後、斜面の低い方向に SB03を建て替えているが、建て替後は住居の規模が小さくなっている。SB02の主軸方向は N-25° -W、竪穴住居の構造体を呈す。平面プランは楕円形である。規模は長軸方向に約7m、短軸は6m程、主柱穴は3箇所ある。柱間は長軸3.2m、短軸3.15m、壁溝は南西面側しか残っておらず、斜面下部側は確認できなかった。遺構覆土は灰白色粘土に明黄褐色粘土がブロック状に混じり少量の砂礫

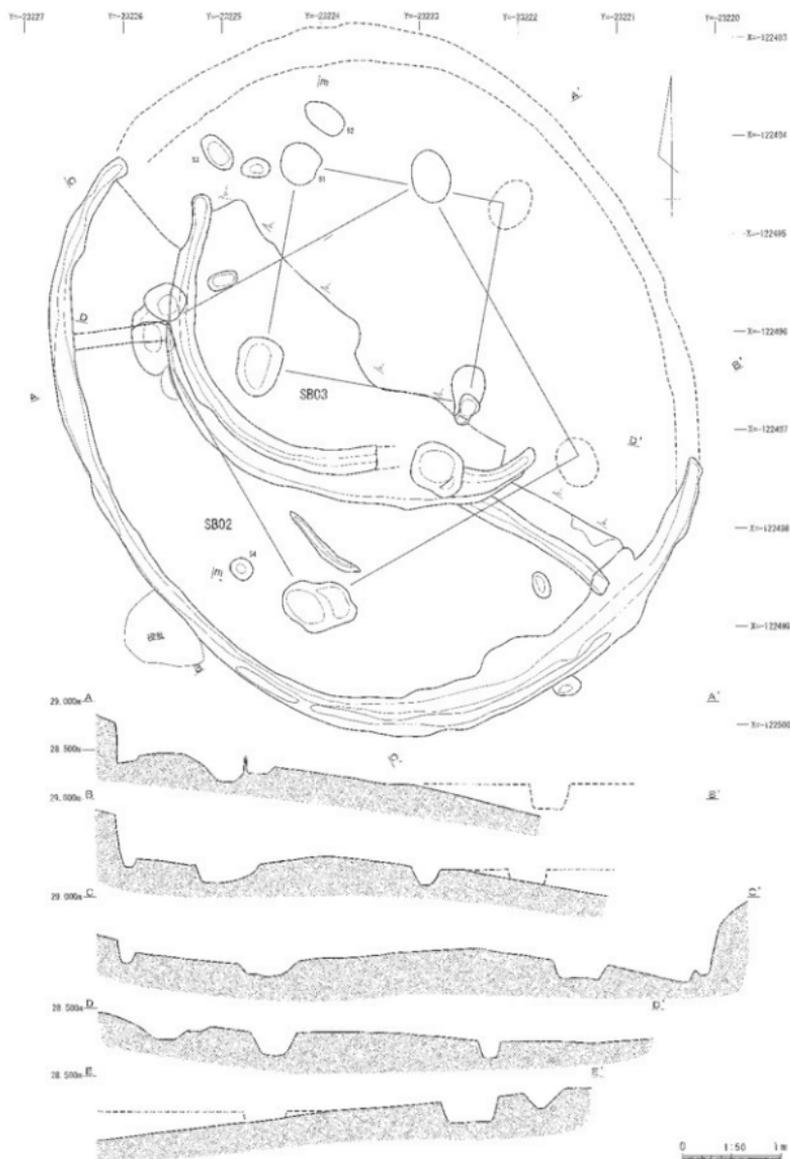


图105 7区整穴住居状道構 SB02・03 完概状況

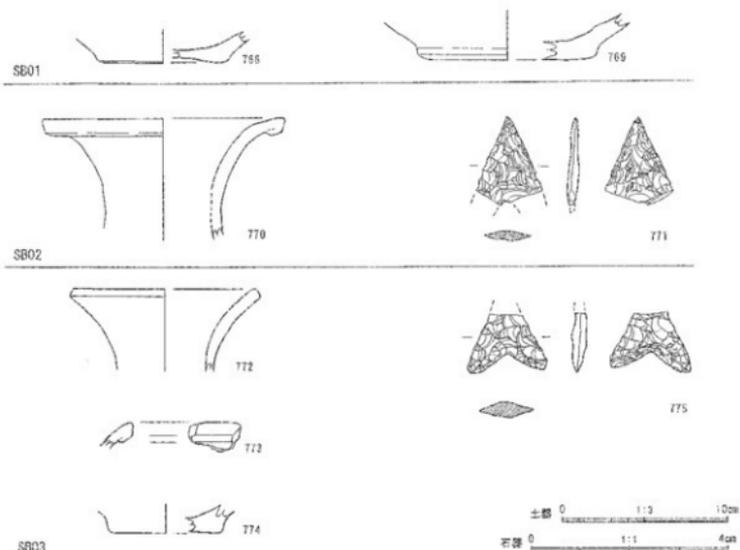


図106 7区壁穴住居状遺構 SB01~03 出土土物

を含む。当初、住居跡の壁が崩落したものと思われたが、その後建て替えられた SB03 の掘削時に地山の土を裏込めのように埋めた可能性が考えられる。また SB02 側の柱穴への覆土も SB03 掘削土と同様に地山に似た土である。SB02 の壁溝と貼床面から建築用材と思われる炭化材が出土した (図104)。焼土が広がってはいなかったため焼失家屋ではない。建て替え時に壁溝にまとめて廃棄した可能性がある (註1)。が跡は検出されなかった。SB02 の貼床 (褐色粘土) は、土層断面での観察上では部分的に薄く二重になっている箇所が確認できた。おそらく床面を修復しているものと考えられる。調査段階では床面検出段階で記録をとり、床面を外し、柱穴を検出しながら掘形まで掘削した。SB03 住居内南西側では溝状遺構を検出した。排水の目的をもつものであろうか。SB03 掘削時の土の下にあることから SB02 に伴うものであろう。SB03 の主軸方向は N-10° -E、同じく壁穴住居の構造体を呈す。規模は長軸約4.5m、短軸は4.0m、主柱穴は3箇所ある。北東面側は斜面により流れてしまっている。SB03 の南面壁溝内にある穴はどちらの住居跡に伴うものか不明である。SB03 に伴うものなら出入口か、SB02 に伴うものなら貯蔵穴の可能性も考えられる。切り合い関係から見ると SB02 の溝状遺構よりも新しい。

出土土器は非常に少ない。床面直上などの時期年代を決める土器がなかった。SB03 では単純口縁の長頸の壺 (772) と胴が張った壺の底部 (774) がある。770 は SB02 の覆土 (暗褐色土層) より出土した壺口縁部である。頸部までの破片で文様帯まではわからない。口唇部は折り返してある、いわゆる「折り返し口縁」である。混入物が非常に多く胎土中にかかなりの割合を占める。表面の調整は剥離して痕跡がほとんど残っていない。弥生時代後期後半期のものであろう。771 は SB02 床面下覆土より出土した。黒曜石製の無茎打製石鏃で両脚部を欠いている。772~774 は SB03 の黒褐色土層より出土した土器である。SB02 よりも新しい時期の住居跡だが、土器の年代自体はさほど変わらず、弥生時代後期後半期の所産と考える。773 は折り返し口縁をもつ壺の破片である。土器の残存状態は非常に悪く、調整

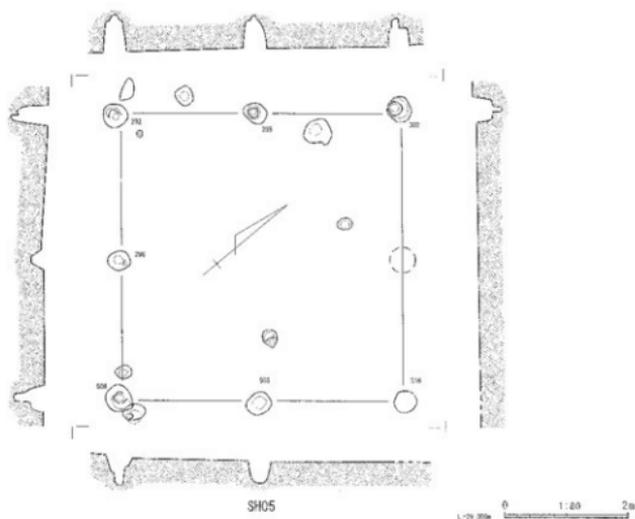
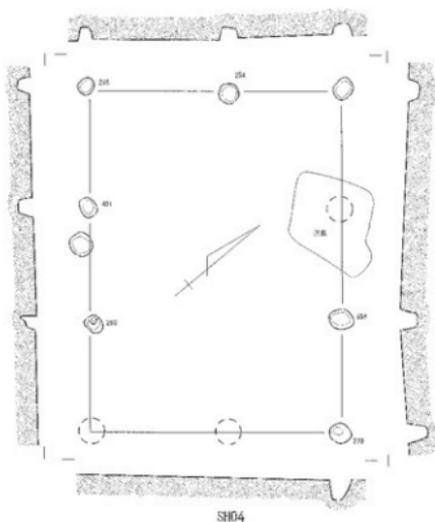


图107 7区榭立柱建物跡 SH04・05

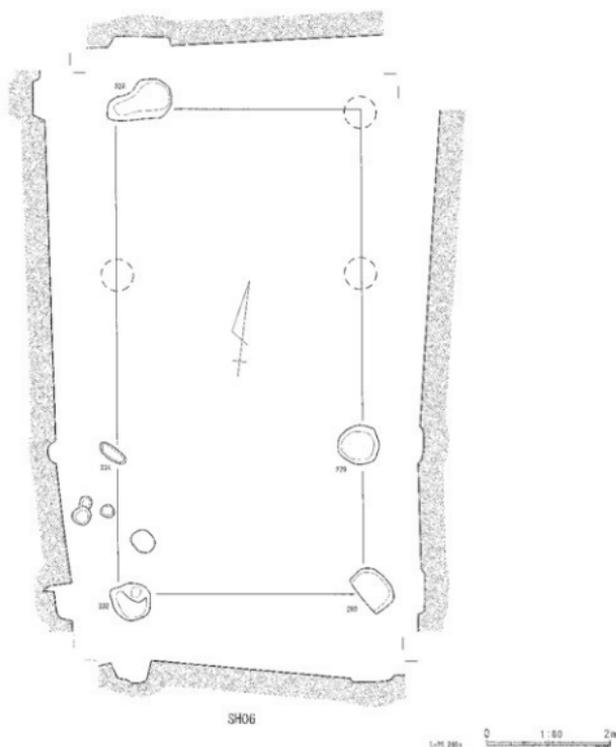


図108 7区掘立柱建物跡 SH06

痕はほとんど見えない。775は打製石鏃で、基部先端が欠損している。淡灰色チャート製。SB03覆土の黒褐色土層より出土した。これらの土器はいずれも弥生後期末あるいは古式土師器と考えられるものであり、これらからSB01～SB03の各住居跡は弥生後期末あるいは古墳時代前期に属するものであることが理解できる。

住居跡の切り合い関係や出土土器の年代から見て、SB02とSB03の時期差はほとんどないであろう。同じ時期の遺構としては衣原遺跡の東側にある寺家前遺跡からも複数の竪穴住居跡が見ついている。同時期に展開した集落であるかどうかの判断は早急にはできないが、寺家前遺跡の竪穴住居群との関連がある遺構と想定される。

掘立柱建物跡 SH04～16 (図107～113、表71)

SH04 (図107) はF・G-10グリッドで検出した掘立柱建物跡である。柱間は1.8m～2.2mある。梁行きは2間、桁行きは3間であったと思われるが、南東側の柱穴を欠く。SP481から土器(P-174)が出土している。

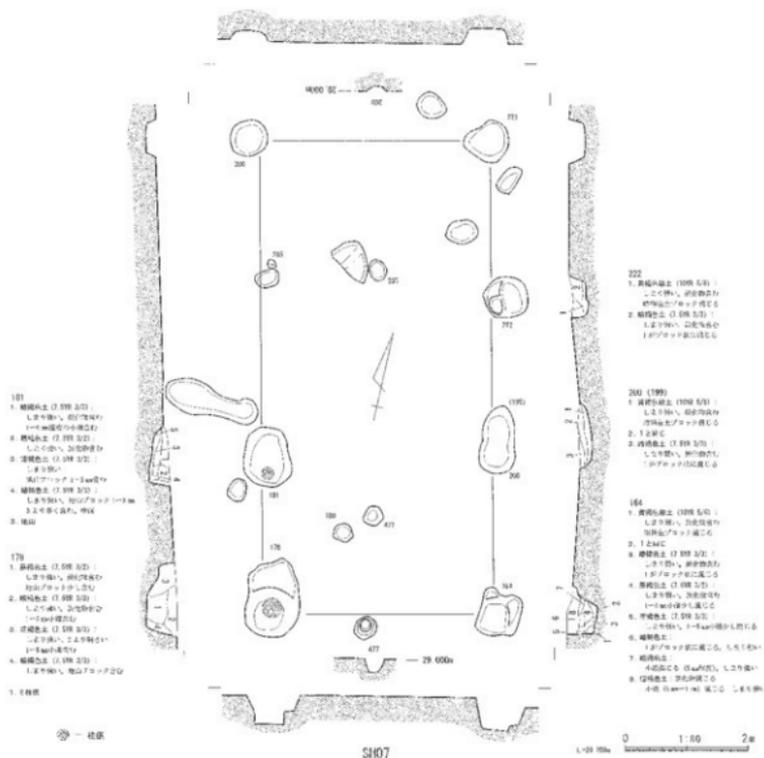
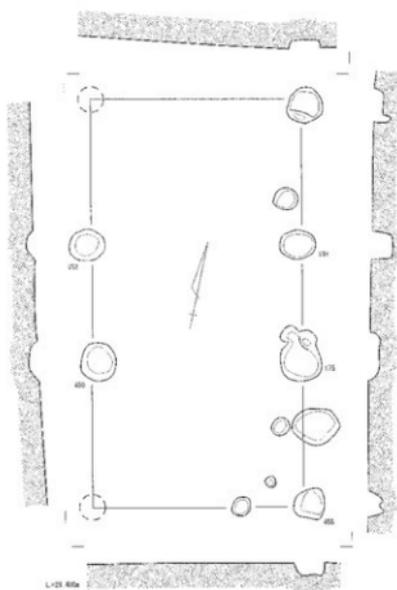


図109 7区掘立柱建物跡 SH07

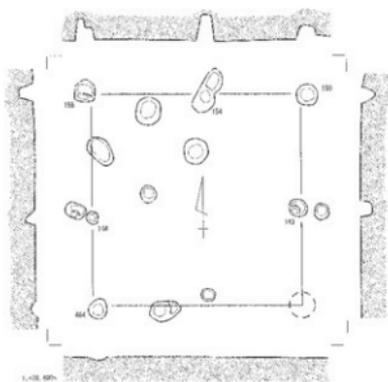
SH05 (図107)は2間×2間の掘立柱建物跡である。柱間は2.2~2.25mであった。北東側の間柱を欠く。柱穴底部には柱の端部が入っていた痕跡が残っている。

SH06 (図108)とSH07 (図109)は大型の掘立柱建物跡である。1間×3間の建物で、径0.6~1.2m程ある柱穴の大きさから見てほぼ同じ規模であったと考えられる。柱間は梁行き方向で3.8~4.0m、桁行き方向で2.2~2.5m程ある。またこの2棟は主軸方向がN-7°-W、N-13°-Wとほぼ同じである。このことから2棟は同時期に存在したか、もしくはほぼ同時期に建て替えられたか、いずれにしても同年代の建物であろう。柱穴の覆土は暗褐色土、黒褐色土に地山ブロックを含む。7区の基本土層から見ると、奈良時代の包含層である暗褐色土と同じ土であることから、奈良時代の建物跡と考えられる。ただし柱穴覆土の下層にあたる黒褐色土は包含層にはない。そのため確実に奈良時代としてもいいかどうか疑問が残る。また柱穴から出土した遺物がなく、7区の包含層から出土した土器も数少ない。調査区全体でも少量の須恵器と灰輪陶器、山茶碗しかないので遺構年代の決め手に欠ける。

SH08 (図110)は規模が一回り小さくなるが、SH06・SH07と同様の構造をもつ。G-7・8グリッド内、SH07の南東側に位置する。柱間は梁行き方向で3.44m、桁行き方向で1.92~2.4m程ある。北西角と南



SH08



SH09

0 1:00 2m

图110 7区排立柱础物跡 SH08 - 09

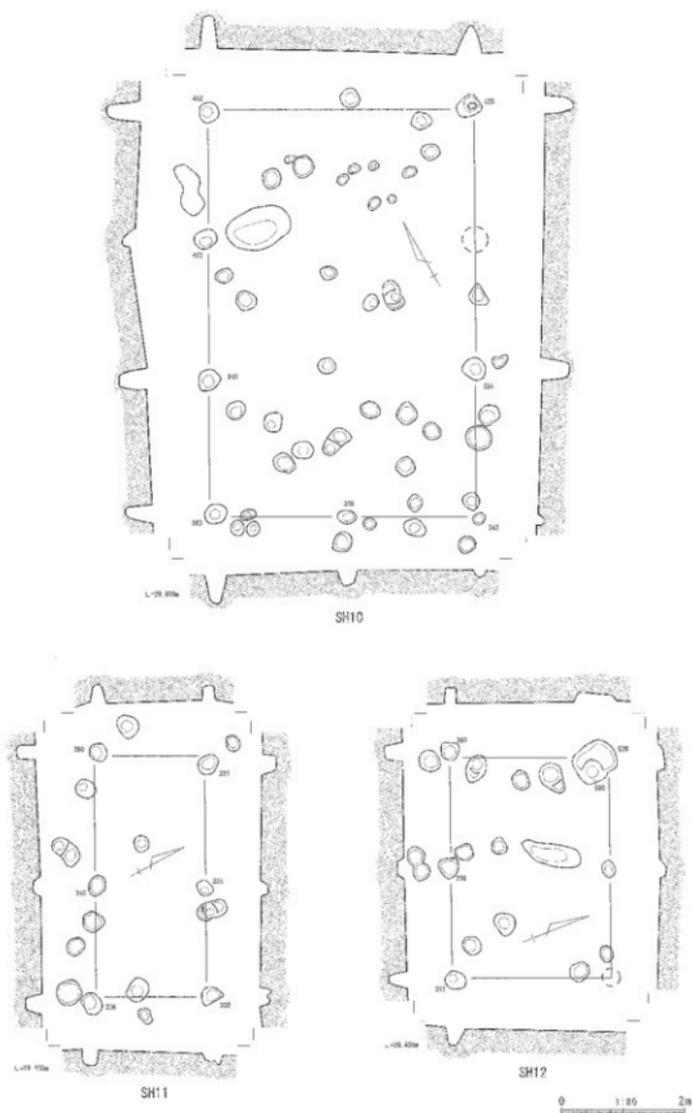


图111 7区独立柱建筑物 SH10~12

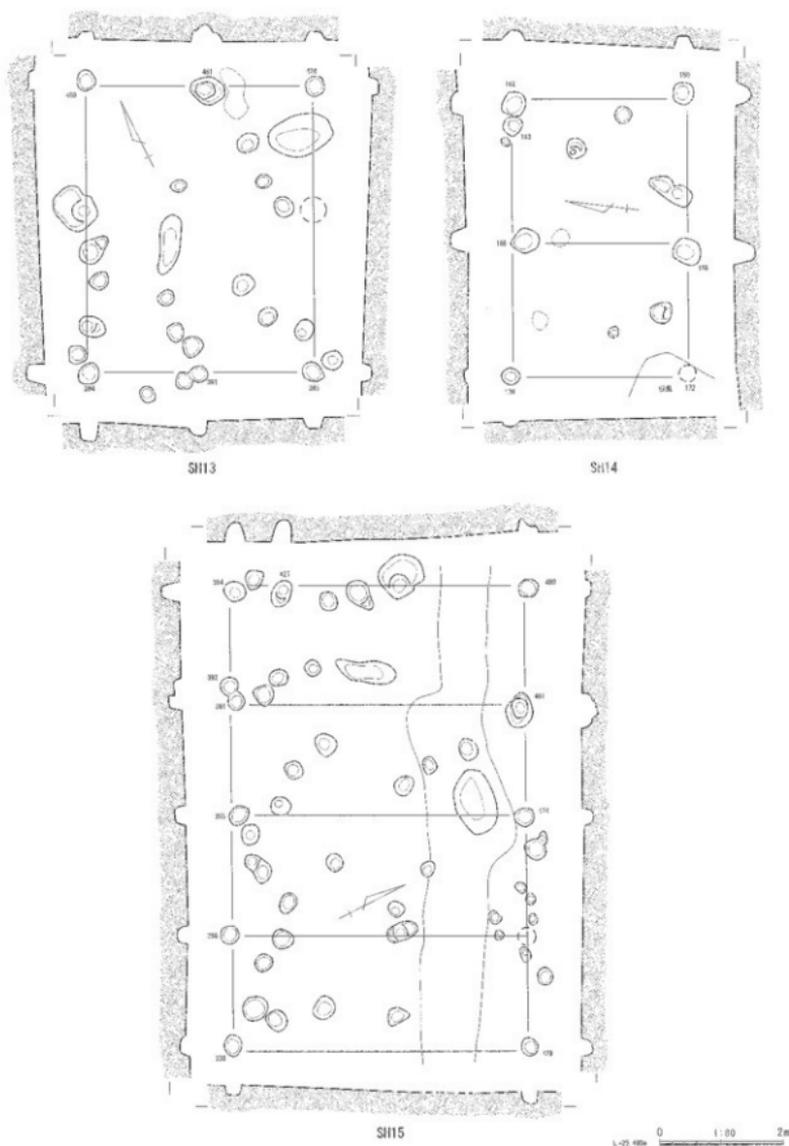


图112 7区掘立柱建物跡 SH13~15

西角の柱を欠く。主軸方向はN-12°-Wである。やはりSH06・07と同時期に存在した可能性が高い。

SH09(図110)は2間×2間の掘立柱建物跡である。G-8グリッド、SH07の南側に位置し、SH14と重複している。梁・桁行きが3.4m程の建物になるであろう。SH06～08と比べて、柱穴の径が0.3mと小さく小規模な建物であっただろう。南東側の柱穴を欠く。

SH10(図111)は2間×3間の掘立柱建物跡である。H-8グリッドに位置し、一部Gグリッドにもかかる。SH09の南側にあり、SH11～16に重複する。梁行きは2.16m、桁行き方向では2.16～2.4m程ある。柱穴は直径が0.3m内外で、柱自体は太いものではなかったと思われる。束柱の存在も考えられるが、明らかに伴うものは確認できなかった。

SH11(図111)は梁行き1間×桁行き2間の建物跡である。H-8グリッドに位置し、SH10と重複する。桁行きの柱間は約1.8m、梁行きの柱間は2.0m程である。

SH12(図111)も1間×2間の建物跡になる。同じくH-8グリッドに位置し、SH10・11・13と重複関係にある。梁行き方向は2.6mあるが、桁行き方向の柱間は1.8m程である。北東角の柱穴を欠く。

SH13(図112)はH-8グリッドに位置し、SH10～12と重複する。2間×2間の掘立柱建物跡だが、桁行きの方が若干長い。梁行きの柱間は1.94m、桁行きの柱間は2.08～2.64m程ある。南東面の間柱を欠く。

SH14(図112)は1間×2間の建物跡である。G-8グリッドに位置し、SH08と重複する。南西の角柱は掘立柱より見つかっている。梁行き側は2.88m、桁行き側は2.20～2.36mの柱間がある。

SH15(図112)は比較的大規模の大きな掘立柱建物跡である。G・H-7～8グリッドに位置する。建物跡はSH10～13と重複する。梁行きの柱間は4.8m、桁行きの柱間は1.80～1.92mある。北東面の柱を1箇所欠く。桁行き側の柱間が広すぎることから束柱が必要であろう。SH15には列9や列10が並行していることから、扉敷の周りを囲む柵列のようなものであった可能性がある。

SH16(図113)はH-7・8グリッドに位置し、SH10～13と重複する。梁行きは4.48m、桁行きの柱間は1.88～2.06mある。北東の角柱を欠くため、あるいは欠けのある建物であったかもしれない。SH15と同じ方位で、建物の規模もよく似ている。ただしSH15とは重複しているため同時期ではなく、建て替えられた可能性がある。後述する列9とは梁方向が、列10とは桁行きが並行している。

以上の掘立柱建物跡の年代はSH06～08のように古くは奈良時代に遡る可能性のものもあるが、SH09～16などのように柱穴の小さなものは、大半、中世～近世の建物であると思われる。包含層から出土した土器の年代幅から見ても奈良時代～近世までおよぶ。このほかにも、柱穴もしくは柵のような並びをもつ列が複数箇所確認されている。以下に記す。

列1～10(図113)

調査区内には柱穴または柵のような並びをもつ列がある。便宜的に列1～10まで番号を付し、順番に記述する。

列1はF-11グリッドにある。3箇所穴の間隔は1.2mと狭い。周囲に関連する遺構は見られない。

列2はG-8グリッドでSH14と重複している。穴は5箇所ですべて「コの字型」を呈する。穴の間隔は1.2～1.6m程で、柱穴としては狭く、また北側に関連する柱穴が見当たらないことから列に含めた。

列3はG-9グリッドの南端に位置する。間隔は1.6m、穴の径としては0.2m程度しかない。また対面する列も見られない。SH06の南面にあたる場所である。

列4はG-11グリッドにある。3箇所穴は並行に並び、間隔は1.84mある。柱穴と思われたが対面する柱穴が周囲に見られない。

列5はF-9グリッドにある。穴の間隔は1.44m、1.84mであるが周囲に関連する遺構は見られない。

列6はG・H-10グリッドにまたがる位置にあるが、掘削の溝跡に沿っていることから新しい時期の可能性もある。覆土は黄褐色土で近世以降の遺構と考えられる。

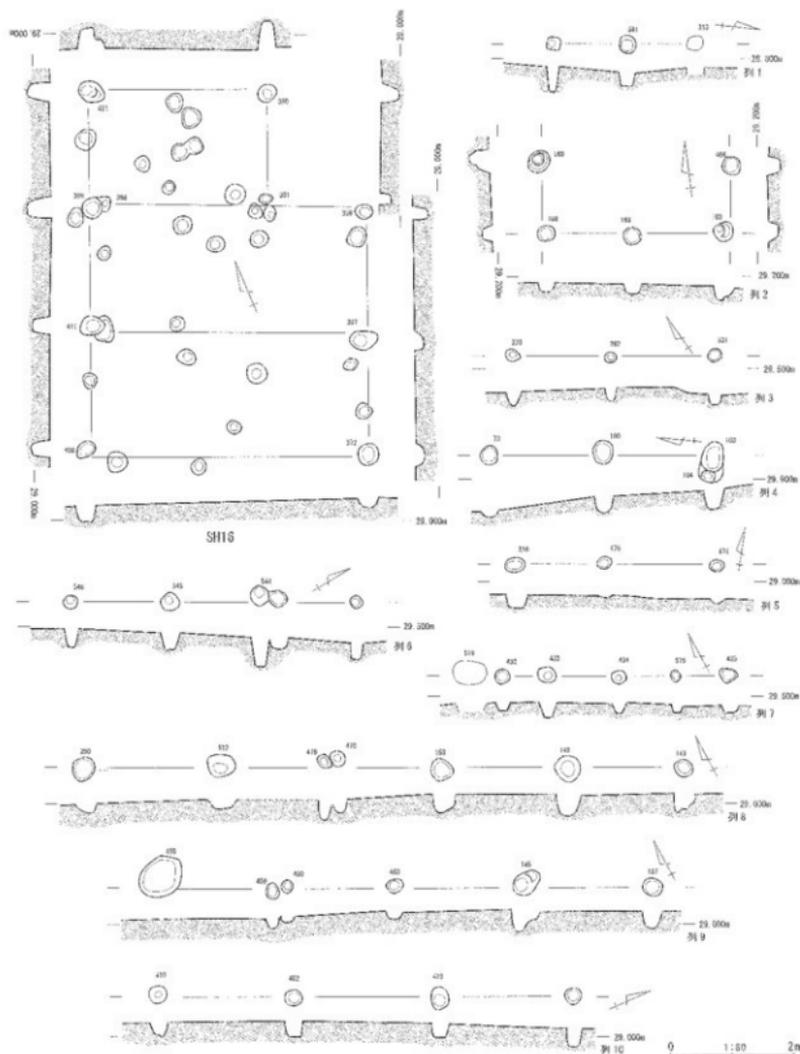


図113 7区掘立柱建物跡 SH16・柱穴列・樹穴

列7はH-9グリッドの中央で、丘陵頂部の平坦面にある。穴の間隔は1.0m前後と、かなり狭い。列の方向は傾斜に対して直交方向である。これも攪乱の溝方向に沿っていることから新しい可能性がある。

列8はG-8グリッド内にあり、列9と並行する。また前述したSH15の北側にあり北面と並行している。穴の直径は0.4m程あり、穴の間隔は狭い所で1.68m、広い所で2.16m程ある。

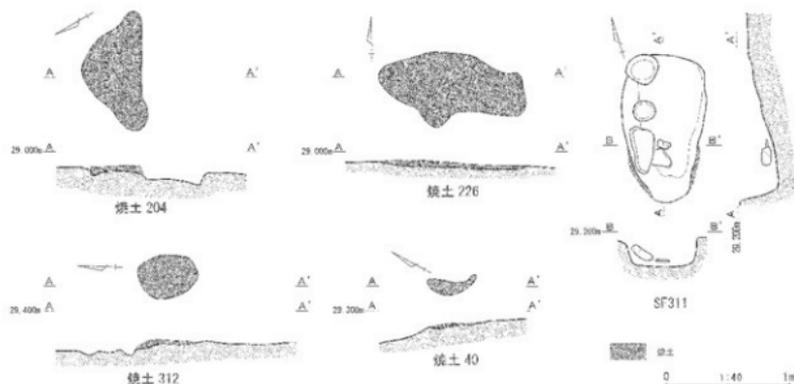


図114 7区焼土および焼土坑

列9は列8と同様、SH15の北面と並行する。穴の間隔は1.84~2.08mである。建物の境界に作られた櫛列であろうか。

列10はSH16の西面、H-7グリッドに位置する。穴の直径は0.3m程度だが穴の間隔は2.16~2.4mと広い。SH16の軒先下辺りにあることから、建物の周りを囲む櫛列であった可能性がある。

SH15・16ともに中・近世以降の建物と考えられることから、この列8~10もこれらの建物跡に関連する遺構であろう。

焼土 (図114)

焼土204は攪乱によって半分以上が消滅している。周囲に関連する柱穴等はなく、原位置を留めていない可能性がある。

焼土226は長いところで2m程の広がりを見せているが関連する遺構はなく時期も不明である。

焼土312は周囲に関連する柱穴などの遺構は検出できなかった。性格・時期とも不明である。

焼土40は狭い範囲で検出された。周囲に関連する柱穴等の遺構はなかった。また、原位置を留めていない可能性もある。

土坑 (図114・115)

SF311は土坑状の遺構で、壁の一部が焼けている。土坑内には大型の礫があったがいずれも土坑底部より浮いている。周囲に関連する柱穴等の遺構は検出できなかった。性格は不明であり、時期についても特定できないが近世以降の可能性もある。

SF582は、ほぼ円形を呈する土坑である。直径は長軸方向で1.3m程ある。覆土(明褐色粘土層)から見ると他の遺構と比べて古いように感じるが、遺物が全く出土していないことから時期は特定できない。

溝跡 (図116)

E-12・13グリッドで検出された溝跡である。SD107・108・114・128・129は一連の溝跡と思われる。SD128の後にSD129が切り合っている。周囲に関連する遺構は見当たらず、区画を示すものでもない。ただ丘陵頂部から谷へ向かう位置で検出されていることから、排水を目的とした溝であった可能性がある。出土遺物はなく時期を判断するものに欠ける。

7区包含層出土の遺物 (図117~119)

出土した遺物量は多くはない。主要土器は図117に示した。大半は灰陶陶器の碗・皿の類であるが、

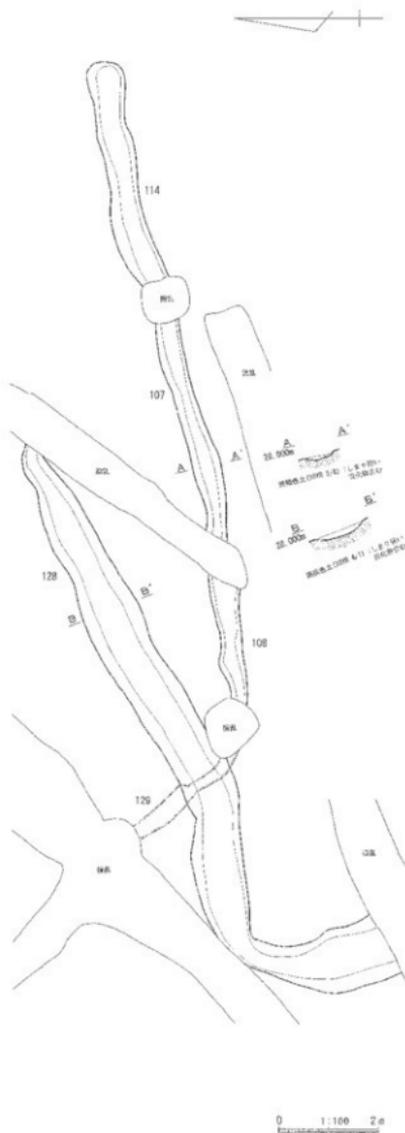


図116 7区溝状遺構 SD107・108・114・128・129

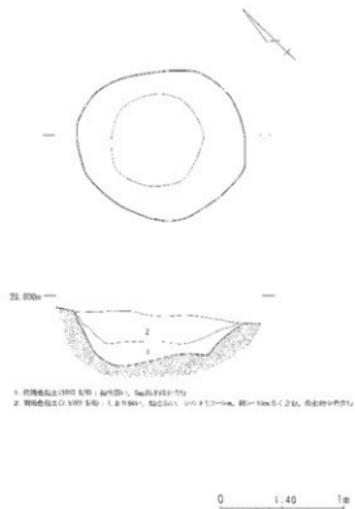


図115 7区土坑状遺構 SF582

須恵器が少量含まれている。776~780は遺構、781~802は表土・包含層から出土した土器である。

4群土器 781に示したものは削り出し高台をもつ須恵器環の底部である。助宗古窯の製品であり、奈良時代末あるいは平安前期に位置付けられるものである。このほかに単純口縁の長頸壺(787)がある。

801は土師器の甕で、口縁が強く外反して胴部が強く張った、いわゆる鞍車甕である。

5群土器 灰釉陶器は高台の形によっていくつかに分けることができるが、なかでも790・793のように比較的高い高台をもった深碗がある。いずれも筑波窯編年の折戸53号窯式あるいはそれ以後に併行するもので、遠江産の灰釉陶器である。

6群土器 795は糸切り痕を残したもので、ひしゃげた三角形の高台をもった山茶碗である。

803~807は陶磁器である。803は瀬戸焼の折縁皿である。804は瀬戸焼の灰釉平碗で古瀬戸編年の後IV古段階に属する。805・806は青磁碗であろう。807は古志戸呂の御皿になる。7区の陶磁器

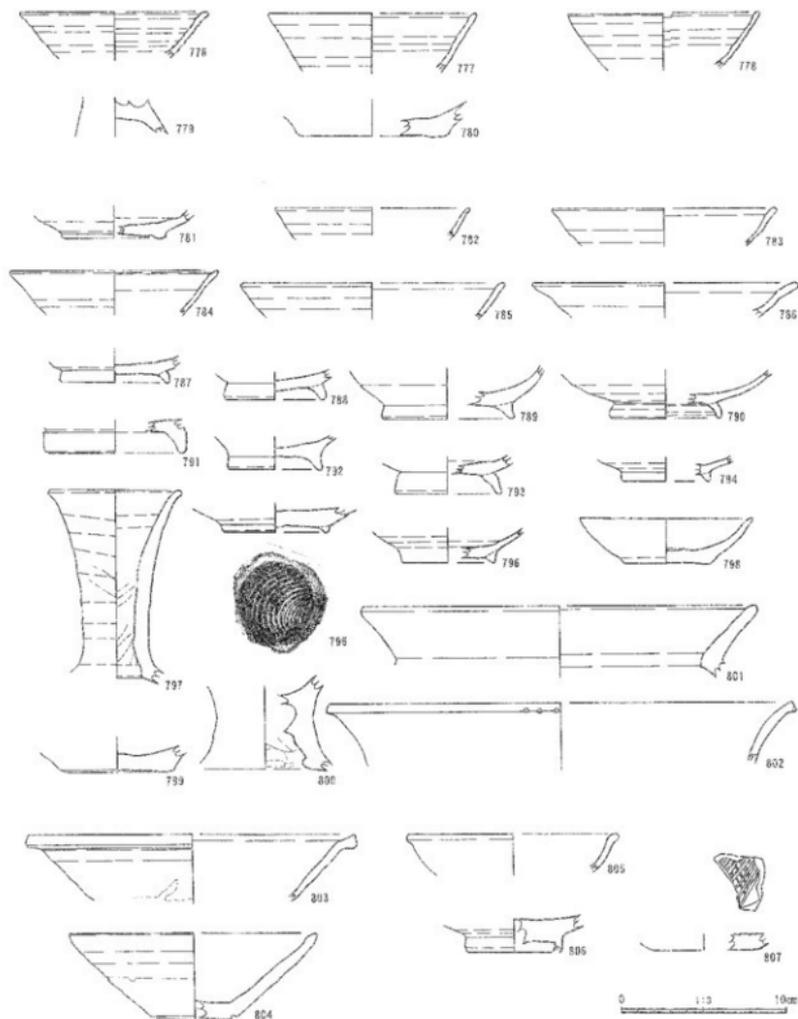


図117 7区出土遺物 1

は他区に比べて若干古めである。特に803・804の時期は応仁の乱の直前、この地域では今川忠義の頃である（15世紀半ば）。ただ、器の種類としては全般生活用具であることから居住域の様相である。

図118・119は7区から出土した石器と土製品である。いずれも表面採集か表土中より出土したものであり、所属時期が明らかではない。808～813は打製石鏃である。814は石錐と思われる。打製石鏃についてはすべて無茎のもので、脚部が二股の形である。出土した石鏃は破損品が多い。先端部や脚部を欠

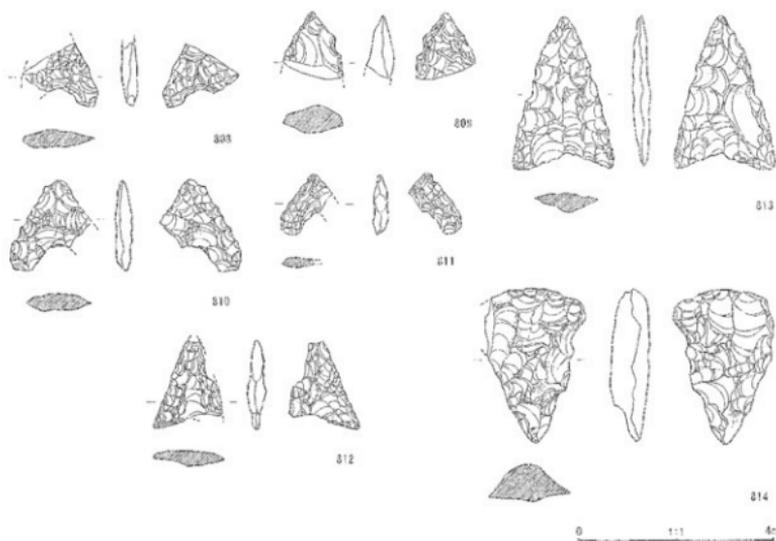


図118 7区出土遺物 2

いている。使用中破損したため破棄された可能性がある。完形品は813のみである。809は石英（または半透明チャート）、812・813は粘板岩製の石鏃である。石鏃は一部欠損しているがほぼ全体形がわかる資料である。鏃状部分はさほど長くはなく、使い減りしたものかもしれない。石材質は暗灰色チャートである。

図119の815は扁平な自然礫の両端を打ち欠いた石鏢である。816は磨石である。拳大の楕円形の自然礫の表裏側面の3面を擦面として使用している。正面の左下の部分には欠損した後に割れ口を使用したと思われる潰れた跡がある。817は大型の打製石斧である。基部中央で折れ、刃部側は欠損している。図の左側は自然の礫面、右側は剖面のまま、側縁部分を細かく打ち欠いて整形している。両側縁は摩耗している。818・819は大型の砥石・台石である。818は完形品で長軸が30cmを超える。使用面は表側の1面だけでおそらく据え置いて使われたものであろう。819は大型であったであろうが、欠損して1/4程の残存と思われる。表裏2面を使用している。部分的に被熱している。

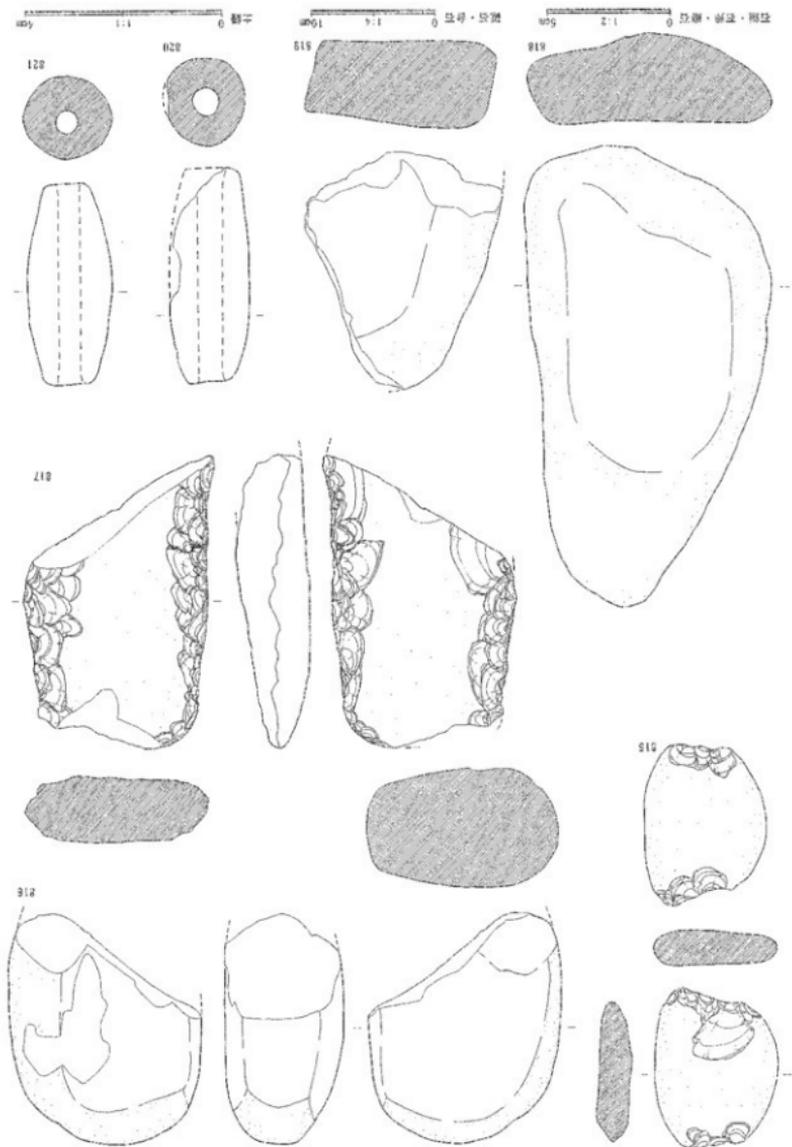
820・821は土製の錘である。いずれも包含層から出土している。820は確認調査のトレンチ内から出土した。一部欠損している。821は820とほぼ同じサイズの完形品である。非常に硬質であり、一部に薄く降灰して自然釉が発色している箇所がある。

石器や土製品については、竈穴住居跡 SB02・SB03から弥生時代後期～古墳時代初頭の土器とともに同じ無茶の石鏃が2点出土している。本調査区ではこれより古い時期の土器は出土していないことから、これらもほぼこの時期のものとしている。時期的にはこの地域でも工具は鉄器化しているものと思われるが、一部には縄文時代からの系譜を引く石器も使われていたのであろう。

註

- 1 炭化材についてはC14年代測定と樹種固定を行っている。詳細は第4章の理化学分析の項に結果が記載されている。

图119 7区出土器物3



7. 8区

8区は衣原遺跡の本調査IV期として平成15年4月1日～平成16年1月15日まで、現地調査が行われた。衣原遺跡の調査対象地は広範囲であったため、確認調査開始当初は便宜的にA～G区の7箇所ブロックに分けている。試掘調査の結果、本調査が必要になった箇所を年度順に1期、II期…と呼称し、平成15年度は本調査IV期と呼んでいる。IV期の調査ではさらに調査区を3ブロックに分けて、IVa区～IVc区の3箇所を実施した(調査対象面積:3,600㎡)。IVa区は7区と地続きの南西側部分、IVb区は南側を流れる半谷川に向かう斜面部、IVc区は6区の河岸段丘西側に広がる緩斜面部である。その後、資料整理の段階でIVa区は9区、IVb区は10区、IVc区は8区と変更している。

改めて8区の調査であるが、位置は葉梨川の支流半谷川の東側で、衣原古墳群のある南西に派生する丘陵の末端にあたる。北西に向く緩斜面に遺構が検出された。標高24～27m辺りの部分は最近まで住宅地として利用されていたこともあり、かなり擾乱を受けていて遺構の残存状況は良くない。しかし斜面の低い方では奈良時代の遺物包含層(暗褐色土層)が堆積しており、その下面から竪穴住居跡や柱穴等の遺構が検出できた。遺構検出面は基盤となる層の直上の1面のみである。

遺構群の内訳は、掘立柱建物跡7棟、竪穴住居跡6軒、そのほかに溝状遺構や土坑、柵列状遺構や柱穴群を検出した。掘立柱建物跡は丘陵頂部から北西に向く傾斜地にかけて点在する。竪穴住居跡は調査区の北半部に多く見られる。竪穴住居跡は傾斜地に立地しているため、斜面下位側が流失している。溝状遺構は傾斜地に沿っているが、端部は斜面下に流れ落ちている。柵列状遺構はほぼ等高線に沿っている。柱穴は直径0.3m程の大きさが多く、覆土はほとんどが単層で暗褐色土(炭化物、1～5mmの小礫を含む)や黄褐色土(炭化物、1cm程の小礫を含む)が多い。これらの遺構は頂部の平坦地には少なく、むしろ斜面中腹部分に展開している。丘陵頂部は後世の擾乱を受けていることも影響しているだろう。

8区の基本土層は図122に示した。調査区北半部の堆積土は、表面から9・10層は盛土と旧耕作土である。7・8層は無遺物層である。6層ではかわらけや陶磁器など近世の土器を含む。4・5層は奈良時代の包含層である。2・3層では土師器の土器片を含むことから弥生～古墳時代の包含層と考えられる。土層断面の状況から見ると、この範囲の地形は奈良時代の頃に一度大きく変更されていることがわかる。1～3層、4層までは北西側の斜面地に一部堆積しているだけであり、5層も平坦な堆積ではなく、一部途切れているのはその後の変更が影響しているであろう。6層は丘陵頂部の一部に堆積が見られる程度である。その後、斜面地に堆積層が形成され、中・近世から現代に至るまでの間、畑地や宅地として利用されている。なお、遺構番号については、極力、現地調査で付けた番号を生かした。ただし、掘立柱建物跡や竪穴住居跡については資料整理

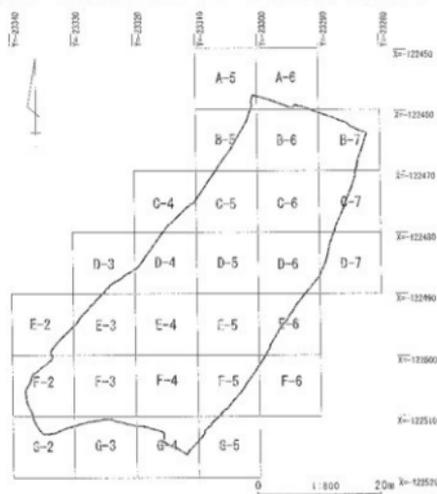


図120 8区グリッド配置図



図121 8区遺構全体図

の遺構検討の結果、新たに付した番号である。

出土した遺物は、竪穴住居跡から古墳時代後期～奈良時代の須恵器や土師質土器、溝状遺構から近世の陶磁器片が少量発見された。遺物包含層からは奈良時代の須恵器を始めとして土師質土器が多量に出土した。その他、陶磁器片やかわらが少量出土している。衣原遺跡の調査区の中では、土器の出土量が最も多い調査区である。その他の土製品、石器、金属製品の出土量は少なく、ごくわずかである。掘立柱建物跡 SH01～07（図123～124・表71）

SH01（図123）はC-5・6グリッドで検出した掘立柱建物跡である。北西向きの変やかな斜面に立地している。梁行きは1間、桁行きは2間であったと思われるが、北面側の柱穴を欠く。柱間は梁行きで3.72m、桁行きで2.0mある。建物跡の北東側には石組みのあるSD03があり、そこから続くSD04は東

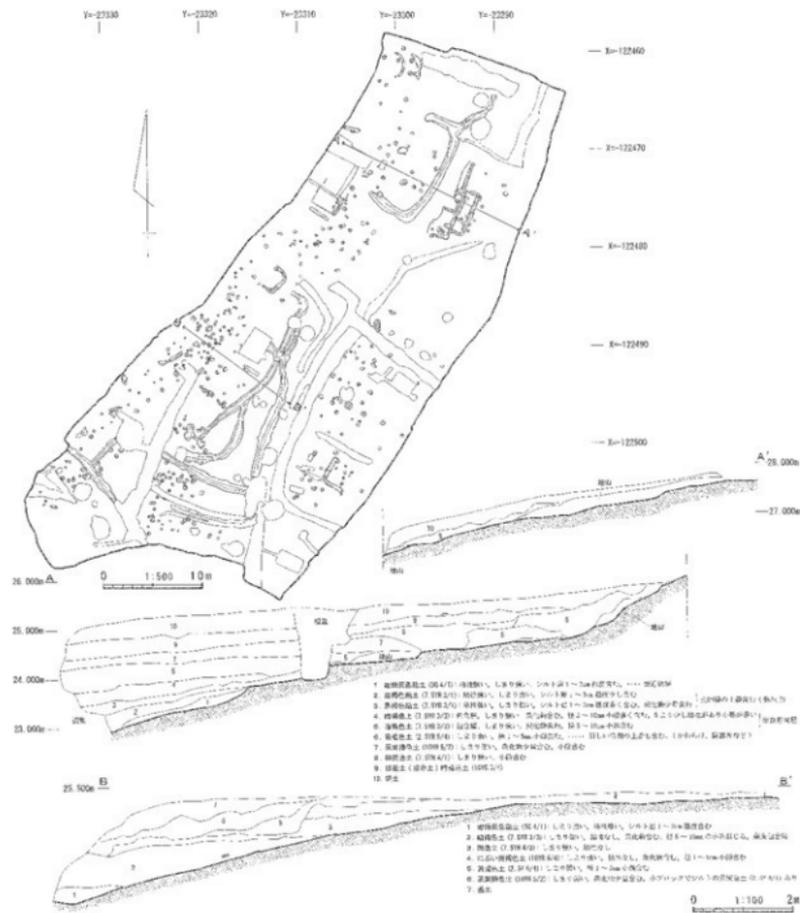


図122 8区土層断面図

側から南へ建物跡の周囲を回るように溝が巡っている。SD03からは近世の陶磁器が出土していることからSD04やSH01も同時期のものである可能性が高い。出土遺物は柱穴SP488よりかわらけ(848)、SP303より陶磁器片が出土している。以上のことからSH01の年代は近世以降であろう。

SH02はC・D-5グリッドの緩斜面上に位置する建物跡である。梁行きが2.0m、桁行きが2.76m、柱穴間は1.3~1.4mと狭い。2間×2間の建物と思われるが北西の間柱と北東の間柱を欠く。柱穴等から遺物は出土していないことから年代は不明である。

SH03・SH04は北西向きに斜面上D・E-3・4グリッドにある。ほぼ同じくらいの規模をもつ建物跡である。SH03は梁行き2.08m、桁行き3.6mで、1間×2間である。北東角の柱穴を欠く。柱穴SP265・

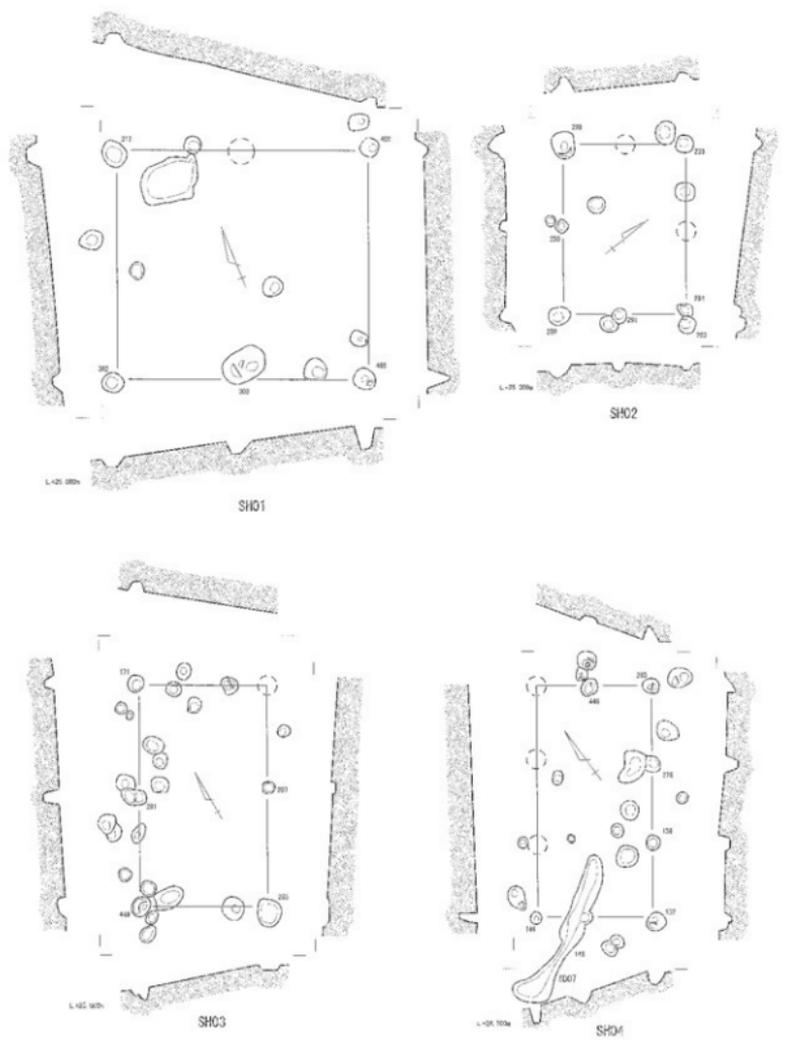


图123 8区独立柱庭物状 SH01~04

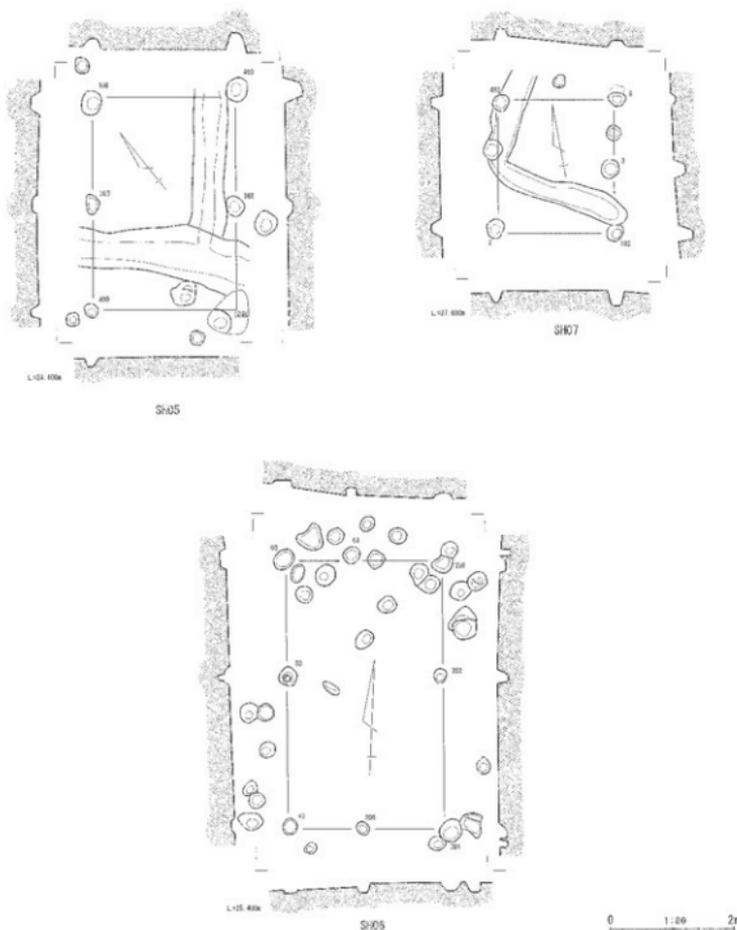


図124 8区掘立柱建物跡 SH05～07

SP281からは、それぞれかわらけ片が出土している。また SP265からは「洪武通寶」と「熙寧元寶」(984・985)の2枚の銭貨が出土している。SH04は2間×3間の建物で梁行き1.88m、桁行きは3.76mある。南面でSD07と重複している。柱穴の直径0.3m程度と小さく、柱の太さは0.10～0.15m内外であったであろう。柱穴 SP276より播鉢片と須恵器の壺肩部片が出土した。銭貨の年代幅はあるものの横鋳銭の下限に合わせると中世末～近世初頭であることから、いずれも近世以降の建物跡と思われる。

SH05は調査区南西隅のD-2グリッドにある。1間×2間の掘立柱建物跡で、梁行き2.32m、桁行き3.44mの規模をもつ。柱穴間は1.70～1.74m程ある。柱穴内からの出土遺物はない。

SH06は調査区の南端 F-3グリッドで検出した掘立柱建物跡である。比較的平坦に近いところに立地している。周辺には複数の柱穴があることから建て替えが行われた可能性がある。2間×2間であるが、梁行きは2.56m、桁行きは4.36m程あり、桁行きの柱間寸法が異なる。柱穴 SP64からはかわらけ片が出土している。近世以降の建物跡であろう。

SH07は調査区南東隅（F-5グリッド）の平坦地に立地している。梁行きは1.88m、桁行きは2.16mで、小型の掘立柱建物跡である。梁行きの柱間は1.04～1.12mある。柱穴 SP3からはかわらけ片が数点、柱穴 SP6からかわらけ片が出土している。

当該調査区の掘立柱建物跡では、柱穴からかわらけ片が出土している事例が複数見られる。なかにはかわらけとともに銭貨も出ている柱穴がある。中世から近世の集落の中で建物を建てる際に、地鎮の行為が行われていたことも考えられる。

竪穴住居跡 SB08（図125、図版72-3）

SB08は調査区のほぼ中央西寄り（D-4グリッド）の緩斜面で検出した竪穴住居跡である。標高24.2mの北西向き斜面に位置する。主柱穴は確認できなかったが、方形を呈する壁溝の一部と貼床面があり、焼土が壁溝にかかるように検出され、竈の残存部分と考えられる。竈は北東に面した位置にある。住居跡は斜面に並行する方向に約2.5m、直行する方向は1.35m程残存している。残存率が悪いが、正確な住居の形状と主軸方向を押さえることはできなかった。壁溝の部分については、検出面から床面までの深度は深いところで0.25m程残っている。この周溝（SD210）より土器と礫が出土している。土器は土器器數十片と須恵器4片があるが、いずれも小片で器種を特定できるほどのものではなかった。礫は全面被熱した5～7cm大の扁平な自然礫である。住居跡の時期を特定できるものが得られなかったが、住居の平面形態が方形で、周辺の竪穴住居跡との関連から考えると、古墳時代後期から奈良時代と考えられる。

竪穴住居跡 SB09（図126、図版70）

竪穴住居跡 SB09は SB08より10m程北東側（C-5グリッド）、標高24mの位置で検出した。住居跡の残存状態は悪く、住居跡の形状ははっきりと確認できなかったが、南側に角をもつことから方形であったものと思われる。斜面の高い方（東側）に竈を検出したが、竈は崩落しており、支柱や天井部は残存していなかった。袖の部分は地山（明黄褐色土）の粘質土を使っており、石を芯材として土を盛っている。そして、すぐ脇（南側）にこれらとは時期の異なる焼土があり、一部竈の袖の下にも広がっていた。そのため、竈を修復していたか、もしくは竪穴住居の建て替えを行っていた可能性も考えられる。住居跡 SB09からは複数の土器が出土している（図127）。竈跡からは829・839が出土している。また竈の構造材として出土した礫は、砂岩質である。礫の大きさは5～30cm大で、大半は被熱している。礫の採取地は最も近い半谷川か栗梨川であろう。828・836～837は床面直上層より出土している（図版70-3）。同じく床面直上層から金属製品（M-11）も出土している。金属製品は5cm程の棒状だが、用途は特定できていない。住居覆土内から出土した土器片は奈良時代の須恵器が主体である。土器も覆土内より小片が多数出しており、壺の破片などが見られる。そのほかにも壺の小片が複数ある。凡土土器は後述する「8区遺構出土の土器」に詳細を述べるが、住居跡 SB09の年代は奈良時代前半である。このほか覆土内から黒曜石の小片も出土している。

竪穴住居跡 SB10（図125、図版71）

SB10については、調査区の北端 B-6グリッドで壁溝の一部と柱穴が確認されたのみである。壁溝の形状から円形または楕円形の住居跡であったと考えられる。壁溝251は浅い溝状を呈するが全体の1/3程度しか残存しておらず、斜面下方は消滅している。壁溝の西側には柱穴跡が2箇所並んで見つかっているが、これも壁溝に伴うものかどうか確定はできない。手がかりになる出土土器が乏しく、壁溝から

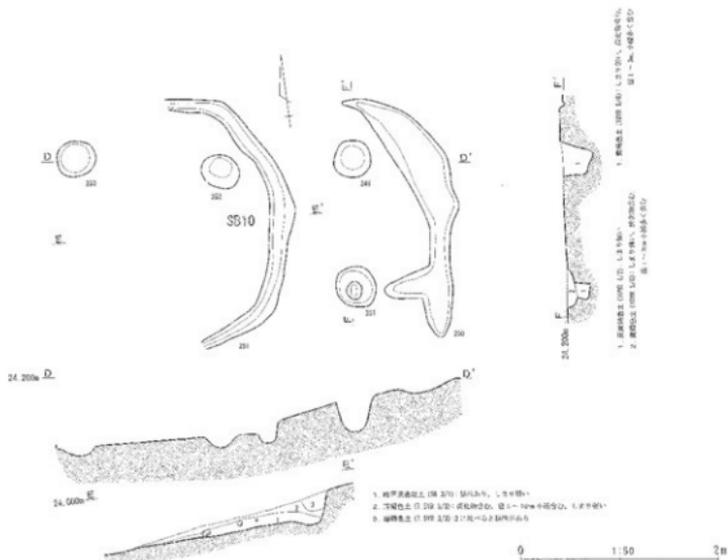
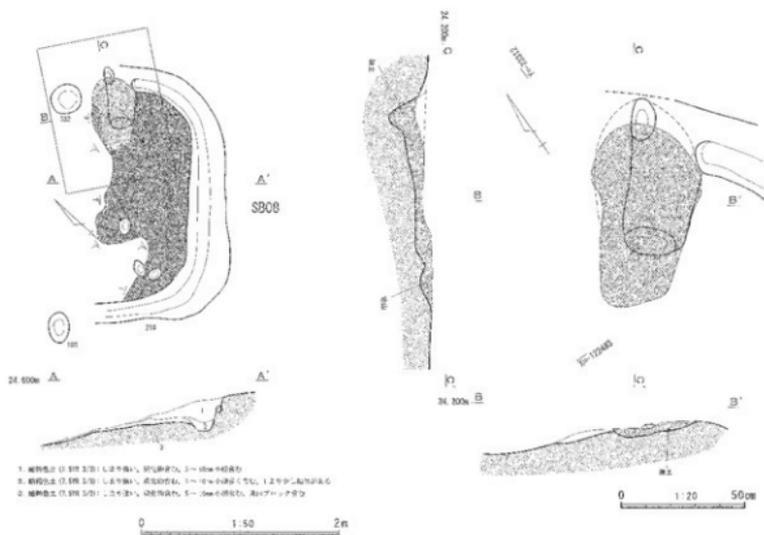


図125 8区竪穴住居状遺構 SB08・10

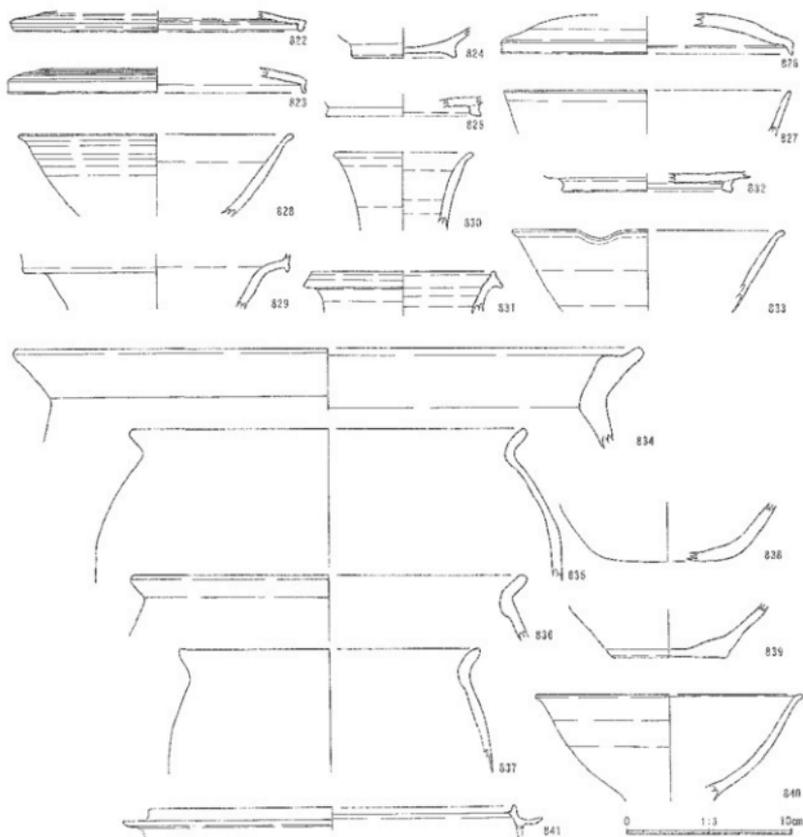


図127 8区壁穴住居状遺構 SB09 出土遺物

土師器が数片出土したのみである。壁溝251からは壺の胴体部片3点と甕の口縁部片が1点出土している。壺の胴部片は胎土内の混入物を見る限り、弥生時代の土器と思われる。甕の口縁部片は表面が摩滅しているため調整痕が不明瞭だが、薄作り単口縁である。出土土器の破片だけでは年代観を読み取ることができないが、周辺の調査では弥生時代後期の住居跡が数軒見つかっていることから、SB10も同時期の住居跡と考えても良いであろう。SB10住居跡周辺からは須恵器の坏蓋が出土している(847)。SB10のすぐ東側には別の溝跡(SD250)や柱穴状(SP249・331)の遺構があり、SP331からは須恵器坏蓋片も出土している。そのため847はSB10に伴うものではなく、奈良時代以降に構築された遺構に伴うものであろう。

壁穴住居跡 SB11・12・13 (図128、図版72-1・2)

SB11、12、13の残存している部分については、検出面から床面までの深度は、深いところで約0.4mある。3軒は重複しており、土層帯の土層の堆積状況を見ると、SB11を建てる際にはSB13を埋め、

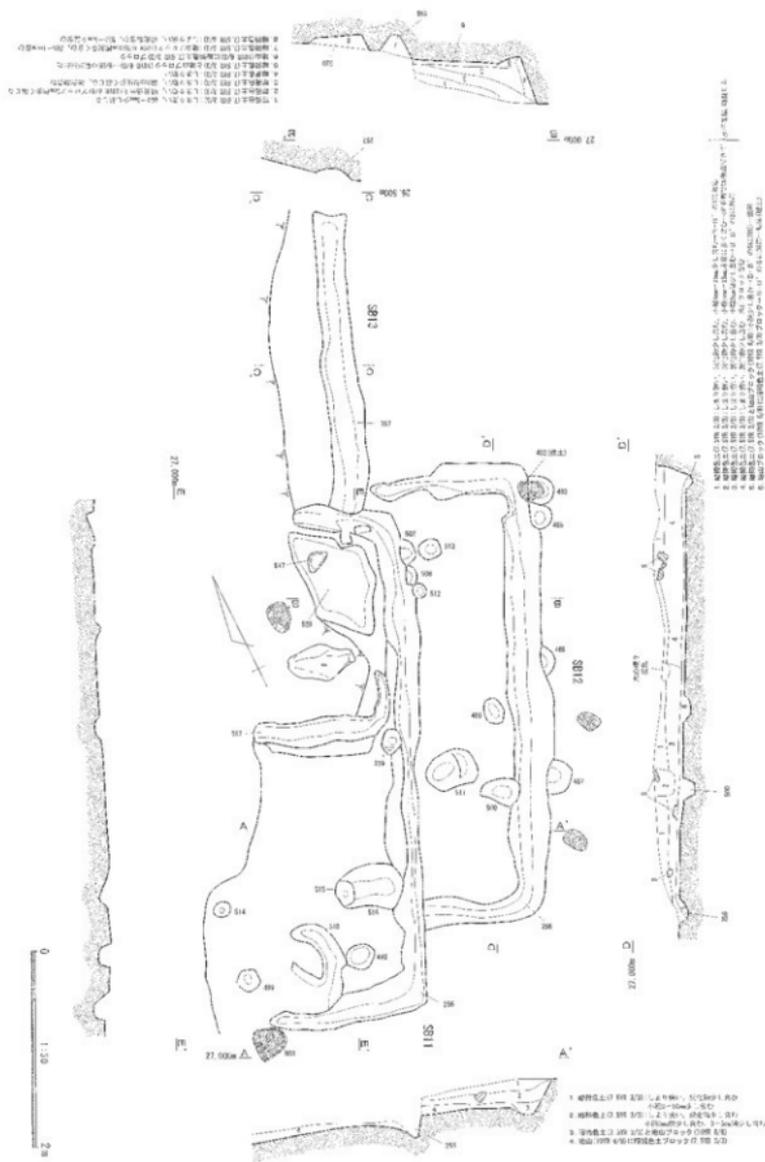


図128 8区竪穴住居状遺構 SB11~13

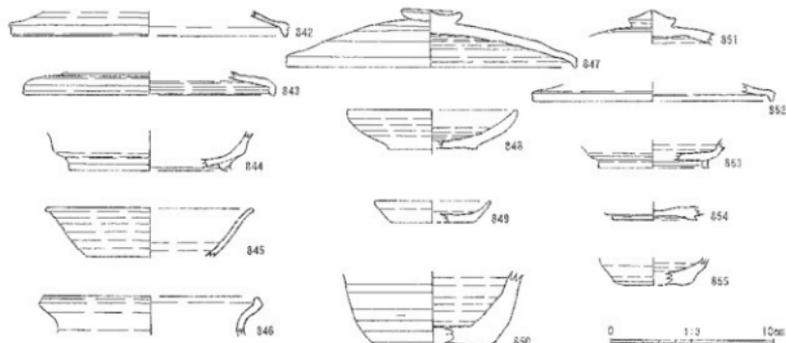


図129 8区竪穴住居状遺構 SB10～13 他出土遺物

SB12を建てる際にはSB11を埋めて建てられていると考えられることから、SB13が一番古く、その後SB11が作られ、SB12が最も新しい住居跡と考えられる。住居跡では壁溝があったが、竈や炉跡は検出されなかった。住居跡は地山を掘り込んで作られている。土層断面観察では床面ははっきりわからなかったが、掘形からあまり上ではない位置で床面を確認した（図128の6層）。貼床は暗褐色土と地山の塊が混じっていた。住居跡の覆土は暗褐色土である。斜面地に立地していることから住居跡の西側半分以上は流出してしまっている。さらに住居跡の内部や周辺からは複数の焼土跡が見つかった。住居に関連する焼土であろう。

SB11は、一辺が5mの方形を呈する竪穴住居跡である。規模は南北に5.3m、東西方向は2.2m程残存している。前述の通り、SB11はSB13を埋め立てた後に建てられている。半分以上が消滅しているので全体の規模や住居の構造は把握できない。壁溝が方形に回っており、その覆土には地山ブロックが含まれる。主柱穴と思われる穴は見当たらず小規模な穴は複数ある。北東の壁寄りに据え置かれたような大型礫や、住居跡の内部に焼土が見つかったり、いずれも竈や炉跡になる決手をもたない。出土土器は壁溝255より広口の須恵器壺（846）や土師器片が数片見つかった。またSP516からは甕胴部の破片と土師器の小片が出土している。住居跡の北東隅に近いSP517からは須恵器の壺胴部破片が1点、また東面の壁溝に切り合っているSP516からは土師器の小片が出土した。このほかにも住居内覆土より礫や黒曜石の小破片が出土している。これらの出土遺物からSB11は奈良時代の住居跡であろう。

SB12は3軒切り合った住居跡の中で最も新しい時期のものである。主軸方向は他の3軒とほぼ同じ方向である。規模は南北に4.65m、東西方向は1.7mが残り、斜面下方は流失している。主柱穴と思われる穴は見当たらず、竈や炉跡の痕跡もない。住居跡の外部では焼土が見つかったり、竈ではなく柱穴であった。内部では貼床と思われる6層を検出した。記録後、貼床を外すと柱穴が見つかった。ただこれらが住居の主柱穴という可能性は低いであろう。住居跡の東面にあった柱穴は住居よりも新しいと思われる。住居内覆土には礫が多く含まれており、なかには径が10cmくらいの礫も入っていた。土器は壁溝256や柱穴内から出土した。壁溝256からは土師器片が複数見つかったり、いずれも小片で器種の特定が難しい。そのほかにも同遺構から黒曜石の破片や小礫が見つかった。SB11の建て替えたとすれば、SB12も奈良時代の住居跡としてもよいであろう。

SB13は切り合っている竪穴住居跡SB11・12とほぼ同じ方向・規模を呈する。3軒のなかでは一番古い時期に属する。方形を呈する壁溝の一辺は約5mであったと思われる。半分以上が斜面下に流失して

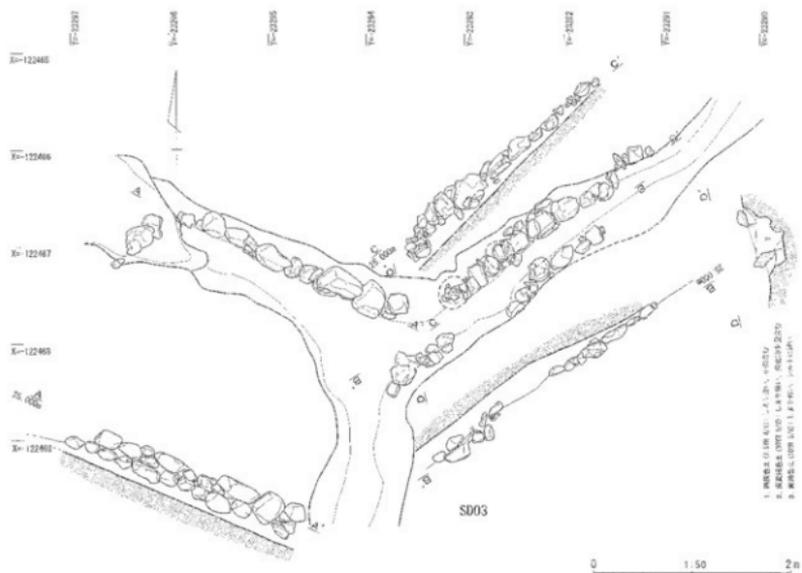


図131 8区溝状遺構 SD03

おり、壁溝と床面の一部しか残っていない。このほかに住居に伴う柱穴や竈・炉跡なども見つからない。標高257からは842・843が出土している。このほかにも壁溝からは土師器の小片が複数個体出土しているが、甕の胴部片などである。しかし多くは器種が特定できるような破片ではなく、時期の決め手になるものではない。住居跡の時期については出土遺物が少ないため特定できない。平面形態が方形であり、SB11やSB12とさほど時期差なく切り合っていることから奈良時代の住居跡と考えられる。

自然流路 SR06 (図130)

F-2グリッド内の南西斜面で検出した不定形な流路遺構である。標高の高い方は掘乱等で削られている。土層断面で確認したところ自然流路であった。SR06は調査区西面境に位置するため、西側の斜面下へ広がっていくものと思われる。土器は土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶磁器など90片が出土した。このうちいくつかは接合し、図化したものを851～855に掲載した。土器年代の主体は須恵器が多く、次いで灰釉陶器・山茶碗小皿が複数片ある。そのほかに土師器はかわらけの小片と陶磁器片が数点ずつある。本遺構の覆土は奈良時代の包合層である暗褐色土と同一であり、竪穴住居跡等の遺構とも、ほぼ同時期と考えられる。

土坑 SF29 (図130)・SX01 (図121)・SX02 (図130)・SF471 (図130)・SF71 (図121)

SF29はF-5グリッドで検出した不定形な円形の土坑である。深さは0.35m程あり、土坑の掘形内は階段状に段差がある。覆土は暗褐色土で上層には炭化物が混じる。出土遺物はなく、時期年代も不明である。

SX01はF-5グリッド内の地山を掘り込み、溝状になっている遺構である。溝底には川原石のような礫が敷かれており覆土はほとんど入っていない。鋸形状に検出されたが、掘乱で削られており、実際には方形の区画をなしていた可能性もある。この遺構に伴う柱穴等は検出されなかった。遺構の掘形は検

出面から0.01m程度の深さである。遺構の性格は不明であるが、基壇などであったかもしれない。SH07と重複しており、この建物跡よりも古い時期であることは確かである。出土遺物はなく、遺構の時代は特定できないが、近現代と思われる。

SX02はC-4・5グリッドにまたがる位置で検出した浅い不定形な土坑である。暗褐色土層に掘り込まれた土坑で、覆土は暗褐色土の小塊に炭化物が混じっている。壁面は火を受けたためか焼土が貼り付いている。また壁面には10cm大の自然礫が2箇所にあり、底面からも拳大の自然礫が出土している。竈状の遺構とも考えられるが、周囲に関連する掘形や柱穴などの遺構は見られなかった。覆土より須恵器底部片、須恵器壺底部片・土師器片などを含む土器が出土している。遺構の年代は奈良時代以降であろう。用途は屋外炉の可能性も考えられる。

SF471はB-6・7グリッド内のSD03と重複している。不定形な土坑状を呈し、深さは0.35m程ある。遺構内からは自然礫が7点見つかった。穴は柱穴と考えられるが、礫は柱を固定する根固めとして使われた可能性がある。後述するSD03を切り込んでいることから、近世以降の極めて新しい時期の遺構であろう。

SF71は不定形な土坑状を呈する遺構である。周辺は溝状遺構があり、柱穴群からも離れていることから遺構の性格は掴めない。覆土内からは陶磁器・土師器片が3点と金属片が出土している。出土遺物の年代から中・近世の遺構と思われる。

溝状遺構 SD03 (図131)

SD03はB-6グリッド内で検出した溝状遺構である。調査当初は覆土が黄褐色土であったため遺構と考えていなかったが、精査していくうちに溝状遺構であることがわかった。部分的ではあるものの、大きいものでは直径40cmの自然石を列状に組んでいる。溝の中には崩落したと思われる石が入っていた。用途については暗渠として使われていた可能性がある。SD03からは石組みの間から近世の陶磁器片(碗、挿鉢片、白磁片など)が出土している。遺構の時期については、土器の年代から見て近世以降であると考えられる。

溝状遺構 SD04 (図121)

SD03から南方向へつながるC-5・6グリッド内の溝状遺構がSD04である。SD03との関係はSD04には石組みがないことや覆土などから、SD03よりも新しい時期(近代)に作られた溝状遺構と思われる。ただし、近年までSD03とともに機能していたと考えられる。覆土内から、かわらけ片や碗の小片が出土した。

溝状遺構 SD05 (図121)

E・F-4グリッド内に南北に走る溝状遺構である。遺構覆土は黄褐色土の下層に褐色土がある。SD06やその南側の溝などと繋がる可能性もあるが、ちょうど攪乱があるため断定できない。調査区北側にあるSD03・04のように排水機能をもたせた溝とも考えられる。出土遺物はないが、覆土等から見て近世以降の遺構であろう。

溝状遺構 SD06 (319) (図130)

F-3・4グリッド内に東西に直線的に走る溝状遺構である。両端を攪乱で切られているが、残存する長さは東西方向に約9m強あり、幅は1m程である。深さは0.25~0.30mある。SD05と繋がっていた可能性もあるが攪乱で正確なところはわかっていない。溝の覆土からは土器片が23点出土している。土器は陶磁器やかかわらけ片が中心であることから、おそらく中・近世の時期に機能していた溝であろう。

溝状遺構 SD07 (148) (図130)

SD07はE-3グリッドで検出した溝状遺構である。2.6m程の長さでほぼ直線状に東西方向に延びる。SH04と切り合うのが溝跡の方が古い時期であろう。SH04は近世以降の建物跡と考えていることから、

SD07はそれ以前の時期である。出土遺物はないため正確な時期は押さえられない。

溝状遺構 SD08 (510) (図130)

SD08は調査区の北西端で検出した溝状遺構である。C-5グリッドに位置する。途中をトレンチで切られ調査区外に延びているが、2.25m程の長さがある。溝幅は0.3mと狭く、深さも0.1m程度で浅い。出土遺物がないため溝の年代は不明である。

竪列状遺構 (図132)

直線状に並び、地山を掘り込む穴の列である。遺構覆土は暗褐色土である。調査当初は建物跡と考えていたが、ちょうど地形が平坦面から西向きに緩斜面に変わる変換点でもあり、同じように緩斜面の方にも穴の列がある。このことから二列に並ぶ柵列もしくは樹木列などがあったことも考えられる。遺構から土器などの出土遺物はないため遺構の年代は不明である。

8区遺構出土の土器 (図127・129)

遺構から出土したものは多くはない。SB09から出土した物を除けばいずれも小破片であるが、少量の灰軸陶器を除けば、混入と考えられる遺物は少なく、年代的には比較的にまとまっている。

SB09 ここからは土師器・須恵器および灰軸陶器が出土している。土師器壺がまとまって出土しており、この遺構の年代を示している。須恵器杯蓋・身がある。高台杯(832)は付け高台で、外に張り出し、断面は角張ってはいない。無高台の杯が2点ある(827・828)が、828は箱環で、体部全体にノタ目が顕著である。このほかに小型の壺・壺の口縁部破片が出土している。

土師器壺は口縁部が外側に張り出し、胴部がやや張ったもの(835)と、口縁に段をもち、胴部が張った、いわゆる駿東壺(834)との2者がある。前者は在地の土器であり、後者は胎土・焼成などから駿東地域からの搬入品であろう。1点含まれている灰軸陶器の碗(824)は他の土器とは時間差があり、覆土への混入であろう。したがって、SB09は奈良時代前半に属す。

SB10 遺構の層位から847に示した須恵器杯蓋が出土しており、この住居跡の年代を示している。口径が17cm程の大型の杯であるが、焼け歪みが大きく、実際の使用に堪え得たか否かには疑問がある。杯が口径によって大・中・小と3つに分かれた3群以後のものである。

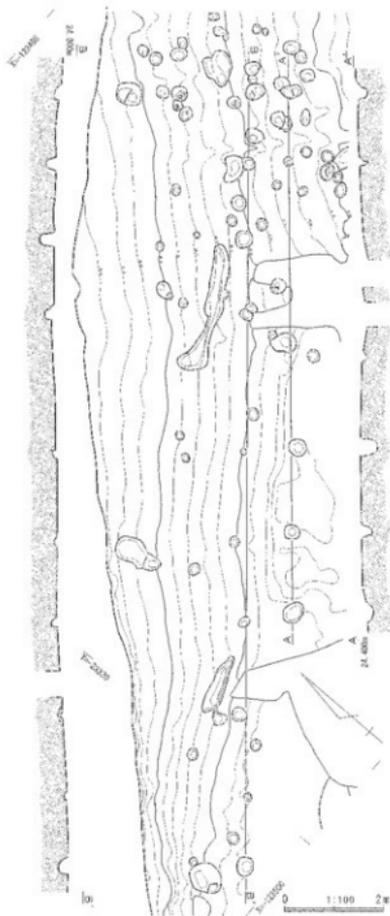


図132 8区竪列状遺構

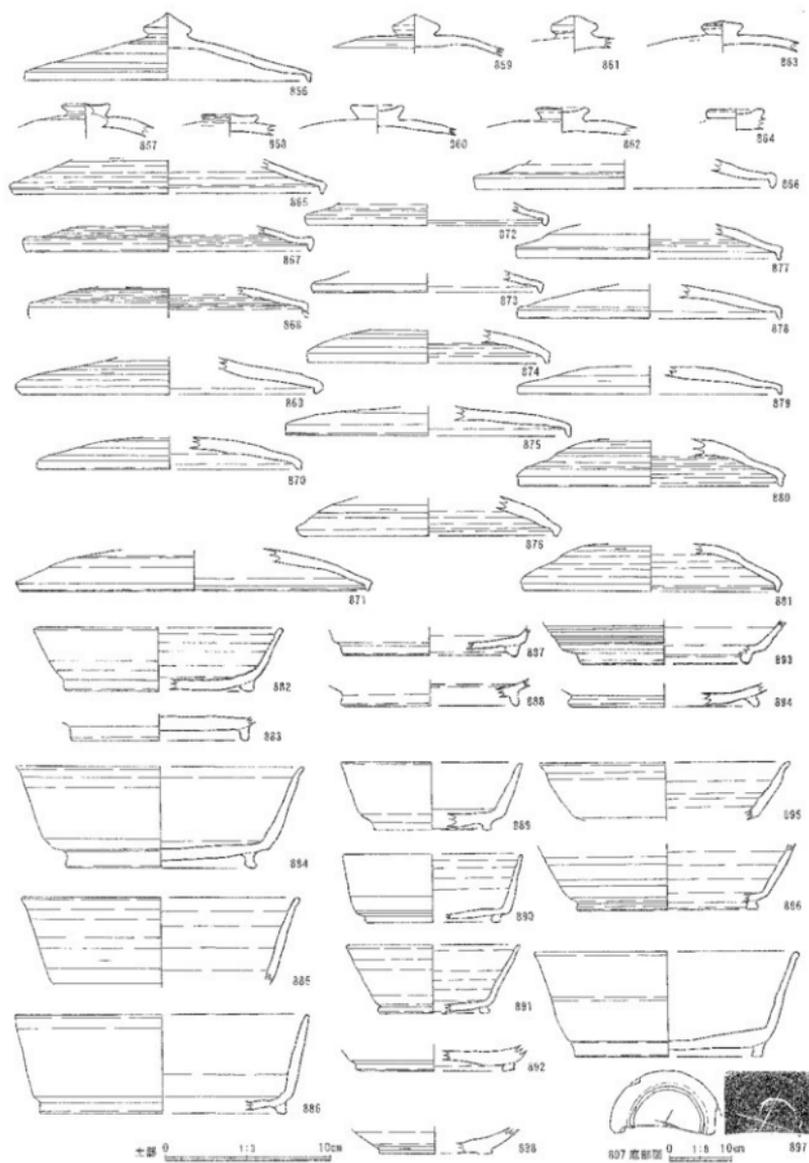


图133 8区包含层他山土遗物 1

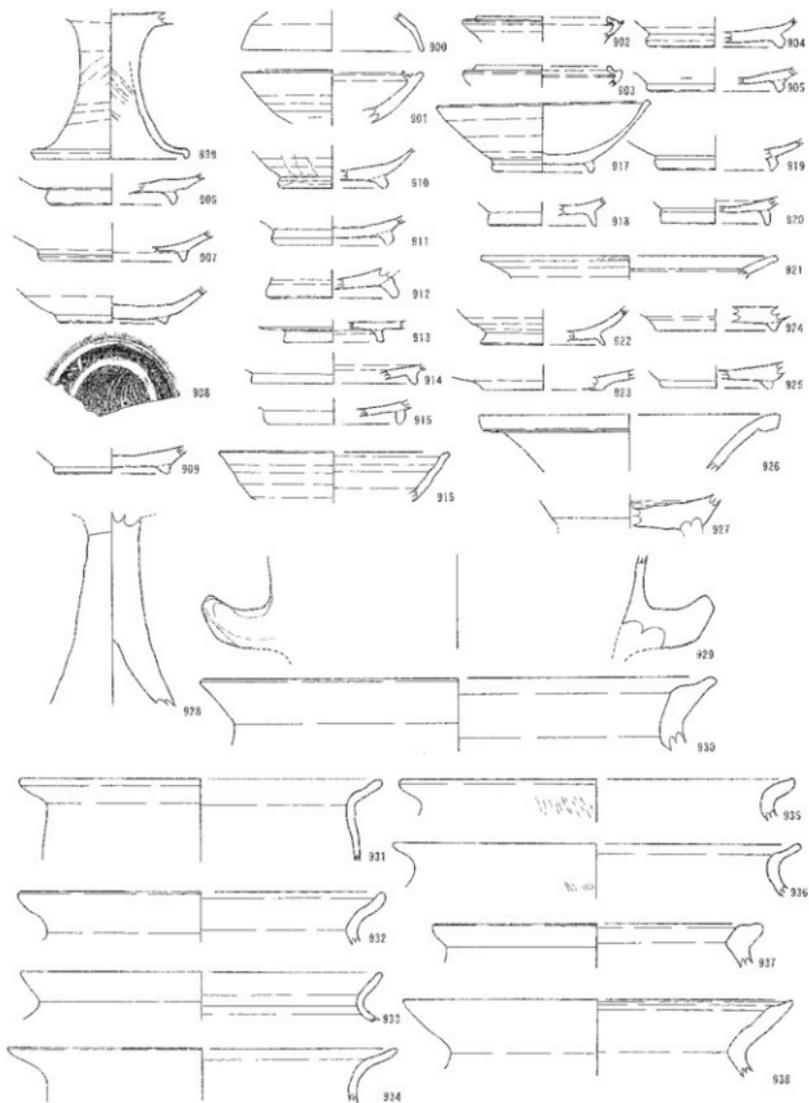


图134 8区包含层出土文物2

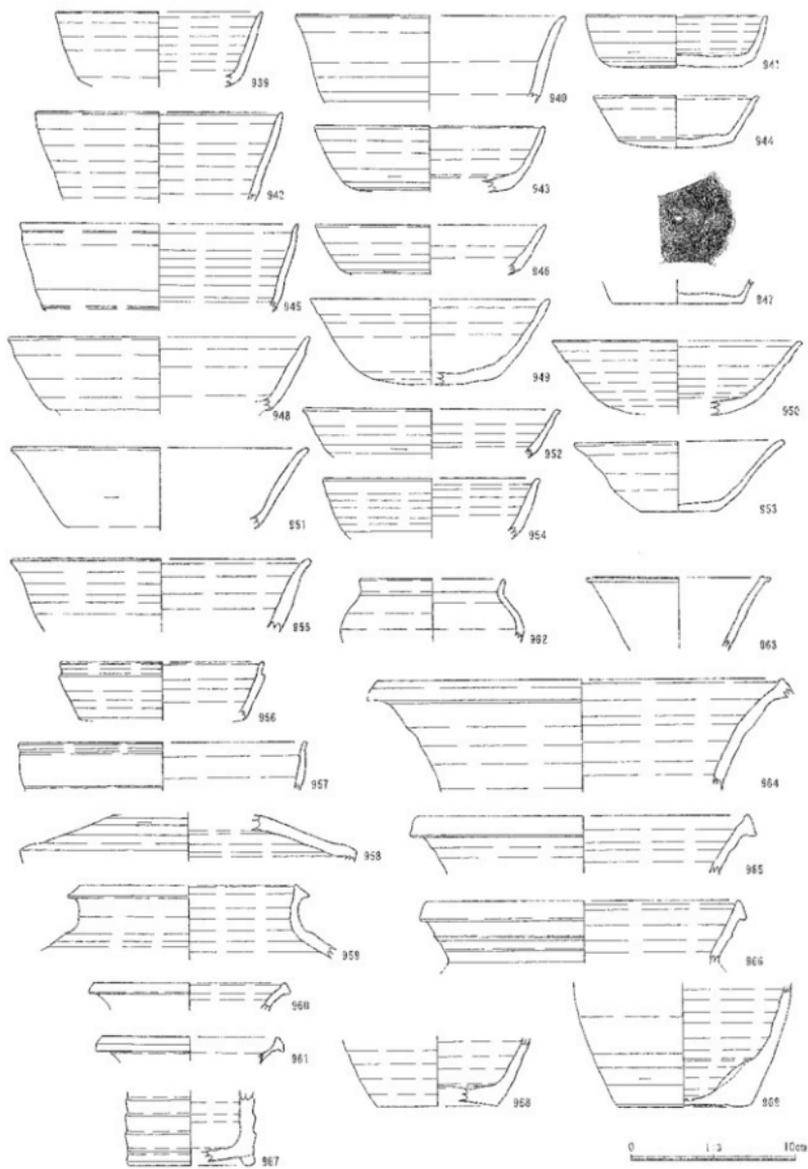


图135 8区包含层出土器物3

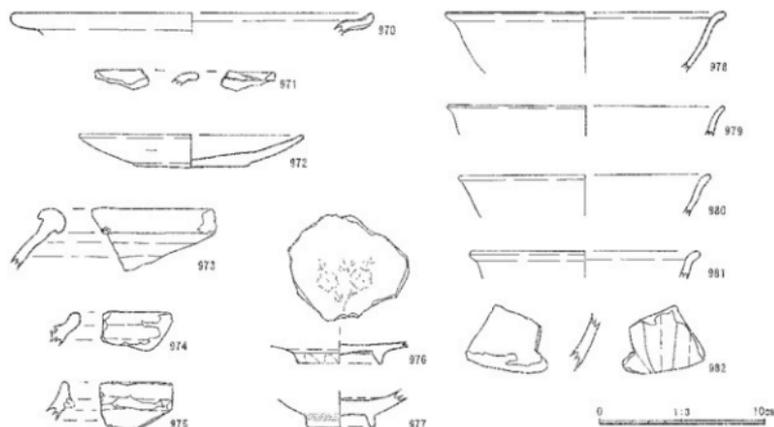


図136 8区包含層他出土遺物 4

SR06 ここからは須恵器環蓋・身、山茶碗段階の小皿が出土している。須恵器環には付け高台をもった853と削り出し高台をもったもの(854)とがあり、多少の年代幅が認められる。削り出し高台をもった854は奈良時代後半から平安初期にかけてのものであろう。高台の径から推定して、口径の小さな環であろう。

SB11 SB11・12・13は隣接し、切り合っており、遺物も混じているかもしれない。846の広口の須恵器壺は奈良時代のもので良い。

SB13 ここからは須恵器環蓋・身が出土している。付け高台をもった環身(844)と折り返し口縁の環蓋(842・843)は2群とした奈良時代の前半のものとして推定できる。

このほかに、住居跡の近くから、無蓋・無高台の環身の破片が出土している。したがって、SB11とSB13の年代は2群あるいは3群に伴う奈良時代のものであり、それらと切り合っているSB12も同時代のものとして良いだろう。

仮254 握柄鉢の底部近くと推定される破片が出土しており、やはり奈良時代に属するものであろう。

仮345・仮488からはいずれも6群とした山茶碗段階の小皿が1点出土している。これらが混入したものでなければ、中世の遺構であろう。

8区包含層出土の遺物(図133~137)

8区は各調査区の中で最も多くの土器が出土しており、1群から6群まで各群の土器が満遍なく出土しているが、3群とした奈良時代中期から後期にかけての土器が最も中心を占めている。

1群土器には須恵器環(900~903)、高環(899)がある。環蓋900は口径11cm程に復元できるが、ほかの環身は口径10cm以下なので、両者には多少の時間差があろう。このほかに土師器高環(928)と甕(929)が出土している。

2群以後の土器群では須恵器環・灰釉陶器の碗・皿が中心であり、環を中心に説明をする。

図133上段は須恵器環蓋のつまみであるが、形態には擬宝珠状のつまみ、擬宝珠が扁平化してボタン状になったもの、扁平化がより進み、中央部が凹面になったものなどの各種がある。そうした変化は必ずしも年代差を表すものではないようで、各種のつまみが混在している。また、環身の口径差による違いかとも推定したが必ずしもそうではないらしい。窯による違いなのかもしれない。したがって、これ

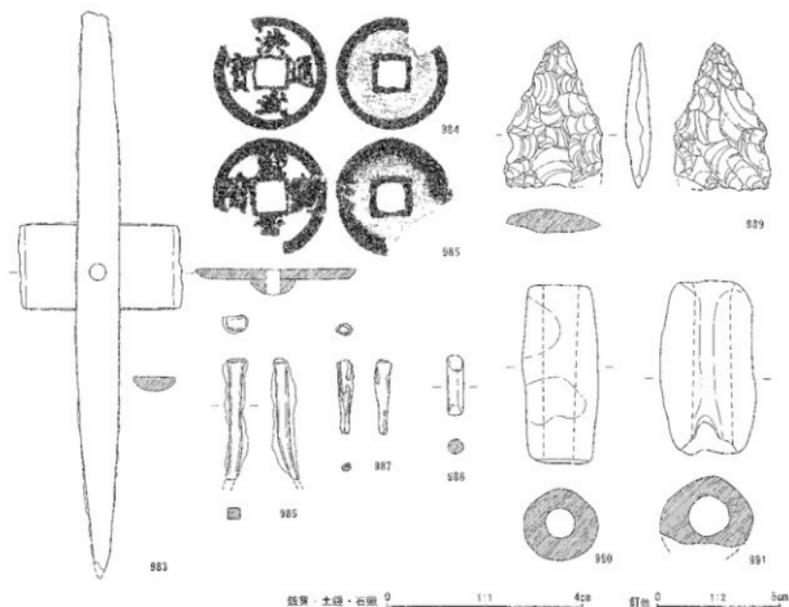


図137 8区包含層他出土遺物 5

らの環蓋は2群あるいは3群に属するものとしておく。

2群土器 865から869に示した蓋は口縁端部が丁寧に折り返されており、こうした口縁端部の形態は湖西古窯群の製品など、比較的古手のものに多い。高台環882・894としたものとともに、2群の土器に含まれるものであろう。

3群土器 角張った高台をもった坏身に代表される土器群で、助宗古窯群の製品である。坏は口径によって大・中・小の3つに分けられる。高台が底部の外寄り（896）に付いたものと比較的内側に入ったもの（894）とがある。形態的には前者がより先行するようである。環蓋の径は坏身ほど明確には分かれませんが、やはり大・中・小に分かれる。いずれも坏身より2cm程大きい。このほかに無高台の箱形坏（941～947）、底部がやや丸みをもった、碗に近い坏（949）がある。後者は蓋をもたない。箱形の坏には口径による分化が認められるが、後者は口径による大きな差はない。

3群に属すと思われる土器器がある。大半は甕である。口縁を外側に屈曲させ、胴の張った甕（931・932）で、この地域に中心的な土師器産地である。930は口縁の特徴から駿車型の甕である。胎土・焼成から在地で生産されたものではなく搬入されたものであろう。936は口縁を外側に強く張り出した遼江に多く見られる甕である。

4群の土器は削り出しの高台をもった坏（898）に代表される。出土した須恵器の量は少ない。953は無高台の坏でこの群に属するものである。

5群土器は狼投窯紀年で折戸53号窯式以後の「第6段階」の灰釉陶器群である。碗・皿が中心であるが底部の小破片が多く両者の区別は難しい。高台の形からいくつかに分けられるが、ここではひとまとめにしておく。出土した量は多くはない。937は口唇部を三角形に肥厚させた土師器甕でいわゆる「清

髷型」の甕に連なるものである。この地域での出土量は多くはない。

6群の土器には灰釉陶器系の山茶碗と施釉陶器がある。

970～982は陶磁器類である。970・971は輸入青磁である。970は折縁線で復元直径が21.6cmのかなり大型品である。971も無文の折縁皿である。小片のため径の復元はできない。972は非常に丁寧な作りのかわらけである。973～975は播鉢、973は瀬戸焼で登窯10・11期にあたる。974は志戸呂焼の播鉢で、15世紀末（後IV新期）に属する。975は16世紀中頃（大富II期）の播鉢である。976は青磁皿の底部で、見込み部分に型押し染め付けが施されている。977の磁器は肥前焼の甕である。外碗面に染め付けがある。見込み部分は蛇の目高台となっており、重ね焼きの痕跡が残っている。978～982は青磁碗である。978～981は無文の青磁碗の口縁部片。982は胸部に銘連弁文がある青磁碗破片で、山茶碗期に伴うものである。陶磁器の年代はおおよそ14世紀後半の時期と思われるが、後世に伝世している可能性もある。8区での陶磁器の種類は少ないものの、生活感のある器種が揃っているといえる。

983は用途不明鉄製品。攪乱層中からの出土であることから極めて新しい年代の可能性がある。8区で出土した銭貨は模造銭と渡来銭。他の区とは時期差が見える。984は「洪武通寶」。985は「熙寧元寶」。SP265の覆土中より出土した。986は鉄釘である。SH06付近にある柱穴SF58より出土している。長さ4.95cm、頭部幅は0.80cm、軸部幅0.40～0.55cmある。先端部は欠損している。987は用途不明の銅製品。土坑状の遺構71（図121）より出土した。長さ3.00cm、幅0.70cmと小型であるが、煙管の吸口のような形状をしている。全体が潰れていて表面は一部欠けて残存状態は極めて悪い。表面の一部に金箔が残っている（図137の網掛け部分）。

988は用途不明石製品。細い棒状を呈するが、器面は研磨されており、上部は斜めに磨り減っている。白色凝灰岩製。銅石の可能性もある。989は暗灰色珪質粘板岩製の打製石鏃である。形態は無蓋平基式で、基部側面左右の一部が突出している。脚部の一部を欠損している。

990・991は土製の甕である。990は硬質で焼きしまりが良い。全長3.70cm、最大径1.55cm、内径0.60～0.70cmで竹管状の形態をしている。主に横方向に整形時のナデ跡が残る。上下両端（小口面）はへら状工具で切り落としているため、明瞭な面となっている。991は土師質の土甕である。残存長は3.55cm、最大径は1.90cm、内径は0.80～0.90cmを測る。側面の一部が破損している。胴部の片側半分が黒煙状に黒ずんでいる。

8. 9区

9区は本調査IV期として実施した現地調査で、3ブロックに分けた調査区のうち、IVa区に該当する。IVa区は7区と地続きの南西側部分である。その後、資料整理の段階でIVa区は9区に名称変更している。

調査区の位置は半谷川の左岸に張り出した丘陵上にある。同じ丘陵上には北側に7区と8区、西側には少し距離を置いて10区が位置する。7区とは北面が接している。立地は南西側に緩く傾斜する斜面地で、一番高いところで標高29.4m、調査区南端との比高差は2.8m程である。宅地造成や茶樹改植を行った際に重機の攪乱を受けているため、遺構検出面は

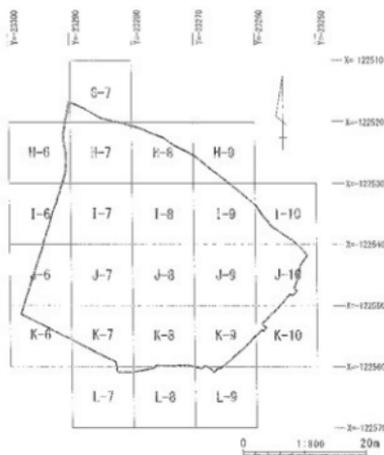


図138 9区グリッド配置図



図139 9区遺構全体図

基盤層の直上の1面のみである。遺構面の土層は茶畑等の耕作土である。

本調査区内の遺構密度はさほど高くないが、7区と地続きの北西平坦部一帯で柱穴群を検出した。柱穴は直径0.3m程度のものが多く、検出面からの深度は、0.25~0.3m程が大半であった。しかし中には0.5m以上の深度をもつ柱穴も存在した。柱穴の覆土はほぼ単層で、暗褐色土（炭化物、1~5mmの小礫を含む）や黄褐色土（炭化物、1cm程度の小礫を含む）のどちらかに分類できる。資料整理での遺構検討の結果、9棟の掘立柱建物跡が確認できた。このほかにも土坑4基、石組井戸1基、流路跡等を検出した。なお、遺構番号については、極力、現地調査で付けた番号を生かした。ただし、掘立柱建物跡や堅穴住居跡については資料整理の遺構検討の結果、新たに付した番号である。

出土遺物は他の調査区に比べて非常に少ない。柱穴や包含層中からは小破片ながら、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器等が出土している。このことから柱穴群は弥生時代から中近世までの遺構と考えられる。そのほか煙管、銭貨、釘などの金属製品が出土している。

掘立柱建物跡 SH01~09 (図140~144・表71)

SH01 (図140) はI-7グリッドで検出した掘立柱建物跡である。2間×3間で、梁行き方向は3.88m、桁行き方向は4.16mある。西側桁行きの柱間は1.4~1.6mである。梁間の間隔は西側が狭く、東側は2.56mと広い。柱穴からの出土遺物はないため建物の時期は特定できない。

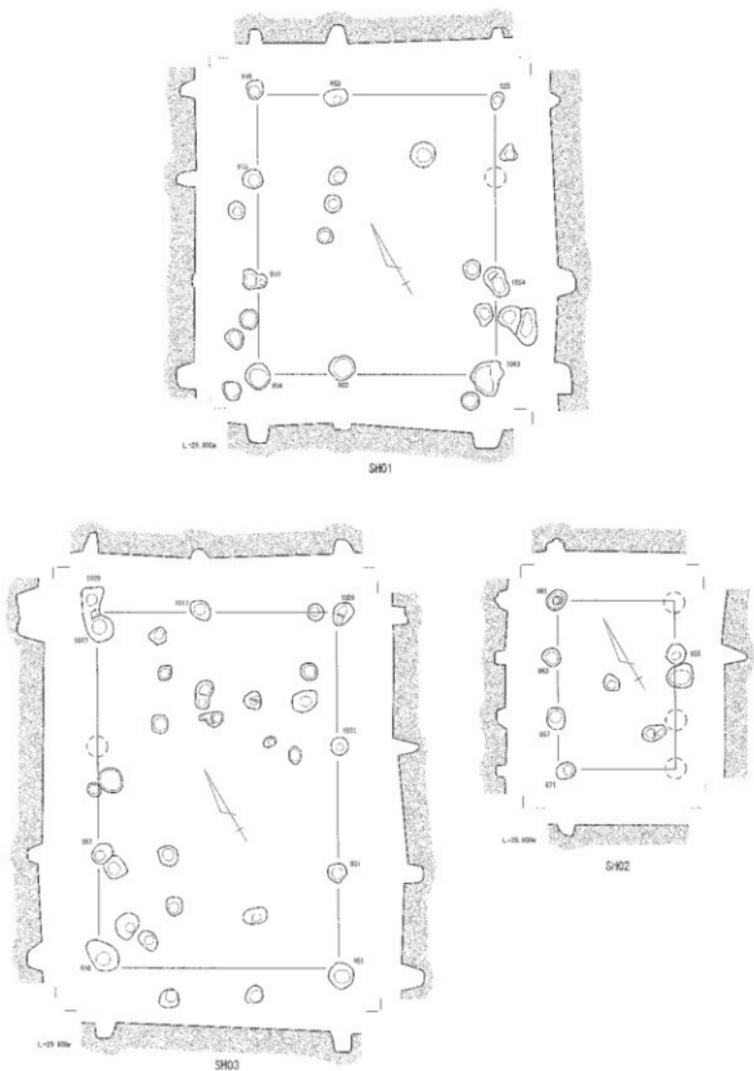


图140 9区柱立柱建物跡 SH01~03

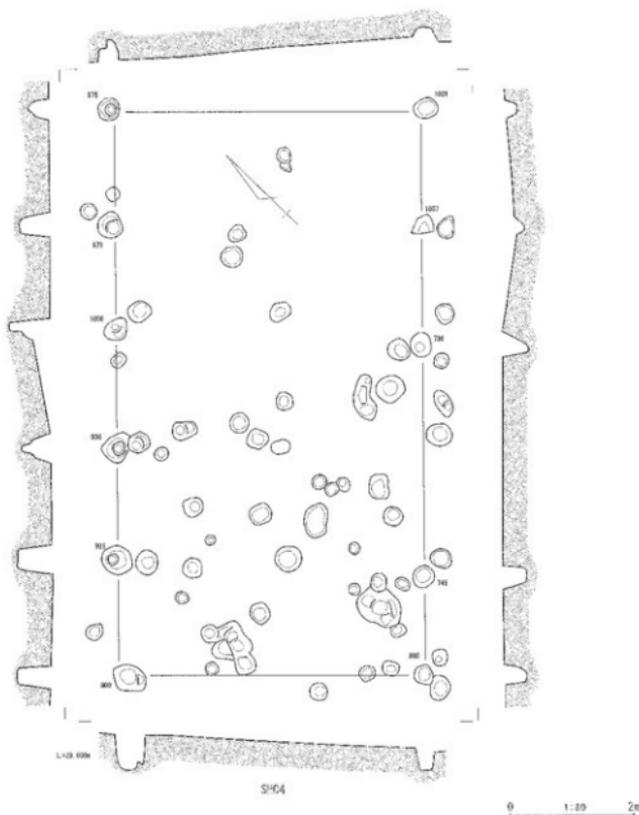
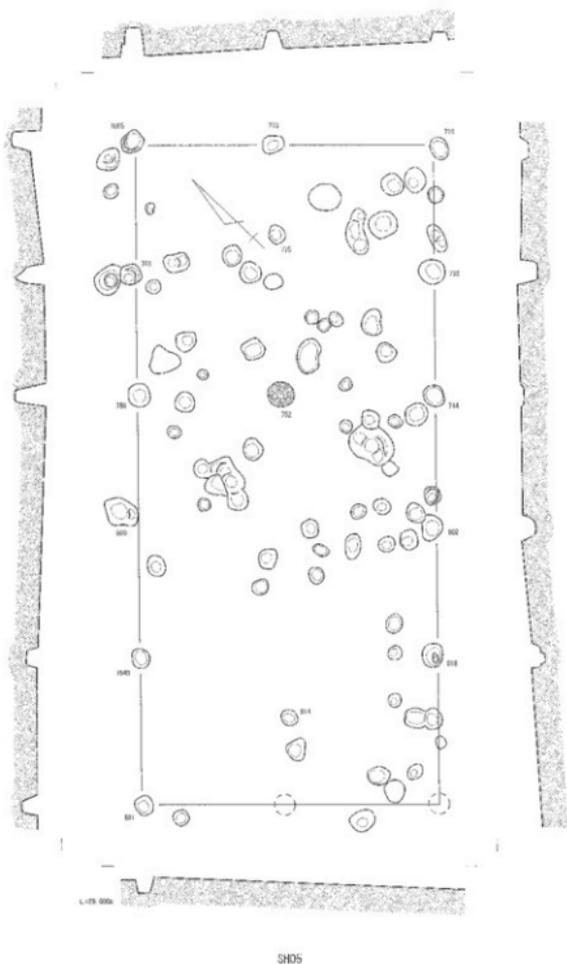


図141 9区掘立柱建物跡 SH04

SH02 (図140) は J~K-6 グリッド内にある小型の建物跡である。1 間×3 間だが、桁行きの柱間が 1.0m にも満たないことや、東側の桁行き面に柱穴が少ないことなどから、掘立柱建物跡にするにはやや立証に欠ける。この区域は集落域の南西側縁辺部にあたることや周辺にも同じような方向の列があることから、柵列と考えてもいいかもしれない。

SH03 (図140) は H-7 と I-7 の 2 つのグリッドにまたがる位置にある。梁行き 3.92m、桁行き 5.76m で、2 間×3 間の掘立柱建物跡である。柱間はやや広く 1.6~2.0m 程ある。遺構出土土器はない。調査区内の建物跡の中では中規模に属する。

SH04 (図141) は大型の掘立柱建物跡に属する。梁間が 4.96m、桁行きは 9.16m 程ある。桁行きの柱間は 1.68~1.92m とほぼ等間隔で、掘形も 0.5~0.6m と深さがある。また柱根の痕跡も顕著に出ている。梁間方向に間柱をもっていないことから、建物内にある柱穴のうち、東柱の機能をもったものが存在した可能性がある。SH05 もこれとはほぼ同じ規模の建物跡であるが、SH04 と SH05 は重複している。建て



—柱坑

0 1:00 2m

图142 9区独立柱建物跡 SH05

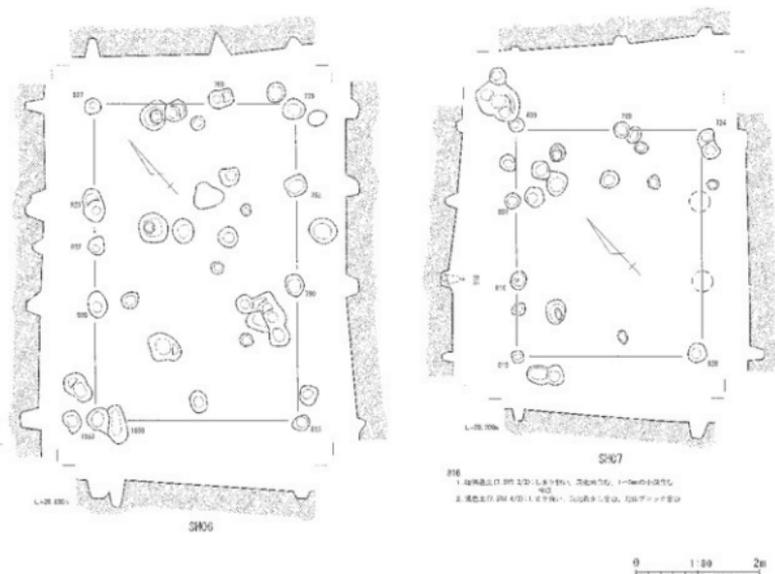


図143 9区複立柱建物跡 SH06・07

替えがあったとも考えられる。西側の桁方向にある柱穴 SP936からは北宋銭「熙寧元寶（真書）」（1001）が1点出土している。銭貨の鋳造年代は11世紀半ば～11世紀末であることから、建物跡もこれ以降の年代であろう。

SH05（図142）は前述のSH04とほぼ同じ規模をもつ建物跡である。梁行きは4.84m、桁行きは10.68mの2間×5間の建物である。柱間は1.92～2.32m間隔とかなり広い。建物の構造はSH04と同じ特徴をもつと考えられる。SP752、SP775、SP814など、建物跡中央に束柱の機能をもつ柱列があったと思われる。SH04と重複することから建て替えられた可能性がある。このほかSH06・07とも重複している。いずれも新旧関係は不明である。柱穴から出土した土器などはないため、時期を特定できないが、建物の存続時期は、SH04と大きな時期差はないものと考えられる。

SH06（図143）はI～J・7・8グリッドにまたがる。関連する柱穴は10箇所あるが、梁・桁方向とも柱穴の位置が整然と並ばず不整形である。梁行き方向は3.28m、桁行き方向は5.12mで中規模の建物跡と考えられている。出土遺物はない。柱列の歪みから、建物跡とするにはやや信憑性に欠ける。

SH07（図143）はJ・7・8グリッドで西側がSH05と重なる。梁行き方向は3.04m、桁行きは3.68mであることから小規模な獨立柱建物跡と思われる。ただしこれも柱列が不規則で、東側列は2箇所の柱穴が確認できなかった。そのため確実に建物跡としかどうかは今後検討する必要がある。

SH08（図144）はI～J・8・9グリッドにまたがる位置にあり、梁行き1間、桁行き3間の建物跡と考えられる。梁行き方向の間柱はない。桁行きの柱間は2.00mである。SP990、SP991、SP992（図版85-2・8）は覆土がその他の柱穴と違い、黒褐色土である。柱穴は直線に並び、底面のレベル差はあるもののSP989（図版85-8）も覆土が同一であることから、関連する遺構と考えられる。SP690、SP671、

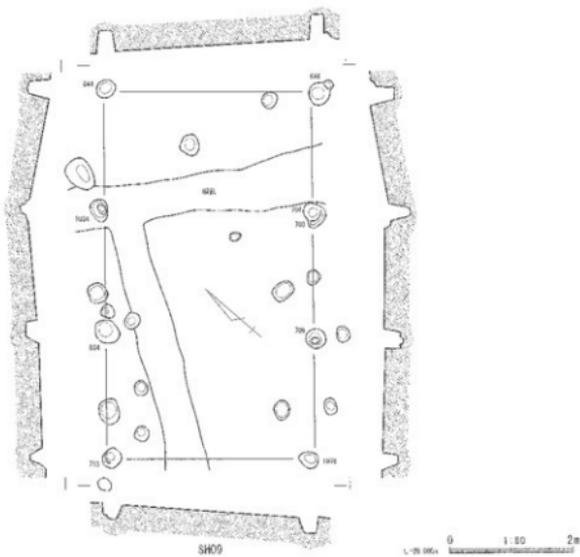
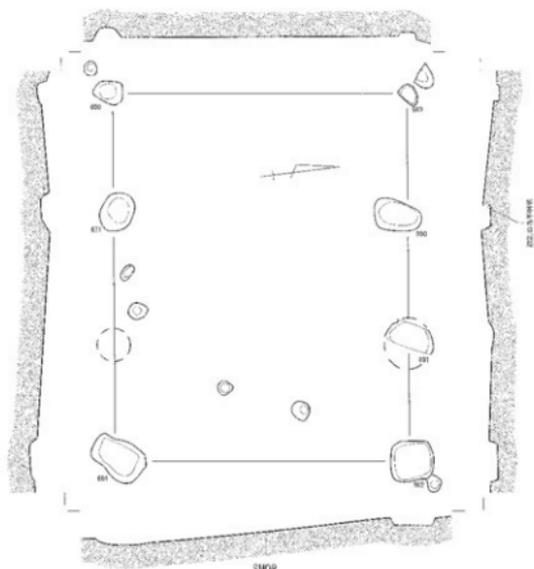


图144 9区棚立柱建物跡 SH08・09

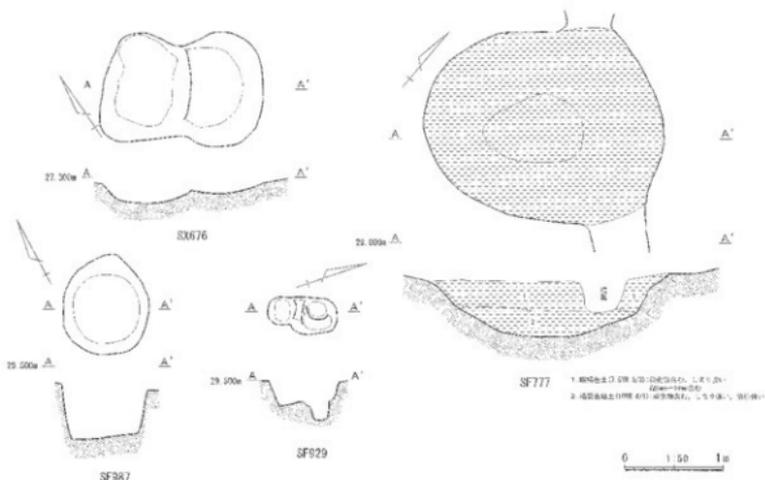


図145 9区土坑

SP684も対面に検出され、覆土が同じ黒褐色土であったことから掘立柱建物跡とした。柱穴の楕形の径は0.5~0.6m前後と周辺の柱穴に比べて大きく、深度は浅い。柱穴 SP990からは土器が数片出土している。土器の種類は弥生土器であるが、小片で表面も風化しているため器種や年代を特定できない。しかし同じ柱穴からは釘が7点(1002~1008)出土している。このことから土器をもって建物跡の年代に直結させることは避けるべきである。釘の形状から見て近世以降の建物跡であろう。

SI09 (図144) はJ-8グリッドに位置し、一部K-8グリッドにかかる。梁行きは3.36m、桁行きは6.00mで、1間×3間の建物跡である。梁行き方向の間柱はないが、桁行き方向の柱穴の間隔はほぼ2.0mと揃っている。一部の柱穴では抜き取られた柱根の痕跡が良好に残るものがあった。北東角の柱穴 SP646 (図版85-3) 覆土からは大型の甕の底部片が出土した。中・近世の時期に属する建物であろう。

自然流路 SR655・938 (図139)

SR655はK-9・10グリッド内で東西方向に走る流路である。出土遺物はなかった。覆土からすると近現代である可能性が高い。等高線に直交する方向に流れることから排水の機能をもつ流れであろう。

SR938はI~K-6グリッドにかけて北から南に流れる流路跡である。調査区の西端にあることから遺構の全形は不明である。遺構の覆土を見ると中近世以降の時期と思われる。覆土内から出土した土器も山茶碗片や陶磁器片であり、覆土観察の結果とほぼ揃う。

土坑 SX676・SF987・SF929・SF777 (図145、図版85-1・6)

SX676の性格は不明。遺物も出土していない。覆土はSR655と同じであることから、近現代の時期と考えられる。

SF987 (図版85-6) は直径0.5m、検出面からの深度は0.5mで、覆土は褐色土。褐色土の覆土から見ると他の遺構よりも古い年代と考えられるが、出土した土器がなく、性格や時期は不明である。

SF929はI-7グリッド内の北半部で検出した土坑である。遺構の周辺には掘立柱建物跡の柱穴群がある。周辺の柱穴よりもやや大きめではあるが、2箇所以上の柱穴が重複したものとも考えられる。覆土からは996・997と弥生土器の小破片が出土している。996は須恵器坏身、997はかわらけ底部である。

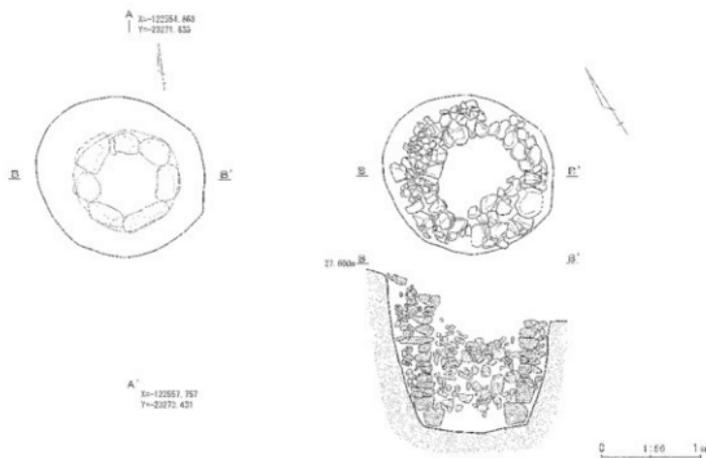


図146 9区井戸 SE650

出土土器の時期差は大きい、かわらけが出ていたことから中・近世の遺構と見るのが妥当であろう。

土坑 SF777の平面形態は、長軸が2.50m、短軸は2.00mの楕円形をしている。遺構面からの深度は0.5m程あり、底は楕円状になっている。覆土は暗褐色土である。廃絶時に埋められたと思われる最大15cm程の礫を多量に含んでいる。遺構の一部は暗渠状の遺構に切られ攪乱を受けている。992～995はSF777から出土した陶磁器類である。年代は須恵器から陶磁器まで幅広いが、なかでも陶磁器が主体である。992は15世紀後半期の青磁碗である。993は土師器の甕で、口縁部片である。994は瓦質の火鉢または香炉である。縁外には型押し文様の施されている。所持していたのは一般庶民層ではなく、比較的富裕層であったと思われる。995は灰釉陶器の碗を模倣した須恵器である。このほか甕や碗などの陶磁器片や、土師器の小片が出土している。995以外は、いずれも15～16世紀代に属することから、SF777の年代もこの時期のものであろう。遺構の性格自体は不明だが、年代は中・近世と考えられる。

井戸 SE650 (図146、図版85-4)

井戸状遺構。古井戸の可能性もあるが、井戸にしてはあまり深くないことから考えると、集水の施設であったことも考えられる。覆土内には拳大以下の小礫が多量に入っていたことから、廃絶時に意図的に礫を入れたと思われる。覆土内にはこのほかに大型の甕や楕円などの破片が数点含まれていた。この遺構の年代は覆土内の土器などから近世以降と考えられる。しかしこれらの土器も、流れ込みか、または礫とともに別の場所から持ち込まれたものだとすれば、正確には特定できない。北側に接している溝跡 SD656などについては近現代の暗渠と考えられるため、SE650も最近まで使われていた可能性がある。その他の遺構 (図139)

SE650の周囲にある SP601・602・628・692 (図版85-7) は、覆土が他の柱穴と違い黒褐色土である。覆土内から弥生土器が出土している。当初、井戸状遺構 SE650の覆い屋とも考えたが、柱穴内の遺物は他時期の混入がない。壁溝や貼床面等は確認できなかったが、竪穴住居跡の主柱穴である可能性が考えられる。柱穴間は南北方向が長く4m、短軸方向は3m程で、長方形を呈する。このことから楕円形もしくは隅丸方形の住居が想定される。東側にわずかに残っている SD603は壁溝の一部かもしれない。

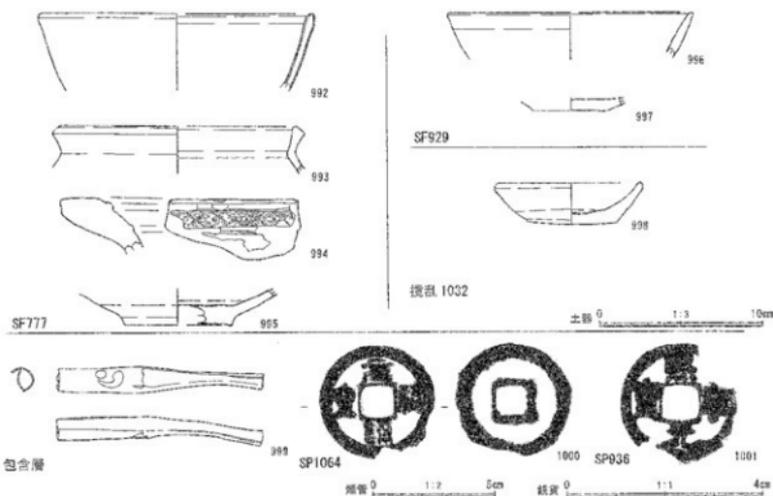


図147 9区遺構・包含層出土土器・金属製品 1

同じような規模をもつ竪穴住居跡は7区のSB02がある。SB02は同じく標高27~28mの丘陵上の傾斜地に位置している。柱穴覆土から出土した土器もほぼ同じ年代であることから、当該遺構も弥生時代後期の竪穴住居跡である可能性が高い。この北側から焼土882を検出しているが、関連性は不明である。

9区出土の遺物 (図147・148)

冒頭で述べたように、9区では出土遺物が極端に少なく、総量は保管箱1箱にも満たない。復乱1032より出土した山茶碗の小皿(998)は、焼成が悪く土師質のような色調である。同遺構からは無高台の皿や蓋、甕片などの陶磁器が出土している。9区で出土した2枚の銭貨はいずれも渡来銭である(1000・1001)。1000はSP1064から出土した。SP1064は今回復元した掘立柱建物跡の柱穴にはあたらなかったが、建物跡の柱穴であった可能性が高い。同遺構からは、かわらけの小片と北宋銭「元祐通寶(篆書)」が伴って出土している。銭貨の鋳造年代は11世紀末~近世前期である。他の調査区で出土した銭貨と比べるとやや古い年代である。8区と同様、他の調査区とは時期差がある。このほかには包含層より煙管の吸口が1点(999)出土した。

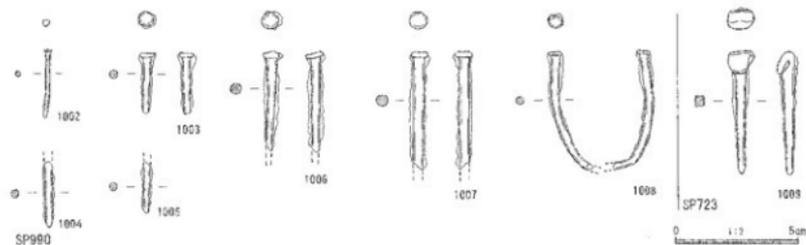


図148 9区遺構・包含層出土金属製品 2

9. 10区

10区は本調査IV期として平成15年度に発掘調査が行われた。IV期調査は、調査区が3箇所に分かれており、このうち南側を流れる半谷川に向かう斜面部を、便宜上、IVb区と呼んでいた。資料整理の段階でIVb区は10区に名称変更している。IVb区の位置は半谷川の左岸に張り出した丘陵の裾部にあたる。丘陵上部には北側に8区、北西側には7・9区が位置する(図45)。立地は西側に緩く傾斜する斜面地で、一番高いところで標高24.6m、調査区西端は旧半谷川の流路であり、その丘高差は2.4m程である。宅地造成や茶樹改植を行った際に重機の攪乱を受けている。遺構面上層は茶畑等の耕作土である。8区や9区と同様に全体に攪乱を受けていて、遺構の残存状態はよくない。調査区の南側部分は、現在、改修され南側に流れる半谷川の旧河道があり、遺構面の一部は削り取られてしまっている。遺構検出面は、暗褐色土層の下面と、調査区西側一部分に地積している暗褐色土の下層である黒褐色土の下面との2面が存在する。第1面(図150)は竪穴住居跡、柱穴群、溝状遺構が検出された。柱穴は圓形上面の径が0.3m程の大きさが多く、検出面からの深度は0.25m程度、なかには深度0.4m以上の柱穴も検出した。遺構覆土は暗褐色土(しまり強い、炭化物含む、小礫5~10mm多く含む)が奈良・平安時代、このほかには黄褐色土(しまり強い、シルトに近い、小礫1~5mm含む)や、黒褐色土(しまり強い、炭化物少量含む、小礫5~10mm多く含む)、褐灰色土(しまり強い、小礫含む)などに分類できる。しかし出土遺物の年代に幅があるため、第1面では複数の時期の遺構が存在するものと考えられる。柱穴の覆土はほとんどが単層で、暗褐色土(炭化物、1~5mmの小礫含む)や黄褐色土(炭化物、1cm程度の小礫含む)が多い。遺物量は全体的に少ない。竪穴住居跡からは奈良時代の須恵器、土師質土器、溝状遺構からは弥生土器が出土した。柱穴や包舎層からは小破片ながら弥生土器、須恵器、土師質土器、陶器片、かわらけが出土しており、年代が幅広い。調査区の北側と竪穴住居跡の周囲にある柱穴群は奈良時代から中・近世の遺構と考えられる。第2面(図151)は柱穴、溝状遺構が検出された。この検出面は、包舎層である黒褐色土層から弥生土器が出土していることから、弥生時代の遺構面と考えられる。柱穴の覆土は黒褐色土(炭化物、5~10mmの小礫含む)である。溝状遺構SD02から弥生時代中期の土器と被熱した礫が出土したが、そのほかは土師質土器の小破片が出土したのみで、性格は不明である。

10区の基準上層は図152のとおりである。集落域では地山(黄褐色土)の上はII層(暗褐色土)が堆積している。III層(暗褐色土)は現代の耕作土や宅地造成で攪乱を受けている。調査区内で見つかった竪穴住居跡は地山面を掘り込んで作られており、覆土にはブロック状の地山土が混じっている。

竪穴住居跡 SB01~07 (図153、図版88・89)

竪穴住居跡(SB01~07)は後世の攪乱を受けておりさらに半谷川の旧河道で流されているため、塹溝の一部と焼土を検出したのみである。地山の上層は2層堆積しているが、分層は難しく、また湧水もひどかったため、平面確認は困難と判断して地山直上での検出を行った。調査の結果、7軒以上の竪穴住居(SB01~07)が重複していることがわかった。SB01とSB02、SB04とSB05は塹溝が一部共有している箇所があり、塹溝のみ修復していると考えられる。SB01とSB02、SB04と

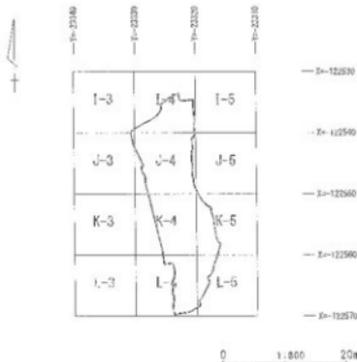


図149 10区グリッド配置図



図150 10区第1面遺構全体図

SB05のそれぞれの新旧関係は不明である。ただし、切り合いから、SB01・SB02よりもSB03の方が新しいことが考えられる。SB04・SB05とSBC3との新旧関係も不明である。SB06は擾乱で大きく破壊を受けており、壁溝の一部だけを検出した。SB06とSB07は他の住居跡との切り合いがなく、新旧関係は不明である。貼床面は検出できなかった。罅穴住居に伴う支柱穴も特定できなかった。住居跡周辺の穴はい

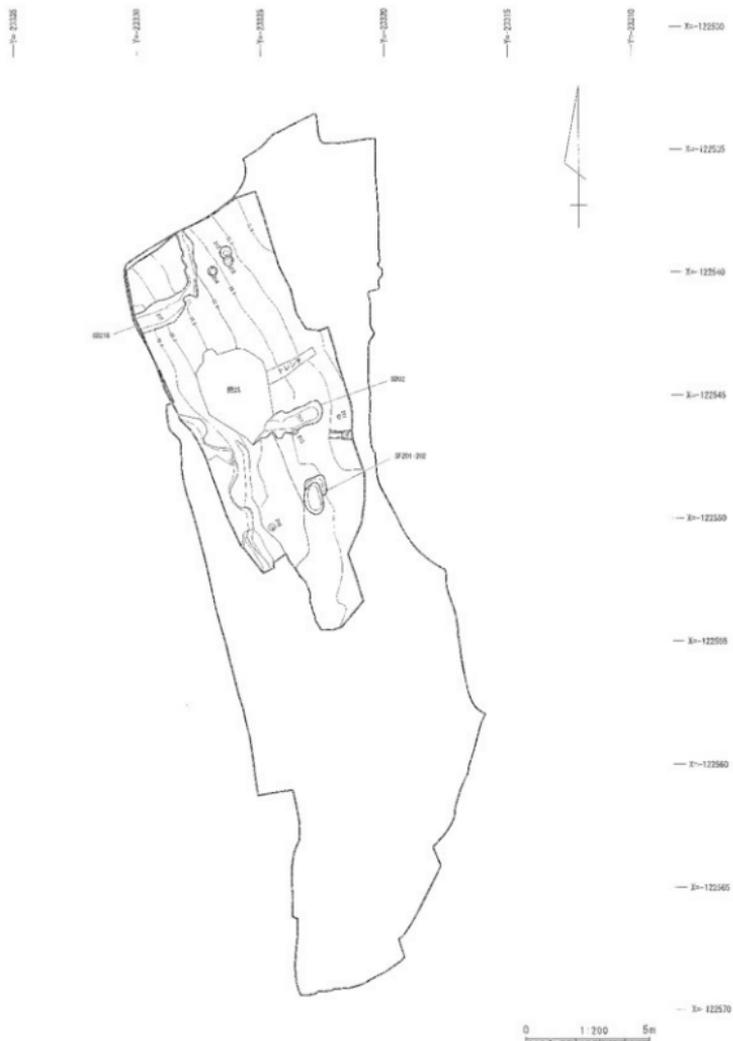


図151 10区第2面遺構全体図

ずれも浅く、主柱穴とは考えにくい。焼土はいずれも壁溝付近で検出されたことから竈と考えられるが、残存状態が非常に悪く、袖や支柱・煙道等の構造がわかるものは検出できなかった。焼土104はSB01・02に伴う竈の残存と考えられる。そのほかの焼土もどの住居跡に伴うものか特定はできないが、位置関係からして、焼土106・107はSB03に伴うもの、焼土102・106はSB04・05に伴うものと推察される。

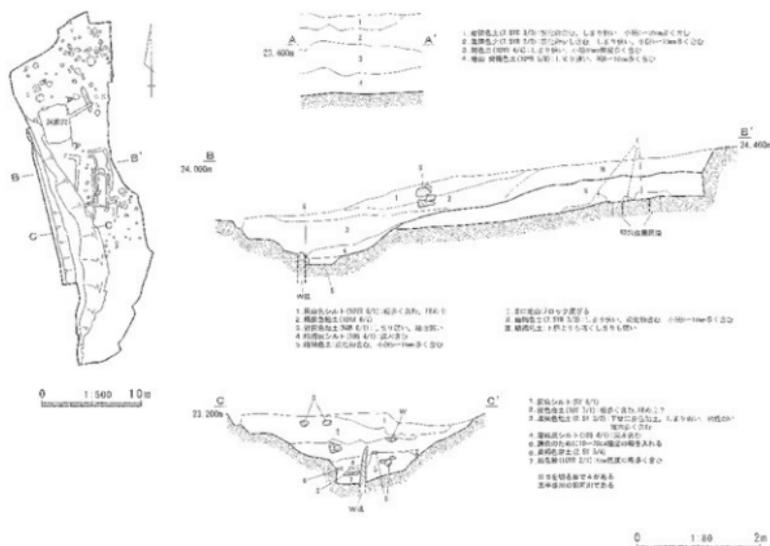


図152 10区土層断面図

焼土の標高値は焼土102が最も高く、焼土106が最も低い。焼土中からは甕の破片が複数見つかった。住居の壁溝が2つ並行する、あるいは共有していることから見ると、建て替えというよりは修復だけ行っている可能性がある。竪穴住居の平面形態は方形を呈している。さらに壁溝内から出土した土器の年代(図154)から見て、10区の竪穴住居は奈良時代と考えられる。

掘立柱建物跡 SH08・09 (図155、表71)

10区では第一面の調査区北側で2棟の掘立柱建物跡が確認できた。SH08は1間×2間の建物跡で、梁間は5.6m、桁間は8.9m程の規模がある。桁行きの柱間は4.2~4.7mである。柱穴の掘形は径が1m程あり、深いもので0.4m程ある。掘形の上端は後世の開発で削り取られている可能性がある。SH09も1間×2間の構造で、梁間が5.0m、桁間は10.0m程ある。桁行きの柱間は4.7~5.3mの距離がある。柱穴の径は0.8~0.9mのものが多く、深さも0.4m弱である。

櫛列状遺構 (図156)

図156のSP36・38・39・41は、他の柱穴に比べて一回り大きく、柱穴間は短いが一定間隔で並び、遺構覆土も同一であった。さらに遺構の深度もほぼ同じくらいであった。穴の間隔は1.5m程である。しかしこれに対応する柱穴は周辺になく、掘立柱建物跡になる可能性は低いと思われる。SP39からは土師質の土錘(1078)や打製石鏝(1079)が出土している。SP32・91・144も一定間隔で並ぶ穴列である。穴の間隔は2.8m程あるが、前述の遺構と同様に対応する列がない。櫛列などである可能性も考えられる。

土坑 SF12・201・202 (図156、図版89)

SF12は第1面の掘立柱建物や柱穴が集中している調査区北側で検出した円形土坑である。直径は約1m、穴の深さは0.3m程で平底となっている。覆土から出土した土器は1055・1056のかわらけのほか

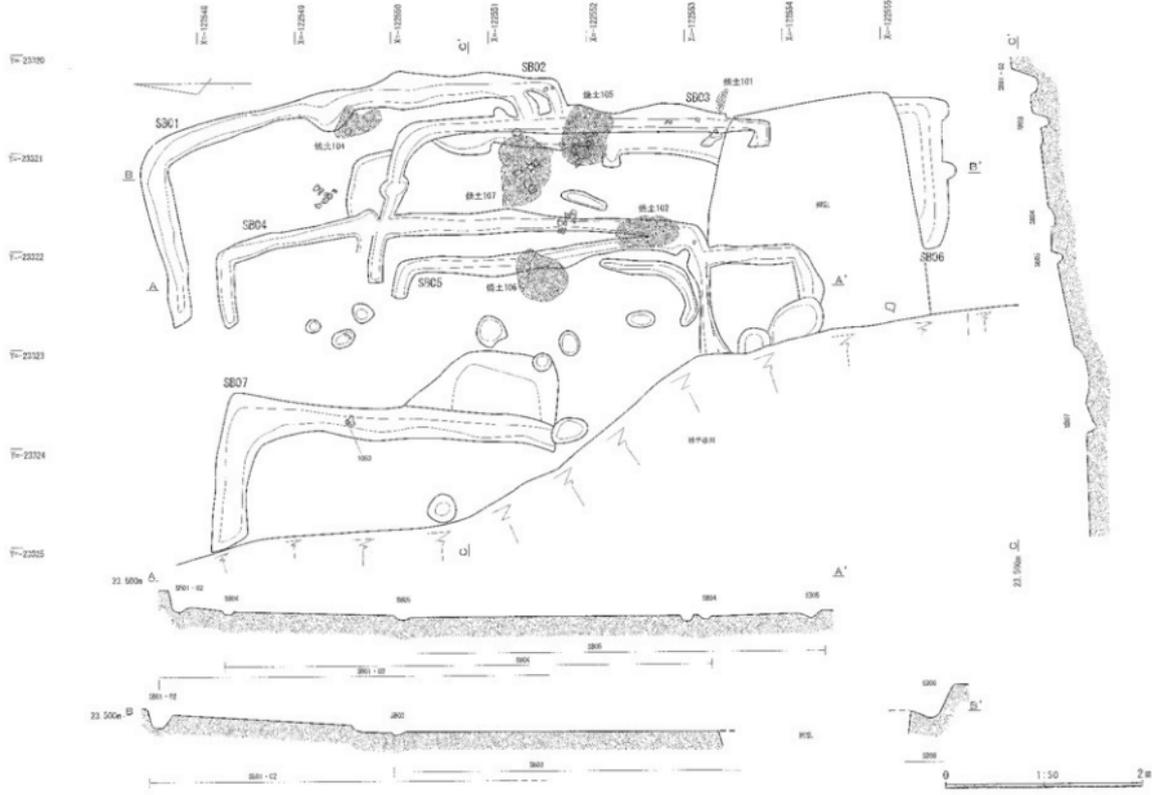


图153 10区壁穴住居状遺構 SB01~07

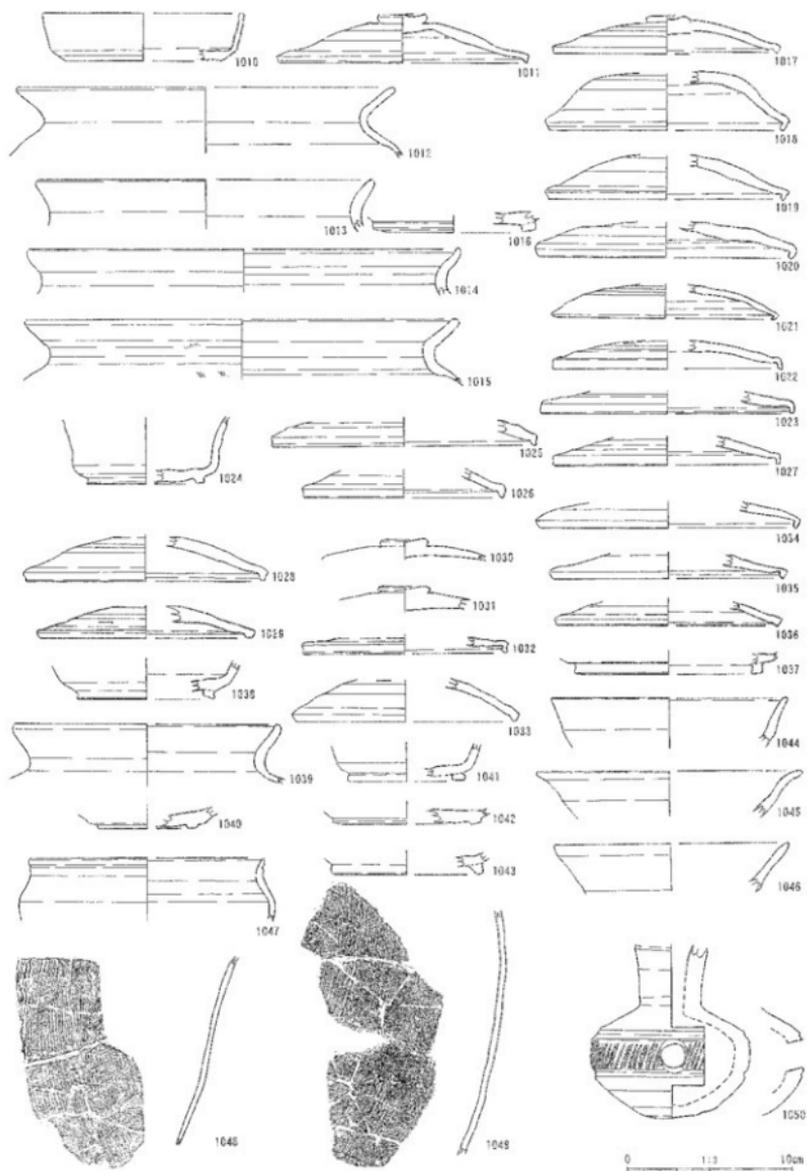
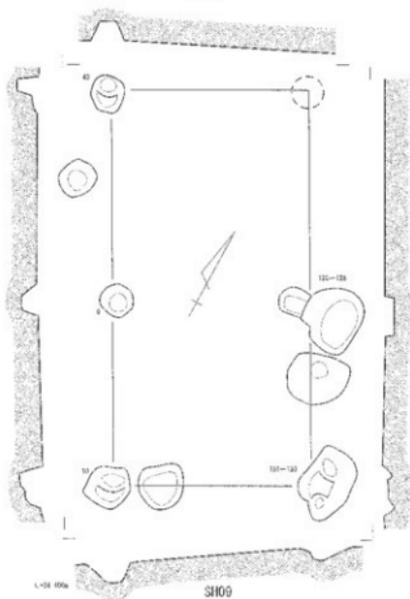
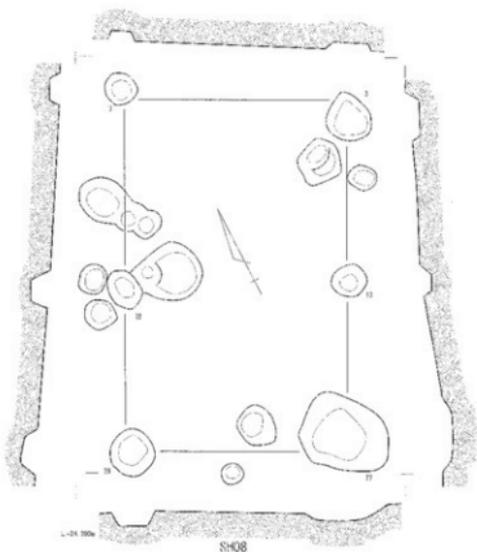


图154 10区髹穴住居状遺構出土遺物



0 1:80 2m

图155 10区独立柱基物跡 SH08・09

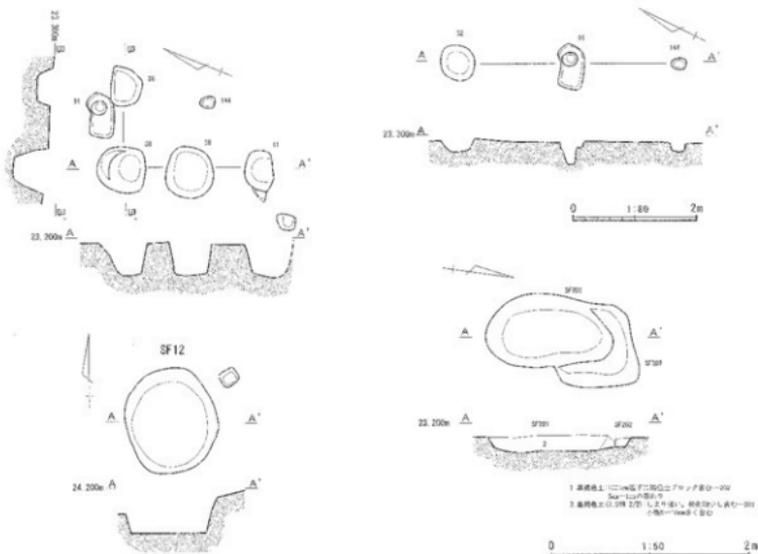


図156 10区柱穴列・土坑

にも複数個体のかかわり片や天目茶碗などの陶磁器片が数点ある。近世以降の土坑墓であった可能性も考えられる。SF201・202は第2面で検出した。両者は切り合っており、SF202の後にSF201が掘り込まれている。SF201は楕円形を呈し、SF202は方形に近い不定形な形状である。SF201覆土からは弥生土器から須恵器までの小片が出ているが、年代幅が広く時期を特定できない。

小穴・溝状遺構 SP04・148、SD01・02・216 (図150・151・157・158、図版89)

SP04は直径0.6m、深さも0.6m程の円形を呈する。掘立柱建物跡SH07付近の柱穴である。覆土内からかわらけが2点(1057・1058)出土している。柱を建てる際、一緒に添えられたものであろうか。SP148は竪穴住居跡SB04の内部にあるが、住居の主柱穴とはしていない。大型礫が掘形底部と側面に2点出土している。柱を据えるためのものと考えられるが、中・近世から現代に近い時期のものであろう。

SD01(図157)は覆土が暗褐色土で、掘形まで0.03m程度である。遺構の性格や時期については特定できないが、覆土からすると、竪穴住居跡とはほぼ同時期と考えられる。SD02(図158)は第2面(褐色土上面)で検出した遺構である。覆土は黒褐色土で、5cm程度の礫を含む。当初は流路と考えていたが、覆土の土層断面を観察したところ立ち上がりがあったため、溝状遺構と考えた。覆土内から弥生時代中期の壺(1051)が出土した。すぐ脇には被熱した礫(最大長20cm)も出土している。土器・礫ともに原位置を留めていないと思われる。住居跡等の遺構の可能性も考えて掘形の再確認も行ったが、周囲に関連するような遺構は見つからなかった。この遺構の性格については現時点では不明であるが、斜面に直交するように切り込まれている溝であることから、人為的な遺構であることには違いない。遺構は最も高いところで標高23.2~23.4mで西向き斜面丘陵上に位置する。また覆土内からは弥生時代中期の壺形土器がほぼ完形に近い状態で出土している。200m程西方の半谷川の対岸に向かい合った丘陵上には花倉大柳遺跡(No.84地点)がある。標高63mの斜面地で方形周溝墓と思われる溝状遺構が見つかった。

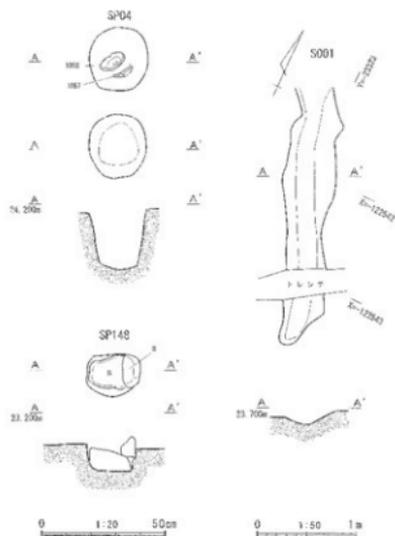


図157 10区溝状遺構・小穴

このことからSD02が方形周溝墓の周溝の一部である可能性も考えられる。

10区遺構出土の土器 (図154～1010・1049、図158)

この区からはさほど多くの土器は出土していないが、中央部分にいくつかの竪穴住居跡が検出されたこともあって、3群とした奈良時代中期から後期の土器が比較的多く出土している。検出された各竪穴住居跡は重複しており、傾斜面に営まれていることもあって、遺構全体を検出できなかったものはない。また、各竪穴住居跡の重複が激しく、出土した遺物も各住居跡ともに混じっている。多くは3群とした奈良時代の須恵器であるが、一部には5群とした灰釉陶器が混在している。この5群の土器は遺構覆土への混入であろう。

竪穴住居跡SB01からSB07まで7軒の竪穴住居跡が検出されたが、SB01とSB05からは時期を特定できる遺物は検出されていない。しかしSB01～SB07から出土した土器はかなりの量があり、各住居跡の年代もおおよそそれらの土器の年代に求めている。

SB01・02 SB01からは口縁を外反させ、胴部が大きく張る甕(1013)が、SB02では須恵器箱環が1点出土している(1010)。ほかにSB01～03出土の土器には3群のものが多く、この土器もそれらに含めておこう。

SB03 須恵器環蓋、土師器甕がある。須恵器環蓋(1011)は扁平なボタン状のつまみをもち、口縁端部の折り返しの形からも助宗古窯の製品である。3群の土器に含まれる。土師器甕(1012)は口縁が大きく外反し、胴部が張った甕でこの地域の甕である。やはり3群に含められる。

このほかに、焼土の近くから長胴甕が出土している(1048・1049)。口縁部付近を失っており、胴部が中心の軀体であるが、2次的に火を受けた様子が明らかで、甕にかけられたものであろう。周辺から検出されている焼土はおそらく甕の残欠であろう。土器は器面全面に縦方向のハケ目を施している。

SB04・05 須恵器環蓋(1025～1027)があるが、その特徴からこれらも3群土器に含めておく。

SB01～SB03の土器 須恵器環身(1016)と蓋(1017～1023)がある。1017は扁平なつまみをもち、それ以外も口縁端部あるいは器形から3群土器に含まれるもので、助宗古窯での生産が盛期を迎えている奈良時代中期から後期にかけての製品である。SB04～05とした環蓋も同様である。

このほかにSB01～05出土の遺物として、かなりの量の土器が一括して取上げられている。多くは須恵器環身・蓋であるが土師器甕も含まれている。須恵器環には口径に中・小がある。また5群とした灰釉陶器も含まれている(1045～1046)がいずれも小破片であり、住居跡覆土への混入であろう。

SD02 完形に近い弥生の壺が1点出土している(1051)。傾斜面に直行する幅0.8m程の溝内から出土している。遺構の性格は明らかではないが溝の形状から見て、あるいは方形周溝墓の一部かもしれない。出土した土器は比較的頸の短い壺で、口縁部の張り出しは弱い。器面全面に縦の粗いハケを施し、肩部に横方向の櫛目紋を描いている。櫛目は4本で5段に施されているが、施紋方向は反時計回り、途中箇所かで継いでいる。櫛の継ぎ目は器壁の保存状態が良くないため明瞭ではないが、最上段では3

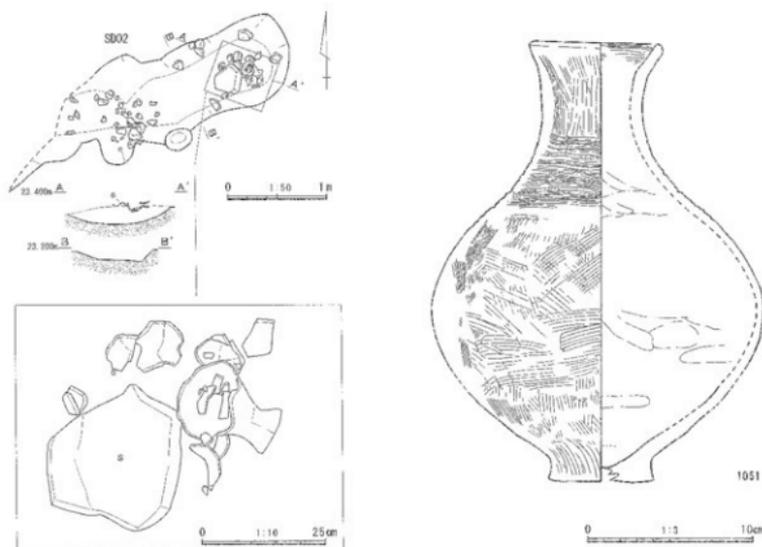


図158 10区溝状遺構SD02・出土遺物

箇所である。弥生中期後半の中頃のものである。衣原遺跡出土の土器では最も早い段階のものである。包含層出土の土器（図154-1050、図159-1052～1077）

1群土器 甕が1点出土している（1050）。口頸部を欠いているが、5区で検出された衣原11号墳から出土した須恵器甕とよく似ている。10区は丘陵の先端部に当たるので、あるいは付近に横穴石室が造られていたのかもしれない。

3群土器 須恵器坏身と蓋がある。1052と1063にはつまみがある。前者は扁平なつまみで、蓋の口径も小さい。後者は擬宝珠状をなしている。蓋は比較的器高の高いもの（1061）と扁平なもの（1062）とがあるが、いずれも小破片であり詳しくは分からない。

坏身 底部から高台にかけての破片を図示した（1064・1067～1069）。いずれも助宗古窯に特徴的な四角張った断面をもつ高台で、口径の小さなものと比較的大きな（坏の口径を大・中・小に分けた場合の中に当たる）ものがある。

このほかに小破片ではあるが、甕がある。3点を図示した。1075は大きく外反した口縁上面に幅広い凹線をめぐらせた、荷手の長胴甕で、淡灰色を呈しており、遠江以西に特徴的な土器である。1076は外反する口縁と大きく張った胴部をもち、器壁の内・外面にヘラ磨きを施した埴東甕型の甕である。1059も外反した口縁をもつ甕で、口縁は内外面とも横位のナデが施されている。志太地域の土器であろう。

5群土器 灰軸陶器の碗と皿である。量は多くはない。1066は高台の端部外面にヘラを当て、先端を細くしたもので、形態的には黒笹90号窯に近いものであるが、胎土・焼成から遠江産の灰軸陶器と推定できる。1074は三角形の低い高台をもったもので、やはり遠江産の灰軸陶器である。小破片ではあるが皿もある。

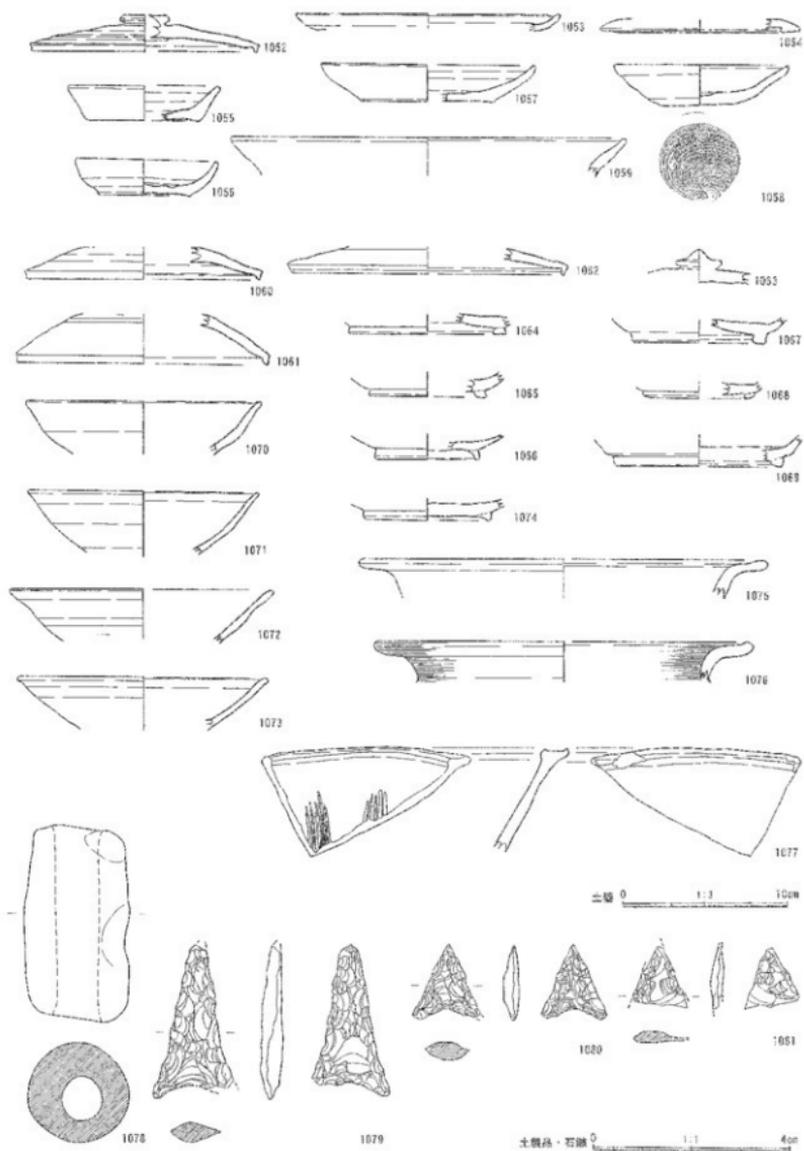


图169 10区透模·包含层他出土器物

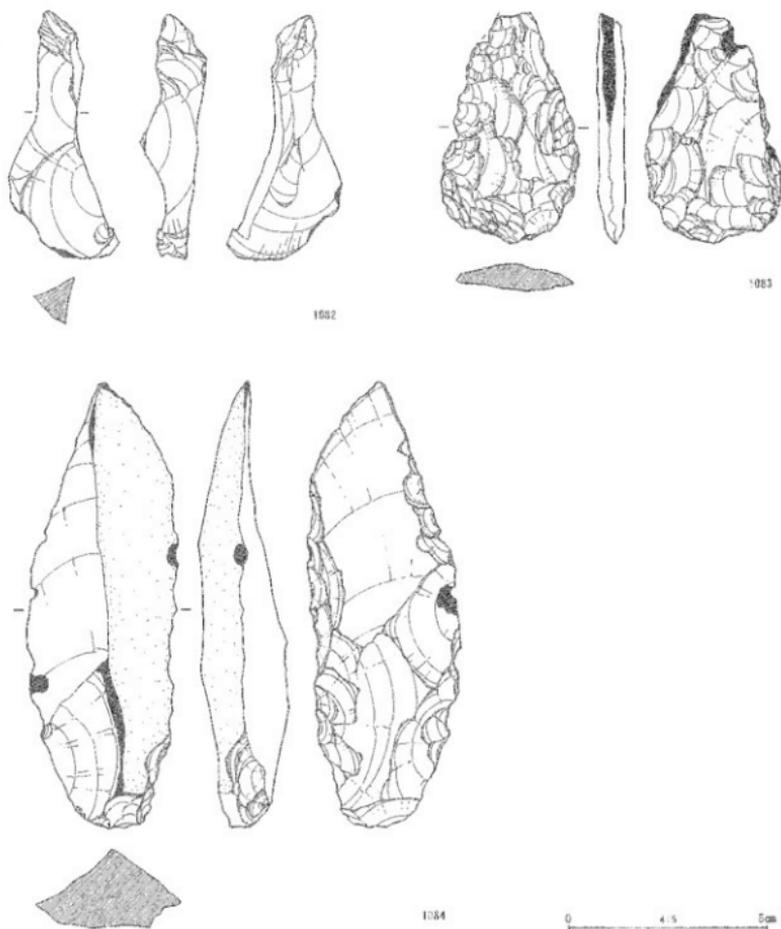


図160 6・8・10区出土尖頭器・石核調整剥片

1077は志戸呂産の播鉢である。1078はSP39から出土した竹管状の土釜で、長さは4.0cm、最大径は2.05cm程ある。1079～1081は打製石鏃である。1079はSP39より出土した淡灰色珧質頁岩製の無茎打製石鏃である。1080・1081はいずれも包含層から出土した黒曜石製の石鏃である。1082・1083・1084（図160）は旧石器～縄文時代の石器と思われる。1082は黒色珧質頁岩製の石核調整剥片である。10区の竪穴住居跡SB01の覆土より出土した。1083は6区SD1535（図94）覆土上層より出土した黒色珧質粘板岩製の尖頭器である。縄文時代早期期と思われるが遺構へは混入したものであろう。1084は8区で出土した暗灰色細粒砂岩製の尖頭器である。縁辺部器面に小さな欠損が多くある。

表23 5区出土權石經觀察表

序號	區別	造別	文字	ゴシック	讀法	原形	重量 (g)			備考
							部重量	字重量	厚	
11	32.30	佛心經	佛	佛	SP6	4.60	1.10	1.50	11	南朝文字
22	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.20	2.50	0.65	15	
23	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.80	4.40	0.70	12	
24	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.30	2.70	1.05	10	
25	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.50	3.30	1.00	12	
26	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.40	3.70	0.80	10	
27	32	佛心經	佛	佛	SP6	4.20	3.70	0.80	12	
28	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.70	2.80	0.80	11	
29	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.20	4.20	0.45	12	
30	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.15	3.00	0.70	10	
31	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.40	3.90	0.85	7	
32	32.10	佛心經	佛	佛	SP6	2.00	2.70	2.90	20	
33	32.20	佛心經	佛	佛	SP6	3.30	3.70	0.90	13	
34	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.50	3.15	0.75	10	
35	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.00	4.00	0.90	15	
36	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.80	2.20	0.45	11	
37	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.80	1.70	0.80	15	
38	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.10	1.60	0.80	5	
39	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.50	2.00	0.65	7	
40	32	佛心經	佛	佛	SP6	1.90	2.30	0.70	5	
41	32	佛心經	佛	佛	SP6	4.70	2.40	0.65	12	
42	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.60	3.00	0.85	7	
43	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.60	2.55	1.00	9	
44	32	佛心經	佛	佛	SP6	4.20	3.00	0.80	15	
45	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.80	2.95	1.15	16	
46	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.15	3.30	1.40	23	
47	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.00	2.45	0.90	13	
48	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.70	3.50	0.90	11	
49	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.40	2.55	0.85	7	
50	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.80	2.90	1.00	10	
51	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.80	3.20	0.90	10	
52	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.60	3.00	0.80	12	
53	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.20	3.50	1.10	10	
54	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.05	4.20	1.10	23	
55	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.50	3.30	0.90	8	
56	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.50	2.60	0.90	8	
57	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.20	2.75	0.65	9	
58	32	佛心經	佛	佛	SP6	4.35	3.35	0.85	14	
59	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.20	3.00	0.70	11	
60	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.45	2.80	1.10	15	
61	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.50	4.40	1.30	30	
62	32	佛心經	佛	佛	SP6	4.00	2.35	0.65	11	
63	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.60	2.65	1.30	20	
64	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.70	2.10	0.85	8	
65	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.30	2.50	0.85	13	
66	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.80	3.30	0.95	13	
67	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.20	1.25	0.95	22	
68	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.15	3.45	1.25	20	
69	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.60	2.55	0.70	8	
70	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.70	4.10	0.95	16	
71	32	佛心經	佛	佛	SP6	4.00	2.05	1.50	21	
72	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.80	2.30	1.10	12	
73	32	佛心經	佛	佛	SP6	4.10	3.20	2.90	10	
74	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.60	3.30	1.30	10	
75	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.20	2.85	0.75	6	
76	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.20	2.35	0.90	7	
77	32	佛心經	佛	佛	SP6	1.20	2.60	3.60	11	
78	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.00	2.70	1.20	13	
79	32	佛心經	佛	佛	SP6	4.10	3.50	1.10	23	
80	32.20	佛心經	佛	佛	SP6	3.25	2.75	0.65	11	
81	32.20	佛心經	佛	佛	SP6	2.20	3.10	0.90	6	
82	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.70	2.40	0.75	11	
83	32	佛心經	佛	佛	SP6	4.20	2.10	0.80	13	
84	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.70	2.80	0.90	12	
85	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.65	2.10	0.70	9	
86	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.60	3.30	1.30	11	
87	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.50	2.05	0.75	9	
88	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.50	3.60	1.50	20	
89	32	佛心經	佛	佛	SP6	4.20	3.10	1.80	20	
90	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.20	2.80	3.20	24	
91	32.20	佛心經	佛	佛	SP6	3.30	3.45	0.85	14	
92	32.20	佛心經	佛	佛	SP6	3.70	3.80	0.80	12	
93	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.30	2.30	0.80	10	
94	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.10	2.05	0.90	9	
95	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.80	2.10	1.20	11	
96	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.80	3.10	0.70	12	
97	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.70	4.70	3.20	24	
98	32	佛心經	佛	佛	SP6	3.30	1.15	0.80	12	
99	32	佛心經	佛	佛	SP6	2.80	3.70	1.20	10	
100	32	佛心經	佛	佛	SP6	4.40	3.70	1.50	10	
101	32	佛心經	佛	佛	SP6	4.40	3.80	1.10	19	
102	32	佛心經	佛	佛	SP6	5.35	4.30	0.80	20	
103	32.20	佛心經	佛	佛	SP6	4.10	4.80	1.20	17	

表23 5区出土碑石経緯表

碑高(m)	碑幅(m)	碑文	文字	ドリフト	遺積	標高	距離(m)			備考
							碑脚中心	碑軸長	碑	
134	33.30	藤下河	春	SPC		2.10	1.83	0.55	10	
135	33	藤下河	春	SPC		2.50	2.50	0.95	12	
100	33	藤下河	春	SPC		2.00	3.50	1.40	13	
137	33	藤下河	春	SPC		2.20	2.10	0.80	5	
136	33	藤下河	春	SPC		3.00	3.50	1.20	12	
139	33	藤下河	春	SPC		2.60	2.43	0.45	7	
133	33	藤下河	春	SPC		2.40	2.75	0.80	9	
113	33	藤下河	春	SPC		4.70	3.60	1.20	21	
112	33	藤下河	春	SPC		3.80	3.20	1.25	13	
111	33	藤下河	春	SPC		3.40	3.53	0.75	17	
114	33	藤下河	春	SPC		3.15	2.70	0.90	18	
115	33	藤下河	春	SPC		2.00	2.20	1.00	6	
118	33	藤下河	春	SPC		2.20	1.90	0.60	5	
117	33	藤下河	春	SPC		2.20	2.00	0.80	8	
118	33	藤下河	春	SPC		4.70	3.80	1.00	24	
119	33	藤下河	春	SPC		2.50	3.00	1.20	12	
130	33	藤下河	春	SPC		3.00	3.50	0.80	12	
131	33	藤下河	春	SPC		4.10	3.80	1.20	20	
122	31	藤下河	春	SPC		3.45	2.25	1.30	11	
123	31	藤下河	春	SPC		3.00	2.40	0.80	12	
124	31	藤下河	春	SPC		3.40	3.85	1.00	7	
125	31	藤下河	春	SPC		3.40	3.60	0.70	6	
126	31	藤下河	春	SPC		3.20	3.15	0.90	13	
127	31	藤下河	春	SPC		3.20	1.80	0.80	7	
128	31	藤下河	春	SPC		2.85	2.50	0.85	8	
129	31	藤下河	春	SPC		2.00	2.50	0.80	11	
130	31	藤下河	春	SPC		2.30	4.50	1.20	17	
131	31	藤下河	春	SPC		2.20	3.80	1.00	16	
132	31	藤下河	春	SPC		3.20	3.20	1.20	17	
133	31	藤下河	春	SPC		2.60	3.60	0.80	9	
134	31	藤下河	春	SPC		2.80	4.80	1.00	18	
135	31	藤下河	春	SPC		3.10	3.80	0.70	7	
136	31	藤下河	春	SPC		2.50	3.25	1.00	12	
137	31	藤下河	春	SPC		3.00	3.00	1.00	9	
138	31	藤下河	春	SPC		3.40	2.90	0.85	12	
139	31	藤下河	春	SPC		2.20	2.20	1.10	24	
140	31.30	藤下河	春	SPC		2.50	3.10	1.15	7	
141	31	藤下河	春	SPC		3.00	3.85	1.50	23	
142	31	藤下河	春	SPC		3.10	3.00	0.80	21	
143	31	藤下河	春	SPC		2.10	2.60	0.80	9	
144	31	藤下河	春	SPC		3.70	3.20	1.10	20	
145	31	藤下河	春	SPC		2.40	2.10	1.20	15	
146	31	藤下河	春	SPC		2.40	3.60	1.20	24	
147	31	藤下河	春	SPC		3.00	3.30	0.50	20	
148	31	藤下河	春	SPC		3.60	3.30	0.80	5	
149	31.20	藤下河	春	SPC		3.00	2.70	0.70	8	
150	31.20	藤下河	春	SPC		3.00	4.50	1.10	19	
151	31	藤下河	春	SPC		3.55	3.30	0.90	10	
152	31	藤下河	春	SPC		2.70	2.65	0.95	12	
153	31	藤下河	春	SPC		3.10	3.00	1.10	15	
154	31	藤下河	春	SPC		3.45	2.50	0.90	12	
155	31	藤下河	春	SPC		4.40	3.95	1.20	20	
156	31	藤下河	春	SPC		4.10	3.95	0.80	7	
157	31	藤下河	春	SPC		3.45	2.00	0.90	13	
158	31	藤下河	春	SPC		3.80	3.60	1.20	26	
159	31	藤下河	春	SPC		4.85	3.10	1.20	26	
160	31	藤下河	春	SPC		3.80	2.90	0.90	11	
161	31	藤下河	春	SPC		2.50	2.60	0.70	7	
162	31	藤下河	春	SPC		2.20	2.40	0.80	3	
163	31	藤下河	春	SPC		3.80	2.90	1.50	23	
164	31	藤下河	春	SPC		3.20	2.20	0.80	9	
165	31	藤下河	春	SPC		3.10	2.90	0.90	11	
166	31	藤下河	春	SPC		2.80	2.60	0.60	10	
167	31	藤下河	春	SPC		2.90	2.50	0.90	11	
168	31	藤下河	春	SPC		3.00	2.50	0.80	7	
169	31	藤下河	春	SPC		2.60	2.90	0.75	8	
170	31	藤下河	春	SPC		3.30	2.80	0.90	10	
171	31.20	藤下河	春	SPC		4.10	4.60	1.40	29	
172	31.20	藤下河	春	SPC		4.25	4.10	0.70	15	
173	31	藤下河	春	SPC		4.80	4.40	1.00	25	
174	31	藤下河	春	SPC		2.90	2.50	0.90	11	
175	31	藤下河	春	SPC		2.00	4.30	0.80	26	
176	31	藤下河	春	SPC		2.60	3.00	1.00	30	
177	31	藤下河	春	SPC		3.45	2.80	0.80	7	
178	31	藤下河	春	SPC		3.20	3.60	0.90	10	
179	31	藤下河	春	SPC		4.30	2.50	0.70	12	
180	31	藤下河	春	SPC		2.40	3.00	0.80	8	
181	31	藤下河	春	SPC		2.10	2.80	1.00	11	
182	31	藤下河	春	SPC		1.80	2.70	0.85	7	
183	31	藤下河	春	SPC		2.90	2.10	0.85	5	
184	31	藤下河	春	SPC		3.70	3.40	0.50	6	
185	31	藤下河	春	SPC		3.70	4.90	1.30	23	
186	31	藤下河	春	SPC		4.30	3.40	0.80	21	

表23 5区出土碑石銘額觀察表

碑石No.	銘額No.	種類	文字	ブレイド	漢字	番付	度量 (mm)				備考
							縦軸長	横軸長	厚	銘高	
187	35	碑石類	夢	SP6			2.60	1.20	1.10	10	
188	35	碑石類	大	SP6			5.20	5.40	2.40	20	
189	35	碑石類	命	SP6			5.00	5.30	0.90	22	
190	35	碑石類	兼	SP6			3.50	3.70	0.50	17	
191	35	碑石類	娘	SP6			2.25	2.10	1.10	12	
192	35	碑石類	元	SP6			2.90	3.00	0.30	19	
193	35	碑石類	解	SP6			2.45	2.60	0.50	21	
194	35	碑石類	相	SP4			3.70	3.50	1.00	13	
195	35	碑石類	淳	SP6			2.15	2.65	1.10	14	
196	35	碑石類	中	SP6			2.00	2.05	0.30	8	
197	35	碑石類	慎	SP6			2.75	2.05	0.70	20	
198	35	碑石類	天	SP6			3.00	2.20	0.75	9	
199	35	碑石類	松	SP6			2.90	3.40	0.65	8	
200	35	碑石類	桃	SP6			3.20	3.30	0.65	15	
201	35	碑石類	上	SP6			2.50	2.85	0.60	9	
202	35	碑石類	望	SP6			3.45	2.55	2.65	11	
203	35	碑石類	尚	SP6			3.15	4.15	0.90	16	
204	35	碑石類	里	SP6			3.30	1.85	0.55	6	
205	35	碑石類	野	SP6			1.45	2.30	1.10	17	
206	35	碑石類	埜	SP6			3.60	3.10	0.60	14	
207	35	碑石類	乃	SP6			2.05	2.60	0.90	12	
208	35	碑石類	清	SP6			3.05	3.05	1.20	18	
209	35	碑石類	安	SP6			3.95	2.95	1.10	10	
210	35	碑石類	清	SP6			2.45	2.60	0.60	10	
211	35	碑石類	乃	SP6			3.55	2.40	0.60	9	
212	35	碑石類	内	SP6			2.10	2.70	0.65	11	
213	35	碑石類	嶋	SP6			3.80	3.80	1.50	16	
214	35	碑石類	一	SP6			2.25	2.60	1.30	7	
215	35	碑石類	松	SP6			3.90	4.00	0.90	10	
216	35	碑石類	西	SP6			4.55	3.15	0.65	12	
217	35	碑石類	樹	SP6			3.00	2.60	0.75	8	
218	35	碑石類	日	SP6			2.65	2.50	0.70	8	
219	35	碑石類	香	SP6			2.75	2.25	0.80	10	
220	35	碑石類	長	SP6			2.60	3.80	0.75	12	
221	35	碑石類	物	SP6			3.20	2.90	0.95	10	
222	35	碑石類	相	SP6			2.55	2.60	1.10	10	
223	35	碑石類	人	SP6			2.60	2.10	0.60	8	
224	35	碑石類	本	SP6			4.20	2.80	1.20	13	
225	35	碑石類	美	SP6			3.60	3.00	1.10	12	
226	35	碑石類	納	SP6			2.90	3.45	0.95	10	
227	35	碑石類	松	SP6			2.70	3.15	1.20	24	
228	35	碑石類	松	SP6			2.25	2.35	0.25	17	
229	35	碑石類	内	SP6			4.05	1.75	1.20	10	
230	35	碑石類	内	SP6			3.55	2.55	0.60	2	
231	35	碑石類	木	SP6			2.65	2.10	0.60	8	
232	35	碑石類	布	SP6			3.80	2.45	1.30	18	
233	35	碑石類	祐	SP6			2.20	2.60	0.95	10	
234	35	碑石類	高	SP6			3.30	3.15	0.75	8	
235	35	碑石類	松	SP6			4.20	2.75	0.90	16	
236	35	碑石類	文	SP6			2.60	3.00	0.60	8	
237	35	碑石類	世	SP6			3.20	2.20	0.90	10	
238	35	碑石類	世	SP6			2.40	1.65	0.65	8	
239	35	碑石類	松	SP6			3.40	3.20	1.10	10	
240	35	碑石類	松	SP6			2.90	2.20	1.05	11	
241	35	碑石類	守	SP6			2.10	2.25	0.55	15	
242	35	碑石類	守	SP6			2.70	2.25	1.00	11	
243	35	碑石類	世	SP6			3.75	2.55	1.30	17	
244	35.20	碑石類	世	SP6			2.85	2.90	0.60	9	
245	35	碑石類	世	SP6			1.85	2.75	1.00	11	
246	35	碑石類	方	SP6			2.05	3.35	0.70	7	
247	35	碑石類	生	SP6			4.40	3.90	0.90	10	
248	35	碑石類	世	SP6			1.90	3.40	0.60	6	
249	35	碑石類	世	SP6			2.25	3.15	0.90	23	
250	35	碑石類	世	SP6			2.85	2.15	0.80	8	
251	35	碑石類	山	SP6			2.50	4.70	0.90	22	
252	35	碑石類	松	SP6			3.75	2.60	0.70	8	
253	35	碑石類	松	SP6			3.60	3.80	1.05	17	
254	35	碑石類	万	SP6			2.75	2.20	0.90	11	
255	35	碑石類	三	SP6			2.75	2.15	0.90	7	
256	35	碑石類	松	SP6			3.85	3.20	0.90	23	
257	35	碑石類	五	SP6			3.25	3.05	0.85	17	
258	35.20	碑石類	高	SP6			2.50	3.10	1.15	17	
259	35.20	碑石類	松	SP6			3.30	2.50	1.15	13	
260	35	碑石類	文	SP6			3.65	3.60	1.35	20	
261	35	碑石類	世	SP6			3.50	2.90	1.25	19	
262	35	碑石類	世	SP6			2.30	2.50	0.80	7	
263	35	碑石類	山	SP6			4.90	3.50	0.85	28	
264	35	碑石類	世	SP6			2.80	3.05	1.35	17	
265	35	碑石類	命	SP6			3.45	2.90	0.80	12	
266	35	碑石類	世	SP6			2.45	3.10	0.90	12	
267	35	碑石類	世	SP6			2.85	2.60	0.90	9	
268	35	碑石類	世	SP6			3.80	3.00	1.10	10	
269	35	碑石類	世	SP6			3.40	3.10	0.75	11	

表23 6区出土隕石観覧表

品目No.	品名	場所	文字	ブリード	表裏	方位	重量(g)			備考
							総重量	隕石片	跡石片	
270	35	砂石田	鉄		SPB		3.70	4.00	0.30	27
271	35	砂石田	了		SPB		3.30	3.70	1.00	27
272	35	砂石田	砂		SPB		3.30	3.05	1.05	17
273	35	砂石田	鉄		SPB		4.30	2.25	1.25	22
274	35	砂石田	鉄		SPB		3.70	3.60	1.15	16
548	37	砂石田	鉄				2.20	2.05	0.65	6
547	37	砂石田	鉄				3.20	3.65	1.15	10
548	37	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	2.45	3.25	0.75	6
549	37	砂石田	鉄				2.50	3.05	0.70	10
550	37	砂石田	石		大塚山群土田層	隕土	3.00	2.70	0.70	7
551	37	砂石田	鐵		大塚山群土田層	隕土	3.00	4.00	1.25	30
552	37	砂石田	鐵		大塚山群土田層	隕土	4.00	2.70	0.90	17
553	37	砂石田	鐵		大塚山群土田層	隕土	5.00	3.70	1.20	15
554	37	砂石田	鐵				2.30	4.10	1.00	15
555	37	砂石田	鉄				3.30	3.00	0.55	19
556	37	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	3.50	2.50	1.10	10
557	37	砂石田	鉄				2.20	2.50	0.85	5
558	37	砂石田	鉄				3.25	4.45	0.95	15
559	37	砂石田	鉄				2.00	2.50	1.15	15
300	37	砂石田	鐵		大塚山群土田層	隕土	4.50	3.20	1.10	22
561	37	砂石田	石		大塚山群土田層	隕土	3.40	2.65	0.95	10
562	37	砂石田	石				1.35	1.70	0.60	4
563	37	砂石田	石				2.00	3.20	0.90	15
564	37	砂石田	鉄				3.10	3.70	0.80	11
565	37	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	2.45	3.00	0.90	12
566	37	砂石田	鉄				3.15	2.15	0.75	8
747	37	砂石田	鉄				2.10	2.10	0.00	5
305	37	砂石田	鐵		大塚山群土田層	隕土	4.15	3.50	2.25	20
569	37	砂石田	鉄				2.65	3.20	0.65	7
570	37	砂石田	鉄				4.55	3.70	0.95	24
571	37	砂石田	鉄				3.25	4.00	0.95	18
572	37	砂石田	鉄				3.90	3.90	0.90	15
573	37	砂石田	了				3.55	2.45	1.10	20
574	37	砂石田	鉄				3.30	3.15	0.70	6
575	37	砂石田	鉄				2.35	2.90	0.60	8
576	37	砂石田	鉄				1.65	1.65	0.10	8
577	37	砂石田	鉄				2.90	2.55	0.60	7
378	37	砂石田	石		大塚山群土田層	隕土	5.00	2.55	1.00	8
579	37	砂石田	石		大塚山群土田層	隕土	3.45	3.10	1.15	19
580	37	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	2.15	2.70	1.70	14
581	37	砂石田	鉄				4.00	3.60	0.90	15
582	38	砂石田	鉄				2.60	2.85	0.70	10
583	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	4.65	3.00	1.30	20
584	38	砂石田	鉄				3.70	2.95	0.60	7
585	38	砂石田	鉄				3.80	2.50	0.80	4
586	38	砂石田	鉄				2.85	1.80	0.50	5
587	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	2.30	2.20	0.85	9
588	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	2.75	1.90	1.15	15
589	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	2.55	2.20	0.70	12
590	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	3.10	4.00	1.30	20
591	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	3.40	2.30	0.85	12
592	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	2.70	2.90	0.80	11
593	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	2.90	2.50	0.90	7
594	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	4.00	3.50	0.95	19
595	38	砂石田	鉄				3.75	2.75	0.90	11
596	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	2.55	2.25	0.90	11
597	38	砂石田	鉄				1.30	2.25	0.80	8
598	38	砂石田	鉄				4.20	2.20	0.70	11
599	38	砂石田	鉄				2.25	2.40	0.90	8
600	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	3.75	3.10	1.00	17
601	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	2.30	3.70	0.90	5
602	38	砂石田	鉄				2.50	3.45	1.00	11
603	38	砂石田	鉄				2.70	2.50	0.75	20
604	38	砂石田	鉄				4.25	4.25	0.50	23
605	38	砂石田	鉄				3.20	2.40	1.20	10
606	38	砂石田	鉄				1.90	2.15	1.00	22
607	38	砂石田	鉄				3.15	4.00	0.85	10
608	38	砂石田	鉄				3.75	3.55	0.90	22
609	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	3.20	3.70	0.60	10
610	38	砂石田	鉄				2.40	2.35	0.60	7
611	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	1.60	0.70	0.70	4
612	38	砂石田	鉄				2.40	3.35	0.90	10
613	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	4.20	3.00	1.05	12
614	38	砂石田	鉄				3.15	2.50	0.65	7
615	38	砂石田	鉄				2.80	2.10	1.20	13
616	38	砂石田	鉄				0.60	0.90	0.15	17
617	38	砂石田	鉄				4.00	3.40	1.25	23
618	38	砂石田	鉄		大塚山群土田層	隕土	0.10	0.60	0.50	5
619	38	砂石田	鉄				2.10	2.50	0.80	5
620	38	砂石田	鉄				2.60	1.70	0.60	9

表24 破石経一覽

文字	よみ	法華経	出土数	文字	よみ	法華経	出土数	文字	よみ	法華経	出土数
阿	ア	294	16	昇(昇)	カイ	150	6	空	クウ	78	4
跋(跋)	ア・アタ・オ	103	4	菩	カイ	329	8	遍	グウ	19	1
衰	アイ	18	1	蒲	カイ	27	1	北	ケ	115	3
愛	アイ	20	2	檣	ガイ	1	1	價(価)	ケ	23	2
跋(跋)	アン	5	1	審(審)	ガイ	15	2	家	ケ	43	2
罷	アン	6	4	羅(羅)	ガイ	23	2	他(他)	ケ	8	1
以	イ	578	12	舍	カク	141	6	卒(卒)	ケ	315	18
團(團)	イ	35	2	覺(覺)	カク	35	1	凱(凱)	ケ	11	1
威	イ	40	1	摩(摩)	ガク・ギョウ・ラダ	168	9	戲(戯)	ケ	28	2
焉(焉)	イ	611	25	舍	ガツ・ゴウ	57	2	齊	ケ	20	1
興(興)	イ	62	1	干	カン	24	1	下	ゲ	91	1
異	イ	27	1	甘	カン	11	2	偽	ゲ	114	2
堅	イ	96	4	卷	カン	13	1	解	ゲ	144	3
誦	イ	42	1	乾	カン・ケン	35	1	計	ケイ	10	1
一	イチ	604	11	澤(澤)	カン	31	1	缺(欠)	クツ	7	1
逸	イツ	22	1	數(數)	カン	91	2	血	クツ	2	1
因	イン	96	3	觀(觀)	カン	90	1	見	ケン	350	9
又	ウ	124	1	願	ガン	111	5	善(善)	ケン	39	2
右	ウ	12	2	危	キ	2	1	閑(閑)	ケン	103	6
有	ウ	620	30	起(起)	キ	83	4	還	ケン	14	2
兩	ウ	48	3	壽	キ	162	2	養	ケン	2	1
世	ウ	60	6	伎	ギ	4	1	威	ゲン	23	1
云	ウ	45	2	重	ギ	26	1	現	ゲン	156	1
實	ウン	27	2	義	ギ	93	1	己	コ	9	7
宣(宣)	エ	35	7	疑	ギ	57	6	五	コ	51	1
衣	エ	62	4	鹽	ギ	33	1	故	コ	265	13
依	エ	8	1	郤(却)	キヤク	7	1	虛	コ	66	1
聲(聲)	エ	126	1	逆(逆)	ギヤク	4	1	五	ゴ	112	4
儀	エ	30	2	嬰	ギヤク	15	1	吾	ゴ	15	1
義	エン	57	2	給	キユウ	12	1	其	ゴ	483	20
緣	エン	114	4	及	ギユウ	277	3	後	ゴ	171	6
於	オ	745	20	交	キョウ	6	1	悟	ゴ	11	2
王	オウ	326	4	孝	キョウ	1	1	語	ゴ	66	2
應(應)	オウ	125	7	敬(敬)	キョウ	110	4	廣(広)	ゴウ	71	3
實(實)	オウ	6	1	經(經)	キョウ	393	16	光(光)	コウ	115	1
誰	オウ	5	1	竟	キョウ	20	1	好	コウ	47	1
德	オウ	209	6	敬(敬)	キョウ	87	4	却	コウ	187	3
應(應)	オン	12	1	經(經)	キョウ	28	3	吾	コウ	172	5
音	オン	152	4	頃	キョウ	無量數経	4	高	コウ	41	3
運	オン	10	1	儀	キョウ	18	1	清	コウ	1	1
臨(臨)	オン	54	2	頑	キョウ	3	1	巧	コウ	1	1
聲	オン	8	1	行	ギョウ	229	4	號(号)	ゴウ	51	3
勝(勝)	オン	36	1	形(形)	ギョウ	28	1	仰	ゴウ	17	1
火	カ	54	3	琴	キン	2	1	管	ゴウ	109	2
可	カ	108	1	口	ク	20	1	曲	コク	10	1
伎	カ	1	1	丘	ク	144	1	關(關)	コク	182	11
采	カ	33	1	功	ク	103	2	潔	ゴク	24	1
澹	カ・ギヤ	119	4	句	ク	11	1	骨	ゴツ	3	1
誦	カ	101	1	俱	ク	226	5	今	コン	226	8
述(述)	カ	93	8	苦	ク	91	1	因	コン	4	1
歌	カ	9	3	宮	ク	50	2	金	コン	49	1
句	ガ	173	5	奇	ク	60	1	崔	コン	70	3
誦(誦)	ガ	619	17	教	ク	18	1	宮	ゴン	316	11
阿	ガ	62	3	求	グ	140	6	欣	ゴン	9	1
威	ガ	14	1	吳	グ	110	1	勳	ゴン	35	3
威	カイ	17	1	佩	グ	34	2	舞	ゴン	19	1
海	カイ	30	2	惡	グ	10	1	麗(麗)	ゴン	109	2

表24 漢石經一覽

文字	よみ	法華經	出土数	文字	よみ	法華經	出土数	文字	よみ	法華經	出土数
无(左)	サ	1	1	昔	シヤク	29	1	城	ジョウ	35	1
作	サ	236	8	惜	シヤク	9	1	淨(淨)	ジョウ	189	3
坐	ザ	86	4	貴	シヤク	4	1	常	ジョウ	191	11
産産	ザイ	71	4	香	ジャク	63	3	誠	ジョウ	4	1
切	サイ・セツ	225	5	手	シュ	19	2	心	シン	316	7
眾	サイ	3	1	主	シュ	14	6	申	シン	1	1
眾, 衆	サイ	2	1	取	シュ	21	1	身	シン	257	11
幾	サイ	54	1	歸	シュ	136	2	幸	シン	2	1
攤	サイ	3	1	殊	シュ	35	1	價	シン	97	2
在	ザイ	186	7	眾, 衆	シュ	711	28	莫(真)	シン	45	4
羅	ザイ	30	1	須	シュ	56	1	審	シン	2	1
數(數)	サク・シュ	160	5	應	シュ	1	2	窮	シン	4	1
薩(薩)	サツ・サル	614	14	種	シュ	281	4	眼	シン	50	1
三	サン	415	14	證	シュ	3	1	盡(届)	ジン	91	2
撰(撰)	サン	65	3	壽(寿)	ジュ	50	5	基	ジン	78	3
暫	ザン	7	2	受	ジュ	198	9	神(神)	ジン	126	4
士	シ	37	1	撰	ジュ	17	3	濃(深)	ジン	96	3
子	シ	420	4	聚	ジュ	17	1	漬(漬)	ジン	58	2
之	シ	471	10	蘇	ジュ	73	3	尋(尋)	ジン	16	1
四	シ	168	5	興	シュウ	3	1	塵	ジン	41	3
此	シ	498	8	覺(覚)	シュウ	22	1	水	スイ	34	2
死	シ	45	2	無	シュウ	20	1	衰	スイ	11	1
至	シ	159	3	十	ジュウ	228	7	隨(随)	スイ	51	1
志	シ	31	2	住	ジュウ	153	2	隨(随)	ズイ	108	3
使	シ	44	2	董	ジュウ	82	5	世(世)	セ	714	16
使	シ	11	2	從(從)	ジュウ	116	4	施	セ	43	2
思	シ	88	1	出	シュツ・スイ	162	4	興	ゼ	1184	37
師	シ	172	5	處(処)	ジョ	143	3	逝	セイ	18	1
示	ジ	32	4	初	ジョ	20	1	返(逆)	ゼイ	22	1
地	ジ・タイ・ダイ	114	5	所	ジョ	616	17	窟(窟)	セツ	3	1
字	ジ	14	2	書	ジョ	45	1	殺	セツ	4	1
次	ジ	33	3	讀(讀)	ジョ	1166	28	親(親)	セツ	759	25
自	ジ	201	4	助	ジョ	14	1	子	セン	326	6
事	ジ	117	5	除	ジョ	41	4	山	セン	69	1
持	ジ	16	2	小	ジョウ	114	1	先	セン	27	1
侍	ジ	1	1	正	ジョウ	104	3	責	セン	84	6
持	ジ	192	3	生	ジョウ	536	20	踐(踐)	セン	1	1
時	ジ	484	9	聲(声)	ジョウ	211	8	篤(篤)	セン	1	1
辭(辞)	ジ	16	1	姿	ジョウ	1	1	驗	セン	19	1
護	ジキ	29	1	性	ジョウ	21	1	前	ゼン	72	5
備, 備	ジキ	10	1	界	ジョウ	8	2	蓄	ゼン	261	10
節, 節	ジキ	24	4	莊(莊)	ジョウ	78	4	禪(禪)	ゼン	42	4
七	シチ	59	6	轉(轉)	ジョウ	34	2	滿	ゼン	35	1
窟	シツ	9	1	稱(稱)	ジョウ	37	1	膳	ゼン	5	1
疾	シツ	18	1	掌	ジョウ	52	2	走	ソウ	15	2
患	シツ	117	5	燒(燒)	ジョウ	36	2	相	ソウ	141	2
實(實)	ジツ	84	1	莢	ジョウ・ヨウ	35	1	神(神)	ソク	21	1
又	シヤ	40	2	輪(輪)	ジョウ	17	2	倉	ソク	3	1
寫(写)	シヤ	19	1	韻	ジョウ	2	1	僧(僧)	ソク	74	1
單	シヤ	45	2	積(積)	シヤク	67	2	壽	ソク	7	1
書(書)	シヤ	142	6	備	シヤク	2	1	象	ソク	15	1
者(者)	シヤ	492	14	讀(讀)	シヤク	18	3	儻	ソク	31	1
捨	シヤ	42	1	上	ジョウ	238	15	增(増)	ソク	33	2
釋(釈)	シヤ・シヤク	82	3	成	ジョウ	152	2	即(即)	ソク	144	5
邪	ジャ	18	1	條(条)	ジョウ	1	1	足	ソク	128	5
陀	ジャ	4	2	定	ジョウ	42	1	刑	ソク	86	3
乘	ジャ	5	1	乘	ジョウ	122	5	薄(薄)	ソク	13	1

表24 碑石鑑一覽

文字	よみ	法華経	出土数	文字	よみ	法華経	出土数	文字	よみ	法華経	出土数
尊	ソン	364	9	乃	ナイ	124	2	巽	フシ	9	2
多	タ	261	8	内	ナイ	23	1	弊	ヘイ	7	1
作	サ	38	3	難(難)	ナン	133	3	別	ベツ	31	2
陀	ダ	108	3	二	ニ	185	4	反	ヘン・ホン	3	1
蛇	ダ	2	1	尼	ニ	147	7	邊(辺)	ヘン	59	2
太	タイ	3	1	而	ニ	478	23	變(變)	ヘン	22	2
弟	タイ・ヂ	39	3	耳	ニ	23	1	備(備)	ヘン	6	2
帝	タイ・テ・ダイ	19	1	階(階)	ニ	257	10	備	ヘン	67	7
待	タイ	6	2	日	ニチ	56	6	暹	ヘン	1	2
返	タイ	36	1	若(若)	ニヤク	520	20	傑(傑)	ベン	160	3
轉	タイ	20	1	入	ニハク	102	1	傑	ホ	1	1
大	ダイ	583	10	美	ニユウ	17	1	替(替)	ボ	654	11
臺(台)	ダイ	15	1	女	ニヨ	108	5	方	ホウ	241	10
息	ダイ	14	1	如	ニヨ	801	24	賢(賢)	ホウ	278	14
弟	ダイ・テ	75	2	汝	ニヨ	238	6	法	ホウ	896	16
婆	ダイ・ヂ	150	2	軍	ニユウ	5	1	北	ホク	7	3
燈	ダイ	3	1	人	ニン	606	11	佛	ホツ	95	3
宅	タク	57	2	任	ニン	3	1	佛(仏)	ホツ	1	1
度	ド	198	4	忍	ニン	41	1	發(発)	ホツ	59	1
脫	ダツ	63	1	漏	ネ	70	2	本	ホン	62	1
連	タフ・ダル	32	1	年	ネン	26	1	品	ホン	14	1
值(但ウ)	タン	47	1	念	ネン	159	4	煩	ガン	7	1
檀	タン・ダン	33	2	然	ネン	83	6	曼	マン	35	1
知	チ	318	7	惱(惱)	ノウ	63	2	意	マ	146	4
致	チ	7	2	納	ノウ	9	1	末	マツ	13	1
智	チ	215	7	能	ノウ	279	7	抹	マツ	19	1
種	チ	5	1	難	ノウ	89	3	篇(万)	マン	258	9
箇	チ	6	1	把	ハ	1	1	滿	マン	62	1
馳	チ	7	1	波	ハ	51	1	樓	マン	30	5
通	チャク	5	1	婆	ハ・バ	180	8	宋	ミ	153	7
中	チュウ	348	11	佗	ハイ	12	1	微	ミ	53	2
柱	チュウ	4	1	八	ハチ	105	1	戲	ミヤク	93	4
壽	チュウ	6	1	解	ハン	71	2	名	ミョウ	217	4
長	チャウ	85	3	比	ヒ・ビ	147	3	妙	ミョウ	185	7
頂	テウ	24	1	彼	ヒ	111	1	命	ミョウ	62	2
聽(聴)	テウ	76	1	非	ヒ	66	2	明	ミョウ	135	2
透	ツウ	117	4	斐	ヒ	31	2	彌	ミョウ	14	1
天	テン	323	7	豐	ヒ	54	2	民	ミン	22	1
轉(転)	テン	104	2	百	ヒヤク	267	7	牟	ム	38	1
田	デン	5	1	白	ビヤク	91	4	儼	ム	681	29
典	デン	39	2	平	ビョウ	23	1	麗	メ	13	1
殿	デン	42	2	窮	ビョウ	35	2	決	メイ	5	1
編	ト	5	1	賣	ビン	2	1	滅(滅)	メツ	211	9
土	ド	128	4	賣	ビン	26	1	面	メン	43	1
當(当)	トウ	320	18	不	フ	532	17	毒(母)	モ	27	2
卓	トウ	22	1	布	フ	26	2	望	ヤウ	6	1
到	トウ	35	1	佈	フ	34	1	網	モウ	10	1
塔	トウ	74	7	富	フ	21	1	目	モク	24	2
等	トウ	527	15	覆	フ	18	3	熬	モク	14	2
倒	ドウ	7	1	父	フ	80	1	波	モツ	7	1
運	ドウ	298	6	舉	ブ	33	2	物	モツ	32	1
銅	ドウ	3	1	負	ブ	3	1	文	モン	49	2
得	トク	590	26	部	ブ	10	1	門	モン	47	1
德(徳)	トク	117	8	復	ブ	238	13	聞	モン	43	5
特	トク	4	2	服	ブク	32	3	聞	モン	384	11
讀(読)	トク	73	3	佛(仏)	ブツ・ボツ	1425	65	夜	ヤ	60	3
那	ナ	96	4	分	フン	89	3	耶	ヤ	13	1

表24 礫石経一覧

文字	よみ	法華経	出土数	文字	よみ	法華経	出土数	文字	よみ	法華経	出土数
赤	ヤク	303	17	実	リ	2	1	別	レツ	1	1
益(益)	ヤク	43	1	利	リ	244	5	蓮	ロ	37	3
由	ユ	73	2	榮(榮)	リ	4	1	論	ロン	11	1
猶(猶)	ユ	34	1	璃	リ	24	1	威	ワク	97	3
譚	ユ	4	1	離	リ	40	1	惑	ワク	17	1
羅	ユ	16	1	力	リキ	189	1	散(散?)			三阿羅漢に 類い文字
輸(論)	ユ	3	4	暗	リヤ、リヤク	6	1	説?			?
惟	ユイ	38	2	麗	リハウ	64	2	院?			?
遊(遊)	ユウ	32	3	了	リョウ	23	2	隱(隠)			?
異(与)	ヨ	126	2	令	リョウ	174	4	養?			?
餘(余)	ヨ	65	1	量	リョウ	293	7	奄?			?
養	ヨウ	195	9	鈔	リョウ	10	1	茂?			?
隨	ヨウ	10	1	輪	リン	61	4	遠			?
欲	ヨク	206	6	讓	リン	6	1	慮?			?
羅	ラ	122	12	羅(陸)	ル	3	1	慮?			?
禮(礼)	ライ	49	1	露	ル	12	1	拜?			?
來(来)	ライ	377	19	雷(雷)	ル	3	3	温?			?
陪	ラク	33	2	樓(樓)	ル、ロ、ロウ	21	3	備?			?
亂(乱)	ラン	17	1	璫(璫)	ル	24	1	丁?			?
欄	ラン	4	1	鐘(鐘)	レ	16	1				

表25 5区出土土器観察表

層位	器種	器名	形状	通径・ 深径	容量(ml)	器 容 率	出土 数	色別	底面などの特徴	観察 結果	備考
10-30	灰釉陶器	鉢	上笠 形状	口径 5.00 底径 4.00	0.80 0.10 0.10 4.00	90	1	白 白磁粘土、器口 ~4mmの厚さあり	内: 2.5Y7/2.5R黄褐色 外: 2.5Y7/1.5R白色	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	右 ツケあり。蓋は焼きかけあり 自然焼成。器口内径
175-28	かわらけ		口径 5.00 底径 4.25 高径 1.50	0.50 0.25 1.50	100	100	1	黄 灰色粘土、口縁部 に多少鉄質あり	内: 2Y7.5/7.5R黄褐色 外: 5Y6.5/4.0C土いり黄褐色	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	左 蓋あり。焼付痕
175-28	かわらけ		口径 5.00 底径 3.80 高径 1.45	0.50 0.30 1.45	90	90	1	黄 灰色粘土、口縁部 に多少鉄質あり	内: 5Y6.5/4.0R黄褐色 外: 5Y6.5/4.0C土いり黄褐色	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	右 焼付痕あり。器口内径あり
277-28	かわらけ		口径 5.00 底径 4.28 高径 1.20	0.50 0.28 1.20	80	80	1	白 白磁粘土	内: 2.5Y7.5/4.0C土いり黄褐色 外: 白	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	右 蓋あり
278	かわらけ		口径 5.00 底径 4.00 高径 1.25	0.50 0.40 1.25	25	100	1	黄 白磁粘土、口縁部 に多少鉄質あり	内: 5Y6.5/4.0R黄褐色 外: 同上	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	不明
279	かわらけ		口径 5.00 底径 4.00 高径 1.25	0.50 0.40 1.25	30	100	1	黄 白磁粘土、口縁部 に多少鉄質あり	内: 5Y6.5/4.0R黄褐色 外: 同上	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	不明
300-28	かわらけ		口径 5.00 底径 4.20 高径 1.20	0.50 0.30 1.20	60	100	1	白 白磁粘土、口縁部 に多少鉄質あり	内: 5Y6.5/4.0C土いり黄褐色 外: 同上	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	不明
301-28	かわらけ		口径 5.00 底径 4.20 高径 1.40	0.50 0.30 1.40	90	100	1	黄 白磁粘土、口縁部 に多少鉄質あり	内: 5Y6.5/4.0R黄褐色 外: 同上	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	右
312-70	かわらけ		口径 5.00 底径 4.20 高径 1.20	0.50 0.30 1.20	100	100	1	黄 灰色粘土、口縁部 に多少鉄質あり	内: 2.5Y7.5/4.0R黄褐色 外: 2.5Y7.5/4.0C土いり黄褐色	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	右 蓋あり。焼付痕
333-28	かわらけ		口径 5.00 底径 4.20 高径 1.40	0.50 0.30 1.40	100	100	1	黄 灰色粘土、口縁部 に多少鉄質あり	内: 2.5Y7.5/4.0R黄褐色 外: 2.5Y7.5/4.0C土いり黄褐色	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	右 内面に焼付痕。器口あり
354-70	かわらけ		口径 5.00 底径 4.20 高径 1.20	0.50 0.30 1.20	100	100	1	黄 灰色粘土、口縁部 に多少鉄質あり	内: 2.5Y7.5/4.0R黄褐色 外: 2.5Y7.5/4.0C土いり黄褐色	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	左 蓋あり。内外面焼付痕
363-28	かわらけ		口径 5.00 底径 4.20 高径 1.40	0.50 0.30 1.40	90	100	1	黄 赤褐色粘土、口縁部 に多少鉄質あり	内: 2.5Y6.5/4.0C土いり黄褐色 外: 5Y6.5/4.0R黄褐色	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	不明
365-28	かわらけ		口径 5.00 底径 4.20 高径 1.40	0.50 0.30 1.40	60	100	1	黄 赤褐色粘土、口縁部 に多少鉄質あり	内: 2.5Y6.5/4.0C土いり黄褐色 外: 5Y6.5/4.0R黄褐色	内: 凹坑ナシ 外: 凹坑ナシ 底面: 凹坑ナシ	不明

表25 5区出土土器観察表

図録 番号	器種	場所	器種・ 形状	高さ (cm)	口径 径 (cm)	備 考	出土	出所	観察などの特徴	録 載	備考
433	甕 (灰戸)	塚	口縁 ツボ 厚肉 底大直	7.55 3.60 3.60 9.20	95	口 縁	白色粘土、白色小直	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12 底 2.57/1.12白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	ツケボク、内面付着
434	甕	塚	口縁 厚肉 底大直	5.40 3.60 3.10	40	口 縁	白色粘土少量含む	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	底縁3.57/1.61白色
435	甕	西地蔵 の墓	口縁 厚肉 底大直	20.00 6.80	3	口 縁		内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	底縁3.57/1.61白色 外縁3.57/1.61白色
436	甕	行口塚	口縁 厚肉 底大直	17.40 6.80 3.50	120 15	口 縁	白色少量含む、底に →心裏面から付着	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	外縁付着、内縁なし
437	甕	行口塚	口縁 厚肉 底大直	15.80 6.80 3.50	40	口 縁	白色少量含む	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	底縁3.57/1.61白色
438	甕 (灰戸)	塚	口縁 厚肉 底大直	9.35 3.60 3.10	100	口 縁	白色少量含む、底に →心裏面から付着	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	外縁付着
439	甕 (灰戸)	塚	口縁 厚肉 底大直	19.30 6.80	15	口 縁	白色少量含む	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	内外共に付着
440	甕	塚	口縁 厚肉 底大直	12.70 6.80	100	口 縁	白色少量含む	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	底縁3.57/1.61白色
441	甕	塚	口縁 厚肉 底大直	17.40 6.80	100	口 縁	白色少量含む	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	内縁から縁に付着
442	甕	塚	口縁 厚肉 底大直	11.40 6.80	100	口 縁	白色少量含む	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	底縁3.57/1.61白色
443	甕	塚	口縁 厚肉 底大直	11.40 6.80	100	口 縁	白色少量含む	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	底縁3.57/1.61白色
444	甕 (灰戸)	塚	口縁 厚肉 底大直	12.70 6.80	100	口 縁	白色少量含む	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	底縁3.57/1.61白色
445	甕 (灰戸)	塚	口縁 厚肉 底大直	12.70 6.80	100	口 縁	白色少量含む	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	底縁3.57/1.61白色
446	甕 (灰戸)	塚	口縁 厚肉 底大直	12.70 6.80	100	口 縁	白色少量含む	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	底縁3.57/1.61白色
447	甕 (灰戸)	塚	口縁 厚肉 底大直	12.70 6.80	100	口 縁	白色少量含む	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	底縁3.57/1.61白色
448	甕 (灰戸)	塚	口縁 厚肉 底大直	12.70 6.80	100	口 縁	白色少量含む	内 3.57/1.61白色、2.57/1.12 外 3.57/1.61白色、2.57/1.12	内 白陶ナメ 外 白陶ナメ	灰	底縁3.57/1.61白色

表26 5区出土土器観察表

器種	器種	器種・ 形状	遺物名	長さ (cm)			備考
				長さ	最大径	底径	
328	46	SP7	骨片	3.20	1.35	1.30-1.50	
344	46	SP5	骨片(灰)	2.80	1.65	1.45-1.50	
473	31		骨片(灰)	5.20	1.20		
475	31		骨片(灰)	4.00	1.20		
477	31		骨片(灰)	4.60	1.30	1.20	
478	46	少直型	骨片(灰)	5.85	1.50		内部に有痕(木?)
479	31	灰片	骨片	7.80	0.85		
480	31	灰片	骨片	6.50	0.80		

表27 5区出土訂観表

測点No.	発見No.	遺構・グリップ	層位	遺物名	高さ (cm)	幅 (cm)		深み (cm)	備考
						幅端	身幅		
294		SP1-4	IV	石	2.30	0.50	0.15~0.20	0.20	
295		SP1-	IV	石	1.20	0.05	0.11	0.20	
296		SP1-	IV	石	2.30	0.60	0.20~0.25	0.20	
297		SP1-4	IV	石	2.40	0.60	0.20~0.25	0.20	
298		SP1-4	IV	石	2.60	0.60	0.20	0.20	
299		SP1-4	IV	石	2.45	0.50	0.15~0.20	0.20	
300		SP1-	IV	石	2.10	0.60	0.20~0.25	0.20	
301		SP1-4	IV	石	3.75	0.70	0.20~0.25	0.20	
302		SP1-4	IV	石	4.11	0.70	0.20~0.25	0.20	
303		SP1-	IV	石	4.90	1.00	0.25~0.30	0.25	
304		SP1-4	IV	石	4.50	1.00	0.20~0.25	0.25	
305		SP1-1	IV	石	4.80	1.10	0.20~0.40	0.20	
306		SP1-4	IV	石	5.10	1.00	0.20~0.25	0.25	
307		SP1-	IV	石	4.80	0.90	0.20~0.40	0.20	
308		SP1-4	IV	石	4.95	0.95	0.20~0.25	0.20	
309		SP1-4	IV	石	5.30	0.95	0.20~0.40	0.25	
310		SP1-	IV	石	2.55	0.60	0.20~0.25	0.20	
311		SP1-	IV	石	2.70	0.55	0.15~0.25	0.20	
312		SP1-	IV	石	2.30	0.20	0.20	0.15~0.20	
313		SP1-	IV	石	2.30	0.40	0.20~0.25	0.20	
314		SP1-	IV	石	1.60	0.50	0.20~0.25	0.20	
315		SP1-	IV	石	2.35	0.70	0.20~0.30	0.25	
316		SP1-	IV	石	2.45	0.70	0.15~0.30	0.20	
317		SP1-	IV	石	2.50	0.70	0.18~0.20	0.20	
318		SP1-	IV	石	5.00	0.95	0.20~0.25	0.25	
319		SP1-	IV	石	2.30	0.70	0.20~0.25	0.20	
320		SP1-	IV	石	5.60	0.65	0.20~0.25	0.20	
321		SP1-	IV	石	5.11	1.10	0.20~0.30	0.20	
322		SP1-	IV	石	4.90	0.90	0.20~0.25	0.20	土留等より測定
323		SP1-	IV	石	1.80	0.30	0.20	0.20	土留等より測定
324		SP1-	IV	石	2.70	0.30	0.20	0.20	土留等より測定
330		SP1-	IV	石	4.00	0.70	0.20~0.25	0.20	
331		SP1-	IV	石	4.50	0.65	0.20	0.20	
332		SP1-	IV	石	4.05	0.60	0.20	0.20	
333		SP1-	IV	石	3.95	0.70	0.20	0.20	
334		SP1-	IV	石	3.80	0.60	0.20	0.20	
335		SP1-	IV	石	2.90	0.20	0.20	0.20	
336		SP1-	IV	石	5.30	0.40	0.20	0.20	
337		SP1-	IV	石	0.70	0.25	0.20	0.20	土留等より測定
338		SP1-	IV	石	1.15	0.60	0.20	0.20	土留等より測定
344		SP1-	IV	石	0.50	0.70	0.20~0.25	0.20	土留等より測定
347		SP1-	IV	石	0.90	0.70	0.20~0.25	0.20	土留等より測定
348		SP1-	IV	石	1.30	0.70	0.20~0.25	0.20	土留等より測定
353		SP1-	IV	石	0.90	0.70	0.20	0.20	
355		SP11	IV	石	0.20	0.70	0.10~0.20	0.20	
354		SP11	IV	石	2.15	0.60	0.15~0.20	0.20	
355		SP11	IV	石	2.10	0.60	0.20~0.25	0.20	
356		SP14	IV	石	0.40	0.60	0.20~0.25	0.20	土留等より測定
387		SP14	IV	石	4.20	1.10	0.20~0.25	0.20	
439	30			石	5.40	0.40	0.40~0.50	0.40	
440	30			石	5.60	0.50	0.20~0.10	0.20	
441	30			石	4.00	1.00	0.10~0.40	0.40	
442	30			石	1.80	1.00	0.20~0.25	0.20	
443	30			石	4.00	0.70	0.15~0.20	0.20	
444	30			石	4.20	0.80	0.15~0.20	0.20	
445	30			石	5.10	0.80	0.20~0.25	0.20	
446	30			石	4.00	0.60	0.20	0.20	
447	31			石	0.90	0.60	0.10~0.20	0.20	
448	30			石	3.30	0.50	0.20	0.20	
449	30			石	2.40	0.80	0.20~0.25	0.20	土留等より測定
450	30			石	3.00	0.90	0.10~0.30	0.30	
451	30			石	3.30	0.80	0.20~0.30	0.20	
452	34			石	2.70	0.70	0.20~0.25	0.20	
453	30			石	5.90	0.90	0.20~0.20	0.20	
454	31			石	4.10	0.65	0.20~0.20	0.20	
455	31			石	0.70	1.30	0.40~0.45	0.30	
456	31			石	0.80	1.30	0.10~0.30	0.20	
457	30			石	5.30	0.70	0.20~0.20	0.20	
458	30			石	0.20	0.70	0.20~0.20	0.20	
459	30			石	0.20	0.60	0.20	0.20	
460	30			石	0.70	0.60	0.20	0.20	
461	30			石	0.70	0.60	0.20	0.20	
462	30			石	2.10	0.90	0.20	0.20	
463	30			石	2.00	0.60	0.20~0.20	0.20	
464	30			石	2.70	0.65	0.20~0.25	0.20	
465	30			石	3.50	0.70	0.10~0.10	0.20	
466	30			石	5.70	0.70	0.20~0.25	0.20	
467	30			石	0.60	0.80	0.20~0.20	0.20	
468	30			石	5.50	0.70	0.10~0.20	0.20	
469	30			石	4.60	0.60	0.10~0.25	0.20	
470	30			石	1.40	0.70	0.20~0.25	0.20	
471	31			石	0.60	0.05	0.20~0.10	0.20	
472	31			石	2.80	0.10	0.20~0.20	0.20	

表31 6区出土土器観察表

区画番号	遺跡名	種類	形状	形状・寸法	表裏・部位	寸法(cm)	厚さ(mm)	素材	用途	色物	観察点の特色	写真	備考
021	51	山形器	甕	D4-5	381415 口内 底面 底面	116.00 11.00 1.70	5	灰	白色灰土少量含む	内: 7.5Y/7.5R 外: 7.5Y/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	外口内面に粘着痕あり
022	51	山形器	甕	D4-5	381415 口内 底面 底面	116.00 11.00 1.70	20	灰	白色灰土少量含む	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部、肩に白土
027	52	山形器	甕	D-5	381437 口内 底面 底面	17.50 8.50 3.50	80	灰	白色灰土、灰1~3 内口部に少量含む	内: 5Y5/7.5R 外: 同上	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	スリットあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
028	58	灰土層	遺物	C-5	391428 391430	11.00 10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	左	「黒土」層、灰土層内に少量の青磁器片あり
029	60	灰土層	遺物	C-5	391440	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	スリットあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
030	58	灰土層	遺物	C-5	391430	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	外口内面に粘着痕、斜行凹痕あり
031	53	灰土層	遺物	C-5	391435	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
032	53	灰土層	遺物	C-5	391446	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
033	60	灰土層	遺物	C-5	391469	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
034	53	灰土層	遺物	C-5	391469	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
035	58	灰土層	遺物	C-5	391486	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
036	58	灰土層	遺物	C-5	391486	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
037	53	灰土層	遺物	C-5	391468	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
038	53	灰土層	遺物	C-5	391468	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
039	53	灰土層	遺物	C-5	391440	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
040	53	灰土層	遺物	C-5	391460	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
041	53	灰土層	遺物	C-5	391468	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
042	53	灰土層	遺物	C-5	391448	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
043	53	灰土層	遺物	C-5	391448	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
044	53	灰土層	遺物	C-5	391448	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
045	51	灰土層	遺物	C-5	391440	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
046	53	灰土層	遺物	C-5	391446	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕
047	51	灰土層	遺物	C-5	391436	10.00	—	黄褐色	灰土層	内: 5Y5/7.5R 外: 5Y5/7.5R	内: 灰土ナシ 外: 灰土ナシ	右	口縁部からあり、口縁部からあり、厚さ約1cm、斜行凹痕

表31 6区出土土器観察表

器名	器種	時期	形状	口径・高さ	高さ	器口形状	底形状	胎土	色相	胎土などの特徴	産地	備考
645	灰土器	弥生	C-3	SK1146 口径 11.0 高さ 11.40	0.20	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質、 胎土中に黒く小片あり	内: N6B / 灰赤 外: 同上	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	
646	灰土器	弥生	C-5	SK1148 口径 10.0 高さ 10.30	0.30	口縁部 直	底 直	赤褐色土、胎土中に 黒く小片あり	内: 5Y7.5/灰赤 外: N7 / 灰白土	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	右	内面底に付着
650	灰土器	弥生	C-5	SK1145 口径 11.0 高さ 11.0	0.20	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質、 胎土中に黒く小片あり	内: 7.5Y6.5/灰赤 外: 5Y5.5/灰赤 胎土中に黒く小片あり	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	右	内面底に付着、胎土付着
651	灰土器	弥生	C-5	SK1145 口径 11.0 高さ 11.0	0.20	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質、 胎土中に黒く小片あり	内: 5Y7.5/灰赤 外: 5Y5.5/灰赤 胎土中に黒く小片あり	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	右	手洗い、摩滅跡、胎土付着
652	灰土器	弥生	C-4	SK1140 口径 10.0 高さ 10.30	0.30	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質	内: 5Y7.5/灰赤 外: 同上	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	
653	灰土器	弥生	C-4	SK1130 口径 10.0 高さ 10.30	0.40	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質	内: 2.5Y6.5/灰赤 外: 5Y3.5/胎灰赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	右	
654	灰土器	弥生	C-4	SK1130 口径 10.0 高さ 10.30	0.40	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質、胎土中に 黒く小片あり	内: 5Y7.5/灰赤 外: 5Y7.5/灰白土	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	中心付近に胎土付着あり
655	灰土器	弥生	C-5	SK1129 口径 10.0 高さ 10.30	0.50	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質、胎土中に 黒く小片あり	内: 5Y7.5/灰赤 外: 同上	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	胎土付着
656	灰土器	弥生	C-3	SK1129 口径 10.0 高さ 10.30	0.50	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質	内: 2.5Y6.5/胎赤 外: 2.5Y7.5/胎赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	胎土付着
657	灰土器	弥生	C-5	SK1129 口径 10.0 高さ 10.30	0.50	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質	内: 2.5Y6.5/胎赤 外: 5Y7.5/胎赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	右	胎土、胎土中に胎土付着あり
658	灰土器	弥生	D-2	SK1614 口径 10.0 高さ 10.30	0.30	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質	内: 5Y7.5/灰赤 外: 5Y7.5/胎赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	右	中央部に胎土付着あり
659	灰土器	弥生	B-3	SK1686 口径 10.0 高さ 10.30	0.30	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質	内: 5Y6.5/胎赤 外: 5Y6.5/胎赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	口縁部側に胎土付着、口縁部に胎土あり
660	灰土器	弥生	B-3	SK1777 口径 10.0 高さ 10.30	0.30	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質	内: N6 / 灰赤 外: 2.5Y6.5/胎赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	外周部に胎土付着、胎土付着あり
661	灰土器	弥生	C-6	SK1574 口径 10.0 高さ 10.30	0.40	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質、胎土中に 黒く小片あり	内: 5Y6.5/胎赤 外: 5Y6.5/胎赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	胎土に胎土付着あり
662	灰土器	弥生	D-2	SK1581 口径 10.0 高さ 10.30	0.40	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質、胎土中に 黒く小片あり	内: 2.5Y6.5/胎赤 外: N6 / 灰赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	内面に胎土付着あり
663	灰土器	弥生	C-4	SK1587 口径 10.0 高さ 10.30	0.40	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質、胎土中に 黒く小片あり	内: N7.5 / 灰赤 外: 同上	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	胎土付着
664	灰土器	弥生	D-2	SK1642 口径 10.0 高さ 10.30	0.30	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質	内: N6 / 灰赤 外: N7 / 灰赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	
665	灰土器	弥生	C-3	SK1431 口径 10.0 高さ 10.30	0.30	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質	内: 5Y7.5/胎赤 外: 5Y7.5/胎赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	胎土、胎土に胎土付着あり、胎土付着あり
666	灰土器	弥生	C-5	SK1467 口径 10.0 高さ 10.30	0.20	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質、胎土中に 黒く小片あり	内: 5Y6.5/胎赤 外: 同上	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	胎土付着
670	灰土器	弥生	D-2	SK1570 口径 10.0 高さ 10.30	0.30	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質	内: 5Y7.5/胎赤 外: 5Y7.5/胎赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	右	胎土付着
671	灰土器	弥生	D-3	SK1773 口径 10.0 高さ 10.30	0.45	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質	内: 2.5Y7.5/胎赤 外: 2.5Y7.5/胎赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	胎土付着
672	灰土器	弥生	D-3	SK1688 口径 10.0 高さ 10.30	0.50	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質、胎土中に 黒く小片あり	内: N6 / 灰赤 外: 同上	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	胎土付着
673	灰土器	弥生	C-5	SK1581 口径 10.0 高さ 10.30	0.40	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質、胎土中に 黒く小片あり	内: N7.5 / 灰赤 外: 2.5Y7.5/胎赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	胎土付着、胎土に胎土付着あり、胎土に胎土付着あり
674	灰土器	弥生	D-3	SK1688 口径 10.0 高さ 10.30	0.50	口縁部 直	底 直	赤褐色多量土質、胎土中に 黒く小片あり	内: N7 / 灰赤 外: 2.5Y6.5/胎赤	内: 胎土ナ 外: 胎土ナ	不明	胎土付着、胎土に胎土付着あり、胎土に胎土付着あり

表31 0区出土土器観象表

調査年度	遺跡	種類	クワ	経緯・方位	出土	出土位置	出土	色相	調査者の特徴	備考
608	67	枕瓦(瓦葺)	傾斜	D-2	白土 赤土	(1.40) (1.80) 3.0)	20	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
700	57	埴輪(瓦葺)	傾斜	D-3	白土 赤土	0.80 0.80 1.70)	20	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
701	57	埴輪(瓦葺)	傾斜	D-3	白土 赤土	(1.50) (1.70) 1.5)	60	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
702	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-2	白土	白土 赤土	(0.60) (0.20)	15	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
703	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-2	白土	白土 赤土	(0.80) (1.90)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
704	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-2	白土	白土 赤土	(0.80) (0.80)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
705	56	埴輪(瓦葺)	傾斜	遺土	白土 赤土	(0.90) (1.10)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
706	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-3	白土	白土 赤土	(0.60) (1.90)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
707	56	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-3	白土 赤土	(1.30) (1.50)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
708	57	瓦葺(瓦葺)	傾斜	K-2	白土 赤土	(1.50) (1.40)	30	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
709	67	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-2	白土 赤土	(1.80) (1.80)	5	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
710	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-3	白土	白土 赤土	(1.70) (1.70)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
711	56	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-2	白土 赤土	(1.80) (1.80)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
712	67	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-3	白土 赤土	(1.30) (1.30)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
713	67	瓦葺(瓦葺)	傾斜	K-2	白土 赤土	(1.20) (1.30)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
714	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-2	白土 赤土	(1.40) (1.40)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm	
715	56	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-3	白土 赤土	(1.50) (1.50)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
716	山崎前	傾斜	D-3	白土 赤土	(1.50) (1.50)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm	
717	56	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-3	白土 赤土	(1.30) (1.30)	15	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
718	56	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-2	白土 赤土	(1.50) (1.50)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
719	56	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-3	白土 赤土	(1.50) (1.50)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm
720	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-2	白土 赤土	(1.50) (1.50)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm	
721	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-2	白土 赤土	(1.50) (1.50)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm	
722	56	瓦葺(瓦葺)	傾斜	D-4	白土 赤土	(1.50) (1.50)	10	赤 赤	内 白化粧した赤土 外 赤土	1) 埋設部あり。厚さ約4cm

表31 6区出土土器観察表

調査年度	調査地区	遺址	遺構	発掘層	遺構・部位	出土品	数量	形状	土質	土色	観察などの特徴	写真	備考
123	13	徳島県 小島	D-3	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(11.90) 瓦 (12.90) 瓦	5	瓦	白色灰土含む	内: 赤/灰色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	左	
124	13	徳島県 小島	D-2	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	3.90 瓦 4.90 瓦	1	瓦	白色灰土含む	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒く染付。胎面あり
125	56	徳島県 小島	D-5	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(10.60) 瓦 (11.60) 瓦	1	瓦	白色灰土含む	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	左	
126	14	徳島県 小島	D-2	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(6.80) 瓦 (7.80) 瓦	1	瓦	白色灰土含む	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	内面に黒染あり。内面と胎面内面が一致。胎面あり
127	27	徳島県 小島	D-1	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(7.40) 瓦 (8.40) 瓦	1	瓦	白色灰土、片1~2 胎面に黒染あり	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
128	14	徳島県 小島	D-2	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(7.40) 瓦 (8.40) 瓦	1	瓦	白色灰土含む	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
129	13	徳島県 小島	D-2	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(7.40) 瓦 (8.40) 瓦	1	瓦	白色灰土、胎面ナシ、 胎面に黒染あり	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
130	57	徳島県 長島町	表土	表土	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(9.00) 瓦	1	瓦	白色灰土多量に含む	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
131	58	徳島県 長島町	D-2	表土	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(9.00) 瓦	1	瓦	白色灰土多量に含む	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
132	34	徳島県 小島	D-3	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(21.30) 瓦 (22.30) 瓦	1	瓦	赤 赤染胎面に含む	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面不明 外: 胎面不明	右	胎面に黒染あり。胎面あり
133	54	徳島県 小島	D-6	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(16.00) 瓦 (17.00) 瓦	5	瓦	赤 白色胎子、片1~2 胎面に黒染あり	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
134	41	徳島県 小島	D-6	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(16.00) 瓦 (17.00) 瓦	60	瓦	赤	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
135	25	徳島県 小島	D-3	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(11.20) 瓦 (12.20) 瓦	25	瓦	赤 白色胎子含む	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
136	27	徳島県 小島	D-3	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(16.50) 瓦 (17.50) 瓦	30	瓦	赤 白色胎子、内面小破 胎面に黒染あり	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
137	38	徳島県 小島	表土	表土	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(7.50) 瓦 (8.50) 瓦	30	瓦	赤	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面不明 外: 胎面不明	右	胎面に黒染あり。胎面あり
138	37	徳島県 小島	表土	表土	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(7.50) 瓦 (8.50) 瓦	1	瓦	赤	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面不明 外: 胎面不明	右	胎面に黒染あり。胎面あり
139	26	徳島県 小島	D-2	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(16.00) 瓦 (17.00) 瓦	13	瓦	赤 白色胎子含む	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
140	41	徳島県 小島	C-5	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(2.00) 瓦	3	瓦	赤	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
141	38	徳島県 小島	D-3	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(2.00) 瓦	1	瓦	赤	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
142	34	徳島県 小島	C-5	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(2.50) 瓦	5	瓦	赤	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
143	36	徳島県 小島	B-1~2	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(3.30) 瓦	5	瓦	赤 胎面に黒染あり、胎面に 黒染あり	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面不明 外: 胎面不明	右	胎面に黒染あり。胎面あり
144	38	徳島県 小島	D-3	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(3.10) 瓦	1	瓦	赤	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面ナシ 外: 胎面ナシ	右	胎面に黒染あり。胎面あり
145	32	徳島県 小島	C-5	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(3.10) 瓦	1	瓦	赤 胎面に黒染あり、胎面に 黒染あり	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面不明 外: 胎面不明	右	胎面に黒染あり。胎面あり
146	36	徳島県 小島	D-3	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(3.10) 瓦	1	瓦	赤 胎面に黒染あり、胎面に 黒染あり	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面不明 外: 胎面不明	右	胎面に黒染あり。胎面あり
147	32	徳島県 小島	C-5	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(3.10) 瓦	1	瓦	赤 胎面に黒染あり、胎面に 黒染あり	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面不明 外: 胎面不明	右	胎面に黒染あり。胎面あり
148	36	徳島県 小島	D-3	惣倉	1層 瓦葺 2層 瓦葺	(3.10) 瓦	1	瓦	赤 胎面に黒染あり、胎面に 黒染あり	内: 赤/灰白色 外: 赤/灰白色	内: 胎面不明 外: 胎面不明	右	胎面に黒染あり。胎面あり

表31 6区出土土器観察表

調査区	調査地	遺物	形状	用途・用途	数量	保存状態	出土	色面	取柄などの特徴	備考
717	58	陶器 (灰褐色)	笠形	土	1個 破片 計 2	口縁部 破片	笠	内: 5YR4/5(赤)黄褐色 外: 5YR4/4(赤)赤褐色	内: 陶板ナブ 一帯、フタ にフタなし 外: 陶板ナブ	高 脇輪、口縁部の角切取
748	58	陶器 (白・赤)	笠形	土	1個 破片 計 5	口縁部 破片	笠	内: 7.5YR3/2(赤)褐色 外: 7.5YR4.5/2(赤)褐色	内: 陶板ナブ 1枚、フタあり 外: 陶板ナブ	高 内面にトシキあり、内 面一帯黒色(土3YR3/2 の褐色、黒色)内面
749	51	陶器 (黄門)	笠	C-2-E	1個 破片 計 26	口縁部 破片	笠	内: 赤土 白土粘土、赤土 赤土 土3YR3/2(赤)褐色	内: 陶板ナブ 外: 陶板ナブ 黒色ナブ	高 内面にトシキあり、内 面一帯黒色(土3YR3/2 の褐色、黒色)内面
750	58	陶器 (赤褐色)	水筒	C-5-E	1個 破片 計 30	口縁部 破片	水筒	内: 赤土 外: 赤土	内: 陶板ナブ 外: 陶板ナブ	高 内面にトシキあり、内 面一帯黒色(土3YR3/2 の褐色、黒色)内面
751	58	陶器 (灰褐色)	水筒	赤土	1個 破片 計 11	口縁部 破片	水筒	内: 7.5Y3/2(赤)褐色 外: 同上	内: 陶板ナブ 外: 陶板ナブ 赤土	高 内面にトシキあり、内 面一帯黒色(土3YR3/2 の褐色、黒色)内面
752	28	陶器 (黄褐色)	片口	D-2	1個 破片 計 5	口縁部 破片	片口	内: 赤土 外: 同上	内: 陶板ナブ 外: 陶板ナブ 赤土	高 内面にトシキあり、内 面一帯黒色(土3YR3/2 の褐色、黒色)内面
753	58	陶器 (赤褐色)	片口	赤土	1個 破片 計 5	口縁部 破片	片口	内: 赤土 外: 同上	内: 陶板ナブ 外: 陶板ナブ	高 内面にトシキあり、内 面一帯黒色(土3YR3/2 の褐色、黒色)内面
754	58	陶器 (黄褐色)	片口	赤土	1個 破片 計 5	口縁部 破片	片口	内: 赤土 外: 同上	内: 陶板ナブ 外: 陶板ナブ	高 内面にトシキあり、内 面一帯黒色(土3YR3/2 の褐色、黒色)内面
755	28	陶器 (土黄色)	瓶	D-3	1個 破片 計 1	口縁部 破片	瓶	内: 赤土 外: 同上	内: 陶板ナブ 外: 陶板ナブ	高 内面にトシキあり、内 面一帯黒色(土3YR3/2 の褐色、黒色)内面

表32 6区出土銭貨観察表

調査区	調査地	遺物・グリップ	形状	遺物名	直径 (mm)		備考
					原形	厚み	
521	58	SKS1907戸付銅貨	C-6	銅貨 (徳川幕府)	2.68	0.28	
625	09	SKS1517戸付銅貨	C-6	銅貨 (徳川幕府)	2.20	0.15	
626	39	SKS1841戸付銅貨	C-6	銅貨 (徳川幕府)	2.20	0.15	3枚重む

表33 6区出土釘観察表

調査区	調査地	遺物・グリップ	形状	遺物名	長さ (mm)	幅 (mm)		厚み (mm)	備考
						釘頭	釘身		
761	59	1111 D-6		釘	(3.93)	0.70	0.20-0.40	0.28	
762		某家伝用	笠形	釘	(3.03)	2.80	0.50-0.60	0.25	

表34 6区出土石器観察表

調査区	調査地	遺物・グリップ	形状	遺物名	長さ (mm)	径 (mm)			備考
						全長	最大幅	最大厚	
765	58	B-1-2	地中層上、砂礫層上部	砥石	45.0	(7.05)	2.50	1.40	±3枚あり
764	58	D-2	赤土	磨製石斧	11.50	3.85	2.50	184.70%	4個あり
765	59	1437 D-3	砥石	砥石	(22.70)	12.80	8.00		全体的に破損している
766	59	E-2	白土層	打製石斧	(1.90)	0.90	3.40	1.016	両側面欠く

表38 8区出土土器類表

器名	種類	特徴	形状	用途・用途	容量	高さ	口径	出土	色相	装飾などの特徴	形状	備考
83	76	環首器	杯蓋	C-5	SD2424焼 灰土	口径 15.00 高さ 1.40	15	器 白地に朱色、横溝 黒線土層に包む	内: N3/灰色 N7/灰白色 外: 同上	内: 縦線ナメ 外: 縦線ナメ 天井線跡にヘラキス	内	内面深く縁取付
84	76	環首器	杯蓋	C-6	SD1-SD3 焼灰土	口径 15.00 高さ 2.40	15	器 白地に朱色	内: 2.5Y8/1R10 2.5Y7/1R10 外: 同上	内: 縦線ナメ 外: 同上	内	縁取付
85	74	杯蓋	杯蓋	C-5	SD11-12 土層	口径 15.00 高さ 3.00	20	器 白地に朱色	内: 2.5Y7.5/2R10 外: 2.5Y7.5/2R10 2.5Y7/2R10	内: 縦線ナメ 外: 縦線ナメ 縦線ナメ 縦線ナメ	内	内面深く縁取付、縁取跡
86	74	杯蓋	杯蓋	C-6	焼灰土	口径 15.00 高さ 2.40	15	器 白地に朱色	内: N3/灰色 外: 同上	内: 縦線ナメ 外: 縦線ナメ	内	器底あり
87	71	環首器	杯蓋	B-4	焼灰土	口径 17.50 高さ 3.50	30	器 白地に朱色	内: N3/灰色 外: N3/灰色 2.5Y7/2R N3/灰白色	内: 縦線ナメ 外: つまみ線、縦線ナメ 天井線跡、縦線ナメ 天井線跡	内	器底あり、内面に朱色の 線あり、横溝あり、縁取 つまみ線あり
88	74	杯蓋	杯蓋	C-6	SD48 焼灰土	口径 15.00 高さ 2.40	30	器 白地に朱色、器底 朱色	内: 5Y8.5/2R10 外: 2.5Y7.5/2R10	内: 縦線ナメ 外: 同上	内	器底あり
89	74	杯蓋	杯蓋	B-5	SD1 (焼灰土)	口径 15.00 高さ 1.30	40	器 白地に朱色、器底 朱色	内: 5Y8.5/2R10 外: 2.5Y7.5/2R10	内: 縦線ナメ 外: 同上	内	内面に朱色の 線あり、縁取あり、器底 朱色の線あり、器底あり
90	74	杯蓋	杯蓋	B-5	SD24 焼灰土	口径 15.00 高さ 4.00	20	器 白地に朱色、内 面に朱色の線あり	内: 5Y8.5/2R10 外: N7.5/灰白色	内: 縦線ナメ 外: 縦線ナメ 縦線ナメ	内	器底あり
91	74	杯蓋	杯蓋	F-2	SD56 焼灰土	口径 15.00 高さ 2.00	15	器 白地に朱色、口 縁に朱色	内: N3/灰色 外: 同上	内: 縦線ナメ 外: 天井線跡、縦線ナメ 天井線跡、縦線ナメ	内	つまみ線あり
92	環首器	杯蓋	F-2	SD36 焼灰土	口径 15.00 高さ 1.00	5	器 白地に朱色	内: 5Y8.5/2R10 外: 同上	内: 縦線ナメ 外: 同上	内	器底あり	
93	環首器	杯蓋	F-2	SD36 焼灰土	口径 15.00 高さ 1.00	5	器 白地に朱色	内: 5Y8.5/2R10 外: 同上	内: 縦線ナメ 外: 同上	内	器底あり	
94	74	杯蓋	杯蓋	F-2	SD36 焼灰土	口径 15.00 高さ 2.00	15	器 白地に朱色	内: 5Y8.5/2R10 外: 5Y8.5/2R10	内: 縦線ナメ 外: 天井線跡、縦線ナメ	内	つまみ線あり、器底あり
95	山部	小壺	F-2	SD55 焼灰土	口径 14.00 高さ 3.70	30	器 白地に朱色	内: N3/灰色 外: 同上	内: 縦線ナメ 外: 縦線ナメ 縦線ナメ	内	器底あり	
96	80	環首器	杯蓋	C-5	SD55 焼灰土	口径 17.20 高さ 4.10	15	器 白地に朱色	内: N3/灰色 外: 2.5Y7.5/2R10	内: 縦線ナメ 外: 天井線跡、縦線ナメ 天井線跡、縦線ナメ	内	つまみ線あり、器底あり、 つまみ線あり
97	74	杯蓋	杯蓋	D-4	焼灰土	口径 15.00 高さ 1.00	15	器 白地に朱色	内: N3/灰色 外: 同上	内: 縦線ナメ 外: 天井線跡、縦線ナメ 天井線跡、縦線ナメ	内	つまみ線あり
98	環首器	杯蓋	C-5	焼灰土	口径 15.00 高さ 1.00	15	器 白地に朱色	内: 5Y8.5/2R10 外: 5Y8.5/2R10	内: 縦線ナメ 外: 天井線跡、縦線ナメ 天井線跡、縦線ナメ	内	つまみ線あり	
99	76	環首器	杯蓋	C-2	焼灰土	口径 15.00 高さ 2.50	15	器 白地に朱色	内: 2.5Y7.5/2R10 外: 2.5Y7.5/2R10	内: 縦線ナメ 外: 天井線跡、縦線ナメ 天井線跡、縦線ナメ	内	縁取付、器底あり、つまみ 線あり、横溝あり、縁取 つまみ線あり
100	76	杯蓋	杯蓋	B-2	焼灰土	口径 15.00 高さ 1.00	15	器 白地に朱色	内: 5Y8.5/2R10 外: N3/灰色	内: 天井線跡 外: 天井線跡	内	器底あり
101	74	杯蓋	杯蓋	C-4-5	焼灰土	口径 15.00 高さ 1.00	15	器 白地に朱色、器 底に朱色の線あり	内: N7.5/灰白色 外: 同上	内: 縦線ナメ 外: つまみ線、縦線ナメ 天井線跡、縦線ナメ	内	つまみ線あり、器底あり、 つまみ線あり

表38 8区出土土器調査表

調査区	遺跡名	種類	形状	土質・用途	出土	調査者	出土層	土器	色澤	加飾などの特徴	備考	備考
002	75	深鉢型	好盆	C4-3	陶質粘土	口径 17.00 底径 11.70	10	内 白色粘土付	内 5Y8/1灰白色 外 灰土	内 目取ナシ 外 5Y8/1灰白色 付きもの(磁器)の残片が 付着して(見当り) 大井 基層のヘラケズリ	下	つまみ取付3.20cm
003	76	深鉢型	好盆	B-8	陶質粘土	口径 18.00 底径 12.10	10	内 白色粘土少量付	内 5Y8/1灰白色 外 2.5Y9/1黄褐色 5Y7.5/1灰白色	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	上	内面近く陥入、つまみ 取付3.20cm、つまみ取付 3.50cm
004	77	深鉢型	好盆	F-3	陶質粘土	口径 17.00 底径 11.70	10	内 白色粘土付	内 5Y8/1灰白色 外 2.5Y9/1黄褐色 1Y1-2/1黄褐色	内 目取ナシ 外 目取ナシ	上	取付3.20cm、つまみ 取付3.50cm
005	78	深鉢型	好盆	X-9	陶質粘土	口径 18.00 底径 12.10	10	内 白色粘土付	内 5Y8/1灰白色 外 5Y8/1灰白色 5Y7.5/1黄褐色	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	上	内面近く陥入、窪み陥入 等、内面一部に白粉付着
006	82	深鉢型	好盆		灰質	口径 17.00 底径 11.70	10	内 白色粘土付	内 5Y7/1灰白色 外 5Y7/1灰白色	内 目取ナシ 外 目取ナシ	右	
007	79	深鉢型	好盆	D-5-6		口径 17.10 底径 11.55	10	内 白色粘土付	内 2.5Y7.5/1灰白色 外 灰土	内 目取ナシ 外 目取ナシ	右	外壁向隅陥付着
008	74	深鉢型	好盆		土質粘土 褐色土	口径 18.00 底径 12.10	10	内 白色粘土少量付	内 5Y8/1灰白色 外 灰土	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	右	窪み陥入
009	73	深鉢型	好盆	D-4	陶質粘土	口径 17.70 底径 12.20	15	内 白色粘土少量付	内 5Y8/1灰白色 外 5Y7/1灰白色 5Y7.5/1黄褐色	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	右	内面窪み陥入窪み陥入り
010	72	深鉢型	好盆	E-2	陶質粘土	口径 17.50 底径 11.90	20	内 白色粘土少量付	内 5Y8/1灰白色 外 5Y7/1灰白色 5Y7.5/1黄褐色	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	右	
011	71	深鉢型	好盆	D-5	陶質粘土	口径 18.00 底径 12.10	5	内 白色粘土少量付、黒色粘土 少量付	内 5Y8/1灰白色 外 5Y7/1灰白色 5Y7.5/1黄褐色	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	右	窪み陥入、窪みあり
012	70	深鉢型	好盆	D-4	陶質粘土	口径 17.00 底径 11.70	5	内 白色粘土少量付、 白色小窪みに付着	内 5Y8/1灰白色 外 灰土	内 目取ナシ 外 目取ナシ	右	
013	69	深鉢型	好盆	B-6	陶質粘土	口径 17.50 底径 12.00	10	内 白色粘土少量付	内 5Y8/1灰白色 外 5Y8/1灰白色	内 目取ナシ 外 目取ナシ	上	窪みあり
014	35	深鉢型	好盆	B-9	陶質粘土	口径 17.00 底径 11.70	10	内 白色粘土少量付	内 5Y8/1灰白色 外 灰土	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	右	窪み陥入
015	70	深鉢型	好盆	B-6	陶質粘土	口径 17.10 底径 11.60	30	内 白色粘土少量付、窪み 1-2cm 白色小窪み少量 付着	内 5Y8/1灰白色 外 5Y8/1灰白色	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	右	窪みあり
016	75	深鉢型	好盆	B-2	陶質粘土	口径 17.50 底径 11.90	10	内 白色粘土付	内 5Y8/1灰白色 外 5Y8/1灰白色 5Y7.5/1黄褐色	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	上	窪み陥入
017	76	深鉢型	好盆	B-3	陶質粘土	口径 17.50 底径 11.90	20	内 白色粘土少量付、窪み陥 入少量付	内 5Y8/1灰白色 外 灰土	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	上	
018	77	深鉢型	好盆	B-5	陶質粘土	口径 17.50 底径 11.90	30	内 白色粘土付	内 5Y7/1灰白色 外 5Y8/1灰白色	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	上	窪みあり
019	78	深鉢型	好盆	B-5	陶質粘土	口径 17.50 底径 11.90	30	内 白色粘土少量付、窪み陥 入少量付	内 5Y8/1灰白色 外 5Y8/1灰白色	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	上	窪みあり、口縁部内面に 窪み陥入(粘土付着)
020	79	深鉢型	好盆	B-8	陶質粘土	口径 17.50 底径 11.90	10	内 白色粘土付	内 5Y8/1灰白色 外 灰土	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	上	窪みあり
021	70	深鉢型	好盆	B-9	陶質粘土	口径 17.50 底径 11.90	10	内 白色粘土付	内 5Y8/1灰白色 外 5Y8/1灰白色 5Y7.5/1黄褐色	内 目取ナシ 外 目取ナシ 大井基層のヘラケズリ	上	窪みあり

表38 8区出土土器観察表

器種別	図記号	種類	形状	土質・用途	高さ	口径	底径	出土	色目	調査名・特徴	図記	備考
966	77	瓦葺器	底	D-4 粘質粘土	口径 底径 15.70 — 13.90	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付 外 同上	内 5YR5/1R赤 外 5YR/1R赤 5Y4/1R赤	内 緑ナメ 外 緑ナメ	正	
967		瓦葺器	不明	C-6	口径 底径 17.30 14.40	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付、蓋上 に2本の粘土付線が凸出 外 同上	内 5YR/1R赤 外 5Y7/1R赤 5Y6/1R赤 5Y5/1R赤	内 緑ナメ 外 緑ナメ 蓋面緑ナメ	正	底面2線、凸出線
968		瓦葺器	片断	E-3 粘質粘土	口径 底径 17.20 14.10	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付、蓋上 に2本の粘土付線が凸出 外 同上	内 5YR/1R赤 外 5Y4/1R赤 5Y5/1R赤	内 緑ナメ 外 緑ナメ	正	底面に凸あり、内面に溝 く線あり、蓋面に底面に溝 あり
969	80	乳白器	片断	B-5 粘質粘土	口径 底径 17.50 13.80	口径 底径 — —	良	内 白色粘土付、白色 不透明が凸出 外 同上	内 5YR/1R赤 外 5Y4/1R赤 5Y5/1R赤	内 白緑ナメ 外 白緑ナメ	正	内面に溝く線あり、粘土付線、 穴が凸あり、底面に一帯 へラこし痕、内面へラこ し
970	81	黄器	片断	D-3-1	口径 底径 17.80 13.20	口径 底径 — —	良	内 1～2mm凸出小筋 が凸出 外 同上	内 5YR/1R赤 外 同上	内 緑ナメ 外 緑ナメ	不明	黄緑、黄緑5YR/1R赤
971	82	黄器	片断	D-3-1	口径 底径 17.80 13.20	口径 底径 — —	良	内 1～2mm凸出小筋 が凸出 外 同上	内 5YR/1R赤 外 同上	内 緑ナメ 外 緑ナメ	不明	黄緑、黄緑5YR/1R赤
972		かわらけ		C-5 粘質粘土	口径 底径 18.20 17.00	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付 外 同上	内 5YR7/1R赤 外 5YR7/1R赤	内 緑ナメ 外 緑ナメ	正	底面2線
973	83	胎土 (片断)	片断	D-3-1	口径 底径 18.70 13.70	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付 外 同上	内 5YR/1R赤 外 同上	内 緑ナメ 外 緑ナメ	不明	黄緑、黄緑5YR/1R赤
974	84	瓦葺 器(片断)	片断	D-3-1	口径 底径 18.00 13.00	口径 底径 — —	良	内 白色粘土付 外 同上	内 5YR/1R赤 外 同上	内 緑ナメ 外 緑ナメ	不明	黄緑、黄緑5YR/1R赤
975	85	黄器	片断	B-5 粘質粘土	口径 底径 18.00 13.00	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付 外 同上	内 5YR/1R赤 外 同上	内 緑ナメ 外 緑ナメ	不明	黄緑、黄緑5YR/1R赤
976	86	黄器	片断	D-3-1	口径 底径 18.00 13.00	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付 外 同上	内 5YR/1R赤 外 同上	内 緑ナメ 外 緑ナメ	不明	黄緑、黄緑5YR/1R赤
977	87	胎土 (片断)	片断	D-3-1	口径 底径 18.00 13.00	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付 外 同上	内 5YR/1R赤 外 同上	内 緑ナメ 外 緑ナメ	不明	黄緑、黄緑5YR/1R赤
978	88	瓦葺器	片断	C-4-1 粘質土	口径 底径 18.00 13.00	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付 外 同上	内 5YR/1R赤 外 同上	内 緑ナメ 外 緑ナメ	不明	黄緑、黄緑5YR/1R赤
979	89	黄器	片断	D-3-1	口径 底径 18.00 13.00	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付 外 同上	内 5YR/1R赤 外 同上	内 緑ナメ 外 緑ナメ	不明	黄緑、黄緑5YR/1R赤
980	90	黄器	片断	D-3-1	口径 底径 18.00 13.00	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付 外 同上	内 5YR/1R赤 外 同上	内 緑ナメ 外 緑ナメ	不明	黄緑、黄緑5YR/1R赤
981		黄器	片断	D-3-1	口径 底径 18.00 13.00	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付 外 同上	内 5YR/1R赤 外 同上	内 緑ナメ 外 緑ナメ	不明	黄緑、黄緑5YR/1R赤
982	91	黄器	片断	D-3-1	口径 底径 18.00 13.00	口径 底径 — —	良	内 内面粘土付 外 同上	内 5YR/1R赤 外 同上	内 緑ナメ 外 緑ナメ	不明	黄緑、黄緑5YR/1R赤

表39 8区出土縄文観察表

器種別	図記号	形状・グリップ	厚位	透物名	長さ(mm)		備考
					表側	厚み	
984	92	底面	底土	瓦葺器(片断)	2.30	0.15	
985	92	底面	底土	瓦葺器(片断)	2.35	0.10	

表40 8区出土土器観察表

器種別	図記号	形状・グリップ	厚位	透物名	高さ(mm)				備考
					全高	最大値	最小値	壁高	
986	92	D-2	底土	不明(片断)	2.20	0.25	0.70	1.58	一面欠損、透物により底面が凸出している
989	94	高脚土器(片断)	底土	片断(片断)	2.00	0.20	0.20	0.90	頸部欠損、底面欠損

表41 8区出土土製品観察表

図記号	種類	遺物・グリップ	用途	産物名	色別	法量 (mm)				出土	備考
						全長	最大幅	内径	重量		
590	皿	5.3	椀型土皿片	土皿	灰白色	3.70	1.55	0.80~0.70	2.10g	南 内径が寸少端欠	遺物
591	皿	5.2	椀型土皿片	土皿	褐色	3.35	1.90	0.80~0.80	4.17g	南	管底が浅い

表42 9区出土土器観察表

図記号	種類	用途	グリップ	産物・用途	法量 (mm)	高さ	口径	出土	色別	観察などの特徴	数量	備考	
													592
593	86	土師器	器	SP777 円筒 器片	111.00 — 13.00	15	15	南	白色粘土、器底に 赤褐色の土質が認められる	内: 10/10 外: 10/10	内: 3.00 外: 3.00	不明	瓦割に粘土片、足付が、器 底が粗い
594	86	磁器	木製? 柄付?	SP777 白磁 磁器 磁器	— — 13.00	5	5	南	白色粘土、灰褐色 器底	内: 10/10 外: 10/10	内: 3.00 外: 3.00	不明	器底に粘土片、足付が、器 底が粗い
595	82	酒器	柄	SP777 円筒 器片	— 6.45 12.20	30	30	南	白色粘土、灰褐色 器底	内: 10/10 外: 10/10	内: 3.00 外: 3.00	不明	器底に粘土片、足付が、器 底が粗い
595	88	酒器	木製 1.7	SP920 円筒 器片	134.00 — 12.80	20	20	南	白色粘土、灰褐色 器底	内: 2.00/1.0 外: 2.00/1.0	内: 3.00 外: 3.00	不明	器底に粘土片、足付が、器 底が粗い
597	86	かみなり	1.7	SP969 L形 磁器 磁器	— 1.55 10.85	10	10	南	白色粘土、器底に 赤褐色の土質が認められる	内: 1.00/1.0 外: 1.00/1.0	内: 3.00 外: 3.00	不明	器底に粘土片、足付が、器 底が粗い
598	86	山車	木製 1.7×1.8	1032 L形 磁器 磁器	— — 2.30	50	50	南	白色粘土、器底に 赤褐色の土質が認められる	内: 1.00/1.0 外: 1.00/1.0	内: 3.00 外: 3.00	不明	器底に粘土片、足付が、器 底が粗い

表43 9区出土煙管観察表

図記号	種類	遺物・グリップ	産物名	法量 (mm)			備考
				長さ	最大幅	法量幅	
100	88	1.6	煙管	3.00	1.10		

表44 9区出土鏡観察表

図記号	種類	遺物・グリップ	用途	産物名	法量 (mm)		備考
					直径	厚み	
1000	86	SP1064-J1		鏡(銅鏡)	1.40	0.15	
1001	88	SP506-J1		鏡(銅鏡)	2.15	0.10	

表45 9区出土釘観察表

図記号	種類	遺物・グリップ	用途	産物名	長さ (mm)	形 (mm)			備考
						頭部	身部	厚み	
1002		SP980-1.8	釘	釘	2.80	0.20	0.15~0.20	0.20	
1003	86	SP900-1.8	釘	釘	4.50	0.60	0.25~0.30	0.30	
1004	86	SP980-1.8	釘	釘	4.70	—	0.30	0.20	
1005	86	SP980-1.8	釘	釘	3.30	—	0.20~0.25	0.20	
1006	86	SP980-1.2	釘	釘	14.10	0.70	0.25~0.40	0.30	
1007	86	SP980-1.8	釘	釘	14.80	0.70	0.40	0.40	
1008	88	SP980-1.8	釘	釘	14.80	0.50	0.25~0.30	0.30	
1009	86	SP723-J1	釘	釘	5.00	1.05	0.70~0.40	0.40	

表46 10区出土土器観察表

図記号	種類	用途	グリップ	産物・用途	法量 (mm)	高さ	口径	出土	色別	観察などの特徴	数量	備考	
													1010
1011	88	酒器	柄	SP920 円筒 器片	115.00 — 12.80	20	20	南	白色粘土、器底に 赤褐色の土質が認められる	内: 10/10 外: 10/10	内: 3.00 外: 3.00	不明	器底に粘土片、足付が、器 底が粗い
1012	81	土師器	器	SP803 円筒 器片	122.00 — 13.00	15	15	南	白色粘土、器底に 赤褐色の土質が認められる	内: 10/10 外: 10/10	内: 3.00 外: 3.00	不明	器底に粘土片、足付が、器 底が粗い

表46 10区出土土器観察表

調査区	遺物種別	器種	形状	用途・用途	数量	出土層	出土状況	出土	色澤	胎土	観察などの特徴	画像	備考
1036	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 13.00 (1.42)	10	散	白色粘土片心	内: 10Y5/1灰褐色 外: 同土	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ 灰褐色土層ヘラケモノ			
1037	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 12.00 (1.43)	10	散	白色粘土片心	内: 2.5Y5/1シロップ灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ 灰褐色土層ヘラケモノ		認めあり	
1038	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 11.20 (1.30)	10	散	白色粘土片心	内: 7Y7/8灰褐色 外: 同土	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		胎土混合	
1039	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1040	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1041	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1042	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1043	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1044	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1045	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1046	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1047	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1048	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1049	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1050	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1051	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1052	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1053	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1054	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1055	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	
1056	10区	土器	片断	5P01-05 灰褐色土	1口 10.00 (1.46)	15	散	白色粘土片心	内: 5Y5/1灰褐色 外: 2.5Y5/1シロップ灰褐色	内: 明灰ナメ 外: 明灰ナメ		認めあり	

表46 10区出土土器観察表

調査区	遺跡名	種類	時期	土層	産地・産状	数量	高さ	形状	出土	色別	施文などの特徴	位置	備考
1007	おんわげ		1.3	SP94 灰土	口径 底径 高さ (13.25) (10.25) (3.00)	50	円筒	底 口径小径少量含む。口縁部は下向き。口内面は滑らか。口縁部は少し凹む。	内 外	2Y1Z/1C(白)色土 10YR7/2C(白)黄褐色	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ 底面凹切	右	
1008	おんわげ		1.3	SP94 灰土	口径 底径 高さ (10.45) (4.80) (2.30)	80	円筒	底 口径小径少量含む。口縁部は下向き。口内面は滑らか。口縁部は少し凹む。	内 外	5Y75/4C(白)黄褐色 2.5Y75/4C(白)黄褐色	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ 底面凹切	右	
1009	土師田	灰	1.3	SP10 灰土	口径 底径 高さ (23.70) (2.40)	10	円筒	底 口径小径少量含む。口縁部は下向き。口内面は滑らか。口縁部は少し凹む。	内 外	MYR5/7M(灰)色土 10YR5/5(白)内凹色	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ	左	
1010	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (12.90) (1.90)	15	円筒	底 口径小径多量含む。	内 外	5Y7/1R(内)色土 同上	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ 底面凹切	右	跡あり
1011	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (15.10) (2.05)	50	円筒	底 口径小径多量含む。	内 外	7.5Y7/1R(内)色土 7.5Y75/1R(内)色土	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ 底面凹切	右	跡あり
1012	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (16.50) (1.80)	10	円筒	底 口径小径少量含む。口縁部は下向き。口内面は滑らか。口縁部は少し凹む。	内 外	7.5Y7/1R(内)色土 7M/1R(内)色土	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ 底面凹切	右	跡あり
1013	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (12.05) (1.50)	10	円筒	底 口径小径多量含む。	内 外	5Y6/1R(内)色土 5M/1R(内)色土	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ 底面凹切	右	跡あり
1014	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (15.10) (1.30)	10	円筒	底 口径小径多量含む。	内 外	5Y6/1R(内)色土 同上	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ 底面凹切	右	跡あり
1015	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (7.80) (1.40)	10	円筒	底 口径小径多量含む。	内 外	5Y6/3R(白)黄褐色 2.5Y75/1R(内)色土	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ	右	跡あり
1016	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (16.10) (1.20)	10	円筒	底 口径小径多量含む。	内 外	2.5Y7/2R(内)色土 同上	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ	右	跡あり
1017	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (7.80) (1.55)	10	円筒	底 口径小径多量含む。口縁部は下向き。口内面は滑らか。口縁部は少し凹む。	内 外	5M/1R(内)色土 5M/1R(内)色土	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ 底面凹切	右	跡あり
1018	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (16.60) (1.50)	10	円筒	底 口径小径多量含む。	内 外	7.5Y7/1R(内)色土 10Y5/1R(内)色土	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ	右	跡あり
1019	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (14.05) (1.25)	15	円筒	底 口径小径多量含む。	内 外	5Y7/1R(内)色土 同上	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ	右	跡あり
1020	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (13.80) (2.80)	15	円筒	底 口径小径多量含む。口縁部は下向き。口内面は滑らか。口縁部は少し凹む。	内 外	5Y7/1R(内)色土 同上	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ	右	跡あり
1021	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (13.70) (3.10)	15	円筒	底 口径小径多量含む。口縁部は下向き。口内面は滑らか。口縁部は少し凹む。	内 外	2.5Y7/1R(内)色土 2.5Y7/2R(内)色土	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ	右	跡あり
1022	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (14.80) (1.10)	30	円筒	底 口径小径少量含む。口縁部は下向き。口内面は滑らか。口縁部は少し凹む。	内 外	2.5Y7/2R(内)色土 同上	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ	右	跡あり
1023	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (12.20) (2.30)	10	円筒	底 口径小径多量含む。	内 外	2.5Y7/2R(内)色土 同上	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ	右	跡あり
1024	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (22.60) (2.20)	10	円筒	底 口径小径多量含む。口縁部は下向き。口内面は滑らか。口縁部は少し凹む。	内 外	5Y10/4C(白)黄褐色 5YK5/1C(白)黄褐色	内 ナゲ 外 ナゲ	右	跡あり
1025	灰土	灰	3.3	成層灰土	口径 底径 (16.60) (1.45)	10	円筒	底 口径小径多量含む。口縁部は下向き。口内面は滑らか。口縁部は少し凹む。	内 外	2.5Y7/2R(内)色土 同上	内 凹線ナゲ 外 凹線ナゲ	右	跡あり

表47 10区出土土製品観察表

種類%	図柄%	透視・グリップ	形状	産地名	色相	粘土	重量 (g)				備考
							全重	最大幅	最大長	底面積	
1075	82	SP50 J-3	磁土	上流	灰白・黄褐色	泥	1.00	2.05	0.90-1.00	15.984	同図あり

表48 10区他出土石器観察表

種類%	図柄%	透視・グリップ	形状	産地名	重量 (g)				備考	
					全重	最大幅	最大長	底面積		
1075	56	SP50 J-3	磁土	石塚	石塚	3.10	1.00	0.40	2.000	
1076	91	J-3	磁土	石塚	石塚	1.50	1.40	0.50	0.431	
1081	91	SP50 J-3 附定 K-2	磁土	石塚	石塚	11.25	1.50	0.50	0.553	水場塚と同時期発見

表49 10区出土石器観察表

種類%	図柄%	透視・グリップ	形状	産地名	重量 (g)				備考
					全重	最大幅	最大長	底面積	
1082	91	50附	磁土	石塚(石塚)	6.10	2.80	0.80	10.000	
1083	59	1285 C-0-2	1	上流	6.800	2.50	0.70	15.716	一文字刻(再文字の横)
1084	92	6	1	上流	11.4	2.00	2.00	61.892	透視部と裏面にL-3の刻記あり

表50 6区鉄滓計測表

No.	種類%	透視・グリップ	産地名	重量 (g)				備考
				全重	最大幅	最大長	底面積	
1	M-106	D-2	石塚	2.80	2.45	1.70	14	
2	M-109	D-2	石塚	1.98	3.15	1.65	6	
3	M-109	D-2	石塚	3.74	1.97	1.60	9	
4	M-109	D-2	石塚	3.58	4.91	2.10	32	
5	M-109	D-2	石塚	4.71	4.71	2.15	38	
6	M-110	D-2	石塚	5.98	3.80	1.85	33	
7	M-110	D-2	石塚	6.15	4.40	2.80	91	
8	M-110	D-2	石塚	3.27	2.10	1.25	13	
9	M-110	D-2	石塚	2.80	2.50	1.15	17	
10	M-110	D-2	石塚	3.65	2.74	2.07	23	
11	M-111	D-2	石塚	3.17	3.16	3.08	40	
12	M-111	D-2	石塚	5.82	5.82	2.42	97	
13	M-111	D-2	石塚	4.15	2.60	2.25	21	
14	M-111	D-2	石塚	6.75	4.49	2.34	83	
15	M-111	D-2	石塚	5.59	5.47	2.55	72	
16	M-111	D-2	石塚	4.78	3.65	2.21	59	
17	M-112	D-2	石塚	6.22	5.29	3.57	68	
18	M-112	D-2	石塚	5.30	7.10	2.90	155	
19	M-112	D-2	石塚	4.37	4.25	3.41	33	
20	M-112	D-2	石塚	5.90	7.87	2.56	18	
21	M-114	D-2	石塚	1.81	1.82	1.88	3	
22	M-115	D-2	石塚	3.82	6.11	1.78	55	
23	M-113	D-2	石塚	4.36	3.22	2.59	29	
24	M-113	D-2	石塚	3.55	7.65	4.31	277	
25	M-112	D-2	石塚	6.65	7.76	5.91	191	
26	M-118	D-2	石塚	2.66	5.87	3.75	179	
27	M-115	D-2	石塚	6.52	5.77	2.88	103	
28	M-113	D-2	石塚	4.46	3.51	1.78	31	
29	M-113	D-2	石塚	3.97	3.54	1.64	25	
30	M-115	D-2	石塚	3.77	3.00	1.19	17	
31	M-110	D-2	石塚	4.36	2.59	1.61	37	
32	M-115	D-2	石塚	3.80	3.18	1.13	7	
33	M-114	D-2	石塚	4.17	2.71	1.88	30	
34	M-114	D-2	石塚	5.09	4.72	2.81	81	
35	M-111	D-2	石塚	5.05	4.94	1.71	64	
36	M-114	D-2	石塚	6.72	8.41	2.49	56	
37	M-114	D-2	石塚	6.11	6.15	1.92	48	
38	M-110	D-2	石塚	5.21	3.77	1.31	25	
39	M-115	D-2	石塚	4.58	2.59	1.57	37	
40	M-111	D-2	石塚	4.75	2.91	1.85	18	
41	M-114	D-2	石塚	3.12	2.39	1.35	3	
42	M-114	D-2	石塚	2.61	2.02	1.05	4	
43	M-114	D-2	石塚	2.65	1.97	1.18	8	
44	M-115	D-2	石塚	5.78	1.92	1.47	9	
45	M-111	D-2	石塚	7.24	6.66	3.15	151	
46	M-115	D-2	石塚	2.62	1.61	1.37	7	
47	M-115	D-2	石塚	3.76	2.95	1.45	29	
48	M-117	D-2	石塚	6.21	5.25	2.25	81	
49	M-111	D-2	石塚	6.17	5.04	3.41	191	
50	M-115	D-2	石塚	3.15	3.65	1.91	13	
51	M-117	D-2	石塚	5.16	2.45	2.17	55	
52	M-117	D-2	石塚	3.86	3.86	1.44	13	
53	M-111	D-2	石塚	5.28	4.85	1.35	89	
54	M-117	D-2	石塚	3.45	3.07	1.21	50	
55	M-115	D-2	石塚	3.11	1.75	1.61	8	
56	M-117	D-2	石塚	2.76	2.42	1.54	6	
57	M-118	D-2	石塚	6.49	7.62	3.00	203	
58	M-118	D-2	石塚	5.50	4.43	2.41	60	
59	M-114	D-2	石塚	5.35	5.59	1.85	19	
60	M-114	D-2	石塚	2.86	2.76	1.65	9	
61	M-115	D-2	石塚	4.60	2.72	1.67	21	
62	M-118	D-2	石塚	3.82	3.31	2.88	30	
63	M-118	D-2	石塚	3.95	3.11	1.32	30	
64	M-118	D-2	石塚	3.80	3.41	1.54	11	
65	M-118	D-2	石塚	1.79	1.38	1.18	5	
66	M-114	D-2	石塚	1.48	1.31	0.92	3	
67	M-118	D-2	石塚	1.28	1.11	1.02	2	

表51 衣原遺跡出土鉄貨一覧

図	図面No	図名	所在地	遺物名	図例
5	530			寛永通寶	図例
5	540			寛永通寶	図例
2	511			寛永通寶	図例
5	545			銅貨不明	図例
5	540			寛永通寶	図例
5	544			銅貨不明	図例
5	545			銅貨不明	図例
6	625	1584 井戸内遺跡		寛永通寶	図例 井戸内北
				寛永通寶	図例 井戸内南
6	636	1635 井戸内遺跡		寛永通寶	図例
				●●●●●	図例
6	594	SP8	同上	徳政通寶	図例
6	665	SP9	同上	寛永通寶	図例
9	1000	SP10A		元禄通寶	図例
9	1001	SP10B	同上	寛永通寶	図例
入財	M-1	SP7v		寛永通寶	図例
				●●●●●	
				●●●●●	

参考文献

- 藤枝市史編さん専門委員会 2001 『藤枝市史叢書 6 静岡県志太郎 葉梨村誌（復刻）』 藤枝市教育委員会
- 君津都市文化財センター 1975 『千歳興木更津市巾尾遺跡群Ⅱ』
- 三重県埋蔵文化財センター 2002 『大花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告 III-2』
- 福島県教育委員会 1997 『福島町古岡遺跡』
- 可見市教育委員会 1999 『清水掻塚』
- 岡山県教育委員会 1999 『大成山たたら遺跡群』
- 大正14年 『大正新編大藏經』第9巻
- 東洋哲学研究所 1977 『法華經…字索引 付開結二經』 財団法人 東洋哲学研究所
- 考古学ライブラリー33『経塚』
- 藤枝市史編さん委員会 2007 『藤枝市史』 藤枝市
- 本村充保 2005 『遺跡出土鉄貨の全国集成に基づく編年および地域性の抽出に関する基礎的研究』『藤原考古学研究所紀要考古学論叢第29冊』 奈良県立橿原考古学研究所
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988 『内流遺跡（遺物編）』

報告書抄録

ふりがな	ころんばらこふんぐん・ころんばらいせき・ころんばらこようぐん							
書名	衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群							
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	藤枝市-1 (第1分冊)							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第214集							
編者名	中川隼子/菊池吉修/半野吾郎/及川司/勝又直人/福島志野/三辻科一/広岡公夫							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL 054-262-4261(代)							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ころんばら こふんぐん 衣原古墳群	しずおかけんふじえだし しものこうあぎころんばら 静岡県藤枝市 下之郷字衣原	22214	21	34度 53分 45秒	138度 14分 47秒	20020701 ～ 20030123	12,760㎡	道路建設に 伴う発掘調査 (第二東名)
ころんばら いせき 衣原遺跡	しずおかけんふじえだし しものこうあぎころんばら 静岡県藤枝市 下之郷字衣原	22214	21	34度 53分 45秒	138度 14分 43秒	20020701 ～ 20041217		
ころんばら こようぐん 衣原古窯群	しずおかけんふじえだし しものこうあぎころんばら 静岡県藤枝市 下之郷字衣原	22214	21	34度 53分 46秒	138度 14分 44秒	20021023 ～20030321 20040401 ～20041217		
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
衣原古墳群	古墳	古墳	横穴式石室1	須恵器、土師器、鉄鏃、両頭金具、馬具、鉄刀、刀子、装身具				
衣原遺跡	集落・墳墓	弥生時代～ 近世	竪穴住居・ 掘立柱建物・ 井戸・溝・ 土坑・流路	弥生土器、須恵器、土師器、灰 釉陶器、山茶碗、陶磁器、青磁、 銭貨、標管、火打金、釘、鉄沖、 尖頭器、打製石斧、磨製石斧、 打製石鏃、石鏃、磨石、砥石、 土鏡、漆碗、曲物、下駄				
		近世	火葬墓	陶磁器、かわらけ、釘、銭貨、 煙管、鏝、礫石経、小玉、砥石				
衣原古窯群	生産遺跡	古墳時代後期	須恵器窯1	須恵器(蓋坏・高坏・平瓶・提 瓶・甕・甕類・特殊扁蓋・陶白・ 甕)、烧台				
		奈良時代	横口付炭窯2	須恵器(甕・坏身)				
		近世	炭窯2					
要約	<p>衣原遺跡群は、古墳時代後期の窯跡である衣原古窯群、古墳時代後期の衣原古墳群、弥生時代・中世～近世の集落跡である衣原遺跡からなる遺跡群である。志太平野北西部の丘陵緩斜面に所在する。衣原古墳群は平成14年度に横穴式石室を埋葬施設とする11号墳の現地調査を実施している。衣原11号墳は6世紀第3四半期に初葬が行われ、6世紀末と7世紀前半に追葬があった。衣原古窯群は、6世紀後半の須恵器窯1基と、8世紀初頭の木炭生産窯2基、近世の炭窯が2基発見された。須恵器窯は畿河でも最古例である。焼成器種が豊富で、特殊扁蓋も制作されていた。炭窯は「横口付炭窯」と呼ばれる構造をもち、畿河では初の発見となる。衣原遺跡は、弥生時代後期～近世の遺物が出土し、竪穴住居や掘立柱建物など集落跡が見つかっている。この間、丘陵上には断続的に集落が営まれていた。助宗古窯群で須恵器制作に関わっていた工人の集落と考えられる。</p>							

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第214集

衣原古墳群
衣原遺跡
衣原古窯群

第二東名 No. 82~83 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市-1

(第1分冊)

平成22年3月31日

編集・発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡市駿河区谷田23-20

TEL 054-262-4261(代)

FAX 054-262-4266

印刷所 株式会社 三 創

〒422-8047 静岡市駿河区中村町166-1

TEL 054-282-4031(代)

